
激闘戦鬼

崎浜秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

激闘戦鬼

【Nコード】

N3086A

【作者名】

崎浜秀

【あらすじ】

人の心の闇から生まれる鬼『オウガ』そのオウガを退治する『ハンター』高校生ハンターの神野天地は五つの龍を封印した刀『五龍神』を使いオウガと戦い、沢山のハンターと出会い、様々な鬼と戦い続ける。

プロローグ

人の心の闇から生まれる鬼。

『オウガ』

オウガは人間や動物を喰らう。

人々はオウガを恐れ、怯えながら暮らしていた。

そんな時、現れたのが『ハンター』と呼ばれる者達だった。

彼等は特殊な力と武器でオウガを退治していった。

ハンターとオウガの戦いは長い間続いていた。

そして、今もなおハンターとオウガの戦いが続いているのだった。

第一章 入学式に少女と化け物

早朝から一人の少年がランニングをしていた。

彼は今日からこの街の天神学園に通う事になる高校一年生の神野天地。

この街に来てまだ間もない天地は、ランニングをしながら街の中を探索していた。

暫くして、人通りが多くなったのに気付いた天地は携帯で時間を確認した。

「ゲッ！もうこんな時間じゃないか！急いで寮に戻らないと！！」

そう言っただけ来た道を引き返したが、どこをどうやって来たのかすでに忘れていた。

道に迷いながらも天地は寮にたどり着く事が出来た。

寮に着くと同時に一人の女性が微笑みながら声をかけた。

「おはよう。天地君。運動もいいけど、入学そうそう遅刻はまずいわよ。」

「わ、わかってますよ……。」

彼女はこの寮の管理人で天地の母の姉で幼い時から色々と面倒を見てもらっている。

二階にある自分の部屋に戻った天地は制服に着替えて学校に行く準備を済ませた。

部屋を出ると、一人の少年と会った。

天地よりも少し身長が低くかった。

「天地。遅いぞ。」

彼は天地と同じ中学に通っていた。名前は倉敷 裕二。裕二は少し厳しい目つきで天地を見た。

「悪い。待たせたな……。」

笑いながら天地は頭を掻いた。裕二は呆れ顔で天地を見ていた。

「お前さ……。」

何かを言おうとした裕二の言葉を遮り天地は叫んだ。

「話は後だ。急ぐぞ！裕二！」

天地は走り出した。その後が続いて裕二も走り出した。一階にいる管理人に挨拶を交わし、学校へと走った。ランニングをした後だと言うのに天地は疲れを感じさせなかった。学校に着くと新生が運動場に集まっていた。

「ギリギリセーフ！」

「そうでもないぞ……。」

体育館から新生を迎える行進曲が天地達の方まで聞こえた。そして、新生が順番に体育館へと歩き出した。

「ちょ！ちょっと待て!!！」

「天地……。諦める、完璧に遅刻だ……。」

「俺はそんなの嫌だ〜！」

「お前が嫌でも、もう間に合わん。」

結局、天地と裕二は入学式には間に合わず、体育館に入る事を許されなかった。

二人は仕方なく、自分の教室へと向った。

幸いにも、二人のクラスは同じだった。

静かな教室で天地と裕二の二人の声が響いた。

「グウソ〜！初日から遅刻なんて……。」

「誰のせいだと思ってるんだ？」

「うるせえ〜。全部俺のせいだよ……。」

「わかってるならいいや。」

そう言っつて裕二は窓から外を見た。

窓の外には人気の無い校舎の裏で木々が生い茂っていた。

そこに、一人の少女の姿が見えた。制服を着ている事からこの学校の生徒であるとわかった。

「おい、天地」

天地を呼んだが、返事が無かった。

「天地！聞いてるか」

もう一度天地を呼んで振り返ったが、そこに天地の姿は無かった。その時、窓の外から天地の声がした。

「裕二！ちよつと行って来るから、後は任せるぞ。」

「あ、ああ……。わかった。気をつけるよ。」

「おう！」

そう言つて天地は拳を突き上げた。

木々の中に走つていく天地の姿を見送つた裕二はゆっくり息を吐くと椅子に腰をおろした。

一方、天地は木々の中を走っていた。

「確か、この辺で気配がしたんだが……。」

気配を感じながら走っていると広い場所に出た。

そこには何も無く、一人の少女だけが立っていた。

可愛らしい顔つきで身長は少し小さかった。

彼女は片手に布に来るんだ長い物を持っていた。

「何してるんだ！こんな所で！（まさか、この娘がああ気配の正体

?）」

少女にそう叫んで天地はゆっくりと近づいた。

その時、少女が天地に向つて呟いた。

「何しに来たの……。」

少女は天地を睨みつけた。

その時、凄まじい音と共に少女の後ろから何かが飛び出した。

「危ない!!」

天地はそう叫んでそれを蹴り飛ばした。

少女の前に着地して天地は目の前の物体を見た。

目の前には二本の角を生やした化け物が立っていた。

体格は大きく、口からは牙が剥き出しになっていた。

目は一つで体の色が赤色だった。

(チツ!怒の鬼か……。)

そう思いながら天地は目の前の化け物を見ていた。

その時、体が後ろに引つ張られた。

「ぐっ……。」

後ろに倒れこんだ天地の前に少女が立ちはだかった。

「何するんだ!!」

「危ないから……。邪魔しないで……。」

彼女はそう言って布に包まれた物をだした。

布の中から出てきたのは刀だった。

彼女は刀を抜くと鞘を天地に投げた。

「持ってて……。」

啞然としながら天地は鞘を受け取った。

彼女は刀を構えると化け物を睨みつけた。

暫し、沈黙が続いた。

先に動いたのは化け物の方だった。

化け物は大きな拳を振り上げて少女に振り下ろした。

少女は化け物の拳を右に避けて刀で化け物の腕を斬った。

「ウガアアアッ!!」

化け物の腕からは血が飛び散った。

その血が付かない様に天地と少女は化け物から距離をとった。

化け物はゆっくりと少女の方を向いた。

そして、怒りをあらわにして向かっていった。

「グオオオオ!!」

もう一方の腕で少女に殴りかかった。

その拳を避けた少女は腕を斬ろうとした。だが、化け物は少女に肘打ちをした。

「くっ……!!」

肘打ちをとつさに刀で受け止めたが、化け物の力に押し負け吹き飛ばされた。

刀は地面に転がり、少女は地面に倒れ込んだ。

ゆっくりと化け物は少女に歩み寄っていった。

そして、拳を振り上げた時だった。

「これでも、くらえ!!」

天地は近くにあつた木の棒で化け物の右足を殴つた。
バランスを崩した化け物は後ろに倒れた。
天地は彼女に駆け寄つた。

「大丈夫か？」

「大丈夫。それより、邪魔しないで……。」

「待てよ！助けてやったのに！邪魔するなだど！！俺も一応ハンタ
ーなんだぞ！」

「……。」

彼女は天地の言葉を無視して刀を手に取つた。
そして、刀に向つて力を集めた。

「行くよ……。疾風丸。」

そう言つて彼女は化け物に向つて走り出した。
化け物はそれに気付き彼女に殴りかかった。
だが、拳は空振り地面に突き刺さつた。
彼女は空高く飛び上がった。

「散りなさい……。疾風一閃！！」

彼女はそう言つて刀を振り下ろした。
すると、凄まじい風の刃が化け物を切り裂いた。
天地はその威力に吹き飛ばされた。
風が収まつた時には、化け物の姿は無かつた。

「鞘を返して……。」

少女はそう言って天地に手を差し出した。
天地は鞘を渡して立ち上がった。
鞘を受け取ると少女は刀をしまった。
そして、天地に一言言った。

「武器、持って無いのにオウガと戦おうとしないで……。」

「俺の武器はな……！」

反論をしようとした天地だったが、少女はそれを聞かずに歩き出した。

第二章 寮の新たな入居者

学校も終わり、天地と裕二は寮に向って歩いていった。相変わらず、寮に向う道は人通りが無く静かだった。街灯もポツポツとしか立ってないため、夜になると滅多に人は通らない。そんな通りは夕暮れも全く人の気配を感じなかった。

「ああー！腹が立つ！！何だよあの女！！」

天地は人通りの無い事をいい事に、大声でそう怒鳴った。その数歩後ろを苦笑いを浮かべながら裕二が歩いていた。

「まあ、まあ。そんなに怒るなつて。」

その言葉を聞いた天地は立ち止まった。裕二もそれに釣られて立ち止まった。

裕二の方に振り返った天地は裕二を指差しながら怒鳴った。

「俺は助けてやったのに、邪魔するなとか、武器持って無いのに戦うなとか！」

「まあ、武器も持たないでオウガと戦おうとする馬鹿はお前くらいだからな。」

「誰が馬鹿だよ！」

「それにさ。結局の所、彼女が居なかったらオウガ倒せなかったでしょ？」

そう言われた天地は口ごもり、裕二に背を向けて歩き始めた。凶星だったのだろう。

裕二は歩きだした天地の後に続いた。

オウガにはいくつ種類がある。大まかに分けると三つの種類になる。

一つ目は『哀』

哀は悲しみから生まれるオウガ。力は無いがその分知識が発達している。

人を襲う時もハンターに気付かれぬ様に人目の付かない所で行う。

二つ目は『怒』

怒は怒りから生まれるオウガ。知識は無いがその分力が強く体格も大きい者が多い。

哀と違い力任せに人を襲うため、ハンターはすぐに見つける事が出来る。

三つ目は『憎』

憎は憎しみから生まれるオウガ。力と知識の両方をバランスよく兼ねそろえている。

三つの中で最も手強く、特殊な力を持った者が多い。

そうこうしている内に、天地と裕二の二人は寮についた。

寮の入り口に入ると管理人と一人の少女が立っていた。

少女は後ろ姿だったが、制服からして天地達と同じ学校だとわかった。

背丈は小さいが胸はふっくらとしていた。

天地と裕二に気付いた管理人は声をかけた。

「お帰りなさい。天地君、裕二君。」

「ただいま」

天地と裕二はほぼ同時にそう返し、階段を上がるうとしたが管理人に呼び止められた。

「そうそう。二人に紹介しておくね。彼女、今日からこの寮に暮らす事になる……。」

「葉山 由美です……。」

由美はそう言つて二人の方を振り返つて頭を下げた。

その声に聞き覚えのあつた天地は顔を上げた由美を見て声を上げた。

「お前！今朝のー！」

「へえ。彼女が今朝の。可愛いじゃないか」

「何言つてんだ！物凄く腹の立つ女だぞ！」

天地は裕二に向つて怒鳴つた。

耳を塞ぎながら裕二は笑つていた。天地をからかつて楽しんでいるのだ。

実際、由美はとても可愛かつた。

天地と裕二が二人で盛り上がつていたので管理人は由美に聞いた。

「由美ちゃん、天地君と裕二君と知り合いだったの？」

その管理人の声が聞こえたのか、天地は管理人に向つて叫んだ。

「そんな女、知り合いでも何でもねえー！」

「そうなの？」

天地にそう言われた管理人はそう言って由美の顔を見た。

「ええ……。知り合いじゃありません。あんなお邪魔ムシ……」

そう言って由美は天地の顔をチラッと見た。

天地は怒りをあらわに由美に向かっていこうとしたが、裕二に抑えられて動く事が出来ずにいた。

「だ！誰がお邪魔ムシだ！！この……！！？」

天地の頭を激しい痛みが襲い、それと同時に床に倒れた。頭を思いつきり殴られたのだろう。

殴られた痛みを我慢しながら天地は殴った奴をみた。

それは、一人の少女だった。由美と同じ制服でオレンジブラウンのショートカットの少女だった。身長は由美より少し高く、胸は少し小さかった。

「寮の入り口でワーワー騒がないで。」

彼女は天地に反論する暇を与えず、階段を駆け上って行った。

天地を抑えていた裕二は暫し呆然としながら階段を駆け上がる彼女の後姿を見送った。

天地は痛みを堪えながらゆっくり立ち上がり管理人の方を見た。

「アレ、誰ですか……。」

「彼女は木下 歩美ちゃんよ。」

「でも、いつから入居したんですか？」

天地の後ろから裕二がそう聞いた。天地は裕二の声に驚き振り返った。

管理人は首を傾げながら言った。

「あら？朝、言わなかったかしら？朝早くに来たのよ、彼女。」

「聞いて無いですよ……。」

管理人は微笑みながら天地と裕二の二人を見ていた。

第三章 知識の鬼

夜も深まり、すでにどの家々も電気が消えポツポツと立つ街灯の光だけが路地を照らしていた。

そんな路地を一人の女性が歩いていった。

歳は20代半ばといった所だろう。残業で帰りが遅くなってしまったのだ。

人通りも無く、とても静かだ。たまに聞こえる野良犬の遠吠えがとても大きく聞こえた。

暫く歩くと街灯の下に一人の少年が座りこみすすり泣いていた。

少年はとても小さく小学生くらいだろうか。彼女は気になりその子に声をかけた。

「君、こんな時間に何してるのかな？」

彼女の問いにその子は何も答えずただ泣いているだけだった。

困り果てた女性は少年の横に腰を屈めた。そして、今度は違う質問をした。

「どうして泣いているのかな？」

その子はその質問に泣くのを止めた。そして、ゆっくりと彼女の方を向いていった。

「お腹が空いて動けないんだ。君の命食べさせて!!」

少年はそう言って大きな口を開いた。彼女は悲鳴を上げる暇もなく少年に丸呑みされてしまった。

翌朝、沢山の家が立ち並ぶ路地を天地はランニングをしていた。どの家もまだ明かりがついていなく、少し薄暗いがとても静かだった。この路地は車が二台ギリギリで通れるくらいの広さしかなく、滅多に車は通らなかつた。

天地がランニングをするのには訳があつた。別に太っているわけじゃない。体力をつけるためだ。

オウガと戦うにはやはり体格が小さいので、（と言っても170cmはある）ある程度素早く動き戦うので、体力をかなり消耗するからだ。

暫くして天地は神社の前にやってきた。何段階段が続いていた。それを見て、天地は気合を入れた。

「うっし!!」

そして、天地は神社の階段を何度も往復した。

暫し時を忘れていた天地は人通りが多くなっているのに気付き、携帯で時間を見た。

「ゲッ!いつの間に、こんな時間に!!」

天地は急いで寮に戻つた。その頃、寮では裕二・由美・歩美の三人が管理人の作った朝食を管理人の部屋で食べていた。

裕二は由美と向かい合わせに座っていて右側に歩美が座っていた。裕二の持っているお椀が空なのに気付いた管理人は裕二に声をかけた。

「裕二君。ご飯、入れようか?」

急に声を掛けられた裕二は声が少し裏返つた。

「は、はい……。」

天地が居ないので男が一人しかいないため、裕二は落ち着かなかつた。

管理人がお椀にご飯を入れて持ってきた。裕二はそれを受け取り静かにご飯を食べ始めた。

そんな裕二の目の前で天地の朝食のオカズに手を出している人物がいた。

それは、由美だった。

由美は朝食に出されたサバの味噌煮を気に入ったのか、自分の物を食べ終えて天地の物を食べていた。

裕二の視線に気付いたのか由美は箸をとめた。

由美と目が合った裕二は苦笑いを浮かべながら聞いてみた。

「それ、天地のだよね……。」

「……うん。」

箸を加えながらそう呟き頷いた。

「知ってるのに食べたの？」

「……来ないから。」

「でも……。」

何かを言おうとした裕二の言葉を歩美が横から遮った。

「別にいいんじゃない？どうせ、あいつ朝ご飯食べないんだし」

「まあ、そうなるだろうけど……。」

裕二は黙々とご飯を食べる歩美を見た。由美は裕二の視線が歩美に行くと同時に天地のサバの味噌煮を食べ始めた。

裕二は何も言えずに静かにご飯を食べた。

三人が朝食を食べ終わると同時に天地が寮に戻ってきた。服は汗でビショビショになっていて、息も荒かった。天地は寮の出入口で倒れこんだ。

そんな天地に管理人がコップ一杯の水を持ってきた。

「毎朝これじゃあ、体が持たないわよ」

「はあ……はあ……。す……すみません……。」

コップを受け取ると水を飲み干した。と、そこに制服を着て鞆を持った歩美がやってきた。

歩美は汗だくの天地を見るなり、表情を引きつらせた。

「ちよ、ちよっと……。そんな格好で寮の前に倒れこまないでよ」

何か言い返そうとした天地だったが、酸欠状態のせいで上手く頭が回らなかった。

息を整えた時にはさすがに歩美の姿は無かった。

「ふっつ……。やっと落ち着いたか……。」

そう言っただけで天地は立ち上がった。そして、階段を何段か上がった所

で管理人に呼び止められた。

「そうそう、天地君。」

天地は振り返り管理人の方を見た。

「何ですか？」

管理人は満面の笑みを浮かべながら天地を見ていた。その時、天地は後ろから頭を殴られ階段から落ちた。

誰がやったか大体検討は付いた。天地は階段に仰向けに倒れたまま階段に居る人物を見た。

やはり、そこに居たのは由美だった。

「何しやがる」

「……邪魔だったから……」

静かにそう言つて由美は天地を見た。そして、天地の目線で由美はある事に気付いた。

制服のスカートは短いため、天地の体勢からでは由美のパンツが丸見えだったのだ。

顔を赤面させて由美はスカートを押さえた。

「やっと気付いたか」

天地はそう言つて笑みを浮かべながら由美を見た。その瞬間、由美が階段を飛び降り持っていた布で来るんだ刀を出した。

さすがにこれはやばいと思つた天地はすぐに立ち上がりその場を離れた。

だが、ランニングの疲れで足が纏れた。その隙を突いて由美が一瞬で間合いを詰めて天地の意識は一瞬にして遠のいた。

あの後、意識の無くなった天地をボコボコにして由美は学校に向かった。

体中に痛みを感じながらも天地は学校へ行く仕度をした。

「オイオイ……。大丈夫かよ？」

「これが、大丈夫そうに見えるか？」

「……いや。見えないな。」

天地は裕二の肩を駆りながら寮の階段を下りていった。この時、すでに天地と裕二の遅刻は決定していた。

やっとの事で一階に辿りついた二人に気付いた管理人が声を掛けた。

「天地君。さっきは大丈夫だった？結構派手にやられていたけど。」

「ええ……。一瞬三途の川に足が浸かりましたよ……。」

「あら。その歳で三途の川を渡りそうになっちゃったの？」

管理人はそう言いながら楽しそうに笑っていた。実際、管理人が止めなければ三途の川を渡る事になっただろう。

「そうだ。忘れる所だったわ。アレが届いてるわよ」

「アレ？」

天地の横で裕二が不思議そうに首を傾げた。
そんな裕二を尻目に天地は嬉しそうに声を上げた。

「本当ですか！アレが届いたんですか。」

「ええ、早速持ってくるわね。」

「はい！」

管理人は奥の部屋に行き1mほどの長さのある細い木の箱を持ってきた。

傷の痛みも忘れ、嬉しそうに箱を受け取った。

その箱に何が入っているのか裕二には全くわからなかった。

そして、箱が開いた時初めて中の物がわかった。

箱の中には布に包まれた一本の刀が入っていた。これは、天地のオウガと戦うための武器であった。

天地は刀を鞘から抜くと刃を眺めていた。その刃には龍の形が彫られていた。

その龍は不思議な色を放っていて、裕二はそれに見とれてしまっていた。

天地と裕二の二人が刀に見とれているので、管理人が声を掛けた。

「二人とも、遅刻決定だからって、のんびりしてちゃダメよ。」

その言葉で二人は今の状況を思い出した。天地は刀をしまい、裕二の方を見た。

「急ぐぞ！裕二！」

「あ、ああ……。」

二人は慌てて寮を飛び出した。
幸いにも寮から学校へ向う道は車が通る事が少ないため全力疾走で
駆ける事が出来た。

しかし、学校に続く道の途中、公園へと伸びる道の方から何か気配
を感じて立ち止まった。

それに気付いた裕二も駆け足をしながら止まり天地のほうを見た。

「どうした？」

その問いに公園に伸びる道を見ながら答えた。

「何か、気配を感じる。」

「オウガか？」

「たぶん。そうだと思うが……。」

天地の言葉が詰まり、険しい表情で考え込んでいた。裕二も公園に
伸びる道を見た。

その道は細く、滅多に人の通らない裏道だった。

公園に伸びる道と行っても、公園の裏の森林に出る道だ。

出入口は他の所にある。ただ、天地と裕二はよくここから公園に行
くのだった。

「ンッ？いつもと違うのか？」

「ああ。ちょっと、行って来る。」

そう言って天地が公園に向う道を行こうとした時、裕二が言った。

「俺も行く。」

その言葉に天地は立ち止まり天地の方を見た。いつになく、裕二の顔が真剣だった。

しかし、天地は裕二と一緒に行くのは反対だった。

「待てよ……もし憎の鬼だったら……。」

「俺だって、一応ハンターになるために修行してテストも受けたんだ。少しくらいなら……。」

裕二があまりにも真剣に頼むので天地は断ることが出来ず仕方なく一緒に連れて行くことにした。

そして、裏道を抜けると公園の森林の中に出た。二人は辺りを見回し気配を感じていた。

「気をつけろよ！裕二。憎の鬼だったらお前を守る自信ないからな……。」

「ああ。憎の鬼じゃ無い事を願うばかりさ。」

二人はゆっくりと森林の中を進んだ。辺りは木と草だけで後は何もなく静かだった。

暫く進むと誰かが倒れているのに気付いた。天神学園の制服を着ていた。しかも、女子生徒だった。

そして、彼女の側には由美の刀『疾風丸』が地面に突き刺さっていた。疾風丸を見て初めて彼女が由美だとわかった。

「葉山さん!!！」

「待て！裕二！！」

由美に駆け寄ろうとした裕二を天地が大声で呼び止めた。裕二は立ち止まり天地の方を見た。

「何で止めるんだ！」

「何があつたかは知らないが、由美がやられたんだ。強敵だ。しかも、まだ近くにいる」

天地がそう言つて辺りの気配を探っていると一人の少年が天地と裕二の目の前の木の上から降りてきた。そして、にこやかに笑みを浮かべながら二人を見た。

「フフフ……。遅かつたね。もう一人のハンターさん。」

「お前が、由美を……。」

「さあ？僕は一切手を出していないよ。」

少年はそう言つて指を鳴らした。すると、少年の両脇から2m程の体格の怒の鬼が現れた。

それを見て天地はやつと由美がやられた訳がわかった。

「哀の頭脳に、怒の力か……。よく考えたな……。」

そう言いながら天地は裕二を下がらせて一歩前に出た。楽しそうに笑みを浮かべながら哀の鬼は答えた。

「そうだよ。僕が、彼らの頭脳となれば憎の鬼にも引けをとらないからね。」

「その様だな……。」

天地はそう言って鞆を下ろし刀を出した。すると、哀の鬼は笑い出した。

「ハハハハ……。所詮、君も彼女と一緒に。刀で僕等に勝てると思っているのかな？」

「さあな……。だが、少なくとも俺はお前等な奴に負ける気がしないけどな……。」

そう言ってゆっくりと鞘を抜き、大声で刀に呼びかけた。

「行くぜ！五龍神！！！」

第四章 火を司る龍 火龍神の目覚め

天地は五龍神から何の力も感じない事に気付いた。
哀の鬼もそれに気付いていた。

「その刀、何の力も持っていないようだね。それなら、さっきの女ハンターの方がまだましだったよ。」

そう言つて大声で笑い始めた。

五龍神の力がなぜ目覚めないのかはわからなかったがそれでも、戦うしかなかった。

二体の怒の鬼は左右に分かれて天地を挟み撃ちにした。

天地の右には鋭い牙と爪を持ったオウガ。左には巨大な金棒を持ったオウガ。

どちらからも、凄まじい力を感じた。

(五龍神は目覚めてないが、やれる所までやる……。)

五龍神の柄を両手でしっかりと握り締めて両方のオウガを交互に見た。

同時に何体ものオウガと戦うのは初めてだった。

オウガに挟まれ迂闊に動く事の出来ない天地は相手の出方を見てから動くしかなかった。

天地の右のオウガが哀の鬼をチラッと見た。

そして、哀の鬼が目で合図すると同時に天地に向つて右のオウガが向ってきた。

天地は右から来るオウガに体を向けた。オウガの鋭い爪が天地に襲い掛かった。

天地はそれをジャンプして避けた。だが、次の瞬間大きな金棒が天

地に襲い掛かった。

空中で身動きの取れない天地は金棒に殴られ勢いよく吹き飛んだ。吹き飛んだ天地の体は木々を貫き地面に落ちた。天地の体がぶつかった木々は大きな音をたてて倒れていった。

「グフツ……。」

天地は口から血を吐きゆつくりと立ち上がった。

金棒を五龍神で受け止めることが出来たがその衝撃は凄まじくすでに立っているのがやっとだった。

しかし、五龍神には傷一つなく、五龍神に彫られた龍の色が徐々に変わり始めていた。

フラフラの天地を見て哀の鬼が不適に笑いながら言った。

「フフフツ。あの金棒を喰らってまだ立ちますか。でも、もう限界の様ですね。」

「そうでもないさ……。」

「口ではそう言っても、体の方は正直ですよ。」

哀の鬼は二体のオウガを引き連れて天地の方に向ってきた。

確かに天地の体はすでに限界だった。朝から色々とあり過ぎたせいできつきの一撃がかなり効いていた。

しかし、天地は由美から注意を外れる瞬間を待っていた。

裕二の方を見て目で合図を送った。裕二もそれを見逃さなかった。一気に駆け出し由美を抱きかかえ疾風丸を地面から抜くと裏道の方へ走りだした。

「くっ！お前達！あいつらを逃がすな！」

哀の鬼がそう言って二体のオウガに指示を出したが天地がボロボロの体で彼等の前に立ちはだかった。

「悪いが、ここは俺が通さねえ……。」

「フツ……。いいでしょう。あなたから先に殺してあげましょう!!」

そう言って哀の鬼は金棒を持ったオウガに指示を出した。

「あなたの金棒で押し潰してあげなさい！」

「ウガアアアツ!!」

金棒を振り上げて天地の頭の上に振り下ろした。

大きな音と共に地面が大きく揺れた。その振動は森林を抜けた裏道まで届いた。

裕二は振り返り天地の居るほうを見た。

「さあ、逃げた者を追いましょう。」

哀の鬼がそう言って裕二達を追いかけようとした時だった。

金棒の下から天地の声が響いた。

「ま、まだだ!!」

その声と同時に真っ赤な光が地面と金棒の隙間から溢れ出てきた。

光が完全に消えたその瞬間、オウガの金棒が吹き飛び宙に舞い再び地面に突き刺さった。

そして、先程まで金棒のあった地面は穴が開いてあり、そこに天地が立っていた。

「やっと……。五龍神の力の一つが目覚めたぜ……。」

天地はそう言って笑みを浮かべた。右手に持った五龍神の刃の龍が赤く輝きを放っていた。

哀の鬼は驚きを隠せなかった。天地はゆっくり穴から出ると三体のオウガを見た。

「さつきは、散々やつてくれたな……。行くぜ!!」

「死に損ないめ!! 行け!!」

哀の鬼は二体のオウガに指示を出した。鋭い爪が天地に襲い掛かった。

天地はそれを五龍神で受け止めた。

すると、五龍神の刃が真っ赤になり、オウガの鋭い爪を斬り落とした。

オウガの斬られた爪は地面に突き刺さり消滅した。

「な! 何だ! あの刀は!! こいつの爪を……。」

「これは、五龍神の火を司る龍。火龍神だ!!」

そう叫ぶと天地は鋭い爪を持ったオウガの体を切り裂いた。血が飛び散りオウガは消滅した。

哀の鬼はもう一体のオウガに指示を出した。

オウガは地面に刺さった金棒を手にとると、天地の頭の上に振り下ろした。

天地は火龍神で金棒を受け止めた。
すると、硬くて重い金棒は火龍神の刃に触れると真っ二つに裂けた。
驚き後ずさる怒のオウガを火龍神で切り裂いた。オウガの体は一瞬
で切り裂かれ消滅した。
天地は哀のオウガの方を見て火龍神の刃先を向けた。

「次はお前だ……。」

その時、体が急に重くなり目眩を起こし地面に右膝をつき、火龍神
を地面に突き刺し何とか体を支えた。
全身を襲う痛みが激しく動く事もままならなかった。それを見た哀
のオウガは不適に笑い始めた。

「フ・フハハハハ！驚かせやがって！」

そう言いながらオウガはゆっくりと天地に歩み寄ってきた。
そして、天地の前で立ち止まり天地を見下した。

「さすがにアレだけの攻撃を受ければ、もう動く事も出来ないだろ
う。」

「ハツ……。自分じゃ何も出来ないのによく言うな……。」

天地のその言葉にオウガは怒りをあらわにして、天地を蹴り飛ばし
た。
体に力の入らない天地は軽く吹き飛ばされた。その後も何度も何度
も天地を蹴り飛ばした。

「ハア……ハア……。最後は自分の刀で斬られて死ぬんだな……
。」

そう言つて哀のオウガは体をオウガの姿に変えて火龍神の柄を握つた。

この時を天地はずつと待つていた。ゆっくりと体を起こして叫んだ。

「焼き尽くせ！火龍神！」

その声に共鳴する様に火龍神の刃の龍が輝いた。オウガはその輝きに柄から手を離れた。
天地は力一杯叫んだ。

「猿円陣！！！」

すると、火龍神の回り半径5mの大きな火柱が立ち上がった。オウガは逃げようとしたがもう間に合わなかった。

一瞬にしてオウガは消滅した。その爆風が天地の体を吹き飛ばした。天地は体を激しく木にぶつけた。

火柱が消えた時には火龍神は元の五龍神に戻っていた。

「やったか……。」

そう呟き目を閉じた。暫くして草の上を走る足音が聞こえた。

天地が目を開けてその方向を見ると、そこには由美を抱えた裕二の姿があった。

裕二は天地に気付いて駆け寄った。

「だ、大丈夫か？」

「まあ、全身ズキズキして動けないけどな……。」

「お前が無事で何よりだ。」

裕二はそう言つて笑い出した。それにつられて天地も笑つた。結局この日、天地・裕二・由美の三人は学校には行かなかつた。天地も由美も動く事が出来ないほどの傷を負つていたが次の日にはほとんど回復していた。

「それにしても、二人とも凄い回復力だな。」

「まあ、ハンターとして色々訓練したからな。」

「……………」

天地・裕二・由美の三人は一緒に学校に向つていた。

相変わらず、学校に向う道は静かで天地と裕二の話し声だけ聞こえていた。

二人は珍しく由美と一緒にだが、由美はまだ一言も話していなかつた。

裕二は由美に話しかけた。

「葉山さん、どうかした？」

その問いに由美はチラッと裕二の方を見たがすぐに目を逸らし前を向いた。

そして、暫くして小声で言った。

「変な夢……………見たの……………」

由美の声は小声だったが、静かな道だったため聞き取る事が出来た。

「へえ〜っ。どんな夢？」

その話に裕二は興味深々だった。天地も何故か興味が湧いた。二人の視線に気付いた由美は小声で話した。

「助けられるの……。」

「助けられる？」

「誰にだ？」

天地と裕二は違う質問を同時にした。縦に首を振り、由美は言葉を続けた。

「お邪魔ムシに……。」

「お邪魔ムシ？」

裕二がオウム返しのようにそう呟くと横から殺気のようなものを感じた。そこを見ると天地が怒りをあらわに今にも由美に襲い掛かろうといわんばかりの表情をしていた。それに、気付き裕二はすぐに天地の体を押さえた。

「誰が！お邪魔ムシだ！！」

大声で天地は由美に怒鳴った。しかし、それを無視して由美は歩き続けた。

「コラー！！待て！俺はな！！聞けー！！」

その日、静かな道には天地の怒鳴り声が響き渡った。

第五章 風邪と優しさと謎の少年

休みの日。

特にやる事の無かった天地は部屋で五龍神の手入れをしていた。

天地の部屋は玄関を入ると右側に風呂とトイレが縦並びになっていて、左側には冷蔵庫・流し台・コンロと横並びになっていた。

寮のどの部屋も大体はこんな並びだ。

食器棚が左端の壁にぴったり付いてたつてあった。

キッチンはこの感じだ。

奥の部屋にはベッド・机・テーブル・本棚・テレビなどがあった。

ベッドが右端の角にぴったりとくっ付いていて、その隣に机が立て並びにおかれていた。

机の反対側にテレビが横に立てられた本棚の上に乗っかっていた。

そして、テレビと机の間にベランダに出るための窓があった。

中央にあるテーブルに五龍神を鞘に入れて置いた。

「ん〜っ……。暇だ……。」

そうばやきながら天地はベッドにもたれながら窓の外を見た。

外は青空が広がり雲がポツポツとあるだけだった。

三階建てのこの寮には10個の部屋があるが天地・裕二・由美・歩美の四人しか暮らしていない。

天地の部屋は二階の階段を上がってすぐ右の部屋で、その隣に裕二が暮らし、向かいの部屋に由美・右斜め前の部屋に歩美が住んでいる。

一階には管理人の部屋と大浴場がある。

寮入って右側には二階に上がる階段があり、真っ直ぐ行くと大浴場がある。

大浴場は一つしかないため、男女でちゃんと曜日分けされている。

月・水・金は女子。火・木・土は男子。日曜は掃除の日だ。

この大浴場は一般の人もよく入りに来るため天地はあんまり大浴場に行く事はなかった。

だが、この日は何故か大浴場に入りたくなくなってしまった。

「この時間帯は誰もいないだろ・・・。」

着替えとタオルを持ち天地は一階の大浴場に向った。

脱衣所で鼻歌を歌いながら服を脱いでいた。

服を脱ぎ終えるとタオルを巻き大浴場の扉を開いた。

「オオツ！やっぱし、大浴場は広いな！」

そう言いながら笑っていると湯船の方に人が居るのが見えた。

湯気でよく見えないが天地は声を掛けながら桶でお湯をすくい体を流した。

「いや。こんな時間帯に入っている人がいるなんて、知りませんでしたよ」

入っているのが誰かよく見えない天地は何となく敬語になっていた。しかし、湯船に浸かっている人は返事を返さなかった。

首を傾げながら天地は湯船にゆっくりと浸かりその人の方へ近付いた。

そして、顔を見て驚きすぐに湯船から出た。

「オワツ！ごめん！」

そう叫び天地は脱衣所の方に走った。湯船に浸かっていたのは由美だったからだ。

自分が曜日を間違えたのだと思った天地だったが、よく考えてみた。確かに今日は男子の日だった。そう思った天地はすぐに引き返し湯船に浸かる由美に叫んだ。

「お前！今日は男の日だぞ！何でいんだよ！！」

「……………」

湯船に浸かりながら由美は天地を見た。由美はタオルを巻いているが天地は由美の方を見ない様にしていた。

「聞いているのか！今日は……………」

最後まで言う前に由美が言った。

「わかってる……………。一回言えば聞こえるし……………」

「な！わかってるなら、何で！！」

「……………誰も、居なかったから……………」

「いや！そんな問題じゃ！」

「それに……………。タオル巻いてるし……………」

「か！関係ないだろ！！」

色々と由美に言ったが由美の方は全く気にせず、結局天地が出る事にした。

完全に湯冷めしてしまった天地は脱衣所で何度もクシャミをしてい

た。

次の日、やはり天地は風邪を引き部屋で寝込んでいた。咳が止まらず、頭痛も激しかった。体もだるくて動く事も出来ないでいた。

天地が寝込んでいると部屋に裕二がやってきた。

裕二はビニール袋をテーブルに置き天地の向いに座った。

「大丈夫か？こんな時期に風邪なんて。」

「ゴホゴホ……。大丈夫だ……。寝てれば治るから……。」

「馬鹿は風邪引かないって言うけどな。」

そう言いながら裕二は笑った。その笑い声は天地の頭に響いた。右手で頭を押さえながら天地は言った。

「頭に響くから……。少し静かにしてくれ……。」

「ああ、悪い悪い。まあ、今日は安静にして置くんだな。」

「わかってるさ……。」

「これ、薬と栄養剤と果物。どうせ、薬飲んで無いんだろ。ちゃんと飲めよ。」

「ああ、わかった。ありがとうな……。」

天地はそう言って軽く手を上げた。

裕二が天地の部屋を出て、何分か経ってから誰かやってきた。目をうつすらと明けて、ぼやけながらもその人物を見た。天神学園の制服を着た少女だった。

この寮に住む女子は由美と歩美の二人に絞られる。髪の色で大体わかるはずなのだが、よく見えなかった。だが、彼女が由美だと天地はすぐに気付いた。

「お前……。何してんだ……。」

ダルイ体を無理やり起こして台所の方に居る由美に視線を送った。天地の方を振り向いた由美はエプロンをしていてゆっくりと天地の方に歩いてきた。

そして、テーブルの前で足を止めてテーブル上のビニール袋を手にとった。

何がしたいか全くわからない天地はもう一度聞いてみた。

「なあ……。何してるんだ？」

「……。」

何も言わずに由美はビニールの中の物をチェックしていた。暫くするとビニールをテーブルの上に戻して台所に行った。フラフラながらも天地は立ち上がり壁を支えにして台所までやってきた。

「おい……。」

「包丁……。どっ？」

天地に気付いた由美はそう聞いた。

一瞬、怖い事を想像してしまった天地は素直に教える気にならなかった。

由美は黙々と包丁を探していた。

そして、包丁を見つけると手に取ってゆっくりと天地の方を見た。

「お、お前……。病気の俺を……。」

「……殺す。」

その言葉を聞いて天地は思わず壁から手を放した。その瞬間、目の前が大きく揺らぎ床に倒れた。

由美はキョトンとした表情で天地を見下していた。

「冗談……。」

「お、お、お前が言うとお冗談に聞こえないよ……。」

「……そう？」

首を傾げながらそう言って軽く微笑んで見せた。天地はこの時初めて由美の笑顔を見た。

由美もこんな風に笑顔で笑うんだなと思った。

壁を掴みながら立ち上がると鍋がコンロで火に掛けられている事に気付いた。

由美は包丁をまな板の上に置き天地の方に歩み寄った。

そして、天地の前で止まり顔を見上げた。

「……トイレ？」

「エッ？」

「トイレ。……行くんじゃないの？」

「あ……ああ……。」

天地はようやく何の事かわかり、苦笑いを浮かべながらトイレに向った。

トイレに入り便座を下ろすと座り込んで頭痛のする頭で考えはじめた。

『由美が、何しに部屋に来たのか？』

『あの鍋の中は何があるのか？』

『お見舞いと見せかけて何か裏があるんじゃないか？』

色々な事が天地の頭の中をよぎった。

だが、すぐに頭痛が起こり考えるどころじゃなかった。

一方、由美は先程裕二の持ってきたビニールに入っていたリンゴの皮を包丁で剥いていた。

皮を剥き終えるところと、トイレに行つて中々出てこない天地の事が気になった。

トイレのドアをノックすると天地の驚いた声が聞こえた。

「………どうかした？」

「い、いや。どうもしないよ！」

その声がすると水を流す音が聞こえドアが開いた。

ドアが開くと由美の目線の高さに天地の胸があった。

由美は顔を上げて天地の顔を見上げた。

「ベッドに……………一人で行ける？」

「あ、ああ。大丈夫……………」

天地はそう言つて壁を支えにベッドに向つた。

ベッドの脇に座ると由美がリンゴを皿に盛つてやってきた。

「リンゴ……………。食べて……………」

「ゴホゴホ……………。あ、ありがとう……………」

やはり、由美がいつもと違う気がした。

いつも、『邪魔』とか『お邪魔ムシ』とか言うのに今日はまだ一度も言つてない。

それどころか、物凄く優しく、笑顔も見せてくれた。

それが、やけに怖かった。

リンゴを食べようとすると天地の顔を由美はジツと見ていた。

普段は別に気にならないが二人きりだと、とても気になった。

「なあ……………。学校は行かないのか？」

目覚まし時計を由美の前に置きそう言った。

由美は目覚まし時計を天地に返して言った。

「……………。管理人さんが、用事があるから……………」

「それで、お前が残つたのか？」

「……………」

由美は黙って首を縦に振った。

天地は「ふうん」と相槌を打ちながらリンゴを口に運んだ。
シャキシヤキのリンゴは甘くておいしかった。

「ンツ！美味しいな……………お前も食べてみるよ」

「……………うん。」

リンゴを一切れ口に運ぶと笑みを浮かべた。

「美味しい……………」

「裕二の奴、結構見る目があるからな」

そう言いながらリンゴをまた口に運んだ。

暫く由美と話し込んでいたが台所から焦げ臭いのするのに気付いた。

「何か、臭わないか？」

その言葉に由美は鍋を火にかけてる事に気付き台所に走った。

台所では黒い煙が鍋から出ている。コンロの火を消した。

暫く経っても由美が台所から戻ってこなかった。

「おーい。どうかしたのか？」

その声でやっと台所から顔を出した由美の手には鍋が掴んであった。

由美はうつむきながらゆっくり天地の所に鍋を持ってきた。

天地の前に鍋が置かれた。

「な……。何だこれ？」

「お粥……。ちよつと……。焦がした」

「ちよつとつて……。」

鍋の中には真つ黒な物体だけが残っていてお粥のおの字も出てこなかった。

こんな物を出されたら誰だって笑いしか出てこなかった。

天地は笑いながら由美の顔を見た。

しかし、今にも泣き出しそうな顔をしている由美を見て、なぜかこれを食べなきゃいけないと思った天地はスプーンで黒い物体を食べた。

やはり、焦げの味しかなかった。しかも、所々にガチガチに硬い物があった。

由美の視線が天地に注がれた。

笑いながら天地はその黒い物体を全て食べた。

(うつうつ……。吐きそう……。)

そう思ったがそんな事口が裂けても言えなかった。

鍋に入ってた物を食べ終えた天地に由美がコップ一杯の水と薬を持ってきた。

「……食後の薬。」

「ああ……。ありがとう。」

薬を口に入れて水で流し込んだ。

少し寝ようとベッドに横になった時、オウガの気配を感じた。それは、由美も同じだった。

「オウガ！」

ベッドから体を起こし立ち上がるうとした天地に由美が言った。

「天地は、休んでて……。」

「俺は大丈夫だ！」

「私……。一人で十分だから」

そう言うと天地をベッドに寝かせて玄関に立てかけられた疾風丸を持って走り出した。

仕方なく天地は寝ている事にした。

由美がそんな簡単にやられるわけ無いし、そんな心配しなくてもいいと思ったからだった。

ベッドに横になってしていると瞼が重くなり、眠りについた。

薬の副作用で眠ってしまったのだらう。

その頃、寮を出た由美はオウガの気配のする方へ走っていた。

オウガの気配はデパートなどの建ち並ぶ市街の方からだった。

人気の多い所でオウガと戦うと色々と面倒な事はかりが起きる。

そういう時のための術をハンターは使う事が出来る。

今回はそれを使う事になるだらう。

市街に入ると由美は足を止めて目を閉じて力を集めた。

そして、天高く疾風丸をかざして叫んだ。

「結空陣！」

疾風丸を中心として半径10km地点までの空間を決壊で囲んだ。
この決壊は一般の人には効果が無く、ハンターやオウガにだけ効果のある決壊だ。

その決壊の中でハンターとオウガの姿や形は一般の人に見る事も触れる事も出来ない。

一方、ハンターとオウガには一般の人は見えているが、触れたり傷つけたりする事は出来ない。

由美は近くにオウガが居る事に気付いていた。
疾風丸を鞘から抜き身構えていた。

その時、殺気と共に由美と同じくらいの体格の哀のオウガが三体飛んできた。

三体は奇妙に笑いながら由美を取り囲んだ。

「私……。忙しいの……。」

「ケケケケツ。俺らも忙しいんだよね。」

「邪魔すんなよ。」

「そうだ。そうだ。」

由美の言葉に三体が別々に答えた。疾風丸に力を集めると三体の位置を確認した。

「散りなさい……。疾風演舞！」

その声が響くと由美が素早く舞い踊るかのように三体を一瞬で切り裂いていった。

三体は声を上げる間もなく消滅した。

疾風丸を鞆に納め様とした時、背後から別の気配を感じて振り返った。

そこには、ポケットに手を突っ込み、色つき眼鏡を掛けた少年が立っていた。

身長は天地と同じ位だろう。

服も今時の若者の服装で街の人達に馴染んでいるが、歩いている一般人が彼の体を透けていくのを見て彼が一般人じゃないと確信した。

「あなた……誰？」

「……。」

彼は何も言わずに眼鏡越しに由美の顔を見た。その目に殺気を感じた由美は疾風丸を構えた。

第六章 力

風邪をひき部屋で寝込んでいた天地は由美の張った結空陣がまだ消えてない事に何か嫌な予感がした。かれこれ、二時間近くになるがそろそろ由美の体力も限界になるだろう。

風邪薬を飲んで少しは楽になったが、いまだに体は重かった。その体をゆっくりと起こして五龍神を手を取った。

重い足取りで部屋を出た。寮の廊下は静かで何の音もしなかった。そして、階段を下りようとした時、激しい殺気が天地の体を襲った。その殺気に天地の体は押し潰されそうだった。

(何だ……。この殺気は……。)

ゆっくりと階段を降りて寮の一階に来ると一人の男が立っていた。歳は20代後半だろう。黒い背広を着ていて、サングラスを掛けてタバコを銜えていた。

男は階段を降りて来たばかりの天地を見てゆっくりと向きを変えた。

「お・・・お前は・・・？」

男は何も言わず、天地を見ていた。

五龍神の柄に手をそえて相手の男をジッと見た。口に銜えたタバコを右手の人差し指と親指で掴み、煙を吐いた。そして、ゆっくりとサングラスを外した。

「久しぶりだな！天地。大きくなったじゃないか。」

「はあ？」

天地は思いがけない男の言葉に呆気に取られた。男は天地の前まで来ると笑いながら肩を叩いた。さっきまで感じていた殺気は消えていた。

「ちよ！ちよつと！あんた誰だよ！！」

天地は肩を叩く男の手を払ってそう言った。男は不満そうな顔をして天地の顔を見た。

「何だ？忘れちまったか？」

「忘れたも何も、見た事ねえよ！」

「そうだよな。あの頃、俺も高校一年だったからな。」

そう言いながら男は顎を右手で摩っていた。

この男は天地と面識があるらしいが、天地にそんな記憶は全くなかった。

男は寂しげな瞳で天地の顔をみて語りだした。

「13年前にあつただろ？神矢 壕だ。思い出したか？」

「はあ……。カミヤゴウ？船の名前？」

「ちげえーよ！神谷は苗字。壕が名前。わかったか？」

「ええ、何となく……。」

天地がそう言うと男はため息を吐いて頭を抱えた。

神谷が敵では無いと思った天地は五龍神の柄から手を放した。そして、さっきの殺気について聞いてみた。

「あの殺気はあなたのじゃないのか？」

「おっ、お前も殺気を感じたか！」

「ええ……。あんな大きな殺気、感じないわけ無いだろ？」

「お前もハンターとして成長したんだな。」

神谷はそう言っただけで泣きまねをした。

この人が何をしたいのか天地はわからなかった。

しかし、泣きまねをしていた神谷の表情が急に真剣な顔つきになった。

「だが、殺気が誰の物か、わからんようじゃいつか死ぬぞ。」

その神谷の目つきに天地は一瞬ひるんだ。

だが、すぐに元に戻り消えた殺気の事を思い出した。

「そうだった！天地！行くぞ！」

「行くつて、どこに？」

天地の質問に答える間も無く神谷は寮を飛び出していった。

訳のわからない天地は仕方なく神谷のあとを追った。

午前中とあって人気の無い住宅地を抜けて、大勢の人で賑わう商店街を抜けた。

そして、市街に出た。

そこから、由美の張った結空陣がよく見えた。その結空陣の中から微かに殺気が漂っていた。

「今、行くぞ！」

走り出そうとした天地だが、急に足がフラつき路地に右膝をついた。後ろから神谷がゆっくり歩いて来て天地に手を差し伸べた。

「お前、風邪引いてんだろ？ 恵子さんから聞いている。」

恵子さんとは、天地達の寮の管理人の名前だった。

神谷の手を取り立ち上がると、ゆっくり深呼吸した。

その様子を見ていた神谷はタバコをポケットから出し口に銜えた。

「天地。今日は絶対に五龍神を抜くなよ。」

「それじゃあ！ 戦えないじゃないか！」

「体調の万全じゃない時に五龍神を扱うのは危険だ。」

「でも！」

「まあ、今回は俺の弟子と俺が何とかするさ。」

神谷はそう言って天地に笑いかけて走り出した。

その少し後をゆっくりと天地が追いかけた。

結空陣の中に入ると細身の背中に翼の付いたオウガが二体宙に浮いていた。

その下には傷だらけの由美と少年がいた。

少年は神谷に気付いて叫んだ。

「神谷さん！遅いですよ！それに、二体も居る何て聞いてませんよ！！」

「わりい、わりい。ちょっと話し込んでな。」

神谷は頭を掻きながら笑っていた。

傷だらけの由美を見た天地は五龍神の柄を握った。それに気付いた神谷は叫んだ。

「天地！」

「!?!」

神谷は天地を何かで殴り飛ばした。

路地に倒れこんだ天地の手に五龍神は無かった。

神谷は左手に五龍神を持って天地を見た。

「言っただはずだ！五龍神を抜くなと！」

「まだ、抜いてねえよ！」

「まだって事は抜くつもりだったんだろ！」

「五龍神を抜かないでどうすりゃいいんだよ！」

「今日は黙って見とけ！お前も彼女も、まだ力の使い方をわかつちゃいねえ。」

そう言っつて神谷は五龍神を天地に投げた。

天地が五龍神を受け取ると神谷が何処からか棍を出した。
その棍の両端は虎の形をしていた。

「魁人！ 一体は任せるぞ！」

「は！ はい！！！」

今時の若者の服装をした魁人はそう返事をして槍を出した。
その槍の刃には鮫の形が彫ってあった。

宙に浮いた二体のオウガは神谷と魁人の二人を見て笑い出した。

「フハハハハッ！」

「宙に浮く我々を棍と槍でどうやって！？」

宙に浮いているオウガの一体が激しい痛みと共に地上に落ちた。
もう一体はすぐにそのオウガを追って地上に降りた。
大きな翼に穴が開いていた。

神谷はニヤリと笑みを浮かべてマンションの屋上に向かって叫んだ。

「よくやった！ 昂！」

その言葉にマンションの屋上で嬉しそうに手を振る少女が居た。
彼女が昂だった。顔立ちは可愛く、身長は由美と同じ位だろう。
胸もそれなりに大きかった。髪は長く茶髪だった。

彼女の手には弓が握られていた。
その弓には鳥の形が彫ってあった。

「あとは任せましたよ！」

昴は神谷にそう叫んだ。

神谷は笑いながら手を振り返した。

二体のオウガを挟み撃ちにした神谷と魁人は武器を構えた。

「魁人！水鮫神みずさめじんに使われるなよ！」

「わ、わかってますよ！」

「それじゃあ。行くぜ！火虎神かいてん！」

そう叫ぶと棍の両端の虎が真っ赤になった。

一方、魁人の槍の鮫が青く輝いた。二人は同時に走り出した。

「ハンターにやられるか！！」

「死ね！！」

二体のオウガも二人に向っていった。

神谷は向ってきたオウガの右肩を火虎神で衝いた。すると、オウガは後ろに仰け反った。

後ろに仰け反ったオウガのお腹を、素早く火虎神で衝いた。

オウガはお腹を押さえて数歩下がった。そして、顔を上げた瞬間に火虎神が額を衝いた。

その衝撃でオウガは吹き飛び地面に倒れた。

意識はあるが、体は動かす事が出来なかった。

「な……。何をした……。」

「さあな……。」

神谷はそう言いながらタバコを銜えて火を着けた。
そして、一服すると煙を入れて小さく言った。

「爆虎……。」

すると、倒れていたオウガの体がボコボコつとアチコチにコブの様な物が出来てきた。

オウガは驚き、苦しみながら何かを言おうとしたが、その時にはすでに跡形もなく吹き飛んでいた。

一方、魁人はオウガの攻撃を槍で受け流しながら後退していた。
オウガは笑いながら魁人を攻撃し続けた。

「フハハハッ！弱いぞ！こいつは！！！」

「魁人！遊んでる暇は無いぞ！早く終らせろ！」

「わかりました。それじゃあ……。」

そう言うと魁人の目の色が変わった。

そして、少しオウガから離れて槍を構えなおした。

水が槍の周りに集まり渦巻きはじめた。

その光景に天地も由美も息を呑んだ。オウガもそうだった。

「何をするかわからんが、そのまま死ね！！！」

オウガは魁人に向かって走り出した。

その時、魁人が槍を引いて腰を低くした。

「噛み砕け！！水牙鮫^{すいがこじつ}」

そう言つて槍を一気に突き出した。
すると、集まつていた水の渦が一瞬にして鮫の形に変化してそのま
まオウガを噛み砕いた。
オウガは苦しみ悶えながら消滅した。

第七章 親子と不安

天地達が寮に戻って来ると管理人が入口に立っていた。管理人は天地の姿を見ると大きな声を上げて駆け寄ってきた。

「天地君！風邪引いてるのに外出しちゃダメでしょ！」

「す、すみません……。」

寮の前で管理人の説教が始まった。

始めは天地だけだったが、いつの間にか由美に飛び火してしまった。天地も由美も黙って説教を聞いていた。

そして、管理人の目が天地と由美の背後に居る黒い背広のサンングラスをかけた神谷に向いた。

管理人は神谷の前にやってきて言った。

「壕？」

「お久しぶりです……。母さん。」

「13年ぶりね。大きくなったのね。」

「まあ……。」

「それにしても、駅まで迎えに行ったけど、全く気付かなかったわ。」

「直接、寮に来たんで……。」

その言葉を聞いて管理人の表情が変わった。そして、周囲の空気が一瞬にして冷たくなったのに天地達は気付いた。

逃げ出そうとした神谷だったが、その前に管理人の雷が落ちた。

「あなたが、寝込んでる天地を連れ出したのね！」

管理人の声が辺りに響き渡った。

幸いにも、この辺りは人気が無いため大きな声でも多少は平気だ。

そして、管理人の説教が長々と続いた。

説教が終わった頃にはすでに夕方になっており、裕二と歩美が学校から帰ってきていた。

魁人と昴の二人は暫くこの寮で暮す事になったが、神谷の方はまたすぐに他の街に行ってしまった。

結局、天地は神谷といつ会ったか聞く事は出来なかった。

夕食の準備が出来るまで天地と裕二と魁人の男性陣は天地の部屋に集まっていた。

「僕は、村上 魁人です。これから、よろしくお願いします。」

「俺は倉敷 裕二。ハンターじゃないけど、ヨロシクな。」

「へっつ。裕二君はハンターじゃないですか。」

「ハンターの修行は受けたが、色々あってな。あと、呼び捨てでいいから。」

「わかりました。」

魁人はそう言いながら丁寧に頭を下げた。

天地は机の前の椅子に座りテーブルを挟んで向かい合って座っている裕二と魁人を見ていた。

「なあ。お前、なんでそんな服装してるんだ？」

今時の若者風の服装の魁人にそう言った。すると、魁人は笑いながら頭を掻いて言った。

「神谷さんに着せられて……。」

「そんなの断れば済む話じゃないか。なあ。」

「そうだな。」

天地の言葉に裕二が腕を組みながら縦に頷いた。そんな二人に対して魁人は複雑な表情で言った。

「確かに、そうなんですけど……。僕って内気だから……。」

「その服装じゃあ。そうは見えないな……。」

「でしょ。そのための服装なんです。」

魁人はニコニコしながらそう言った。天地と裕二は少し呆れた。

「そう言えば、お前の武器は槍だけ？」

「水鮫神です。」

「神が付くって事は、五龍神と同じか？」

裕二のその質問に魁人は軽く首を縦に振った。そして、水蛟神をテーブルに置いた。

「この槍は、五龍神に封じられる水龍神の鱗から生まれた鮫、水蛟を封じた槍なんです。」

「へえ〜。それじゃあ。親子みたいな物か？」

「まあ、そうですね。」

「それじゃあ。神谷の持ってた奴もあの女の持ってた奴もか？」

天地はそう言いながら水蛟神の刃を見ていた。

魁人は頷きながら語った。

「そうですね。神谷さんの火虎神は火龍神から生まれた火虎を封じた棍。

昂さんの風鳥神は風龍神から生まれた風鳥を封じた弓。

他に土龍神から生まれた土蛇を封じた鉤爪。

雷龍神から生まれた雷犬を封じた大剣があるそうですね。」

「お前、何でそこまで詳しいんだ？」

「勉強しましたから。」

魁人は自慢そうな顔で笑みを浮かべた。天地と裕二の二人は呆気に取られた。

その頃、由美・歩美・昂の女性陣は大浴場にいた。

オウガとの戦いで汗を掻いた昂が由美と歩美を誘ったのだ。

今日は一般の客は無く、三人だけの貸しきり状態だった。由美は湯船の端の角の方で何やらボンヤリとしていた。その様子を少し離れた場所から歩美と昴が観察していた。

「どうしたのかしら？」

「いつもあんな感じじゃないの？」

「うん。いつもはもっと真ん中の方に居るけど……。」

「悩み事かな？」

「どうだろう？」

歩美と昴の二人は小声でそう話していた。

由美はため息を吐き湯船に潜った。黒髪が水にぱっと広がった。

(私は……。弱い……。今回も、この前も……。)

湯船に潜った由美を見て歩美と昴は首をかしげた。

「何してるのかしら？」

「もしかしたら、恋の悩みじゃない？」

「恋？」

「そうよ。愛する人を思ってあんな風にやっってるのよ。」

昴は目を輝かせながら右手でガッツポーズをしていた。

歩美は苦笑いを浮かべながらそんな昴の顔を見ていた。暫くすると由美が顔を出した。濡れた髪から水が流れた。

「ああやって、涙をごまかしてるのよ！」

「そうかしら？」

「絶対そうよ。」

「何でそう言い切れるの？」

「私もそうだったから……。」

そう言つて昴は自分の恋の話 시작했다。

歩美は仕方なく昴の話聞く事にした。

暫く大浴場の天井を見つめながら由美が考えた。

『私は……。邪魔？』

『役に……。立ってない？』

『足でまとい？』

『疾風丸……。私じゃダメなの……。』

色々な想いが胸の中にあつた。

天地に助けられ、魁人と神谷に助けられ……。

自分はこれから、オウガと戦つていけるのだから。

そんな不安が由美にはあつた。

第八章 全てを破壊する鬼 現る

魁人と昴も寮の生活に慣れ、天地達とも馴染んできていた。相変わらず、朝は騒がしくドタバタとしていた。

変わった事は魁人が居る事で裕二は朝食も少しは落ち着いて食べる事が出来る様になった。

ただ、天地のせいで学校にはいつも遅刻ギリギリだった。

「ハア・・・ハア・・・。」

天地・裕二・魁人の三人は息を切らせながら教室に入った。教室に入ると一斉に席に着いている生徒の視線が集まった。

黒板の前には体格の良い男の先生が立っていた。この人が天地達の担任だ。

「また、お前達か！何度も何度も遅刻ばかりしよって！！」

「す、すいません！」

三人は同時に頭を下げた。この先生は天神学園でも一位、二位を争うほど怖い先生だ。

そのため、天地達は口答えしないようにしている。

頭を下げた三人を見た先生はため息を吐きながら言った。

「もういい。明日は遅刻するなよ。」

「はい！」

返事を返してすぐに自分の席に向った。

天地の席は窓際の一番後ろで、その右横が歩美の席だ。裕二は廊下側の一番後ろで前の席に昴、左横の席が魁人だ。由美は違うクラスで学校ではあんまり顔を合わせない。天地が席に着くと歩美が笑いながら天地を迎えた。

「また遅刻ね。」

「またって、昨日は遅刻してねえ。」

「って言うか。少しは学習したら？」

「何をだよ？」

「毎朝遅刻してるのにちつとも変わらないから。」

呆れ顔で歩美はそう言った。歩美を軽く睨みつけながら天地は言った。

「悪かったな。」

「まあ、わかればいいのよ。」

「ヘイヘイ……。」

歩美に口では勝てないとわかっている天地は怒りを堪えて負けを認めめた。

裕二と魁人はその二人のやり取りを見て小さく笑っていた。

「クククツ……。あの二人、またやってるよ……。」

「いつもの事だけど、見てると楽しいんだよね……。」

二人の笑い声が聞こえた昴は体を横に向けて二人の方を見た。

「また、やってるの?」

「ああ。喧嘩するほど仲が良いって言うけど、あの二人もそうだったりすんだよな。」

「そうかしら? 私は違うと思うわ。」

「どうして?」

首を傾げた裕二に腕を組みながら昴が不適に笑い始めた。

裕二と魁人は引きつった表情で昴を見た。

「フフフツ……。私の直感がそう言ってるのよ。」

「直感って……。当てにならないだろ?」

「女の直感は鋭いのよ。それに、私の直感によくあたるんだからねえ。」

ウィングをしながら魁人を見た昴に魁人は軽く苦笑いを浮かべながら会釈した。

「どう言う事だ?」

「まあ、色々だね……。」

裕二の質問に魁人はアイマイな答えを返した。
何の事が全くわからない裕二を尻目に昴は話を進めた。

「あの天地の様子を見る限りじゃあ。好きな人が居るわね。」

「だから、歩美じゃないのか？」

「違うはね。他に居るはずよ。もっと近くに……。」

「それじゃあ。お前か？」

「馬鹿じゃないの？私なわけ無いでしょ！」

「自分で言つてて虚しくない？」

そう言つて裕二が笑いながら魁人の方に顔を向けた瞬間、昴の右ス
トレートが右頬を直撃した。

殴られた衝撃で裕二は椅子ごと後ろに倒れた。
その音に生徒が一齐に裕二の方に向けられた。
昴はいつの間にか前を向いていて裕二が勝手に後ろに倒れた形にな
っていた。

「何をしてるんだ倉敷！」

「す、すみません……。（覚えてるよ！）」

先生に頭を下げて昴の背中を覗んだ。

昼休みになり、天地・裕二の二人は屋上のタンクの横で買ってきた

弁当を食べていた。

赤く腫れた裕二の頬は見ているだけで痛々しかった。それを、見ない様にしようとする、余計に目に入った。

「お前……。痛く無いか？」

恐る恐る天地は裕二に聞いた。裕二は眉間にしわを寄せて睨みつけた。

昂に殴られてから裕二の機嫌は悪かった。

痛み of せいもあるが、女に殴られたのが一番効いたのだろう。

裕二が黙ったまま弁当を食べているので、天地もゆっくりと弁当を食べ始めた。

暫くすると、弁当を持って魁人がやってきた。

「遅くなったね。もしかして、食べ終わっちゃった？」

微笑みながら魁人はそう言って二人の前に座った。

すでに、弁当を食べ終えた裕二は冷たいお茶の缶で頬を冷やしていた。

「大丈夫？ 昂って結構力が強いんだよ。」

「……。」

「聞いている？」

「……。」

何の返事も返さない裕二の顔を魁人が覗き込んだ。その瞬間、裕二が魁人を睨みつけた。

笑みを浮かべながら魁人は天地の側にやってきた。

「やっぱり、怒ってるの？」

「らしいな。」

「怒のオウガになつたりしてね。」

「そんなわけ無いだろ。」

そう言つて二人は笑つたが、裕二に睨まれてすぐに笑つのを止めた。静かに会話も無く、二人は弁当を食べた。

誰も話さないと屋上は静かで、運動場で騒いでいる者の声がよく聞こえた。

校門の前には一人の少年がいた。細目で白い髪、色白の肌。服装は死に装束だった。手は袖に隠れて、足は裸足だった。校内に入った少年はゆっくりと人気の多い運動場へと向つた。運動場が見えて来ると、立ち止まり口元に笑みを浮かべた。その瞬間、凄まじい殺気が校内を包み込んだ。屋上に居た天地と魁人は勿論、裕二もその殺気を感じ取つた。

「オウガか！」

「でも、こんな凄い殺気は初めてだ……。」

魁人は強い殺気に押し潰されそうになつた。

何とか立ち上がった天地は五龍神を手にした。

運動場で遊んでいた生徒達もその強すぎる殺気を感じ取つたのだろ

う。

吐き気を訴えドンドン倒れていった。

急いで殺気のある方に行こうとするが、思うように動く事が出来なかった。

天地達が苦しんでいる中、少年は着実に運動場に近付いていった。運動場で気を失っている生徒に近付こうとした時だった。

風の刃が少年を襲った。

とっさに風の刃をかわした少年はそれが飛んできた方を見た。

そこには、疾風丸を持った由美が立っていた。

風の刃で殺気が弱まった。

「君は、ハンターだね？」

「……. だったら？」

少年の言葉に由美はゆっくりそう答えた。

すると、少年はゆっくりと微笑み頭を下げた。

その態度に由美は怒鳴った。

「どっいつつもり！」

少年は顔を上げてまた微笑みながら言った。

「挨拶だよ。」

「挨拶？ なぜ？」

「君達ハンターと長い付き合いになるからね。一応、挨拶を。」

ニコニコと笑顔でそう言った少年に由美は疾風丸で斬りかかった。

だが、由美の疾風丸は軽々とかわされ後ろを取られた。由美の後ろを取った少年は攻撃をしないでただ由美を見ていた。

「僕は挨拶に来ただけですよ。あなた方ハンターに危害は加えませんが。」

そう言いながら少年は背後から飛んできた数十本の矢を全てかわした。

「くっ！」

悔しそうに風鳥神を下ろした昴は木の上から降りた。

矢は地面に刺さり消滅した。それを見た少年は少し驚いた表情で昴の方を見た。

「今のは、風鳥の力ですね。力の方は衰えて無いようですが、使い手が未熟ですね。」

「何ですって!!！」

細目でニコニコと微笑む少年に向って、昴は矢を無造作に放った。軽やかな身のこなしで少年は矢をかわした。

かわされた矢は昴の正反対に立っていた由美を襲った。

疾風丸で矢を防ぐ由美だったが、矢の勢いが凄く由美は全てを防ぐことが出来なかった。

数本の矢が体に刺さり地面に膝をついた。

「由美!!！」

「くっ……。」

「ダメですよ。状況は冷静に判断しないと……。仲間を殺す事になりますよ。」

大量の矢を全てかわした少年だったが、息一つ乱していなかった。そこに、五龍神を持った天地と水鮫神を持った魁人がやってきた。矢の刺さった由美を見て、天地と魁人が同時に叫んだ。

「由美！」「由美さん！」

死に装束の少年は天地と魁人に気付いて振り返った。やはり、笑みを浮かべたまま言った。

「あなた方もハンターの様ですね。」

「お前!!！」

天地は階段を駆け下りて、少年に向って五龍神を振り下ろした。しかし、五龍神は空を斬り砂埃を上げただけだった。

「くっ!!！」

「力任せな戦い方ですね。伝説の五龍神が泣きますよ。」

少年はサッカーゴールのバーの上に立ち天地にそう言った。怒りの納まらない天地は五龍神を目の前に添えて叫んだ。

「ふざけんな!!目覚めよ!火龍神!!！」

五龍神の刃の龍が赤く染まり火龍神へと変わった。

真つ赤に燃える炎が火龍神を包み込み、天地が叫んだ。

「喰らえ！炎裂弾！！」

素早く火龍神を横に振ると、火龍神を包んでいた炎が少年に向って飛んでいった。

そして、途中で分裂し一斉に少年に襲い掛かった。炎を一つになり燃え盛った。

「やったか・・・？」

足がもつれ天地は地面に膝をついた。

しかし、炎が消えた所に少年の姿は無かった。

「残念だったね。」

天地の背後で少年の声がした。いつの間にか、天地の後ろに回りこんでいた。

天地も魁人も由美も昴も気付かなかった。

天地が危ないと思った魁人は水鮫神を構えた。

水鮫神の周りに水が集まり渦巻いた。

「噛み砕け！水牙鮫！！」

水鮫神を突き出すと集まった水が鮫の形になり、少年に襲い掛かった。

少年は魁人の方に向かって微笑んだ。そして、次の瞬間、姿を消した。

「天地君！」

魁人の声で自分に水牙鯨が向っている事に気付いた天地は、とつさに火龍神で防ごうとした。

しかし、水で出来た鯨を刃で防げるわけも無く、水の鯨の牙が天地に襲い掛かった。

火龍神だったおかげで、ダメージは半減されたが着ていた服は裂かれ、体中傷だらけだった。

特に、火龍神を持っていた右腕は酷い傷で火龍神を握ることが出来なかった。

火龍神は地面に落ちると五龍神に戻った。柄は天地の血で真っ赤に染まった。

力の入らない右腕を左腕で押さえながら辺りを見回した。

その時、少年の声が響いた。

「この街を護る四人のハンターさん。僕の名前は絶鬼。

これから、君達とは長い付き合いになるから、覚えておいてね。

それから、もっと強くなって僕を楽しませてね。

僕は君達が強くなった時にもう一度会いに来るよ。全てを破壊し

に……。」

天地はこの声を聞いてすぐ気を失った。

第九章 取り囲まれた寮

絶鬼との戦いの傷が未だに癒えぬ天地の右腕には白い包帯が何重にも巻かれていた。

傷の浅かった由美の方はすでに完治しているがオウガとは戦いつていない。

魁人と昴はその二人の分も頑張り、オウガと戦っていた。

「ハア・・・ハア・・・。」

公園の裏の森林で魁人と昴はオウガを倒し終わった。今日、四匹目の鬼とあつて二人の息遣いは荒かった。

水餃神を地面に着き体を支えながら魁人は苦しそうに息をしていた。そんな魁人の方に息を整えた昴が話しかけた。

「やっと片付いたわ・・・。今日は、今ので何匹目？」

「今日は4匹目だね・・・。最近、オウガの出現率が高くなってきたね・・・。」

「そうね。昨日は7匹だったし・・・。」

「やっぱり、あの絶鬼って奴の仕業かな？」

「そうかもね。憎の鬼はまで出てきて無いけど、一日に何匹も憎の鬼が出てきたら終わりよ。」

武器をしまった二人は公園の裏道から寮に向って歩き出した。

連戦で体中が重かった。寮に着いた時には日が暮れて街灯が灯って

いた。

寮の入口では右手に包帯を巻いた天地が立っていた。

「ヨッ！今日も遅かったな。」

「今日は4匹出たわよ……。」

「そんなんで、体がもつのか？」

心配そうに天地はそう言った。

天地の右腕の包帯を見ると、魁人はとても罪悪感があった。自分の放った技を受けて、あれ程の怪我をってしまったのだから。そんな魁人の気持ちが表情に出ていたのか、天地が言った。

「そんなに、気にするなって。」

俺の傷も大分癒えてきたし、由美ももう時期復活するだろうし。

俺もすぐに傷を治して一緒に戦うから、それまで任せるぞ！」

優しく魁人に微笑みながらそう言った。

だが、その右腕に巻かれた白い包帯には薄らと血が滲んでいた。それを、隠すように天地は左手で押さえた。

「それじゃあ。俺は部屋に戻るから……。」

天地は二人の返事を聞かぬまま階段を駆け上って行った。

やはり、右腕の傷口は塞がってないのだろう。

暗い部屋に戻った天地はテーブルの前に座った。

窓から見える空には満月が浮かんでいた。

「くっ！！！」

天地は右腕をテーブルに叩き付けた。
すると、真っ白だった包帯がジワジワと赤く染まり始めた。
何度も何度も叩き付けた。

「くっ……。俺は……………」

テーブルは包帯から染み出した血が飛び散っていた。
力が入らない右腕に天地の涙がこぼれた。
自分の無力さと悔しさで涙が止まらなかった。

その日の食卓に天地と由美の姿は無かった。
食事を終えた裕二と魁人は大浴場で湯船に浸かり話をしていた。

「天地君の腕……………」

「大丈夫だって、あいつは不死身だから。」

裕二は魁人が言いたい事が何となくわかった。
しかし、それを聞きたくなかった。

「でも……………」

「天地はすぐによくなる。」

そう言って笑って見せた裕二だが、その目はやはり不安そうだった。
その時、昴の声が大浴場の入口からした。

「天地は良いとして、問題は由美の方よ！」

「昂!？」

湯煙で下としか見えないが、昂が裕二たちの方に近付いていた。焦った二人は同時に湯船に潜った。

湯船に潜っている裕二と魁人を服を着た昂が見ていた。

「何してるの？」

「バツ!お前こそ、ビックリさせるなよ！」

「そ!そうだよ!！」

「何?私が裸で来ると思ったわけ？」

「ウツ！」

二人は固まったまま動かなかった。

桶の上に座って湯船に浸かる裕二と魁人に昂に言った。

「それより、さっきの話だけだ。」

「さっきの話？」

顔を見合わせた裕二と魁人の頭に風呂桶が飛んできた。桶は見事に二人の頭に当たり粉碎した。二人の頭には大きなコブが出来ていた。

「そ、それで……。さっきの話とは？」

二人は正座をしながら昴の方に体を向けた。もう、これ以上コブを増やさないとためだった。

「由美の事だけど、彼女の傷は完治してるのよ。」

「完治してるって事はもう戦えるのか？」

「そうらしいね。でも、それなら一緒に戦ってくれるでしょ？」

魁人はそう言っつて昴の顔を見た。昴は複雑そうな顔で語った。

「実は、由美あれから一度も疾風丸に触れてないのよ。」

「疾風丸に？」

「どうしてだ？」

「私にもわからないわよ。」

首を横に振りながら昴はそう言った。

「でもさ……。」

裕二は何かを言おうとしたが止めた。

魁人と昴は何を言おうとしたのか聞きたかったが、オウガの殺気が寮を取り囲んでいる事に気付いた。

「囲まれてる！」

「大体5体は居るわ！」

「行こう！昂！」

「そうね。私は先に行ってるから、魁人は服着てすぐに来て！」

「結空陣を張るけど、その前に天地君と由美さんは裏口から寮の外に！」

「わかった。俺が二人を連れ出すから、10分くらいたったら結空陣を張ってくれ！」

「任せるわよ！」

先に大浴場を出て昂は寮を出た。魁人と裕二は服を着て同時に大浴場を出た。

魁人と裕二はすぐに別れた。寮を出た魁人は昂の横に並んだ。

目の前には巨体の怒のオウガが三体並んでいた。

ただでさえ狭い寮の前の道が完全にふさがっていた。

三体のオウガは鋭い爪と牙を持っていて武器らしいものは持っていなかった。

「これは、楽に済みそうね。」

「そうだね。」

二人はそう話武器を出した時だった。背後から鋭い刃物の様な物で二人は斬り付けられた。

「ぐっ！」

「誰だ!!」

二人が振り返ると細身の小さな哀のオウガが刀を持って立っていた。その刀の刃先には真つ赤な血が付いていた。哀のオウガは笑いながら二人を見ていた。

「油断したな……。」

「どうする？ 魁人。」

二人は背中合わせに立ち、魁人が怒のオウガの方を向き、昴が哀のオウガの方を向いていた。

一方、二階に向った裕二はすぐに天地の部屋のドアをノックした。涙もおさまった天地は真つ赤に染まった包帯を取替えながらドアを開けた。

ドアを開けると裕二が勢いよく部屋に入ってきた。

「な、何だよ！」

「オウガに囲まれてるぞ！」

「そんな事、知ってるさ。俺だってハンターだ。」

包帯を巻いている天地を見て裕二はハツとした。

「お前！ まさか、戦おうとしてるんじゃないだろうな！」

「いや。包帯を替えてるだけだ。」

「それなら、いいんだが……。そうだ！ 葉山さんにも知らせな

いと！」

「だから、あいつもハンターだ。オウガの気配くらい感じるさ。」

天地は笑いながら裕二にそう言った。

ホツと肩をなでおろした裕二に天地が思い出したように言った。

「それに、由美ならさっき部屋の前通ったから、きっと部屋には居ないぞ。」

「なっ！本当か！！」

そう叫びながら裕二は天地に掴みかかった。

「ど、どうしたんだよ！由美は傷も殆ど治ってるんだ、弱いオウガと戦う事くらい出来るだろ？」

「葉山さん。あれから、一度も疾風丸を持って無いらしいんだ。

もしかすると、今回も……。」

「まさか……。そんなはず……。」

天地と裕二は顔を見合わせて由美の部屋に向った。何度もノックをしたが返事は無かった。

やはり、部屋に由美は居なかった。

仕方なく、天地と裕二は部屋のドアを蹴破った。そこには、鞘に納まった疾風丸が置いてあった。

それを見た途端、天地は自分の部屋に戻った。

部屋から出てきた天地の左手には五龍神が握られていた。

「オイ！お前、五龍神を持って何処に行くつもりだ！」

「由美を探すんだ。」

走り出そうとする天地の肩を裕二が掴んだ。

その手を振り払おうとした天地だったが、振り払うことが出来なかった。

「離せよ！」

「右腕の使えないのにオウガと戦えるのか！」

「わからない。でも、武器を持っていないハンターは、オウガにとつては都合の良い獲物なんだぞ！」

そう言つて天地は裕二をにらみつけた。天地の肩を掴んでいた手の力が緩んだ。

そして、裕二が天地を見て言つた。

「俺も、行くぞ！お前の腕じゃ、疾風丸も持てないだろうからな！」

「わかつた。けど、危ないと思つたらすぐに引き返せ。」

天地と裕二は拳をぶつけ合わせて一階の裏口から外へと抜け出した。

第十章 黒いオウガ 阿修羅

寮から居なくなつた由美を探すため、裏口から外に出た天地と裕二だったが、町のあちこちからオウガの気配を感じ由美の気配を感じなかつた。

裏口を出て暫く林の中を走つた。林を抜けると空き地に出た。何も無い空き地を横切り一気に街道にでた。

住宅街の細道を走りながら微かに感じる由美の気配を追つていた。いつの間にか空には雨雲がかかつており、いつ雨が降つてもおかしくなかつた。

右腕の痛みを堪えながら必死に由美を探す天地だったが、一向に見つける事が出来なでいた。

住宅街を抜けて、市街に出ている二人は交差点で立ち止まつた。何処の店も看板が光り、住宅街に比べて明るい市街は人通りが多かつた。

こんな所にオウガが現れたら確実に半数は食われてしまつたろう。そんな事を考えながらも人波をかき分けながら走り出した。

一方、寮でオウガに取り囲まれた魁人と昴はオウガの集中攻撃を受けていた。

直撃は避けているが、さすがに体力の方が限界に近付いていた。額から大量の汗があふれていた。

結空陣を張つたが、それも消えかかつていた。

「くっ……。」

「固まつてもやられるだけね……。」

「そうだね……。」

背中合わせに立っている魁人と昴は小声で話していた。話をしている二人に向って魁人の前に居たオウガの大きな爪が振り下ろされた。

その時、魁人と昴が同時に叫んだ。

「スタート!!」

二人は一斉に別方向に走り出した。昴は寮の中に走り出し、魁人は寮の門を出て街道を走り出した。

大きな体の怒のオウガは寮に入る事が出来ず、怒のオウガにとっては狭い街道を歩き出した。

魁人は振り返り水鮫神を構えた。一列に並んだ怒のオウガを鋭い目で睨んだ。

水鮫神の刃先に水が集まり渦巻いた。

「噛み砕け!!」

そう叫ぶと怒のオウガ達が慌てて逃げ出そうとした。しかし、もう手遅れだった。

「水牙鮫!!」

水鮫神を突き出すと、水の渦が鮫の形になり三体のオウガの胸を貫いた。

三体のオウガは消滅した。それと、同時に雨が降り出した。息を切らせながら、地面に膝をついた。魁人の背中に雨の雫があたった。

その雫はとても冷たく、重く感じた。

昴は寮の中で哀のオウガと戦っていた。
矢を放とうとするが、哀のオウガはそれをさせなかった。
不気味な声で笑いながらオウガは刀を振っていた。
それを、風鳥神で払いながら昴は矢を放つタイミングを見計らっていた。
後ろに下がりながら、オウガの攻撃を避けていた昴はいつの間にか廊下の置くまで追い込まれていた。

（しまった！）

追い込まれた昴にオウガは刀を振り下ろした。
しかし、刀は空を切り、そこに昴の姿は無く、扉が開いていた。
昴の後ろには大浴場に続く扉があり、昴はとっさに大浴場に逃げ込んだ。
オウガは昴を追いかけて、大浴場に入った。大浴場は湯気で真っ白だった。
何処に昴がいるかわからないオウガは入口でキョロキョロとしたいた。
その時、矢が真っ白な湯気を取り巻きながらオウガに飛んできた。

「くっ！」

矢はオウガの右肩に突き刺さった。矢は無差別にオウガに向って飛んできた。
昴を追い詰めたはずのオウガだったが、いつの間にか自分が追い詰められていた。
開けていた入口から湯気が出て行ったおかげで、ようやくオウガはようやく昴を見つけた。
だが、その時すでにオウガの全身には風の矢が何本も刺さっていた。

そして、昴の手には風鳥神が構えられていて、それには大きな風の矢がセツトしてあった。

「射抜け！大燕！！」

昴の手から大きな風の矢が放たれた。矢はオウガの胸を貫いた。オウガは消滅し、跡形も無くきえさった。

風の矢を何本も放った昴は目眩をおこし、その場にうずくまった。

市街を抜けた天地と裕二は人気のないボロボロのビルの前に辿りついた。

今まで感じていたオウガの気配がこのビルに集まっていた。

そして、由美の微かな気配も……。

ビルに集まった沢山のオウガの気配は、徐々に一つにまとまり始めた。

とても、嫌な感じだった。絶鬼の時と似ているが、少し違った。

何が違うのかは、わからないが天地にはそう感じた。

天地と裕二はビルの入口で立ち止まった。

ドアのガラスは割れて木の板が貼り付けられていて、立ち入り禁止の札が貼ってあった。

「ここに、由美が居るのか？」

「たぶん……。微かに感じるんだ……。」

「でも、嫌な感じがするぞ……。」

「お前も感じるのか……。」

ゆっくりと頷きながら裕二はビルを見上げた。

雨に討たれたせいで服はビショビショになっていた。天地の右腕の包帯からは赤い血が滲み出していた。ビルの中は暗く、嫌な臭いが漂っていた。天井と壁の隅にはくもの巣が張っており、廊下も傷んでいた。

きしむ廊下をゆっくりと歩きながら奥へと進んで言った。雨の音と廊下のきしむ音が響き渡りとても静かだった。

「本当にここに由美がいるのか？」

「ああ……。たぶん……。」

「自信ないのか？」

「微かにだから、よくわからないんだ。」

真剣な表情で天地はそう言った。裕二は今来た廊下の後ろを見てため息をついた。

暫く、黙ったままビルの中を歩いていた。古びた階段を上がり、廊下を進み何とか四階までたどり着くことが出来た。

屋上に続く階段の前で二人は立ち止まり息を整えた。

「次は屋上だぞ。本当に居るのか？」

「ああ、確かにここに居る。行くぞ！」

天地は階段を上り始めた。その右腕の包帯から赤い雫が滴れ落ちた。右腕の傷が開き、血が出始めているのだろう。

裕二は止めようとしたが、止めても聞かないとわかっていった。だから、止めずにゆっくりと後からついていった。

屋上には白髪の色白の絶鬼と大きな黒いオウガが立っていた。黒いオウガは2mほどの体格で大きな牛の様な角が二本生えていた。雨で濡れた黒い体は、黒光りしているようだった。右手に大きな槍を持っていて、鋭い目で絶鬼を睨んでいた。

「貴様が、我を呼び起こしたのか？」

「ええ。」

ニコヤカに微笑みながら絶鬼は頷いた。その絶鬼に向かって黒いオウガは槍を突き出した。

その刃は絶鬼の鼻先でピタリと止まった。

表情を変える事無く、絶鬼は笑みを浮かべていた。

「どうしました？」

「……………よからう。我はお主に従おう。」

「そう。よろしく、阿修羅。」

「よろしく頼む……………。お主、名前は？」

「僕は絶鬼。全てを破壊する鬼だよ。」

「良い名前だ。それでは、邪魔なハンターを始末しよう。」

阿修羅はそう言って槍を後ろに居る由美の方に向けた。ゆっくりと笑みを浮かべたまま絶鬼は由美を見た。

「武器も持ってない様だし、君に任せるよ。」

その言葉に阿修羅は笑みを浮かべて由美に向って走り出した。その時、勢いよく屋上の扉が開き、天地と裕二の二人が飛び出してきた。

阿修羅の槍の刃は由美の目の前で止まり、阿修羅は天地達の方を見た。

絶鬼は天地の右腕を見て言った。

「おや。君の右腕は酷い傷のようですね？」

「絶鬼！」

「名前、覚えててくれたんですね？」

「ふざけるな！！」

絶鬼に向って走り出そうとした天地の前に黒い壁が現れた。

天地は立ち止まり距離をとった。その黒い壁は阿修羅だった。

阿修羅は鋭い目で天地を睨みつけていた。

「我が主には指一本触れさせぬ！」

阿修羅の槍が天地の首筋に延びた。雨で濡れた槍の刃先からは雫がたれた。

第十一章 生死

冷たい雨にうたれ髪も服もビショビショの由美に裕二が駆け寄った。疾風丸を由美に差し出したが、由美は受け取るうとしなかった。

「葉山さん！どうしたんだ！」

「……………」

返事は返ってこなかった。うつむいたまま動かない由美の腕を掴んだ。

その腕は冷たく、冷え切っていた。驚いた表情の裕二を見て絶鬼が言った。

「彼女からは力を感じないよ。きっと、僕に負けた時に精神を壊したのかな？」

無意識の内に阿修羅の力に引き寄せられたみたいだけど……………」

まあ、どの道、彼女はもうハンターには戻れないね。」

絶鬼はゆっくりと裕二と由美の方に歩み寄ってきた。裕二は由美の前に立ち絶鬼を睨み付けた。

しかし、絶鬼は歩みを止めずドンドン近付いてきた。その時、天地の音が響いた。

「由美を連れて逃げる！」

天地は首筋に向けられた槍の刃を左手に持った五龍神で払い距離をとった。阿修羅は槍を右脇に立てると余裕の笑みを浮かべた。

雨で濡れた足場はすべり易く、動きにくかった。

「裕二！急げ！！」

「お前はどつする気だ！」

「俺は、時間を稼ぐ！」

五龍神を左手で抜くと、右手に持ち替えて包帯で固定した。両手で五龍神をしっかりと握った天地は、右腕の痛みに顔をゆがめた。五龍神を構えたが、右腕は痛みで小刻みに震えていた。

「その傷で我に挑むか。片腹痛い！」

そう言つて阿修羅は大きな声で笑い出した。その声は辺りに響きわたった。もちろん、寮の前まで聞こえた。

寮の周りのオウガを倒し終えた魁人と昴は、その笑い声でやっと天地と由美が近くに居ない事に気付いた。

「天地の奴、あの傷でオウガと戦つてるんじゃないでしょうね！」

「わからないけど、彼ならやりかねないよ！」

「急ぎましょう！」

魁人と昴は雨の中を走りだした。

右腕の痛みを堪えながら、必死で阿修羅の槍を防いでいる天地だったが、一撃一撃が重く右腕に巻かれた包帯からは血しぶきがまっていた。

「ぐっ！目覚めよ！火龍神！！」

五龍神が赤く輝き一瞬にして火龍神になった。火龍神の刃に付いていた水滴が、火龍神の熱で蒸発し白い蒸気を上げていた。阿修羅は天地と距離をとり、火龍神を見ていた。

「ハア・ハア・ハア……どうした？」

「それが、火を司る龍か。」

「それが、どうしたって言うんだ！！」

火龍神の回りに燃え盛る炎が集まった。天地は火龍神を振り上げて叫んだ。

「燃え盛れ！！炎裂弾！！」

火龍神を振り下ろすと集まった炎が阿修羅に向って飛んで行った。そして、分裂して一気に阿修羅に襲い掛かった。阿修羅の体は一瞬にして炎に包まれた。しかし、すぐに雨によって消化された。

「貴様の炎はこの程度か？」

「何だと！」

右腕の痛みに顔を歪めながら阿修羅を見た。阿修羅の体は傷一つついてなく、天地の攻撃が全く効いていなかった。絶鬼はニコニコしながら阿修羅と天地の方に体を向けた。

阿修羅の槍の刃が真っ赤に染まった。

そして、次の瞬間には天地の体が炎に包まれ吹き飛ばされていた。

「ぐっ……」

雨ですぐに火は消えたがその威力が凄まじく、天地はすぐに立ち上がる事が出来なかった。

何が起こったのか、全く目で終えなかったが、阿修羅の持っていた槍が突き出されている事から、槍から何かが発射されたのはわかった。

立ち上がるうとする天地の前に阿修羅が立ち止まった。

「あれを喰らってまだ動けるか。人間にしては中々だ。だが、もう終わりだ。」

阿修羅はそう言って槍をひいた。動く事の出来ない天地は死を覚悟して目を瞑った。

一向に槍は天地を貫かなかった。恐る恐る目を開いた天地の前には由美が立っていた。

背中からは阿修羅の槍の刃先が血をたらしながら突き出していた。

目の前の光景に天地も裕二も驚きを隠せなかった。

「由美!」「葉山さん!」

天地と裕二が同時に叫んだ。阿修羅は槍を抜くとその場を離れた。それと同時に由美の体が崩れ落ちた。

天地は由美の体を受け止めた。裕二もすぐに駆け寄った。

傷口からは血が止まる事無く流れ出て、そこから一体は赤くそまった。由美は天地の顔を見ると弱弱しく微笑み言った。

「私……。役に……。たてた……。グフツ。」

「もう、話すな！血が！」

そう言いながら傷口を塞ごうとするが、そうすればするほど血は流れ出てきた。

「……。私。邪魔……。じゃないよ……。ね……。」

由美はそう言っただけで動かなくなった。

「うそ……。だろ……。」

疾風丸を落とし、裕二は由美の横に座り込んだ。

冷たい雨が三人に容赦なく降り注いでいた。

阿修羅は槍を右脇に立てると、ゆっくりと言いつつ放った。

「命拾いをしたな。その女に感謝するんだな！」

阿修羅の笑い声が降りしきる雨の中響き渡った。

うつむきながらゆっくりと立ち上がった天地は裕二に言った。

「由美を頼む……。」

裕二は何も言えなかった。と、言うより何を言っているかわからなかった。

天地の右手に固定された火龍神はいつの間にか五龍神に戻っていた。そして、刃の籠の色が青く変わり始めていた。

「今度は、貴様が死にたいのか？」

ゆっくりと近付いて来る天地に阿修羅がそう言った。その時、絶鬼の声が響いた。

「来るよ！」

絶鬼の声とほぼ同時に天地が阿修羅に詰め寄った。阿修羅はその勢いに飲まれ、槍を出すのが遅れた。五龍神の刃が阿修羅の右肩から左脇腹までを切りつけた。

黒い阿修羅の体に赤い線が出来た。阿修羅は距離をとり天地を睨んだ。

「くっ！貴様！！！」

「お前はゆるさねえ！！！」

右腕の痛みなど忘れ天地は阿修羅に斬りかかって行った。先程と全く違う動きの天地に、阿修羅は驚きを隠せないでいた。この様子を見ていた絶鬼はゆっくりと阿修羅に言った。

「今日は退くよ。ここで、君を失うわけには行かないからね。」

「わかった。」

阿修羅は絶鬼の横に移動した。すると、ニコやかな笑顔を残しながら絶鬼は消えて行った。

荒い呼吸の天地は大声で叫んだ。

「ウオオオオオッ！！！」

そこに、魁人と昴がやって来た。二人とも雨に濡れてびしょ濡れだった。二人は血塗れ由美を見て驚いた。

「由美さん!」「由美!」

二人は同時にそう呟きゆつくりと由美に歩み寄った。由美の側まで来ると腰を下ろした。

昴の目からは涙が雨と一緒に零れ落ちた。魁人も涙を堪えていたが、薄らと涙を流していた。

「何で……。何でこんな事に……。」

昴は泣きながらそう呟いた。雨音のせいでその声は誰にも聞こえなかった。

冷たい大粒の雨のさらに激しさを増していた。裕二達から離れた場所に立っていた天地は、崩れるように座り込んだ。

「俺に……。力があれば……。」

大切な……。仲間を護る……。力が……。」

大切な……。人を護る力が!」

天地がそう叫んだ時、五龍神の刃の龍が青く輝いた。その青い光に裕二も魁人も昴も目をやった。光は優しく彼らを包み込んだ。そして、光の中に彼らは青い龍を見た。

青い龍は水のように透き通り、美しかった。

彼らが龍を見ていると、何処からとも無く声がした。とても美しく優しい声だった。

『私は、五龍神に封じられし、蒼き龍。水龍神。』

その声は目の前に居る龍のものだとわかった。言葉はさらに続いた。

『あなたがたの想いはわかりました。』

私は紅き龍と違い、強い力などをもって降りません。

私に出来る事は癒す事だけです。』

龍はそう言って横たわる由美の方に近付いていった。他の四人はその龍の動きを目で追った。

『彼女はまだ、蘇る事が出来ます。』

「それじゃあ！」

それを聞いて、天地が叫んだが龍がさらに言葉を続けた。

『ただし、時間がかかります。その間、彼女は私が預かります。』

いいですね。それから、疾風丸も……。』

「どれくらいかかるんですか！」

『それは、わかりません。ですが、彼女は必ず蘇ります。』

それから、彼の右腕は私が癒しておきました。それでは……。

』

そう言うと、蒼き龍は消えて天地達は元の場所に居た。雨は上がり、太陽が四人を照らした。

由美の姿は無く、天地の右腕の傷も消えていた。

第十二章 遊園地

あれから何日か過ぎた。

暫く、オウガも現れず平和な時が過ぎていた。

相変わらず、静かな寮の前の街道だが、寮の中は相変わらず騒がしかった。

一時期、由美が居なくなり天地も元気が無かったが、今ではすっかり元気になっていた。

休みの日も朝のジョギングをしていた天地は寮の入口で倒れていた。

「グオオ……。つ……疲れた……。」

「まあ、まあ。お疲れ様。」

管理人は冷たい麦茶を天地に渡した。麦茶を飲みほして立ち上がり、軽く伸びをした。

そこに、やって来た歩美は横を通り過ぎる時に天地に一言言った。

「汗臭いから、私には近寄らないで。」

「お前に言われなくても、近付かねえよ！」

大体、こつちからお断りだ！」

そう言い終った時、天地の頭に歩美の回し蹴りが炸裂した。回し蹴りをくらい、意識が吹っ飛び一瞬気を失った。

意識を取り戻し振り返った時には、歩美の姿は無かった。

「くっ！あの野郎！オウガより素早いな……。」

「凄い回し蹴りだったわね。でも、少し踏み込みが甘いかしら。」
頬に手を当てながら管理人はそう言って、奥に歩いていった。苦笑いを浮かべながら管理人を見送った。
管理人と入れ違いに魁人と裕二がやって来た。二人は天地を見て笑った。

「また、歩美さんにやられたの？」

「まあな。よくわかったな。」

「いや〜。凄い音がしてたからな。」

「今日は何されたの？」

「回し蹴り。」

「回し蹴りか……。」

裕二は腕を組みながら頷き、その横で魁人が笑っていた。天地はむしろように腹が立った。

鋭い視線を感じた魁人は天地が睨んでるのに気付いて笑うのを止めた。

頷いていた裕二も頷くのを止めて天地を見た。

その時、昴がやって来た。天地達の所で立ち止まり会話に参加した。

「ねえ。何の話してるの？」

「別に、何にも話して無いけど？」

「本当に？」

「お前に嘘ついて何になるんだ？」

裕二はそう言っただけで呆れ顔で昂を見た。その瞬間に昂の鉄拳が裕二の顔を捉えた。

殴られた勢いで寮の外まで飛ばされた裕二は暫く動かなかった。

天地と魁人は驚きのあまり啞然とした。

一方、裕二を殴った昂は清々しい顔で鼻歌を歌いながら階段を上って行った。

動かない裕二にゆっくりと近付き、二人は顔を見た。顔は少し腫れて赤くなっていた。

「だ、大丈夫か？」

「そう……。見えるか？」

「見えねえ……。」

天地と魁人は顔を見合わせて苦笑いをした。

天地の部屋に裕二と魁人は集まった。昂に殴られた所をしっかりと氷水で冷やししながら裕二はため息をついた。

ベッドに座りながら天地はテーブルの向こう側の裕二を見ていた。その間に挟まれ魁人が座っていた。

「なあ、何でお前ら俺の部屋に居るわけ？」

不満そうな表情で天地はそう聞いた。そんな天地に裕二は笑いながら言った。

「堅い事言っなって、どうせ暇だろ？」

「あのな……俺だって、一人でやりたい事もあるさ。」

「工口本でも読むのか？」

「お前じゃねえよ……。」

呆れ顔でそう言った天地はため息を吐き二人の顔を見た。魁人は相変わらず笑顔を絶やさなかった。

しかし、男三人で部屋に居ると変だと思った天地は何か無いかと考えた。

暫く考えた結果を二人に伝えた。

「お前ら、昴と歩美と一緒に映画でも見て来いよ。」

「何で、俺らが昴と歩美と映画に行かなきゃ行けないんだ？」

「どうせ、暇なんだろ？男と居るより、女と居たほうがいいだろ？」

「暴力女と居たら命がいくつあっても足りないぜ……。」

「誰も、昴と何て言ってねえよ。歩美も居るだろ。」

その時、玄関をノックする音が聞こえた。その音に裕二は飛び上がり身を隠した。

もし昴だったら、もう一発鉄拳を貰う事になるかもしれないからだ。った。

そんな裕二を苦笑いしながら見ていた天地は、二回目のノックで玄関に向った。

玄関の前に立っていたのは管理人だった。
管理人はニコヤカに笑みを浮かべながら優しく言った。

「あなた達にこれあげるわね。」

「これって……。」

管理人が天地に渡したのは遊園地のチケットだった。

「近くに新しく遊園地が出来たのよ。」

そのチケット貰ったんだけど、私はもう遊園地って歳でもないし……。

ちようど五枚あるし、昴ちゃんと歩美ちゃんにも渡しといたから、一緒に言ってきたね？」

「でも……。」

「大丈夫。弁当も準備してあるし……。行ってくれるわよね？」

そう言つて管理人は天地を優しい目つきで見た。しかし、天地にはその目がとても怖く、断る事が出来ず、結局遊園地に行く羽目になつてしまった。

最初は乗り気じゃなかったメンバーも、いざ遊園地に着くとはしゃいでいた。

「最初に何乗る？」

「そうね。私はジェットコースターかな？」

「ジェットコースターか……。」

「まさか、怖いのか？」

「ま、まさか！」

天地の右横で裕二と昴がこの様な会話をしていた。一方左横では・・・。

「最初は何処行こうか？」

「そうだね。とりあえず、歩き回って目に付いたものから入っていいだろうか？」

「それもそうね。」

と、魁人と歩美が楽しそうに会話をしていた。そして、それぞれのペアが散って行った。

一人残された天地はため息を吐き、座れる場所を探していた。遊園地に男一人で居ると、とても切なかつた。他の客も殆どカップルで歩いていった。

暫く歩いたが、何処もかしこもカップルだらけで、座れそうな場所は無かつた。

「休みの日に何でこんな事に・・・。」

一人でぼやきながら、近くの芝生の木の陰に座り込んだ。

もう、すっかり暑くなり夏の風格を漂わせていた。空は蒼く澄み渡り、所々に薄白い雲が浮いていた。

そんな空を見ていると、心が落ち着いた。そして、眠くなった。

ジェットコースター乗り場に向った裕二と昴の二人は列に並んでいた。結構人気があるらしく、列は長かった。

「凄い列だな……。」

「そうね。人気なのね。」

「止めないか？ジェットコースター。」

「ここまで、来たら絶対乗るわよ。」

「俺、高所恐怖症なんだが……。」

「大丈夫よ。死にはしないわ。」

「だと、いいが……。」

高所恐怖症の裕二をよそに、昴は楽しそうにジェットコースターを見上げた。

そして、遂に裕二達の番が回ってきた。

席に座った裕二は足をガクガクさせていた。昴はそれを見て笑った。

「あんたにも怖いものってあるのね。」

「そりゃ、人間だからな……。」

「まあね。」

その時、遂にジェットコースターが動き出した。ゆっくり、音を鳴らしながら上がって行った。

裕二は声を震わせながら言った。

「ほ、本当に大丈夫だよな……。」

「大丈夫よ。」

そして、坂の上まで来ると一気に急降下した。その瞬間に、裕二は意識を失った。

一方の魁人と歩美のペアはと言うと……。

「結構、迫力あったね。」

「そうだね。最近のお化け屋敷は凄いね……。」

「若いんだから、そんな年寄りみたいな事言わないでよ。」

「そ、そうだね。」

そう言って笑い出した。

「次は、どこに行こうか？」

「そうだな……。」

魁人と歩美は辺りを見回して、次の場所を探した。

そして、次の場所を決めるとすぐに歩き出した。

眠っていた天地も騒がしい声で目を覚ました。目を覚まして体を起こすと、目の前に何人かの男が一人の少女を取り囲んでいた。

少女は小さな体で、幼い顔をしていた。胸は結構大きかった。空色の髪を腰の辺りまで伸ばし、それを後ろで束ねていた。

「ねえ、俺達と一緒に遊ぼうぜ！」

男達の内、一番ガラの悪い男がそう言った。少女は怯えながら答えた。

「私……。」

怯えている少女の腕を掴み、無理やり連れて行くこととする男達を見ていた。

そんな少女をほおっておく事が、出来なかった天地はゆっくり立ち上がった。

「嫌がつてるじゃないか。離してやれよ。」

「何だと！」

男達は天地の方を見た。天地は男達を睨みつけた。

ガラの悪い男が他の連中に合図を送った。そして、男達は一斉に天地に襲い掛かった。

殴りかかってくる男達の拳をかわしながら、天地は一撃ずつ鉄拳をいっていった。

あっと言う間に男達は倒れていき、最後にガラの悪いのが一人残った。

「お！覚えてるよ！」

ガラの悪い男はそう捨て台詞を言って逃げて行った。天地は息を吐

き少女の方を見た。

少女は天地に頭を下げた。

「ありがとうございます。」

「ああ。気にする事無いよ……。」

天地はそう言って笑っていた。そんな天地に少女が恥ずかしそうに聞いた。

「あ、あの……。名前を聞いてもいいですか？」

「名前？俺は神野 天地。」

「わ、私は、犬山 千春です。た、助けてもらったお礼を……。」

「いって。当然の事をしたまでだから。それじゃあ。俺はこれで。」

天地は笑いながら千春に手を振って去って行った。その後ろ姿を千春は顔を紅くしながら見送った。

第十三章 遊園地に現れたオウガ

遊園地に来ている天地は相変わらず一人荷物を持ち歩いていた。そろそろ、お昼だと言うのに裕二達は戻ってこなかった。

一人で皆と別れた噴水広場の噴水の前で待っているが誰一人来なかった。

ため息を吐きながら天地は蒼い空を見上げた。すると、静かに風が天地の側を横切って行った。

時は刻々と過ぎて行き、天地は誰も戻って来る気配が無いので芝生の木陰に向った。

木陰に座ると鞆の中を見た。中には、敷物・弁当・お手拭きなどその他にも色々が入っていた。

「さあ、寂しいが一人で弁当を食べるか……。」

お手拭で手を拭きながらそう呟き弁当を鞆から取り出そうとした時だった。

聞き覚えのある声が聞こえた。

「あっ！か、神野さん！」

苗字で呼ばれる事が滅多にない天地は始めは誰の事かわからなかった。

自分の事だと気付いたのは千春の顔を見てからだだった。

千春は恥ずかしそうに芝生の向こう側に立って天地の方を見ていた。

「あ、あの……。」

「さっきの……。」

「お、お一人ですか？」

その質問に天地は苦笑いを浮かべながら答えた。

「友達と来たんだけど、一人置き去りにされて……。」

「そ、そうなんですか？」

「そうだ！よかつたら、一緒に弁当食べない？」

「えっ、いいんですか？」

「どうせ、一人じゃ食べきれないから。」

そう言って笑いながら弁当箱を鞆からだした。

その頃、裕二と昴の二人は中央広場にあるお店にいた。食事を採る為に来たのだろう。

二人は向かい合わせに座りジュースを飲んでいた。グツタリと裕二は椅子の背もたれにもたれていた。一方の昴は清々しい顔でメニューを見ていた。

午前中、ずっと絶叫マシンに乗っていたため、裕二は気分が悪かった。

「ねえ、裕二は何食べる？」

「俺は……。いや……。今食べたら……。吐くから……。」

「もう……。男でしょ？」

「男とか女とか、関係あるのか？」

ゆっくりと昴の方を見て裕二はそう言った。その顔に覇気が無く、今にも倒れそうな感じだった。

その顔を見て、昴は顔を引きつらせながら苦笑いをした。

「それより、絶叫マシンは……。もう乗らないぞ……。」

「そうね。午前中に全部乗ったし、次は何処行こうか？」

「絶叫マシン以外なら……。何でもいい……。」

そう言って裕二はテーブルに倒れこんだ。

一方、魁人と歩美の二人は遊園地の置くの池の辺にあるファミレスにいた。

向いあつて座っている二人はメニューを見ていた。

「何食べようか？」

「そうだね……。何がいいかな……。」

二人は慎重にメニューを選んでいった。魁人はメニューを置くと複雑そうな顔をして歩美に言った。

「天地君の所に戻らなくてよかったのかな？」

「大丈夫よ。裕二と昴が戻ってるから。」

歩美はそう言って微笑んだ。そんな歩美の顔を見て、魁人も微笑み言った。

「そうだね。裕二君や昴もいるからね。」

「私達は私達で楽しみましょう。」

二人は楽しげに微笑みながら食事を楽しんでいた。

芝生の木陰で弁当を広げた天地は千春と弁当を食べていた。スカートの千春はしっかりとスカートを抑えていた。

その千春の首元にはチラチラと剣の首飾りが見えた。

その首飾りが目についた天地は千春に聞いた。

「その首飾り……。」

「これ……ですか？」

千春は首飾りを左手で軽く持ち上げて天地に見せた。そして、優しく嬉しそうに微笑みながら千春は言った。

「これ、私の家に代々受け継がれてきた物なんです。」

「そうなんだ。大事な物なんだ。」

「はい……。」

小さくそう言って顔を紅く染めた。そんな千春の表情に気付く事も無く天地は空を見上げた。

そんな天地の顔を千春はジッと見つめていた。暫く沈黙が続き、草木のザワメキと風の吹き抜ける音だけが辺りを包み込んだ。

そんな風の流れに乗って、オウガの気配が漂ってきた。

天地はその気配を察知して、立ち上がったが、五龍神を寮に置いてきた事に気付いた。

(くっ！こんな時に限って……)

天地はそう思いながら下唇を噛んだ。

いつもなら、出かける時も持ち歩くのだが、今日は寮の管理人に無理やり置いて行かされたのだった。

勿論、他の二人も同じだった。オウガの気配を感じていたが、武器を持っていないため、動く事が出来なかった。

「こんな時にオウガなんて……。ついて無いわ。」

「どうするんだ？このままじゃ……。」

「わかってるわ。何とかしないと……。」

そう言って昴はどうするか考えた。しかし、考えはまとまらなかった。

それは、魁人も同じだった。険しい表情の魁人に歩美が言った。

「どうかしたの？」

「い、いや……。何でも無いよ。」

魁人はそう言って苦笑いを浮かべた。

芝生の木陰に居る天地はどうするかをずっと考えていた。

このままだと、沢山の人がオウガに食べられてしまう。しかし、今から五龍神をとり戻っている暇は無い。

色々考えたが、やはり何も浮かばなかった。

結局、出した結論は被害を最小に抑えるために、何とかオウガを引き付けると言う事だった。

千春の方を見て、天地は言った。

「君は、今すぐここから離れるんだ。いいね。」

「神野さんは？」

「俺はやる事があるから……。」

そう言うと天地は走りだした。オウガの気配のする場所からは人々の悲鳴が聞こえた。

誰かが襲われたのだろう。このオウガが憎のオウガじゃない事を願いつつそこについた。

そこには、沢山の人々が血だらけで倒れていた。

そして、その中央には1体の細身のオウガが立っていた。長い角が三本頭から生えていて、牙がむき出しになっていた。

そのオウガは天地に気付いて腕を広げて言った。

「オヤオヤ……。ハンターさんのお出ましかな？」

しかし、武器を持ってないと見るが……。それで、私に勝てるか？」

「この人達はお前が！（憎のオウガか……）」

「そうですね。私がやりました。しかし、近頃の人間の血はドロドロしていて不味いので。」

不気味に笑いながらオウガはそう言った。

この憎のオウガが、どんな能力を持っているのかわからないため、迂闊に手を出す事が出来ない天地は息をのんだ。

その頃、騒ぎに気付き客が逃げ惑う中、裕二達と魁人達が合流していた。

裕二と魁人は天地を探すと言って、昴に歩美を任せてオウガの気配のする方に向った。

「どうするつもりだ？お前も水鮫神は持ってないだろ？」

「ええ。でも、天地君一人に頼るのはどうかと……………」

「そうか……………でも、俺はハンターじゃないんだが……………」

「一応、ハンター見習いをやってたんだから、何とかありますよ。」

「何とかって……………」

笑みを浮かべてそう言った魁人の横で、裕二は顔を引きつらせていた。

そして、オウガと天地の対峙する場所に出た二人にオウガは気付いた。

「オヤ……………仲間が来てくれた様ですが……………。どちらも武器は持っていませんね？」

天地の所からは建物が邪魔で見えていなかったが、声で裕二と魁人とすぐにわかった。

「天地君！大丈夫かい？」

「ああ、まだ戦って無いからな……。」

「って言うか、どうするんだ？武器無しで……。」

三人の会話を聞いていたオウガは空高くまうと、ジェットコースターのレールの上に立った。

天地と裕二と魁人は合流した。

「お前！ハンターじゃないだろ！」

「仕方ないだろ！歩美は、お前らがハンターだって知らないんだから！」

「そうだよ。僕と昴と一緒に来たら変でしょ？」

「まあ、そうだけど……。とりあえず、裕二はどこか安全な所に！」

「わかってるって、俺もまだ死にたくないからな。」

そう言って裕二は近くの建物に身を隠した。レールの上から天地と魁人を見下しているオウガは顎に右手の人差し指を当てながら首をひねった。

何をする気かわからないが、二人は警戒していた。

静寂が続く、オウガはレールの上に座り込んだ。

「なあ……。何がしたいんだ？あいつ。」

「さあ？僕に聞かれても……。」

小声で天地と裕二は話をしていた。その時、オウガがいきなり立ち上がり不気味な笑みを浮かべた。

「これ以上、ハンターは集まりそうに無いようですし、そろそろ始めましょうか？」

そう言うと、辺りに血だらけで倒れていた人達が立ち上がり始めた。

第十四章 轟く雷鳴

血だらけの人達に囲まれた天地と魁人は背中合わせに立っていた。そんな二人を見て、オウガは笑いながら言った。

「これが、私の能力。屍を操る力！」

屍は天地と魁人をジリジリと追い詰めて行った。

「このままじゃ、まずいよ！」

「そう言われても、屍が相手じゃな……。」

「そんな事言ってる場合じゃないよ！」

「そうだな。それじゃあ、散るか……。」

そう言った天地の方を見ようとした魁人だったが、急に体が宙に浮き驚いた。そのせいで、声が裏返った。

「ちよ！な、な！」

「そんじゃ！行って来い！！」

魁人の体を勢いよく投げた。体の軽い魁人は軽々と飛び、ジェットコースターのレールに乗った。

心臓がバクバク言っている魁人はレールに立ち上がり、天地の方を見て怒鳴った。

「ちょっと！何するんだよ！！死ぬかと思ったたよ！！」

「生きてるんだから、いいだろ。」

「そう言う問題じゃなくて！」

「気をつける！来るぞ！！」

天地のその言葉で、横から飛び出してきたオウガの右の拳を避ける事が出来た。

「チツ……。」

舌打ちをしながらオウガは魁人の方を見た。その時、レールの向こうから何かが迫ってくる音が聞こえた。まさかと思った魁人の予感は当たった。

無人のジェットコースターがオウガの後ろから走ってきた。オウガはそれに飛び乗り笑いながら目の前を走っている魁人を見ていた。

「な！何で！！僕ばっかり！！」

一生懸命走る魁人だが、人がジェットコースターの速度に勝てる訳も無かった。

しかし、魁人は間一髪の所で、レールから飛び降りた。しかし、降りた所がさらに最悪の場所だった。

「ウウツ……。酷い目にあつた……。。」

立ち上がりながら服に着いた埃を払っていた。辺りを見回したが、何の気配も静かだった。

薄暗く光は魁人が落ちてきて壊した屋根からしか入ってこなかった。

「ここ、どこだ？」

一歩踏み込んだ瞬間だった、いきなり床が抜けて魁人は下に落ちた。
ちた。

激しく体を強打し、さらに暗い場所に出た。

「まさか……。迷路の迷宮に落ちたのか……。」

魁人の落ちたのは複雑な道の迷路の迷宮と言う所だった。色々な仕掛けがあり、入ると抜け出せなくなる人もいるらしい。
その迷路の迷宮を魁人はさまよっていた。

一方の天地はゾンビ達の包囲網を抜け出して園内を走り回っていた。

「くっそ！早くあいつを倒さないといけないのに！」

ゾンビの大群に追われている天地は辺りを警戒していた。裕二と魁人も心配だが、今は逃げる方が先決だと考えた。
しかし、徐々に逃げ場が狭くなっていき追い込まれていっているのに気付いた。

「野郎！ゾンビのくせに頭使いやがって！」

天地は噴水広場でゾンビ達に囲まれた。その時、千春の声がゾンビ達の後ろから聞こえた。

しかし、その声は先程まで一緒にいた時と何か違った。

「少々、おふざけがすぎた様ですわ！」

ゾンビ達は一斉にその声のする方に顔を向けた。そこには、自分の背丈ほどある大剣を右横に立てて立っている千春の姿があった。やはり、先程とは違う雰囲気を漂わせていた。

「今度は私が助ける番ですわ！」

右横に立ててある大剣をゆっくりと持ち上げた。その大剣の刃には犬の形が彫ってあった。

それを見た天地は、アレが雷犬神だとわかった。

彼女は大剣を振り上げると天地を取り囲むゾンビを睨んだ。

「轟け！！雷鳴！！！」

そう叫んで大剣を振り下ろすと、その刃先から勢いよく蒼い稲妻が走った。稲妻は天地を取り囲むゾンビを丸焦げにした。

「さあ、次はあなたの番ですわ！出てらっしゃい！！！」

ゆっくりと顔を上げながら千春はそう言った。すると、近くの建物の屋根の上にオウガが姿を現した。オウガは拍手を送りながら言った。

「いや〜。凄まじい稲妻でしたよ。しかし、その大きな剣では私の動きには……。」

オウガは素早く体をひねり、そのままの体勢で屋根から落ちた。地面に着地すると千春の顔を睨みつけた。

雷犬神をゆっくりと構えるとオウガを見た。

「今のをよく避けましたわ。さすがは憎のオウガですわ。」

千春はオウガが話している時に素早く蒼い稲妻を放つたのだった。一瞬の事だったが、天地にも何とか目で追う事が出来た。その稲妻で建物の屋根が壊れた。オウガは笑いながら言い放った。

「ハハハハッ。その大きな剣でこの様な素早い攻撃も出来ると！さすがですね。」

「褒めても何も出ませんわよ！」

そう言うのと千春は地を蹴った。それを見て、オウガも地を蹴った。千春の雷犬神がオウガの鋭い爪と激しくぶつかった。

振り下ろされた雷犬神の勢いに押され、オウガは後ろに吹き飛んだ。千春とオウガのぶつかりあった地面はひび割れてへこんでいた。

「どうなさったのです？私はただ振り下ろしただけですわよ？」

「くっ！私を侮辱するとは、許さん！」

そう叫んだオウガは、千春に向って突っ込んで行った。千春は大きな雷犬神で軽くオウガの爪を受け止めていった。

千春とオウガの戦いを見ていた天地は、驚きを隠せなかった。あのおとなしかった千春が、あんな大きな剣を軽々と持ちオウガと戦っているのだから。

次第に焦りを見せるオウガに対して、余裕の表情の千春は大きく雷犬神を振り上げて叫んだ。

「これで、終わりですわ！！」

雷犬神の刃の周りに稲妻が走った。その瞬間にその場を離れたオウガに向って、千春は叫びながら雷犬神を振り下ろした。

「大地を走れ！雷鳴犬！！」

振り下ろした雷犬神の刃に集まった稲妻は、一瞬にして犬の形に変わり、そのまま地面を蹴りながらオウガに向って走りだした。オウガは腕を振り上げた。

「ウオオオオツ！切り刻んでやる！！」

鋭い爪を迫り来る蒼い犬に向って振り下ろした。しかし、蒼い犬に触れた瞬間にオウガの体を、激しい電流が流れた。蒼い犬はオウガに噛み付き天に昇っていった。

そして、雲に入ると激しい音と共に地面に落ちた。オウガは消滅し、地面は真っ黒にこげていた。

その威力に天地は腰を抜かしそうになった。

千春は天地に歩み寄り、何かを言おうとしたが、雰囲気はまた変わった。

その途端、持っていた雷犬神の重さに倒れこんだ。

「キャツ！」

その勢いでスカートが捲かれた。慌てて千春はスカートを抑えた。すぐに目を逸らした天地だったが、その目にははっきりと見えた。

「み、見ました？」

「い、いえ……。」

雷犬神に気付いた千春はハッと口を押さえて目を潤ませた。

「も、もしかして……。私……。変わってました？」

「エッ……。まあ、変わったかな……。」

「一般の人に、ハンターだつてばれちゃうなんて！」

千春はそう言つて蹲りシクシク泣き出した。雷犬神はいつの間にか消えていた。

泣いている千春に天地はゆっくりと言つた。

「あつ。俺、一応ハンターだから……。」

「エッ！そんなんですか！」

それを聞いた千春は目を輝かせながら天地の顔を見た。

暫くすると、迷路の迷宮を抜け出した魁人と、隠れていた裕二が天地と合流した。

結局、あのあと遊園地は閉園となり、天地達は千春を連れて寮に帰つたのだつた。

夕日の色でオレンジ色に染まつた空を見ながら、相変わらず人通りの無い寮に続く道を歩いていた。

「せっかく、遊園地に言つたのに……。」

魁人はそう呟きながらため息を吐いた。その魁人の横で裕二もため息を吐いた。

「結局、絶叫マシンにしかのれなかったし……。」

その二人の少し後ろを天地と千春が歩いていた。荷物持ちの天地は深いため息を吐いた。

「ふっつ。結局、最後まで俺が荷物持ちか……。」

「わ、私が少し持ちましょうか？」

「だ、大丈夫だよ……。」

心配そうにそう千春が顔を覗いたので、天地は軽く微笑みながらそう言った。

二人並んでゆっくりと歩いた。

千春は幼い頃から、オウガの気配を長く感じていると、人格が替わってしまふ。

どうしてかはわからないが、そのおかげで雷犬神も使いこなしている。

その間、自分の記憶が飛んでしまったため、オウガと戦っていると言う感覚は全く無い。

そんな話を千春から聞きながら、寮へと帰っていったのだった。

第十四章 轟く雷鳴（後書き）

『激闘戦鬼』を読者の方々、ありがとうございます。

この度、読者総数が300を超えて、感謝の気持ちで一杯です。まだまだ、未熟ですがこれからも頑張っていきたいと思っております。

ぜひ、感想や評価・アドバイスなどある方はお聞かせください。

第十五章 もつすぐ

暫く千春も寮に住む事になり、寮も少しはにぎやかになりつつあった。

朝が騒がしいのは何時もの事だが……。

「どわー！ち、遅刻だ！」

「お前が、風呂場で寝てるからだろ。」

祐二が呆れた表情で、天地の部屋のドアの前に立ちながらそう言った。その時、部屋のドアが勢いよく開き、制服のボタンを全開で天地が出てきた。

ドアの前に立っていた祐二は、勢いよく開いたドアに顔をぶつけた。鼻を押さえながら、祐二はうずくまった。

「いって〜っ！」

「何やってるんだ？」

うずくまっている祐二を見下ろしながら、天地がそう言った。

「あいな！」

「おっ！こんな事してる場合じゃなかった！急ぐぞ！祐二！」

何かを言おうとした祐二の言葉を遮り、天地はそう言って走り出した。

走り出した天地を追いかけて、階段の途中で呼び止めた。

「ちょっと待て！」

「な、何だよ！急がないと遅刻だぞ！」

「遅刻は、お前が風呂場で寝てたせいだろ！」

大体、俺がドアの前にいるのに、勢いよくあけるなよ！」

鼻の真つ赤な祐二の顔を見て、天地は笑いを堪える事が出来ずふきだしてしまった。

天地の笑い声が寮内に響き渡った。堪忍袋の緒が切れた祐二は大声で怒鳴った。

「お前な！！」

階段の途中で立ち止まり、一向に動き出さない二人を、階段の下で待つ魁人はため息を吐き、呆れ顔で二人を見ていた。

時間は刻々と過ぎていき、結局この日も三人は遅刻だった。

相変わらずの学校生活。

変わった事は特に無い。

ただ、教室内は中間テスト前となって、少しギクシャクしていた。

そんな中、天地は机にうつ伏せになって寝息をたてていた。

その横で歩美が深いため息を吐き呟いた。

「中間前なのに居眠り何て……。」

その声が聞こえたのか、天地はチラッと目を開き歩美の方を見た。しかし、すぐに顔を伏せた。

「あんだ、起きてたの？」

「いや。寝てる。」

歩美の質問に天地は素っ気無く言った。呆気にとられた歩美は、さらに深いため息を吐いた。

「あなたさ……。やる気あるの？」

「やる気は無いな……。」

「テスト、どうするつもりなの？」

「どうするって？」

天地は顔を上げて歩美を見た。歩美は数学の教科書を見ながら天地に言った。

「赤点とつたらどうするの？」

「赤点は採らないさ。何なら、勝負するか？」

「いいけど、カンニングでもするつもり？」

天地はまた机にうつ伏せになり、少しこもった声で答えた。

「カンニングしなくても、お前には勝てる。」

「いいわよ！私だって負けないわよ！」

そう言うと歩美は乱暴に数学の教科書を机に置いた。そんな事はお構いなしに、天地は眠りについた。授業の殆どがテスト勉強のため、天地は昼休みまでずっと目を覚まさなかった。

祐二と魁人もお互いに、教えあいながらテスト勉強をしていた。

苦手な科学の教科書をひるげて、三色ペンを右手でクルクルと回している祐二。

それに対して、魁人は英語の教科書を読んでいた。

勉強が一向に進まない祐二は次第にイライラしてきていた。

それに気付いたのは、昴だった。昴は体を横に向けて祐二の方をみた。

「どうかした？」

「いや……。全く進まなくな……。」

「苦手な教科からやるより、得意な教科からやった方がスムーズに進むわよ。」

「そうなのか？」

「そうよ。得意なを終わらせると気分が乗ってくるじゃない？」

そう言って微笑んだ昴の顔を見ているとそんな気がしてきた。

そして、科学の教科書を閉まって、数学の教科書を出して勉強した。時間も過ぎ昼休みになり、天地・祐二・魁人の三人は何時もの様に、屋上で弁当を食べていた。

「テスト勉強は進んでる？」

「相変わらずかな？」

祐二はそう言いながらご飯を口に運んだ。その横で天地がのんびりとお茶をすすっていた。

何時もは、運動場で遊んでいる生徒の音が聞こえる屋上だが、テスト前は静まり返っていた。

風の音と鳥のさえずり、木々のざわめきだけが聞こえた。空も蒼く澄み渡り、何だか心が落ち着いた。

「ふっっ……。テスト前は、静かでいいな。」

「天地君はそんなにのんびりしていいの？」

「こいつは、いいんだよ。別に……。」

「どうして？テスト、諦めてるの？」

その魁人の問いに屋上に寝そべって天地が答えた。

「今更、勉強してもただ暗記してるだけ。」

授業をちゃんと聞いて、家で復習してれば点は採れるって。」

「でも、天地君何時も授業中寝てるじゃない。」

少々呆れながら、天地の顔を見ながら魁人はそう言った。体を起こし、ムスツとした顔で魁人を睨み付けている天地の横で、祐二がゲラゲラと笑い転げていた。

ため息を吐き天地はもう一度仰向けに寝そべった。蒼く澄み渡る空をゆっくりと流れる雲を見つめた。

こうしていると、なぜか蒼い龍と由美の事を思い出してしまう。

『本当に蘇るのか？』

『また、会う事が出来るのか？』

など、考えているとウトウトとしてきた。そして、何時の間にか眠ってしまった。

暫く、暗い闇の中に居た。どこまでも続く暗闇の奥に蒼い光が見えた。

その蒼い光に向って走ったが、一向に近づく事が出来ずにいた。天地は立ち止まり振り替えた。背後は暗闇でどの位走ったか分からなかった。

これが夢だとわかっていたが、あの蒼い光の先に蒼い龍と由美がいるんじゃないかと思った。

夢でも会いたいと思った。

その時、蒼い光の方から由美の声がした。

『もうすぐ……。戻るから……。』

「由美!？」

その声を聞いた途端、天地はもう一度蒼い光に向って走り出した。

『もう、足手まといにならないから……。』

声が消えた。そして、天地は目を覚ました。制服は汗で濡れていて、祐二と魁人が顔を覗いていた。

「大丈夫か？」

「うなされてたみたいだけど……。」

「ああ……。」

体を起こして天地は軽く首を振った。祐二と魁人は顔を見合わせて首をひねった。

まだ、ボンヤリとする頭に夢で聞いた由美の声が響いていた。

その時、予鈴のチャイムがなった。急いでゴミをまとめる祐二と魁人の横で、天地はボンヤリしていた。

「天地君！授業、始まるよ！」

その魁人の声で天地はようやく正気に戻った。

「ああ、わかった。」

そう言って天地もゴミをまとめ始めた。

蒼い光の中に、一人の少女がいた。艶のある黒髪が腰の辺りまで伸びていた。

身長は低く、胸はふっくらとしていた。右手には鞘に入った刀を持っていた。

その背後から優しく暖かな声が響いた。

『あれで、よかったですか？』

「……はい。」

『彼は、あなたに会いたがっていましたが？』

少し間があったが、彼女はゆっくりと答えた。

「……………いいんです。それに……………。
今、会えば……………。すぐに、彼の元に……………。行きたくなる
から……………。」

彼女のその言葉に背後の優しく暖かな声が続けた。

『そうですね……………。それでは、最後の試練をあなたに与えまし
ょう』

「……………はい。」

返事をして、ゆっくりと刀の柄を握った。ゆっくり息を吸い、ゆっ
くりと吐き出した。

そして、ゆっくりと刀を抜くと、顔の前に刀を持ってきて呟いた。

「……………いくよ。疾風丸！」

第十六章 突然変異

中間テストが終わり、天地達は午前中で学校が終っていた。のんびりと人通りの無い寮に続く道を歩く天地達。

落ち込んでいる者が居れば、嬉しそうな者やいつもの変わらない者も居た。

「そんなに落ち込むなよ。」

「そうだよ。中間何だしさ。」

天地と魁人が裕二の両端を歩きながらそう言った。ため息を吐いた裕二は魁人を見た。

「お前はいいよな。スラスラ解いていったから……。」

「そんな事ないよ。」

「全力を尽くしたんだ。それで、いいじゃないか？」

右側を歩いている天地がそう言うと、裕二はいきなり天地の前に立ち怒鳴った。

「うるさい！お前はいいよ！勉強できるんだから！」

「エッ！天地君って、頭良いの？」

「普通じゃないか？」

そう言いながら両手を頭の後ろに持つていった。その時、裕二の人差し指が天地の目の前に差し出された。

ゆっくりと、裕二の顔を見た。鋭い目つきで裕二は天地を睨んでいた。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「三年連続、学年トップのくせに普通なのか！」

「エエツ！三年連続って、凄いじゃないか！」

「俺達の通っていた中学のテストが簡単だったんだよ。」

寮に続く道で立ち止まり、話をしている三人の後ろから、昴・千春・歩美の三人がやってきた。三人は天地達が騒いでいるので、話に加わる事にした。

「何、話してるの？」

天地と魁人の間から顔を出して、昴がそう言った。それに続き、歩美・千春の順にやって来た。

裕二は先程の話を昴達、三人にも聞かせた。すると、昴と歩美は怒りをあらわにして怒鳴った。

「ちょっと！本当はカンニングしてたんじゃないの！」

「そうよ！授業中も寝てるあんたが、三年連続トップなんてありえないわ！」

疑いの目で昴と歩美は天地を見た。眉間にしわを寄せた天地は、軽く睨みをきかせながらその二人の顔を見た。

険悪な雰囲気あたりにはただよった。
今にも喧嘩になりそうだった。何とかしようと、魁人がその間に入った。

「まあまあ。この話は、もう終わりにして早く寮に帰ろうよ。管理人さんも待つてるんだから」

「魁人は、黙ってて。」

「私達は真相を突き止めたいのよ！」

「うっ……。」

鋭く厳しい目つきで睨まれた魁人は、おとなしく引き下がった。
その魁人の横で裕二が楽しそうに笑っていた。

「ちょっと、何笑ってるんだよ！」

「クククツ……。だ、だつてさ……。」

「もしかして……。」

「全部、嘘だから。」

そう言った瞬間、裕二の右頬には昂の拳が、左頬には歩みの回し蹴りが飛んできた。

両方が顔に直撃して、裕二は崩れ落ちた。

その横に立っていた魁人は呆然と立ち尽くしていた。

そして、二人の怒りは天地にも飛んだ。

しかし、右頬に飛んできた拳を右手で押さえて、左頬に飛んできた

蹴りを左手で受け止めた天地は嫌味に笑った。

「甘いな！俺が、裕二と同じ！？」

その時、右足を掴まれている歩美が空に舞った。スカートがヒラヒラと揺れて、同時に天地の頭に左足の踵が直撃した。

まさか、歩美がこの様な身軽な動きが出来ると思わなかった、周囲にいた皆が驚きの声を上げた。歩美はビシッと、着地を決めてスカートを叩きながら息を吐いた。

頭に踵を落とされた天地は、一瞬で地面に崩れ落ちた。

「女だからって、甘くみると痛い目見るわよ！」

そう言うと、歩美は寮に向って歩き出した。感心しながら昂は歩美の後に続いた。

千春は天地の側に来ると、顔を覗き込んだ。

激痛の走る頭を右手で押さえながら体を起こした。

「だ、大丈夫ですか？」

「イデデッ……。頭がフラフラする……。」

「油断したね……。」

魁人はそう言っただ道に倒れている天地と裕二の二人の顔を見た。

痛みを堪えながら、天地と裕二は寮に向った。魁人は裕二に肩を貸して、千春は天地に肩をかしていた。

「どうして、あんな嘘ついたのさ？」

「嘘は三年連続トップって言うのだけで、本当にテストは上位の方にいたんだぞ！」

「お前の嘘に付き合ってたせいで、俺は踵落としだぞ……。」

まだ、頭がきしむ様に痛かった。その時、市街の方からオウガの気配が漂ってきた。

魁人は裕二の肩から手を離しその方向を見た。その瞬間、裕二はバランスを崩し地面に倒れた。ハツとした魁人は裕二の方を見て誤った。

「う、ごめん！つい！」

「ついじゃないだろ！くっ。また鼻打った……。」

「そんな事より、魁人と千春は先に行ってくれ……。」

俺は、ゆっくり後から行くから……。」

「わ、わかりました。それじゃあ……。」

千春はそう言って天地の肩から手を離した。鞆を下ろして、水鮫神だけを持って魁人は走り出した。それに続くように千春が走り出した。

天地は道に座り込み息を吐いた。そんな天地に裕二は言った。

「あの二人だけで大丈夫か？」

「鼻も来るだろうから……。一応、俺も後から行くし……。」

「手遅れにはなるなよ。」

「ああ。誰かが傷つくのはもう嫌だからな……。」

そう言っつて鞆を下ろして、ゆっくりと立ち上がり五龍神を手にとった。

そして、裕二に向って右の拳を出して、笑みを浮かべた。それに対して、裕二も右の拳を出して笑った。

「そんじゃあ、行って来るわ。」

「おう。気をつけるよ。」

天地は裕二に背を向けて走り出した。

市街にやって来た魁人と千春はオウガの気配を探った。オウガの気配はビルの屋上からだった。いつの間にか、人格の変わっていた千春は立ち並ぶビルを見ながら言った。

「あなたは、あちらのビルを私はこちらのビルを探しますわ！」

「別々に行動したら、オウガの思う壺じゃ……。」

そう言った魁人に千春の鋭い視線がとんだ。その視線は痛く、冷たかった。

息を呑み、一步後ずさりした。

「一緒に行動してたら、時間が掛かるわ！」

「ですが！」

「それに、あなたが居ても足手まといですわ！」

この言葉が、魁人の胸に突き刺さった。少しの間、放心状態になった。そんな魁人を尻目に千春は、ビルの中へと入っていった。気を取り戻したのは、歩いている人にぶつかってからだだった。

魁人は被害が拡大しないように結空陣を張った。そして、千春に指示された様にビルの中に入っていった。

最初に魁人の入ったビルの屋上にオウガがいた。オウガはビルの角に立ち街を歩く人達を見下していた。

背中には大きな翼が付いていて、大きな角が一本額から出ていた。体は怒のオウガと同じくらい大きく。腕はとても長かった。両手の爪は鋭く、右手には大きな斧を持っていた。

「ウウーッ！ハンターノ、気配ヲ感ズル！！」（ううーっ！ハンターの気配を感じる！！）

片言の言葉でそう言うと、ゆっくりと魁人の方を振り返った。目は真っ赤で、鋭い目つきをしていた。その目からは、殺気を感じた。その殺気に魁人は飲み込まれていた。

足を動かそうとしても動かず、寒気が体を襲った。

「ハンターハ、皆殺シ！」（ハンターは、皆殺し！）

そう言って、オウガが鉄柵を越えて魁人に向かって突進してきた。

足の動かない魁人は、突進してきたオウガの肩を両手で押さえて耐えた。

しかし、その勢いは凄まじく、後ろに押されていった。壁とオウガに挟まれ、魁人は押し潰されそうになった。

「ぐあああつー!!」

魁人の叫び声が響いた。それは、向かいのビルの屋上にいた千春の所まで聞こえた。

雷犬神を構えてオウガに狙いを定めると、千春はゆっくりと雷犬神を振り上げた。

「やはり、足手まといになりましたわ!」

そうばやきながら、雷犬神に力を集めた。雷犬神の周りには蒼い稲妻が集まり、バチバチつと音を立てていた。

「轟け!雷鳴!!」

雷犬神を勢いよく、振り下ろすと、向い側のビルに居るオウガに蒼い稲妻が落ちた。

稲妻を背中に喰らったオウガは、力を緩めて後ろを振り返った。

「マダ、他二ハンターガイルノカ!」(まだ、他にハンターがいるのか!)

「ガハッ、ガハッ……。」

魁人は膝を付き、口から血を吐いた。体中痛くて、動く事が出来なかった。

オウガはキョロキョロとしていたが、すぐに魁人の頭を掴み上げた。このオウガはハンターの気配を上手く、察知できないでいたのだ。

怒のオウガの突然変異で、少し喋れる様になったようだ。

「ぐぐつ……。」

頭を捕まれ、苦しむ魁人をオウガは壁に叩き付けた。一度目で壁にひびが入り、二度目で壁が崩れた。魁人はそのまま、投げ飛ばされて、瓦礫に埋もれた。

オウガは雄叫びを上げて暴れまわっていた。

向かいのビルからそれを見ていた千春は小さく舌打ちをして、走り出した。

第十七章 怒れる 蒼き鮫

ビルの屋上で雄叫びを上げているオウガに、凄まじい稲妻が襲い掛かった。

しかし、この稲妻に動じず、ゆっくりと稲妻の飛んできた方に体を向けた。

そこには、雷犬神を構えた千春の姿があった。

「才前モ、ハンターカ？」（お前も、ハンターか？）

「だったら？」

「殺ス！」（殺す！）

そう言って、オウガは千春に突進してきた。下に雷犬神を突き刺すと、千春は叫んだ。

「弾き返せ！雷壁！」

オウガの体は、雷犬神から放出される電気の壁に弾き飛ばされた。オウガは鉄柵に激しく背中を強打した。

ゆっくりと、立ち上がりオウガは千春を睨み付けた。

「才前、強イナ。俺モ本気デ、才前ヲ殺ス！」（お前、強いな。俺も本気で、お前を殺す！）

右手に持った斧を千春に目掛けて投げた。斧は勢いよく回転しながら、千春の所に飛んできた。

軽々と斧を避けた千春に、オウガが突っ込んできた。それに気付き、

とつさに右方向に飛んだ。

その時、オウガの投げた斧が弧を描きそのまま、千春に向かって飛んできた。

斧に気付いた千春は、とつさに雷犬神で斧を受け止めた。

刃と刃が擦れ、火鉢が散って斧は下に落ちた。

その瞬間、背中に激痛が走ると同時に、体が吹き飛ばされていた。

「グウツ！」

オウガの突進を背中に直撃したのだった。オウガは斧を手にとると、笑い出した。

「本気ヲ出シタ俺ニ、才前勝テナイ。」（本気を出した俺に、お前勝てない。）

背中に走る激痛で、立ち上がるのも辛かった。しかし、オウガは容赦なく千春に襲い掛かった。

その頃、ようやく結空陣の中にやって来た天地は、頭の痛みを我慢しながら追うがの気配を探った。

オウガの気配がビルの上からするとわかったが、どのビルの上からなのかは分からなかった。

「一体、どのビルだ……。」

建ち並ぶビルを見上げながら、天地はそう言った。その時、一つのビルの屋上で爆音がした。

それに気付いた天地はそのビルの方を見た。すると、何かが飛んでくるのが見えた。

「何だ？」

遠目にして飛んで来るものを見た。それは、雷犬神だった。雷犬神は真つ直ぐ天地に向ってきていた。

「なっ！！」

とっさにしゃがんだ天地の頭の上を、雷犬神が通り過ぎ天地のすぐ横に突き刺さった。

驚きの隠せない天地は、まだ心臓がバクバク言っていた。

「び、びっくりした……。」

道路に突き刺さる雷犬神の柄を握りゆっくりと抜いた。

雷犬神が振ってきた事から、魁人と千春の身に何かがあつたと天地はわかった。

雷犬神を持ち急いで屋上に向った。

しかし、屋上に着いた時には、すでに千春がボロボロの体で倒れていた。

「千春！」

そう叫んだ天地は雷犬神を置き、同時に魁人の姿を探した。瓦礫に埋もれている魁人が見つかるはずがなかった。

オウガは天地の気配に気付いて、天地の方に体を向けて笑った。

「ウへへへッ。才前モ、ハンターダナ。殺ス！」（うへへへッ。お前も、ハンターだな。殺す！）

そう言うと、いきなり天地に飛び掛っていった。とっさに五龍神を

抜きオウガの体を斬り付けた。
しかし、オウガの体は岩の様に硬く、斬りかかった天地の手が痛かった。

「ぐっ！何て硬さだ！」

「ソナ攻撃ジャ、俺二勝テナイ！」（そんな攻撃じゃ、俺に勝てない！）

オウガはそう言って斧を投げた。天地は五龍神で斧を受け止めた。その時、オウガが突進してくるのが見えた天地は、体を捻り斧の軌道を逸らして、オウガの突進を避けた。
オウガは戻って来た斧を取ると、もう一度斧を投げた。

「俺に同じ手が二度も通じると思ふなよ！！」

そう言って、天地は斧を避けた。この時点で、天地はオウガの思惑通りになっていた。

斧を避けた天地にオウガが突進してきた。天地はオウガの突進を左に避けた。

しかし、弧を描き戻ってきた斧が、天地の背後に迫っていた。

それに、気付いた時、天地は避ける術が無く、五龍神で受け止める事しか出来なかった。

斧を五龍神で防いだ天地の背後はがら空きで、そこにオウガが突進を仕掛けた。

天地は千春と同じ様に、背中に激痛が走ると同時に吹き飛んだ。

「グハッ……。」

口から血を吐き、苦しそうに膝を突いていた。目の前がクラクラと

してきた。

あの時の歩美の踵落しの影響だろう。頭を振り、何とか視点を合わせ様とするが、視点は合わなかった。

揺れている視界の中で、オウガが近づいてきているのが分かった。何とか立ち上がり、五龍神を構えたがオウガをはつきりと捕らえられていなかった。

オウガは斧を振りかざし、天地に振り下ろした。何とか、五龍神で斧を弾いていたが、それが限界だった。

その時、瓦礫の中から魁人がゆつくりと這い出てきた。

壁に叩きつけられたせいで、頭からは血が出ていた。血は、額を流れ頬を伝って顎の先から下に垂れた。

額を流れる血を左手で拭い、天地を攻撃するオウガの背後を取った。

「はぁ・・・はぁ・・・。くら・・・!？」

腰を低くして水蛟神を構えた時、あの時の事を思い出して動きを止めた。

それは、自分の技で天地を傷つけたあの日の事だった。

オウガの振り下ろす斧を弾きながら、オウガの背後にいる魁人の姿が天地には見えていた。

なぜ、背後を取っているのに、攻撃を仕掛けないのか天地には分からなかった。

「くっ！仕方ない！目覚めよ！火龍神！」

五龍神の刃の龍が赤く光、一瞬にして火龍神へと変わった。

しかし、火龍神に変わっても、天地はオウガの斧を防いでいるので精一杯だった。

「グへへへッ！早く諦メテ、ミンチニナレ！」（グへへへッ！

早く諦めて、ミンチになれ！)

斧を振り下ろす力を徐々に強くしていき、天地を端の方に追い込んでいった。

天地が五龍神を火龍神にしたのには訳があった。そして、その機を待っていた。

鉄柵まで追い込まれた天地に、オウガは勢いよく斧を振り上げた。その時、斧はシューツと音をたてながら碎け散った。斧の刃の破片がオウガの下に落ちた。

どの破片からも白い煙が出ていて、少し溶かされたような後があった。

「はぁ・・・はぁ・・・。残念だったな・・・。」

だが、天地の体も限界だった。揺れていた視界は次第に暗くなり、そのまま倒れこんだ。

火龍神も五龍神に戻ってしまい、動かなくなった。

「グへへへッ！後八、トドメヲ刺スダケダ！」（グへへへッ！後は、トドメを刺すだけだ！）

オウガは雄叫びを上げて天地の体を踏みつけた。

その瞬間、魁人の中で何か弾けた。そして、自分への怒りがこみ上げてきた。

「その足を退けろ！」

「何ダ？マダ、生キテタノカ？」（何だ？まだ、生きてたのか？）

オウガは天地を踏みつけながら、魁人の方に顔を向けた。

俯いて顔が見えなかったが、魁人の体からは凄まじい闘志が湧き出ていた。

今まで、こんな事は無かった。

冷静沈着で頭脳派の魁人は、天地の様に戦いに熱くなる事はなかった。

しかし、今の魁人は闘志が流れ出ていた。

「才前八、弱過ぎテ楽シクナイ！」（お前は、弱すぎて楽しくない！）

そう言つてオウガが魁人の方に体を向けた瞬間、魁人が視界から消えた。

宙に舞つたと思つたオウガはすぐに、上を見たが魁人の姿は無かつた。

何時の間にか、背後に回つていた魁人が、オウガの頭部を槍の柄で殴り飛ばした。

2・3歩前のめりに進みすぐに、後ろを振り返つたがそこには魁人の姿は無く、倒れていた天地の姿もなくなつていた。

オウガの後ろで着地すると、魁人は天地をおろした。

魁人は水蛟神を使つて、宙を素早く移動していたのだった。ゆっくりと、水蛟神を構えてオウガに向つて対峙した。

「才前、何時ノ間ニ！」（お前！何時の間に！）

「.....」

オウガの言葉に魁人は答える気はなかった。

「ウウーッ！先二、才前ヲ殺シテヤル！」（ウウーッ！先に、お前を殺してやる！）

そう叫ぶとオウガは魁人に向って突進してきた。突進してくるオウガに、魁人は水鮫神を構えたまま突っ込んでいった。

そして、突進してくるオウガが、踏み込んだ右足の太ももを水鮫神で突き刺した。

岩の様に硬かったオウガの体だったが、オウガの突進の勢いが凄かった為、水鮫神の刃は簡単に突き刺さった。

すぐに刃を抜き、オウガの突進を右に避けて体勢を整えて、すぐに水鮫神を構えなおした。

オウガの右の太ももからは、真っ赤な血が噴水のように吹き出していた。

「グオオオオオツ!!」

オウガは叫びながら、痛みに苦しんでいた。オウガの右足は震えて力が入らなかった。

そんなオウガに魁人は、水鮫神の刃先を向けた。

「次は、胸を貫く！」

「フ、フザケルナ！俺八、コンナ所じゃ死ナナイ！」（ふ、ふざけるな！俺は、コンナ所じゃ死なない！）

地を蹴り、魁人に向って突進してきた。しかし、先ほどより勢いは無かった。

右の太ももをやられたせいだろう。そんなオウガの左の太ももを水鮫神で突き刺した。

オウガの突進を今度は左に避けて、体勢を整えてオウガを見た。下に膝を付き、オウガは苦しんでいた。両太ももからは血が流れていた。

魁人は腰を落とし、水鮫神を引き低く構えた。水鮫神の刃の周りに、

霧状の水滴が集まり渦巻いていた。

「喰らい付け！霧鯨むこうれんが連牙」

槍を一気に突き出した。集まった霧状の水滴がいくつかにまとまり、そのまま鯨の形になり、オウガに喰らいついた。

「グオオオオツ！！」

オウガの悲鳴が響いた。何匹もいる霧状の鯨が、オウガの血で真っ赤に染まった。

そして、そのままオウガと共に消滅した。

第十八章 亀裂

蒼い光の中で、髪の毛の長い少女がいた。

右手には刀を持っていて、蒼いワンピースを着ていた。

彼女は蒼い光の強い所に目をやった。そこから、優しく暖かな声が響いた。

『もう、私の教える事はありません。よく試練に耐えました』

「……………はい」

彼女はゆっくりうなずいた。

『それでは、皆のもとに戻しましょう』

「あ……………お願いが……………」

『何でしょう?』

小さな声で、光をお願いした。

『良いでしょう。それでは、さようなら。私の主の愛しき者よ』

「ありがとう……………。蒼き龍さん……………」

彼女はそう言って微笑んだ。そして、その蒼い光の中から姿が消えた。

相変わらず、天地・祐二・魁人の三人は、屋上で昼休みを過ごしていた。

弁当を食べ終わった天地は、屋上に横になって眠っていた。

蒼い空には白い雲とキラキラと輝く太陽が浮かんでいた。

中間テストも終わり、運動場からは大勢の生徒の声が聞こえていた。もうすぐ梅雨の時期だと言つのに、全く雨の降る気配がない。

セミの声が学校の裏の林から響き渡ってきた。

寝ている天地の横で、弁当を食べている祐二は、少し元気がなかった。

「はあくっ……」

ため息を吐き、暗い表情で俯いた。テストの結果が悪かったのだ。

もちろん、魁人はその事を知っていた。だから、なかなか声を掛けられないでした。

弁当を一口食べてはため息を吐く祐二に、寝ていた天地が急に置きだして怒鳴った。

「ダーツ！ため息ばかり吐きやがって！空気が重いじゃないか！
！」

「はあ？空気が軽いに決まってるだろ？」

怒鳴った天地に祐二はそう言って、もう一度ため息をついた。

「ため息を吐くな！雰囲気が悪くなるだろ！！」

「まあまあ。そんなに怒らなくても……」

苦笑いをしながら、魁人は天地をなだめた。怒りのおさまらない天

地は、さらに怒鳴った。

「大体、魁人も魁人だぞ！あんなにため息吐いてるんだから、何か言っただれよ！」

「エッ！何で、僕が怒鳴られなきゃならないのさ！」

怒鳴られた魁人は天地に言い返してきた。少しの間、天地と魁人の言い争いが起こっていた。

二人をなだめようと、祐二が立ち上がり二人の間に入った。

「まあまあ………。やめろよ。一体なんで喧嘩になったんだ？」

その祐二の言葉に、天地と祐二は同時に答えた。

「お前のせいだろ！」 「君のせいだよ！」

結局、仲直りしないまま昼休みが終わり、険悪なムードのまま岐路に着いた。

寮に続く道はいつも以上に、静かだった。いつも話をしながら帰っているからだろう。

今までは、すぐに仲直りしていたのだが、今回はまだ仲直りしていなかった。

天地と魁人が喧嘩をするなんて、そんなに無かった。

そんな中、オウガの気配が天地達の所にとどいた。天地と魁人は同時にオウガの気配のする方に走り出した。

もちろん、鞆は置きっ放しで……。

祐二はため息を吐きながら、天地と魁人の鞆を拾い寮へと歩き出した。

住宅街の続く道を天地と魁人は走っていた。車の通りは少ないが、人通りは多くなっていた。

暫く走っていると、オウガの気配が突然消えた。

その場に足を止めた天地と魁人は、オウガの気配を探った。

「くっ！何処に消えた！」

そう言いながら、天地はオウガの気配を探った。しかし、いくら探してもオウガの気配は感じられなかった。

天地と魁人が引き返そうとした時、またオウガの気配を感じた。先程とは全く違う強い力を感じた。

「どうなってるんだ！」

そう言った天地だったが、魁人からの返事は無かった。それどころか、魁人は天地を置いて先に行ってしまった。

やはり、まだ怒っているようだ。天地はため息を吐き魁人の後を追いかけた。

市街に入って、さらに人通りが多くなった。どの店も活気で溢れ返っていた。

活気溢れる市街の道を走っていると、人気の無い裏道に続く横道があった。

そこから、オウガの気配がしていた。

すぐにその横道に入っていた魁人の後を、天地は急いで追いかけた。

気配の強さから、憎のオウガだと感じていた。

意外と広い裏道には、禍々しい殺気を漂わせたオウガが立っていた。両手には鋭い三日月形の剣を持っていた。体格は天地と魁人と殆ど変わらない。

頭に生えた二本の角は鋭く、口から出た牙は更に鋭かった。

「ハンターか……」

ゆっくりとした口調でそう言って、天地と魁人の方に体を向けた。ピリピリとした空気が漂い、体中が重く感じた。

「悪いが、お前達ハンターの相手をするほど、暇じゃないんだ」

「何だと！」

「そつちに無くて、こつちにはあるんだ！」

水蛟神を構えて、魁人はオウガに向っていった。早く鋭く突き出した水蛟神の勢いを、オウガは持っていた剣で勢いを抑え込んだ。

「な!?!」

反撃を食らうと思った魁人は、すぐに距離をとった。しかし、オウガの反撃は無かった。

「どういつつもりだ！」

「言った筈だ。ハンターの相手をしている暇は無い」

「なら、大人しく消え去れ！」

そう叫んだ天地は五龍神に力を集めた。

「目覚めよ!火龍神！」

五龍神が火龍神に変化した。それと同時に火龍神をゆっくりと構えた。魁人も腰を低くして水鮫神をゆっくりと引いた。火龍神の周りには、燃え盛る炎が渦巻いた。一方、水鮫神の周りには水が渦巻いていた。そして、同時に叫んだ。

「燃え盛れ！炎裂弾！」 「噛み砕け！水牙鮫！」

火龍神から放たれた炎は、分裂して一気にオウガに向っていった。水鮫神から放たれた水の渦も、鮫の形に変化しオウガに向っていった。

しかし、オウガに届く事無く炎と水はぶつかり合い、相殺した。その瞬間、白い蒸気が辺りを真っ白に染めた。蒸気が消えた時には、オウガの姿は無かった。

「くっ！逃げられた！」

悔しそうに魁人はそう言った。その魁人に天地は叫んだ。

「おい！どういうつもりだ！」

「・・・・・・・・」

天地の言葉に魁人は返事をしないまま裏道から出て行こうとした。そんな魁人の態度に、天地はムカツと来た。

「おい！待て！」

水蛟神を突き出すと同時に、無数の霧状の鮫が分裂した炎に向かって飛んでいった。

炎と霧状の鮫がぶつかりあい、蒸気で真っ白に染まった。

相殺したかに見えたが、その蒸気の中から天地に向って霧状の鮫が一匹飛んできた。

完全に不意を突かれた天地は、完全に避ける事が出来ず、霧状の鮫の体に触れてしまった。

その瞬間に触れた所が切れて、血しぶきが舞った。

地面に膝をついた天地に向って、蒸気の中から魁人が歩み寄ってきた。

「これで、終わりだ！」

水蛟神を引いた魁人の背後で昴の声が響いた。

「何！やってんのよ！」

「そうですよ！ハンター同士が傷つけあってどうするんですか！」

昴の横で千春がそう言った。ゆっくりと二人の方を見た魁人は不敵に笑っていた。

第十八章 亀裂（後書き）

今回、総読者数が400人を超えました。
読者の皆様ありがとうございました。
これからも、頑張っていきたいと思えます。

第十九章 暴走と帰ってきた風

裏道には魁人の笑い声が響いていた。

それを見た瞬間、昴は背筋がゾツとした。

「まさか！暴走してるの！」

「暴走？違うな……」

そう言いながらゆっくりと昴と千春の方に歩き出した。そして、ゆっくりと語りだした。

「暴走は、自分の力を制御できずに起こる現象だ。」

今は俺自身がこいつの望む力を引き出しているんだよ」

「どついう事ですか？」

千春は複雑な表情で昴の方を見た。昴は厳しい表情で魁人の方を見ながら千春の質問に答えた。

「水鮫神は時々暴走するのよ。しかも、質が悪くて持ち主の意識を乗っ取るのよ」

「それじゃあ、今は魁人さんの意識は無いんですか？」

「ええ、今は完全に水鮫神に乗っ取られてるわ」

風鳥神を構えると風の矢を引き、魁人の方をにらみつけた。表情を変えず、魁人は昴を挑発した。

「お前に撃てるのか？」

「撃てるわよ！」

風の矢を何発も放ったが、全ての矢を水鮫神で弾かれた。

小さく舌打ちした昴はもう一度、風鳥神を構えて大きな風の矢を魁人に向けた。

凄まじい風が辺りを取り巻いていた。

魁人はゆっくりと腰を下ろして水鮫神を引いた。水鮫神の周りには水が集まり渦巻いた。

二人は構えたまま対峙していた。

先に動いたのは昴だった。

「射抜け！大燕！！」

大きな風の矢は魁人に向って一直線に飛んでいった。

しかし、魁人は一向に水鮫神を引いたままだった。そして、大きな風の矢が水鮫神の刃先に触れた瞬間に叫んだ。

「噛み砕け！！水牙鮫！」

水鮫神を突き出すと、大きな風の矢は裂けてそよ風となって魁人に届いた。

水鮫神に集まった水の渦は鮫の形に変化し、昴と千春に向かっていった。

二人は動く事が出来なかった。その場で、目を閉じた。

しかし、爆音と爆風だけが二人の間を抜けた。目を開くと、目の前には真っ白な蒸気だけが残っていた。

「はあ……はあ……」

魁人の後ろで、息を荒げながら天地が立っていた。その手には火龍神が握られていた。

炎裂弾で水牙鯨を相殺したのだろう。ゆっくりと天地の方を見て笑った。

「まだ、立てたのか」

「今すぐ魁人の体から出る！」

「悪いな。今は俺の体だ」

「なら、力づくでも追い出す！」

そう言って天地は魁人を睨んだ。闘志が体から溢れ二人は対峙していた。

二人の闘志が激しくぶつかり合い、昴と千春は何もする事が出来なかった。

火龍神の刃は燃え盛る炎に包まれ、水鯨神の刃には水の膜が張っていた。

何か嫌な予感のした昴は一応、結空陣を張った。

その瞬間、天地と魁人が同時に地を蹴りぶつかり合った。

火龍神と水鯨神が、ぶつかり合うと白い蒸気が出ていた。

先程とは打って変わって、互角の攻防を繰り返していた。リーチの違いを感じさせなかった。

「す、凄いですね……」

「そ、そうね……。私達には手が出せないわ」

激突する天地と魁人を離れた場所から見ている。離れているのに、火龍神と水鮫神がぶつかり合うと起こる熱風が、二人の所まで届いていた。

火龍神から出る熱気からなのか、疲れなのか天地は汗だくだった。一方の魁人は額から汗が出ているだけで、顔色一つ変えなかった。

「どうした？汗だくだぞ」

「だ・・黙れ・・・」

苦しかった。立っているのが辛く、腕が重かった。目は霞み始めた。だが、ここで止める訳にはいかなかった。何としても魁人の中から水鮫の力を出すために。

天地は重い体を必死に動かして魁人を攻め立てた。しかし、火龍神の刃を取り巻いていた炎の勢いは、明らかに弱まっていた。

「そろそろ、終わりかな？」

そう言うと魁人は腰を落として水鮫神をゆっくりと引いた。水鮫神の周りには水が渦巻き始めた。

天地も何とか反撃しようとしたが、炎を思うように集める事が出来なかった。

「だめ！このままじゃあ、天地が！！」

「どっしまししょう！！」

「こうなったら！」

風鳥神を構えて風の矢を構えた。そして、魁人目掛けて何発もの風の矢を放った。
水蛟神に水を集めたまま魁人は全ての矢を叩き落とし、昴と千春の方に体を向けた。

「邪魔をするなら、お前達からしまつしよう！」

「ま、待て！」

思うように動く事の出来ない天地は、そう言うと同時に地面に膝をついた。

体が重く、力が入らずもう立つ事も出来そうに無かった。
大量の水の渦が水蛟神に集まっていた。

「噛み砕け！大水牙蛟！」

水蛟神を突き出すと同時に、水の渦は蛟の形に変わりそのまま昴と千春に向っていった。

風の矢を何本も放ったが水の蛟には効果がなかった。

今度こそ、二人は駄目だと思った。大きな蛟の口が目の前に来た時、二人は目をつぶった。

その時、突風が吹き大きな水の蛟が消滅した。

「また、邪魔が入ったか……」

昴と千春の後ろの人影に目をやった。そこには、髪の毛長い蒼いワンピースの少女が立っていた。

少女の右手には刀が抜かれていた。

昴と千春はその人物を見た。天地も遠退く意識の中、その少女を見

た。そして、それが由美である事がわかった。
天地は由美を見た途端に、意識が無くなり倒れた。火龍神は五龍神
に戻り地面に落ちた。

「も、もしかして……………」

「誰ですか？」

千春はそう言って昴の顔を見た。ゆつくりとした口調で昴は言った。

「ゆ…………み……………」

微笑みながら昴を見た由美はゆつくりと歩き出した。

「何だか…………急に変わっちゃったね……………」

私が…………居ない間に……………」

疾風丸を構えながら、ゆつくりと昴と千春の間を通り抜け、魁人の
前に出た。

魁人の後ろに倒れている天地の姿を確認すると、小さく呟いた。

「やっと……………帰ってきたよ」

魁人はゆつくりと腰を下ろして水蛟神を引いた。水蛟神に水が集ま
り渦巻いた。

由美は目を閉じて、疾風丸を顔の前に構えた。疾風丸の刃の周りに
風の吹き荒れた。

二人は対峙したまま、動かなかった。目を閉じたままの由美に向っ
て、魁人が動いた。

「噛み砕け！水牙鮫！」

水鮫神を突き出すと、水は鮫の形に変化して由美に襲い掛かった。ゆっくりと目を開いた由美は、風の吹き荒れる疾風丸を構えなおした。

「貫け！疾風一点！」

水の鮫目掛けて、由美は疾風丸を突き出した。疾風丸を取り巻いていた風が、槍の様に水の鮫を貫いて、魁人に向かっていった。風の槍は徐々にスピードを上げて、一瞬にして魁人の右肩を捕らえた。

右肩から血しぶきが舞い、魁人は後ろに吹き飛んだ。そして、壁に体を打ち付けると、気を失った。

第二十章 ただいま

目を覚ましたのは自分の部屋のベッドの上だった。

体中がズキズキ痛み重たかった。天地は体を起こして窓の外を見た。外は雲が掛かり薄暗く、雨が降っていた。雨の日は嫌いだった。

雨の日に由美は居なくなっただからだ。天地はそんな風な事を思いながら空を見上げていた。

窓に雨が当たりぬれていた。天地はため息を吐き、台所に向った。

その時、部屋のドアをノックする音がした。天地は重い足をゆつくりと動かし、玄関に向った。

ドアを開けると、目の前には由美が立っていた。

天地は暫く目の前の光景に呆然としていたが、あの日の事を思い出した。

「オオツッ!」

驚きの声を上げて由美の顔をマジマジと見た。恥ずかしそうに顔を背けた由美に、天地は首を傾げて言った。

「お前、本当に由美か?」

「エツ?」

「実はドッキリで誰かが変装してるとか?」

「どっつして……そう思うの?」

「何となくかな?」

そう言いながら笑い出した。由美はムスツとした表情で天地の顔を見ている。

そこに、祐二がのんびりと歩いてやってきた。

「何してるんだ？そんな所で？」

「オツ！祐二」

「何だよ。見せ付けやがって……アツアツだな」

笑いながら二人の肩を叩いて通り過ぎていった。

取り合えず、部屋の中で話をする事にした。

天地はベッドに寄りかかりながら座った。天地の向かいに由美は座った。

テーブルを挟み向い合った二人だが、何から話していいか分からなく沈黙が続いていた。

その光景を台所の窓から見ている者達がいた。

「おいおい……。何か話せよ！」

「ちよつと！祐二！押さないでよ！」

「うるさいな！静かにしないと、ばれるぞ！」

「二人とも、覗きなんて駄目ですよ！」

「そつだよ。バレたら大変だよ」

覗きをしている昴と祐二を、暴走が収まった魁人と千春が止め様としていた。

だが、祐二は二人の方を見て不敵に笑いながら言った。

「バレなきゃいいんだよ。それに、お前達だって、気になるんだろ？」

「な、何言ってるんだよ。そんな事無いよ……」

と、言いつつ魁人は窓から中を覗き始めた。

「ちょ、ちよつと！魁人さんまで！」

「千春も気になるんでしょ」

「そ、そんな事……」

千春もそう言いつつ部屋の中を覗いてしまった。

もちろん、その声は部屋の中の天地と由美には聞こえていた。

ゆっくりと立ち上がった天地は窓の方を見て叫んだ。

「お前ら！全部聞こえてるぞ！！」

「やばい！バレた！散れ！！」

と、祐二の声が響きバタバタと足音がして静まり返った。

ため息を吐きゆっくりと腰を下ろして、由美の方を見た。

何から話していいか、わからなかった天地は取り合えず言った。

「久しぶりだな。傷の方はもういいのか？」

「うん……。少し……後が残るけど……」

「そっか……」

申し訳ないと言う気持ちで一杯だった。だが、口にすることが出来なかった。

暫し沈黙が続き、雨音だけが響き渡った。

久しぶりに会って、話したい事が沢山あったはずだったが、なかなか言葉が出なかった。

由美も同じだった。

話したい事が沢山あり、何かから話していいか分からないでいた。

そんな時、天地がゆっくりと立ち上がり台所に向った。

その天地を由美は目で追った。

冷蔵庫の中を見てから由美の方を見ていった。

「ちょっと、飲み物買って来るから、待っていてくれ」

「うん………わかった………」

財布を持って天地は部屋を出た。そして、階段を下っていた。

それと同時に祐二の部屋から、祐二と昴が出て来た。そして、魁人の部屋からは魁人と千春が出てきた。

四人は天地の部屋の前に集まり話し合いを始めた。

「このままだと、話が進まないぞ！」

「そうね。私達で何とかしましょうー！」

「エッ？何とかって？」

「どうするつもりですか？」

「取り合えず……………」

昴は三人に小さな声で耳打ちした。

「それじゃあ！魁人と祐二は天地の方を任せるわ！」

「おう。任せろ！由美の方は任せたまぞ！」

そう言つて祐二は魁人を連れて天地を追いかけた。昴と千春は天地の部屋に入つていった。

天地の部屋に居た由美は、天地が帰つてきたと思ひ玄関の方を見た。しかし、そこにいたのは昴と千春だった。

昴と千春は由美のそばに駆け寄つた。

「昴に……………千春……………。どうしたの？」

「どうしたのじゃないわよ！」

「何が？」

「久しぶりに会つたのに、話す事無いわけ？」

「向こうが……………話さないから？」

落ち着きながら昴の顔を見てそう言った。昴は由美の横に座り気を静めた。

その後ろに千春がゆつくりと腰を下ろした。

「久しぶりに会つたんだから何か話さないよ！」

「でも……………」

「でもじゃない！」

昴は由美に説教をはじめた。黙って由美はそれを聞いていた。

一方、飲み物を買いに出かけた筈の天地が、寮の入り口で立ち止まっていた。

丁度、そこに祐二と魁人が降りてきた。

その二人に気付いた天地は声を掛けた。

「お前ら！さつきは人の部屋覗きやがって！」

「まあまあ。それより、何で話さないんだ！」

「お前に関係あんのかよ！」

「久しぶりにあって、話したい事も沢山あるんだろ？」

「だから……………。お前に関係ないだろ……………」

「わかってるって、ちゃんとアドバイスしてやるって」

「そうだよ！僕もアドバイスするよ！」

「いや……………。人の話聞いてるか？」

呆れながら天地はそう言ったが、祐二と魁人はそんな事はお構いなしに話を続けた。

結局、飲み物を買うに行く事が出来ず、天地は自分の部屋に戻った。

その時には、昴と千春も居なくなっていた。
疲れた様子の天地はベッドにもたれて座った。
何も手にしていない天地に由美が言った、

「飲み物………買いに行つたんじゃない？」

「ああ、行つたけど、この雨じゃあな………」

「私………部屋から取つてこようか？」

「いって、別に」

笑いながら天地はそう言った。

祐二と魁人からのアドバイスなど、すっかり忘れてしまっていた。
由美も昴のアドバイスをすっかり忘れていた。

だが、由美は意を決した様に立ち上がった。急に立ち上がった由美に驚き、天地は仰け反った。

「ど、どうした？」

「た、た、ただいま………。まだ………言つてなかったから………」

そう言つて、由美は顔を真っ赤にして玄関の方に走つていった。

暫し、ポカーンとしていた天地だった。結局、話したい事は話す事が出来ず、天地は一人部屋に残された。

雨が窓に当たる音が部屋の中に響いていた。

そんな、静かな部屋に天地と魁人と昴が駆け込んできた。

「ちょ！ちょっと！！どういふつもりなの！！」

「な！お前ら！勝手に入ってくるなよ！」

「それより！全然話してなかったじゃない！」

「そつだ！お前やる気あんのか！」

天地の言葉など聞かず、祐二と魁人と昴の三人の不満の声が上がった。

雨の音など、この三人の声に比べれば、とても静かな方だった。

三人の声が同時にバラバラの言葉を発し、天地は全く聞き取れなかった。

「ちよ！ちよつと待て！一斉に喋るな！」

大きな声で怒鳴った天地に三人の視線が集中した。

天地は三人を座らせて、話を聞く事にした。

天地の向かいに魁人が座り、右側には祐二が座り、左側には昴が座った。

ゆっくりと三人の顔を見回して、天地は言った。

「それで、何？」

「いや……………。どうして、何も話さないで帰したのかな？つて」

厳しい表情の天地に、恐る恐る祐二はそう言った。魁人と昴は縦に頷きながら、天地の方を見た。

ため息を吐きながら天地は話を始めた。

「話そうとしたら、あっちがただいまって言って帰っていったんだ！」

「普通、ただいまって言ったら、お帰りって返すわよね」

「そうだよね」

昂の言葉に魁人がそう言って頷いた。鋭い視線で昂と魁人を睨み付けた天地は、深いため息を吐いた。

顔を俯けたまま天地が暫く動かなかった。

祐二は天地の顔を覗き込んだ。その瞬間、天地の拳が祐二の額に落ちた。

「ぐあっ！」

額を殴られた祐二は、床に伏せながら苦しんでいた。

そんな祐二をそのままにして天地は話始めた。

「俺だって、お帰りくらい言いたかったけど、なんかさ……」

「そんな事でいいの？」

強気な声で昂がそう言った。こう言う事になると、昂は強い態度を取る。

そんな時だった、オウガの気配を感じた。

天地と魁人は同時に立ち上がった。厳しい表情の昂はゆっくり立ち上がり叫んだ。

「何で、こんな時に出てくんのよ！」

「まあまあ、話は後でも出来るし……………」

「祐二！留守番頼んだぞ！」

天地は苦しんでいる祐二にそう言い残して部屋を出た。寮の一階には由美と千春が三人の事を待っていた。

「急いで……………。今回は……………。絶鬼の気配を感じる……………」

「絶鬼か……………。気を引き締めていくぞ！」

天地達は気合を入れて雨の中を走り出した。

第二十一章 林の中の罨

雨の降り注ぐ街道を天地達五人は走っていた。水溜りの上を走ると泥が跳ねる。しかし、五人はそんな事気にしなかった。

雨が降っているため、街道には人の姿は無い。

市街に入ってもそれは変わらなかった。市街を暫く走っていると住宅街に出た。

その住宅街を真っ直ぐ突っ切ると、林の中へと続く道があった。

ただでさえ薄暗いのに、林の中は更に暗い。

五人は林に入つてすぐに足を止めた。林の中は木々が雨を凌いでいる。

ここまで来るのに、髪も洋服も雨で濡れてビショビショになっていた。

濡れた洋服が体に張り付いて、気持ち悪かった。

「これだから、雨は嫌いなんだ！」

服を脱ぎ絞りながら天地はそうぼやいた。女性陣は目を背けていた。洋服の水気が大分とり、それを由美に渡した。洋服を差し出す天地に、戸惑いながらも由美は洋服を受け取った。

「そのままだと、風邪引くだろ？お前の服の水気も取るから、その間俺の服着てる」

「あ…ありがとう……」

頬を少し赤く染めながら、由美は天地の服を着て、自分の服を脱いだ。

その間、もちろん天地と魁人は木の陰に行かされた。

「天地君って、結構優しいんだね」

「それ、どういう意味だ？」

隣に座る魁人を鋭い目つきで睨みつけた。そんな天地に魁人は楽しそうに微笑んでいた。

その微笑んだ魁人の顔を見ると、なぜか天地も楽しくなってきた。

「もういいわよ」

昴の声が響き、天地と魁人が木の陰から出た。天地にとってはいいくらいの大きさの服でも、由美にとってはブカブカだった。

「ちょっと……大きかった……」

「ちよつとか？」

そう言っただけで天地は頭を掻いた。濡れた由美の服を絞り、水気を取っていた。

その後、千春・昴と続き、ようやく全員の服の水気を取った。実際、そんな事をしている暇は無かったのだが、五人には分かっていた。

この林にオウガが誘い込んでいる事が……。

「さて、これからどうするか……」

「確かに、オウガの気配はするけど、きつと畏れね」

「でも、絶鬼程の力を持ったオウガが、僕らを罠に誘い込む必要があるかな？」

複雑な表情で魁人がそう言った。確かに、絶鬼の様な絶対的な力を持ったオウガが、罠に誘い込む意図が分からなかった。五人は林の入り口で立ち尽くし暫し悩んでいた。

「この気配、阿修羅のにも似てるけど……。
何処と無く、静けさのある気配なんだよな……」

「どういう事よ？」

「阿修羅の気配は……激しく燃える……炎って感じ。
でも……。今回は……静かに流れる……水って感じ」

静かにそう言った。天地も同じような感じだった。

林の奥では、一体のオウガが居た。蒼く染まった長い髪に隠れているが角が二本生えていた。

体格はさほど大きくは無い（とは言っても、天地達よりかは大きい）。

腰には長い刀をぶら下げている。

大きな岩の上にあぐらを掻いて座っていた。

その横に白髪の色白の絶鬼が立っていた。

「君に、用があつてきたんだけど？」

「拙者は、お主に用は無いが？」

「まあ、そう言わずに……」

絶鬼はそう言つて微笑みそのオウガと話を始めた。

話のまとまらない天地達一行は、まだ林の入り口に立っていた。

天地と魁人と由美と昴の話を、千春は黙って聞いていた。

四人は深刻そうな顔をしながら話を続けていた。

「どちらにしても、絶鬼とは決着をつけなきゃいけないんだが……」

「だけど、今じゃなくてもいいんじゃないかな？」

「どっちにしても……今の私達じゃ……勝てない……」

「そうだよね……」

四人はほぼ同時にため息を吐き、深刻なムードが漂っていた。

すでに人格の変わっている千春は我慢の限界だった。

グダグダと無駄な話をしている四人に怒鳴り散らした。

「いつまで、無駄な話をしているつもり！」

私達ハンターは、どんなオウガも倒さなきゃいけないの！」

「確かに……でも、これが絶鬼の罠なら、俺たちは確実に死ぬ！」

真剣な表情で天地は千春を見た。しかし、表情を変えずに千春は言い放った。

「そう。わかりましたわ。あなた方が腰抜けだと言う事が」

「ちょっと！どついう事よ！」

「千春さんは絶鬼の力を、見た事無いからそんな事が言えるんだよ！」

そう言った魁人と昴を、千春は睨み付けた。その目には何か強い意志のような物を感じた。暫く雨音だけが響き渡った。

「もういいですわ！私一人で行きますわ！」

「待つて！千春……」

千春は由美の言葉を聞かずに、林の奥へと走り出した。由美はゆっくりと天地の顔を見た。その目は何か訴えかけるような目をしていた。ため息を吐き魁人と昴の顔を見て頷いた。

「千春を一人にする訳には行かない。急ごつ」

「うん……」

小さな声でそう言った由美の言葉は雨音に寄ってかき消され、天地達の耳には届かなかった。林の下の地面はぬかるんでいて、千春の足跡がはっきりと残っていた。

天地達四人は、その足跡を追っていった。

すぐに追いつけると思っていたが、一向に千春に追いつく事が出来なかった。

と、言うか先程から同じ道を何度も走っているのに気がついた。四人は立ち止まり辺りを見回した。

「天地君。おかしいよ!」

「さつきから、同じ場所を回ってる」

「でも、足跡を追ってきたのにどうして?」

「分からない。もしかすると、これが罠なのかもしれない」

厳しい表情で天地は、もう一度見回した。静かで冷たい風が木々の間を吹き抜けてきた。

オウガの気配も感じなくなっていた。

何か別の空間に切り離された感じだった。

まるで、結空陣の様なものに閉じ込められた様だった。

「どこをどういっても、同じ場所に出るな……」

「……どうする?」

「どうするって……。まずは、ここから……」

「どうやって出るのよ?」

「いや……。どうにかして……」

「どうにかして?」

次々と天地に質問をしてきた。頭がこんがらがってきた。

そんな天地の顔に三人の視線が集まった。

天地が黙り込み、沈黙が続いた。木々のザワメキだけが響き渡っていた。

そんな天地の顔を由美が覗き込んだ。

「……………どうかした？」

顔を覗き込まれた天地は、驚き慌てふためいて後ろに仰け反った。そして、慌てながら言った。

「だ、大丈夫だ！ちょ、ちょっと、考え事してただけだから！」

「そう？」

「アーツ！何イチャついてるのよー！！

大体！この非常時に何しちゃってるのよー！！

「……………どうしたの？」

「嫉妬だよ。嫉妬」

昴の横で笑いながらそう言った魁人の横腹に、昴の右の拳が深く突き刺さった。

鈍い音と共に魁人の体がぬかるんだ地面に崩れ落ちた。

その様子を見ていた天地と由美は苦笑いを浮かべていた。

魁人は暫く動かなかった。

「それで、どうするの？」

「……………どうしよう？」

「何で俺の方を見るんだよ」

二人の視線が集まっているのに気付いた天地はそう言ってため息を吐いた。

三人の間に沈黙が続き、天地は近くの木にもたれかかった。

千春のことが心配だった。確かに、人格の変わった千春は強いが、絶鬼には絶対に勝つ事は出来ないだろう。

と、色々な事が頭を過った。

ふと空を見上げた天地は何かをひらめいた。

「なあ、上も切り離されてるんだよな」

「当たり前でしょ？」

「だったら、風の矢を空に向って打てば、いずれ壁に当たって境界線が見えるんじゃないか？」

「……そうかな？」

「まあ、やってみなきゃわかんないし、やってみようぜ」

笑いながら天地はそう言った。

ぬかるみに横たわったままの魁人をそのままに、天地の案を試す事になった。

昴は風鳥神を上に向けて構えて、大きな風の矢を引いた。

「行くわよ！準備はいい！」

「おう！いつでもいいぜ！」

「いつでも……。いいよ」

天地と由美は走る準備をした。

「射抜け！大燕！！」

大きな風の矢を放った。風の矢は空に上っていった。そして、壁にぶつかり止った。

その瞬間、天地達を閉じ込める空間の壁が見えた。

「あそこだ！行くぞ！！」

「……うん」

由美の声は天地の足音でかき消された。天地と由美は壁の前に来ると五龍神と疾風丸を構えた。

そして、同時に壁を切り裂いた。壁が切れると同時に空間を区切っていた壁が崩壊した。

動かない魁人の服を引っ張り、地面を引きずりながらやってきた。

「どうやら、出られたようね」

「ああ。それより、魁人はまだ動かないのか？」

「結構…鈍い音してたから……」

「確かに……」

「天地は……平気だよな？……あれくらい」

由美はそう言って天地の顔を見て微笑んだ。

苦笑いを浮かべながら天地は、鼻の上を掻いた。

実際、あんな鉄拳をくらったら、天地だってひとたまりも無いだろう。

自分が殴られた所を想像すると、体中が恐怖で震えた。

「そ、それより、ち、千春を探そう」

若干天地の声が震えていたが、由美と昴はそんな事は気にしないで歩き始めた。

天地も、ゆっくりと二人の後を追った。

第二十一章 林の中の罫（後書き）

この度、アクセス数が5000人を超えました。

僕としては、大変嬉しく、満足しています。

読者の皆様には感謝しております。ありがとうございます。

始めの頃は一日十人も行かず、これって僕の書く小説は面白くないのかと、自信を失くした事もありましたが、まさか5000人を超えるとは思いませんでした。

僕の書く小説で、悪い所があればドンドン言っして下さい。

なるべく、直す様に努力したいと思います。

第二十二章 消えた二人と青髪オウガ夜叉

林の中を彷徨う天地達は、一向に千春を見つける事が出来なかった。オウガの気配も感じなく、林には霧が立ち込めてきていた。気を取り戻した魁人は、泥でアチコチ汚れていた。

先に行く由美と昴の背中を見ながら、魁人が天地に愚痴を言い出した。

「すぐに、暴力振るんだからさ……。全く。

大体、ちよつとした冗談だったんなのに……。

あんなに思いつき殴らなくてもいいのに……。」

天地は笑いながら頷いていた。霧は奥に行くに連れて濃くなってきた。辺りが真っ白になってきた。

四人は一箇所に固まり、それぞれの場所を確認した。

「何で、急に霧が出てきちゃったのかしら？」

「これも、畏なのかな？」

真っ白な霧の中で、昴と魁人の声がした。天地はその声に向って返事を返した。

「畏だとして、相手にもこっちの姿は見えないんだ。意味無いだろ？」

「……そうだよ。意味……無いよ。」

天地の声に、所々間の開いた由美の声がした。その時、何か鈍い音

と共に、誰かが倒れる音がした。
何も見えない視界の中で、天地の頭に嫌な予感がした。

「おい！皆無事か！」

「私は……無事」

「僕も無事だよ」

由美と魁人の返事は返ってきたが、昴の声だけが返って来なかった。
三人はあせった。昴が何者かに襲われたのだと知って……。

「天地君！このまま!？」

何かを言いかけた魁人の言葉が、鈍い音と共に消えた。そして、地面に倒れる音がした。

「魁人！どうした!!！」

叫んだが魁人からの返事は無かった。その時、白い霧の中から由美の音が響いた。

「伏せてて……」

どういう事なのか、わからなかったが、とりあえず言われたとおりに天地は体を伏せた。

霧の中を冷たい風が通り過ぎた。その時、天地は由美が風を集めている事に気付いた。

濃かった霧も、徐々に薄くなり、視界が見えるようになってきた。

白い霧は由美の持っている、疾風丸の周りに風によってまとめられ

ていた。

しかし、そこに魁人と昴の姿が無かった。

残っていたのは、何かを引きずった様な跡だけだった。

由美はゆっくりと後方に疾風丸を振った。

すると、疾風丸に集まっていた風は突風となり、白い霧と共に飛んでいってしまった。

「……どうしよう。昴と魁人が……」

「行こう！きつと、この跡の向こうにオウガが居る！」

「……うん」

二人は何かを引きずった跡を辿っていた。

静かな話の中に、天地と由美の二人の足音が交互に鳴り響いていた。そして、林を抜けると何も無い広い所に出た。

目の前には、大きな岩と断崖絶壁の崖が聳え立っていた。

大きな岩の上には蒼い髪の毛のオウガが座っていた。天地と由美の二人を見るとオウガは立ち上がり岩から飛び降りた。

「お主が、天地と申す者か？」

「ああ、俺が天地だ！それより、魁人達は何処だ！」

「魁人？それは、あの者達の事か？」

オウガはゆっくりと腰の長い刀を右方向に向けた。

天地と由美がその先に目をやると、魁人・昴・千春の三人が木に張り付けにされていた。

三人とも気を失っているのか、動かなかった。

「大丈夫か！」

天地と由美が三人に近づこうとした瞬間、二人の前に木が倒れてきた。

そのせいで、三人に近づく事が出来なかった。

「まだ、彼等を還す訳にはいかぬのだ」

「それなら、力ずくでも還してもらおうまでだ！」

天地が五龍神を構えると、背後から由美が心配そうな声で言った。

「危険……。私も戦う」

「いや！由美は三人を助けに行ってくれ！」

「でも……」

由美の言葉を聞かずに天地は、オウガに向かっていった。

鉄と鉄のぶつかる音が林の中に響いた。

天地の五龍神とオウガの持つ長い刀が、ぶつかり合ったのだろう。

嫌な予感がしたが、由美は天地の無事を願いつつも三人の所に急いだ。

天地とオウガは刀を交えたままにらみ合っていた。

「グッ……」

「その刀。なかなかの代物とみる」

「うるせえ！」

天地は勢いよくオウガを弾き飛ばした。体勢が崩れながらも、オウガはそれを修正した。

刀の刃を地面に触れさせながら、オウガは天地の方をみた。あのオウガは五龍神に興味を持ち、この戦いを楽しんでいる様に見える。

刀を交えてわかったが、あのオウガは今までの奴とは全く違う。力任せに戦うのではなく、自らの技のみで戦っているのだと。息を整えている天地に対して、オウガがゆつくりと言った。

「絶鬼殿から聞いたのだが、その刀は変化すると聞いたが？」

「お前！やっぱり、絶鬼と関係があるのか！」

「そうか。拙者、まだ名乗っておらぬか。」

拙者の名は夜叉。絶鬼殿の配下に付いた。蒼き刃となりてなんじらと戦おう」

刀をゆつくりと構えながらそう言った。先程とは違う力を感じさせていた。

「俺も、本気で行くぜ！目覚めよ！火龍神！」

五龍神の刃の龍が赤く光り、火龍神と化して炎が刃の周りを取り巻いた。

驚いた様子で火龍神を見る夜叉に、天地が一気に斬りかかっていた。

火龍神はあっさりとかわされ空を切った。と、同時に夜叉の刀が、天地の右肩に向かって勢いよく振り抜かれた。

身を翻して後ろに避けたつもりだったが、天地の右頬からは血が滲み出て来た。

「グッ！」

「なかなかの身のこなし……。しかし、お主にはまだ拙者の刀はかわせぬ」

夜叉はそう言いながら刀を構えなおした。

二人の所は木々が無く、雨が降り注いでいた。髪が塗れて、額に引っ付き、流れてくる水滴が天地の視界を狭くしていた。

腕で額から流れ落ちる水滴を拭った時、夜叉が天地に向って走ってきた。

体勢が整えられず、天地は右肩から左脇腹までを斬り付けられた。

血しぶきが舞った。しかし、雨で血は流された。

傷は浅かったが血が止まらなかった。

「まだ、若いな。しかし、あの判断は素晴らしい」

「グッ……」

天地は苦痛に顔を歪めた。服は裂けて血が滲んでいた。

あの瞬間、天地はとっさに体を後ろに引いたので、浅い傷で済んだが、もし引いていなければ完全に切り裂かれていただろう。

痛みを堪えながら天地は夜叉の方を見た。そして、火龍神に力を集めた。

火龍神の刃には炎が渦巻き始めた。

「燃え盛れ！炎裂弾！」

火龍神を振り下ろすと、炎は分裂して夜叉に向って飛んでいった。しかし、夜叉は刀で全ての炎を切り裂いた。夜叉は鋭い目つきで天地を睨んだ。

「この程度の力とは……。期待外れもいい所だ」

「くっ！やっぱり雨の中での火龍神は駄目か……」

そう呟き、力を緩めると火龍神は五龍神に戻った。

そのまま五龍神を目の前にかざして、左手で五龍神の刃の龍に触れて目を閉じた。

五龍神の刃の龍が青い光を放ちだした。

目を閉じた天地は真っ暗な中にいた。そして、その奥で青い一筋の光りが見えた。

その瞬間に天地は目を開いた。

「目覚めよ！水龍神！」

叫ぶと同時に降り注いでいた雨が、水滴のまま空気中に止まった。

先程と違い、刀の周りに薄い水の膜が張っていた。

夜叉は何が起こったのか全く分からなかった。

「お主、何をした？」

「俺は何もしてない。ただ、最近使える様になったこの水龍神が全ての水を操る！」

しかし、夜叉はいたって冷静な表情で天地を見ていた。

宙に浮いたままの水滴を手にとると、そのまま握りつぶした。

夜叉は笑い出した。なぜ、笑ったのか分からなかった。

ゆっくりと刀を構え直した。すると、刀が蒼く光った。

「お主の刀は変わっておる。火を操り、水までも……。
しかし、残念な事に拙者のこの刀も水を操る物でな！」

夜叉はそう言つて、刀を振り下ろした。その瞬間、止まっていた水滴達が、矢の如く天地に向かってきた。

天地も水龍神を振り下ろした。止まっていた水滴は夜叉の時と同じように矢の如く、夜叉の方に向つていった。

双方の水の矢がぶつかり合い、相殺していった。

天地と夜叉のぶつかり会っていると、何者かの声が響き渡った。

「動くな！」

声のする方を見た天地は動きを止めた。

第二十三章 謎の少年と目覚める稻妻 雷龍神

動きを止めた天地に大量の水の矢が、一斉に襲い掛かった。体中から血が吹き出た。天地は吹き飛びぬかるんだ地面に倒れた。急に動きを止めた天地に、疑問を持った夜叉はその声のした方を見た。

そこには、小さな体格の腕の長いオウガが立っていた。腕にはボロボロの由美の姿があった。体中の痛みを我慢しながら天地は立ちオウガを睨む。

しかし、オウガは顔色を変えていなかった。

夜叉もこのオウガの存在を知らなかったのか、表情が険しかった。

「お主！ 拙者の戦いの邪魔をするとは、いい度胸だ！」

「フツ……。絶鬼様がお呼びだ」

「なぬ！ 絶鬼殿が！？」

「あとは、俺が楽しんでやるから、さっさと帰りな！」

「グッ！」

夜叉は悔しそうな顔をして、姿を消した。そして、暗いジメジメとした部屋の中に出た。

そこに、絶鬼の姿もあった。刀を絶鬼に向けると夜叉は言い放った。

「どういつつもりだ！ 拙者の戦いに水を差すとは！」

大声で怒鳴った夜叉の刀を、阿修羅の槍が弾き返した。

いつの間にか、阿修羅が絶鬼の横に来ていたのだ。
鋭い眼光で阿修羅は夜叉を睨みつけていた。

「貴様こそ、どういっつもりだ！ 主に刃を向けるとは！」

「お主には関係ない！ 拙者は絶鬼殿にようがあるのだ！」

「ならば、我が相手となろう！」

阿修羅と夜叉が睨みあう中で、絶鬼の声が響いた。

「ごめんよ。夜叉。楽しんでたのを引き戻したりして。

でも、今は我慢してくれない？ もう少し強くなった彼らと戦う方が楽しいから」

暗闇の中で絶鬼が微笑んだ。

ポロポロの体の天地を見ながらオウガは笑っていた。

体格からして、哀のオウガだろう。力は無いくせに何かとム力つく。でも、天地にはそんな事どうでもよかった。

ポロポロの由美を見た瞬間に自分自身に怒りを覚えた。

水龍神は五龍神に戻っていた。だが、五龍神の刃の龍の色が黄色くなり始めていた。

「俺は、結局誰も守れて居ない」

「俺は弱い」

「もっと強い力が……」

天地がそう思った時、雨雲から稲妻が五龍神に落ちた。激しい爆音と共に、天地の姿が土埃で見えなくなった。

「て…んち……」

遠退く意識の中、由美は小さく呟いた。土埃が消えた時、そこに天地の姿は無く、黒く焦げた布切れだけが残っていた。オウガの大きな笑い声だけが林の中で響いていた。

その声で魁人が目を覚ました。しかし、木に張り付けにされて動く事が出来なかった。

「ぐっ……。僕とした事が……」

頭部に激しい痛みを感じた。木の横には水蛟神が立ててあつたが、どうやっても手が届きそうに無かった。

魁人が諦めてため息を吐いた瞬間だった。

急に体が楽になり、地面に落ちた。魁人は、木の根にお尻を打ちつけた。

「イツ！」

お尻を摩りながら目の前の人物を見た。そこには、一人の少年が立っていた。

両手には、鉤爪を着けていた。その鉤爪の甲には蛇の刻印があった。すぐに土蛇神とわかった。

少年は茶色の髪に黒いローブを着ている。

目つきが悪かったが悪い奴ではなさそうだった。

「助けてくれてありがとう」

そう言つて、魁人は笑いながら右手を差し出した。少年は鋭い目つきで魁人を睨むと小さく言った。

「無様だな……」

「なっ！」

「早いとこ、残りの二人も助ける事だな」

そう言つて素早い身のこなしでその場を去つた。腹が立つたが、あの少年の言う事も確かだった。

不意を突かれて捕まるなんて、本来なら殺されていただろう。そんな事を考えながら魁人は、昴と千春を木から下ろした。

オウガが笑っていると、背後で声がした。

それは、間違いなく天地の声だった。

「何で笑つてるんだ？」

ゆっくりと後ろを振り向いたオウガの前には、全身ボロボロの天地が立っていた。

髪が少し焦げていたが、稲妻の影響は無かった。

変わったのは五龍神が雷龍神になったという事だった。

雷龍神の刃の周りには稲妻が走っていた。

オウガは、由美を放した後退りした。倒れる由美の体を天地が抱きかえた。

「ごめん。守れなくて……」

ボソツと呟きゆつくりと地面に寝かせた。そして、オウガを睨み付けた。

その目にオウガは恐怖を覚え、その場を去ろうとした。

だが、天地はオウガを逃がさなかった。雷龍神を振り下ろした。

その瞬間、刃先から稲妻が走った。稲妻はオウガを捕らえた。

稲妻を直撃したオウガは、そのまま崩れ落ちるように倒れた。

ゆつくりと立ち上がり、オウガに歩み寄った天地は雷龍神を振り上げた。

その時、地面が隆起して行き、オウガを土の壁が押しつぶした。

「蛇呑食」
へびのくは

オウガの苦痛の叫びと共に、オウガを押しつぶす音が鳴り響く。

声がしなくなると、隆起していた地面が元に戻っていた。

林の奥に人影が見えた。声を掛けようとしたが、すぐに居なくなっ
てしまった。

雷龍神は五龍神に戻っていた。そこに、昴と千春を肩に担いだ魁人
がやってきた。

意外と軽い二人を担いでいる魁人は天地に声を掛けた。

「天地君？」

その声で天地は後ろに魁人が居るのに気付いた。五龍神を鞘にしま
い、ゆつくりと由美のほうに歩み寄っていった。いつの間にか、雨
は上がり雲からは蒼く澄み渡った空が顔を出していた。

「それじゃあ、帰るか」

天地は由美を抱きかかえて魁人の方を見て笑いながら言った。

その後、二人は林を抜け様としたが、どこをどう来たのか分からず、

そのまま林の中を彷徨っていた。

「天地君。本当に道わかるの？」

「いや。全く分からん」

自信満々にそう言う天地に、魁人は呆れながらも天地に着いて行った事を反省した。

林は次第に深い所に行き、木々の生い茂る森になっていた。流石の二人も疲れが出てきた。

「ど…どうするつもり？」

「と…とりあえず……。休もう」

「そうだね……」

二人は木の根元に腰を下ろして、体を休めた。

こんな事では、いつまでたってもここから抜け出せないと、二人は思っていた。

夜叉に斬り付けられた傷が痛むが、天地はそれを顔には出さずにいた。

光りのあんまり入ってこない森は、薄暗く雨の後だけあつて湿っている。

斬れた服から滲む赤い血が、魁人は気に掛かった。

「その傷大丈夫なの？」

「ああ、傷は浅いし全然大丈夫さ」

「そう。でも、あんまり由美さんに心配かけた駄目だよ」

「わかってるって」

笑いながらそう言った天地だったが、笑うと傷が痛んだ。

暫く休んだ二人は、また歩き出した。森？ の中を彷徨い続け、寮についたのは夜中の事だった。

第二十四章 絶鬼からの宣戦布告

その夜、激しい揺れと音が、世界中を揺るがした。

だが、その揺れはすぐに収まり、誰もがただの地震だと思っていた。しかし、その日の朝衝撃的なニュースが放送された。

今朝は、なかなか起きる事が出来ず、朝のランニングに行っていない天地が、部屋から出てきた。

電気の点いていない廊下は薄暗く静かだった。他の皆はすでに管理人の部屋で朝食を取っているのだろうか。

どの部屋の明かりも消えていた。階段を欠伸をしながら下りていると、激しい足音が天地の方に迫ってきた。

足を止めて、階段の下を見ていると、裕二が姿を現した。

裕二は階段の上で立ち止まる天地に気付き叫んだ。

「た、大変だ！天地」

「何だよ……。挨拶もしないで……」

眠そうに欠伸をした。

だが、裕二の次の言葉で天地の眠気は一気に吹き飛んだ。

「絶鬼が。ついに動き出したぞ！」

「どついつ事だ！」

天地は勢いよく階段を下りて、祐二の目の前で立ち止まった。とりあえず、裕二は天地を管理人の部屋に連れ込んだ。

管理人の部屋には、魁人・由美・昴・千春・歩美の五人がいて、二コースを見ていた。

「天地を呼んで来た」

そう言いながら裕二は天地をテレビの前に座らせた。テレビに映っていたのは、白髪の色白の絶鬼だった。ニコヤカに笑顔を見せているが、恐ろしい程の殺気を出しているのが、テレビ越しからでも分かった。

「僕は、全てを破壊する鬼。いや……。全てを破壊する者かな？」

まあ、そんな事はどうでもいいか。

これより、僕等はこの世界の全てを破壊する。

信じる人はいないかな？でも、いいや。

気付いた頃には、もう生きていないんだし

絶鬼はそう言っただけで笑っていた。

きつと、この放送を信じているものなんて、そんなにはいないのだろつ。

絶鬼は更に言葉を続けた。

「三カ月後、僕等は世界を破壊する。

その間、遣り残した事やつとくといいよ。

期限は三ヶ月……。その間、僕は自分の城にいる。

この蒼く澄み渡る海の上に佇む城に……。

確か、日本の昔話には、桃太郎と言う話があるようだね。

人間が、犬とサルとキジを連れて鬼を退治するって……。

僕も待ってるよ。勇敢なハンターの皆が僕の城に来てくれる事を

……」

そう言つて、中継が切れた。

三ヶ月後、世界は破壊される。

そんな絶鬼の宣戦布告は、その日の夕方世界を混乱に陥らせた。テレビ局の人間がへりで、海に突如現われた島を生放送した。

その島には大きな城が建っていた。

そして、その映像に一体のオウガが映りこんだ。

オウガは鋭い三日月形の剣を両手に持つていて、そのままへりを切り裂きそこで中継は終わった。

もちろん、天地達もそれを見ていた。

「くそっ！」

天地は激しくテーブルを叩いた。部屋の中は重い空気が立ち込めていた。

魁人も由美も昴も千春も暗い表情だった。

今の力では、絶鬼に勝てない事が分かっていたからだ。

その暗い空気を切り裂いたのは一人の男だった。

「何、心気臭い顔してやがる」

部屋にいた全員がその声の方を見た。そこには、サングラスを掛けた黒いスーツ姿の男がいた。

それが、神谷だと先に気付いたのは昴だった。

「神谷さん！」

「よっ。元気にしてたか？」

そう言つてタバコを銜えると、ライターで火をつけた。落ち着いた様子の神谷に天地は腹がたった。

「何で、そんなに落ち着いてられるんだ！」

立ち上がり怒鳴り散らす天地を祐二と魁人が止め様とした。しかし、天地はゆっくりと神谷の方に歩き出していく。

神谷の目の前で立ち止まり、顔を睨み付ける。

そんな天地の顔に神谷がタバコの煙を吐き出した。当然の如く天地はむせた。

「ゴホツ、ゴホツ。な、何するんだ！」

「まあ、落ち着け」

「落ち着けって！ゴホツゴホツ！あんた分かってるのか！」

むせながらも何とか天地はそう言った。

すると、神谷はテーブルの前に腰掛けて、ゆっくりと話し出した。

「今日、戻ってきたのは、お前らを強くするためだ」

「どういう事ですか？」

神谷の言葉に魁人がそう言った。ようやく咳が治まった天地は、神谷の後ろに立って話を聞いていた。

由美と昴と千春の顔を見た後に、神谷は言った。

「この寮は、可愛い娘ばかり入居してるんだな」

緊迫していた空気は一気に崩れた。魁人と祐二は呆れて言葉を失っていた。

昴と千春は恥ずかしそうに頬を赤く染めていた。一方、由美は首を傾げながら昴と千春の様子を見ていた。そんな中、一人の男が怒りをあらわにした。

「この野郎！真剣な話をするかと思えば！！」

神谷の背後から天地は首を絞めた。急に首を絞められた神谷は抜け出す事も出来ず、タツプした。

しかし、天地がそう簡単に開放する事は無かった。開放されたときには、神谷の顔は真っ赤になっていた。

「それで……。さっきの話の続きは？」

ようやく怒りがおさまり、天地は神谷にそう聞いた。首を摩りながら神谷は天地の方をみた。

そして、涙目ながら言った。

「これから、修行に行くぞ。もちろん、ただの修行じゃない。下手したら死ぬかもしれない」

「修行はいいんですが、僕等は学校ありますし……」

「大丈夫だ。学校には話しをつけた。後はお前達次第だ」

そう言っつて神谷は天地達の顔を順番に見ていった。

迷いはない。すでに、自分達のやるべき事は知っていた。だから、迷う訳が無かった。天地・魁人・由美・昴・千春は顔を見合わせて、同時に言った。

「修行に行きます」

その言葉を聞いて、笑みを浮かべた神谷は早速、準備をするように言った。

薄暗い城の奥に絶鬼がいた。大きな窓があり、そこからバルコニーに出る事が出来る。

大きなシャンデリアが城の中を明るく照らした。

床はキラキラと輝く岩で出来ていて、シャンデリアの光りを反射して隅々まで照らしていた。

赤マツトが道のように入り口から、中央にある階段まで続いていた。絶鬼は窓辺に立ち、日の光りを反射して煌く青々とした海を見ていた。

その絶鬼の背後に阿修羅が姿を現した。

阿修羅は跪き絶鬼に言った。

「絶鬼様。言われた通り、皆を呼び集めたが……」

「ご苦労様」

絶鬼はそう言って微笑んだ。そして、阿修羅の背後に立つオウガ達を見た。

背後には五体のオウガがいた。体格も持っている特殊な武器も全てがバラバラだった。

頭に生えた鋭い二本の角と更に鋭い牙のある、三日月形の剣を両手に持ったオウガ。

生い茂った蒼く長い髪に隠れた角の、長い刀を持ったオウガ。

天井に頭をぶつけている筋肉質の体格で、長く太い頑丈な棍を持ったオウガ。

絶鬼と同じくらいの体格で、巨大なボーガンと巨大な斧を持ったオウガ。

体中切り傷だらけで、鋭い目つきで、鎖で繋がれた巨大な鉄球を持つたオウガ。

「君達は六鬼神。僕の大切な力。

密迹みつしゃくと那羅延ならいんは城に入ろうとした者を食べていいから」

そう言つて、長く太い頑丈な棍を持ったオウガ（密迹）と、鎖で繋がれた巨大な鉄球を持ったオウガ（那羅延）を見た。二体はゆつくりと、背を向けて歩き出した。密迹と那羅延が部屋から出て行くと話を続けた。

「万が一場内に侵入した者がいれば、天邪鬼あまのじやくと悪鬼あくき。君達二人が始末してくれるね？」

そう言いながら、巨大なボーガンと巨大な斧を持ったオウガ（天邪鬼）と三日月形の剣を両手に持ったオウガ（悪鬼）の二体を見た。悪鬼は頷き歩きしたが、天邪鬼は不満そうな表情で絶鬼を見ていた。それに気付き絶鬼が聞いた。

「どうかしたのかい？」

「俺は、人の指図は受けない。俺は俺の好きな様にさせて貰う」と、言い残し天邪鬼はその場から消え去った。立ち上がった阿修羅は絶鬼に言った。

「あの者は、アレでよいのか？」

「大丈夫。彼は彼のやり方でこの城に侵入した者を捕らえるから」

「それで、拙者は何をすればよいのだ？」

一人取り残された長い刀を持ったオウガが絶鬼に向っていった。絶鬼は彼を見ると微笑みながら言った。

「夜叉。君と阿修羅は、天邪鬼と悪鬼が逃がした獲物を捕らえてくれ」

「わかった。それでは……」

そう言っつて部屋を出ていった。部屋に残ったのは絶鬼と阿修羅の二人だけだった。

絶鬼はまた、窓の外を見た。そして、呟いた。

「あと三ヶ月……」

第二十五章 残り一ヶ月

世界の崩壊まであと一ヶ月。
オウガ達は行動を活発させて、人々は恐怖に怯えていた。
何度か、ハンターが絶鬼の居る島に入り込んだが、絶鬼の姿を見る
事無く消えていった。

「あと一ヶ月か……。結局、誰も僕の所まで辿り着かなかったな……」

バルコニーから蒼く煌く海を絶鬼は眺めていた。
と、絶鬼の背後に阿修羅が現れた。
阿修羅は膝まづき絶鬼の背中を見た。

「絶鬼様。近頃、獲物が減り城内が張り詰めております。
そろそろ、人間共を喰らい尽くしに……」

「駄目だよ。約束は一ヶ月後だよ」

「しかし……」

何かを言おうとしたが、鋭い目つきで絶鬼が睨み、言葉を飲み込んだ。
そして、絶鬼はゆっくりとした口調で、阿修羅に部屋を出るように
言った。

部屋を出ると、夜叉が壁にもたれたまま立っていた。

「夜叉か……」

「絶鬼殿と何の話を？」

「貴様には関係のない話だ」

「そうか……」

そう言つて夜叉は壁から体を離して、長い廊下を歩き出した。阿修羅はその背中を睨んでいた。

城内の大木の枝の上に天邪鬼が寝そべっていた。

青々と茂る木々の葉の間から、日の光りが差し込んでいた。

緩やかに流れる風が木々の葉をざわめかせた。

そんな木の下に悪鬼がやつて来た。

木の枝の上に眠る天邪鬼を見上げた。

その気配に気付いた天邪鬼は体を起こした。

「天邪鬼……。見回り……。サボるな」

悪鬼のその言葉に天邪鬼は鼻で笑った。

「フツ……。悪いが、俺は誰の指図も受けない」

「なら、なぜここに？」

「ここにいれば、何かと楽だからな」

「そうか。それじゃあ、俺は見回りに行く……」

悪鬼はそう言い残し、去っていった。

木の枝の上で、欠伸をして天邪鬼はまた眠りについた。

綺麗で頑丈に出来た城の門の前には、密迹と那羅延の二人が立っていた。
真つ直ぐ海に続く道を二人は見ていた。

「獲物がこんな……」

「仕方ないさ。まあ、あと一ヶ月すれば、食い放題さ」

「そうだな。楽しみだ」

そう言いながら二人は笑っていた。

その頃、天地達が居なくなった町では、沢山のオウガ達が暴れまわっていた。

修行をすると言い、神谷が天地達五人を連れて行ったのだ。
そのせいで、オウガ達に好き放題させられていた。

「くっそー。早く戻って来いよ」

寮では裕二と歩美が管理人の部屋に隠れていた。
管理人の部屋の周りには、オウガが入り込めないように決壊陣が張られていた。

だが、その決壊もいつまで保つか分からなかった。

「ねえ、魁人達がハンターって本当なの？」

「まあ……」

「そっか……」

ため息を吐き暗い表情の歩美に裕二は何の声もかけることが出来なかった。

電気も消して暗い部屋に祐二と歩美の二人だけ。

外ではオウガ達の暴れる音が響いていた。

その時、部屋のドアが激しく揺れた。大きく激しく。

「オウガか！」

「ど、どうするの？」

声を震わせながら歩美はそう言った。

暫くドアは揺れていたが、急に静かになった。

そして、ドアが開いた。

「大丈夫か？」

その声と共に天地が入ってきた。

裕二も歩美も天地を見ると安心して座り込んだ。

「オイオイ……。どうしたんだ？」

「何か安心してな……」

裕二がそう言って半笑いしていると、隣にいた歩美が叫んだ。

「か、魁人は？」

「知らないな。修行って言っても、皆別々だったからな」

「そう……」

ため息交じりにそう言った。
不満そうな顔をしながら天地は言った。

「俺より魁人の方がよかったのか？」

「別に……」

ふてくされながら歩美はそう呟いた。
町中に漂うオウガ達を退治するために、天地はすぐに寮を出ていった。

寮を出て街道を走りながら、五龍神で人々を襲うオウガを切り裂いていった。

市街に出た天地は一人の少女を発見した。
後姿だが、身長が低く肩まで伸ばした黒髪。
腰には刀がぶら下がっていた。

天地は足を止めて彼女の方に声を掛けた。

「お前……」

声に気づき彼女が振り向いた。

「由美！」

「……天地」

「お前、髪切ったのか？伸ばしてた方がよかったですぞ」

「邪魔……だったから」

「邪魔だったって……」

呆れながらも天地は嬉しかった。

由美が無事だった事が。

ゆっくり話しがしたかったが、そんな状況では無かった。

「それじゃあ。ここは、任せるぞ」

「……うん」

天地は由美と別れて住宅街にやって来た。住宅街は静かでオウガの居る気配がしていなかった。

そこには、一人の少年と一人の少女が居た。

ポロポロの服装のその少年は右手に槍を持っていた。

少女の方は綺麗な身だしなみで、弓を左手に持っていた。

後姿だが一目見てそれが誰かわかった。

「魁人！ 昂！」

二人はその声を聞いて同時に振り向き叫んだ。

「天地君」「天地」

二人は同時にそう言って天地に駆け寄った。

「何だ。二人とも変わらないな。当たり前か、二ヶ月じゃ変わらないよな」

「そうよ。二ヶ月で変わったら凄いわよ」

「まあな」

「寮には戻った？」

「ああ、戻ったよ。歩美が会いたがつてたぞ」

「そうなんだ」

トーンの低い声で魁人はそう言った。

何か元気の無い魁人に天地は首を傾げた。

「どうした？そんな暗い顔して」

「いや。元気だったならいいんだよ」

「会わないのか？」

「ああ。今会えば気持ちが揺るぐし、絶鬼との戦いで命を落とすかもしれないし……」

暗い表情でそう言って俯いた。

その隣で、昴も寂しげな顔をしていた。

やはり、魁人と同じ理由だろう。

それを察し、天地は何も言わなかった。

暫く沈黙が続いていたが、魁人が何かを思い出した。

「そうだ。さっき、神谷さんから連絡があつて、今夜港に集合だそ
うです」

「今夜か……」

「ええ、他のハンター達も集まっているみたいよ」

「いよいよ。絶鬼との総力戦か……」

怖かった。本当にあの絶鬼に勝てるのかという不安からだった。もちろん、天地だけじゃない。他のハンター達も皆同じだ。

「それより、由美と千春にこの事伝えなくていいの？」

「そうだな。確か、由美は市街に居るよ。」

あつちはまだオウガがウヨウヨいるから、そっちを任せるよ。俺は千春を探すから」

「わかった。それじゃあ、今夜港で」

「ああ……」

天地はそう言つて魁人と昴と分かれた。

住宅街を抜けて、人通りのない裏道の方に出た。

そこには、大きな剣を振り回した少女がいた。

それが千春だとわかったが、何だか雰囲気が変わっていた。

「ち……はる……だよな？」

千春は振り返り天地に気付いた。

ゆっくり雷犬神を下ろし天地に言った。

「久しぶり。元気でした？」

「ええ……。元気だったけど……。何か変わったか？」

「そうですね。修行で皮剥けたって所ですかね？」

「そ…そうなのか？」

「ええ」

明るく微笑んだ。

「それより、今夜港に集合らしいよ」

「わかりました。今夜港ですね」

「ああ。それじゃあ、ここは任せるよ」

「はい。今夜、港で」

微笑みながらそう言うと裏道の奥に走っていった。

一応、千春に港に集まるという事を伝えた天地は、市街に戻る事にした。

天地が市街に戻ってきた頃には、オウガはいなくなっていた。

呆気を取られている天地を見て、魁人と由美と昴の三人が歩み寄ってきた。

「おどろいてるようだね？」

「そりゃな。あんなに沢山いたのに……」

「私達だって、強くなったのよ」

「でも……遣り過ぎて……疲れた……」

疾風丸を鞘に収めながらそう言った。

足元がふらついていている事から、かなりの体力を消耗していると分かった。

魁人も昴もそうだった。

体力をかなり消耗していた。

「それじゃあ、僕と昴は神谷さんと合流するよ」

「由美と天地は寮に戻るなり、二人っきりで話をするなり、好きにして良いわよ。

でも、時間は忘れないでよ」

「わかってるさ。裕二と歩美に伝える事はあるか？」

魁人と昴はその言葉を聞いて動きを止めた。

暫く沈黙が続いたが、魁人が口を開いた。

「伝える事か……。全てが終わったら会おうで良いかな？」

「俺に聞くなよ。自分で考える」

「じゃあ。さっきのでもいいよ。あと、僕は元気だって伝えといて」

「わかった。昴はどうする？」

天地が昴の方を見た時には、昴の姿が無かった。

魁人は首を振りながらため息をついた。

仕方なく、天地と由美の二人と魁人は別れた。

天地と由美は寮に戻ると、裕二と歩美に魁人と昴が戻らない事を伝えた。

歩美は泣くかと思っていたが、泣かなかった。

結構意外だった。

そして、夜。

大勢のハンターが港に集まった。

そこに、天地達の姿もあった。

第二十六章 船の上で

天地達ハンターは大きな船に乗っていた。今から絶鬼達と戦いに行くと言う感じの船ではなく、豪華な船だった。

その船には各地から集まったハンター、総勢80名近く乗っていた。殆どが、天地達より年上で、20代から40代位までだろうか。

天地は由美と二人で船の外にでて、夜の海を見ていた。空にはどんよりと雲がかかり、月も出ていなかった。

風は強く、波も高かった。

船はその影響を受けて、大きく揺れていた。

「結構揺れるな……」

「……うん」

二人は静かに暗い海を見ていた。

そこに、魁人と昴と神谷の三人がやって来た。

神谷は相変わらず、黒いスーツに口にタバコを銜えていた。タバコの煙で天地は神谷達に気付いた。

右手を軽く上げながら、神谷が声を掛けた。

「どうした。暗いぞ」

「それは、夜だからだ」

「いやいや……。雰囲気がつて事だ」

笑いながら神谷はそう言った。

そんな事、天地はわかっていた。ただ、神谷の側に居たくなかった。その理由はタバコの匂いだ。

天地はタバコの匂いが嫌いだった。

神谷も手すりに手をかけて、海を眺めた。

暗くどこまでも続く海の先を見つめていた。

天地も魁人も神谷も由美も昴も不安だった。

その気持ちはどのハンターも同じだ。

だから、口には出さないでいた。

五人は黙って流れる景色を見ていた。

冷たい風が、五人の間をすり抜けていき、船に当たる激しい波が水

しぶきを上げていた。

神谷は体を振るわせた。

「それじゃあ。俺はそろそろ部屋に戻るから、お前らも風邪引かない程度にな」

そう言い残して神谷は、そそくさと部屋に戻っていった。

その後も、四人の間には沈黙が続いていた。

暫く続いた沈黙を破ったのは、由美だった。

「……………ねえ」

天地には何が言いたいのかわかった。

だから、すぐに答えた。

「ああ……………。皆、無事に帰ってこれるさ……………」

その言葉に、魁人も昴も頷いた。

すると、由美がポケットから何かを出した。

色違いのお守りの様だった。

それを、三人に渡した。

「……お守り。皆が……無事戻って来られる様に」

「お守りか……。効果あるのか？」

天地は疑いの目でお守りを見ていた。

そんな天地に昴の鉄拳が飛んだ。

「ぐはっ」

天地はその場に倒れたが、すぐに体を起こして怒鳴った。

「何すんだ！」

「せっかく、由美が作ったお守りなのに、そんな事言うから！」

「冗談じゃないか！この場を和ませよう……」

そう言うと、三人の顔から笑いが溢れた。

何で笑ったのわからないが、天地も一応笑った。

暫く、四人は今までの事を振り返ってた。

初めて由美と会った学校裏の森の奥での事。

この時は、本当に嫌な奴だと天地は思っていた。

哀のオウガとの戦いで苦戦した事。

由美がやられて、天地一人で三体のオウガと戦った。

火龍神が目覚めなければ、どうなってたか……。

風邪でダウンしてた日の事。

大浴場で湯船に浸かるはずが、まさかの由美がいたため、天地はそのせいで風邪を引いたようなものだった。

その次の日、天地は初めて由美の笑顔を見た。

神谷と魁人と昴との出会った時の事。

凄まじい殺気を放っていたオウガを、一撃で倒す力を見せ付けた神谷と魁人。

この時は、天地も驚かされた。

全てを破壊する鬼、絶鬼が現われた日の事。

学校に突如現われた白髪の色白の肌の少年。彼が、絶鬼だった。

天地達に力の差を見せつけ、天地は右腕を大怪我させられた。

寮がオウガに囲まれて大変だった事。

天地と由美が戦えず、魁人と昴の二人で寮の周りのオウガと戦った。

この時、由美がいなくなり、天地は裕二と由美を探し回った。

阿修羅が現われ、由美が死に掛けた時現われた、蒼き龍の事。

右腕を負傷しながらも、天地は五龍神で阿修羅と戦った。

そんな天地をかばう様に、由美が阿修羅の槍に刺された。

蒼き龍が現われなければ、由美とはもう会う事ができなかつただろう。

遊園地で出会った雷犬神の持ち主、千春の事。

一人だけ、荷物持ちをさせられ、置き去りにされた天地の前に現われたのが、千春だった。

憎のオウガが現われ、死人をゾンビに変えて襲ってきたが、武器を持っていない天地と魁人は逃げ回るだけだった。

その時に、千春の稲妻がオウガを貫いたのだ。

突然変異で現われたオウガと戦った事。

怒のオウガと哀のオウガの力を併せ持った少し変わったオウガだった。

この時は、天地もやられてやばかったが、何とか魁人が倒してくれた。

その後にあった、水鮫神の暴走と由美が帰ってきた時の事。

魁人の持つ水鮫神が暴走し、天地や昴に襲い掛かってきた。

天地も火龍神で対応したが、水との相性が悪くあえ無く力尽きた。

そんな時に現われたのが、由美だった。

そして、雨の日の林の中で出会った青髪の夜叉との戦いの事。

阿修羅と違う気配を漂わせる変わったオウガ。

林の中には様々の罠があり、魁人も昴も千春も罠にかかって捕まってしまう。

天地は夜叉と一対一で戦ったが、邪魔が入り結局決着はつかなかった。

そんな中、魁人達を助けたのは謎の少年だった。

未だに名前は知らないが、多分この船に乗っているだろう。

色々な事があった。

思い出すと、本当に限が無かった。

「色々あったね……」

「ああ。そうだな」

魁人の言葉に天地がそう言った。

暗い海を見ながら四人の顔は笑顔だった。

「……大変だったよね」

「まさか、こんなに沢山のオウガと戦うとはな……」

「私……。結構……。足引つ張ったね……」

「そんな事ないよ。由美だって、頑張ってるんだから、オウガが強くなってるだけよ」

昂はそう言って由美を励ました。

微かに微笑みかけた由美は小声で言った。

「ありがとう」

でも、その言葉は風の音と波の音で掻き消され、誰の耳にも届かなかった。

「僕はそろそろ、部屋に戻るよ」

「そうだな。俺も戻るかな。まだ、鬼ヶ島まで着きそうに無いし……」

「天地、鬼ヶ島は無いでしょ？桃太郎じゃないんだから」

そう言って昂が冷やかな視線を送った。

しかし、天地はそんなのお構いなしで、笑い声を上げていた。

「それじゃあ。オヤスミ」

魁人はそう言つて由美と昴に手を振つた。

「おやすみ。また、明日ね」

ゆつくりと昴は魁人に手を振つた。

欠伸をして、天地も歩き出した。

「明日も早いんだ。寝坊するなよ」

「天地と……一緒にしないで……」

「そうよ。あんたこそ、寝坊しないでよ！」

天地の言葉に、由美と昴が言った。

笑いながら天地は自分の部屋に戻つた。

「私たちも……戻ろうか」

「そうね。天地の言う通り、明日も早いし……」

二人も、自分の部屋に向つて歩き出した。

本当に静かで、波の音と風の音だけが響いていた。これが、嵐の前の静けさだろう。

そして、着実に船は絶鬼のいる島に近づいていた。

第二十七章 悲しい事実

明け方。

船の甲板に一人の少年が居た。

歳は天地達と同じ位だろう。

黒いフードを被り、顔はよく見えないが、茶色い髪がチラチラとフードから見えている。

体格はさほど大きくは無い。

精々、160cm後半と言った所か。

少年はゆっくりと船の先端に歩き出した。

海の向こうに日の光りが見え隠れしていた。

風も強まり、波も高くなっていた。

少年の黒いフードは風で激しく揺れ、船に当たる波が水しぶきを上げて、彼の黒いフードを湿らせていた。

暫く歩いて少年は足を止めた。

そして、ゆっくりと言った。

「何の用かな？」

少年のその言葉で、どこからとも無く10人のハンターが少年を取り囲んだ。

白髪交じりのハンターや金髪に染めた頭のハンターと様々だったが、どのハンターも少年に向かって武器を向けていた。

「貴様、ハンターではないな！」

黒フードを被った少年の真正面に立った男が、そう言って槍の刃を黒フードを被った少年の喉元に突き出した。

黒いフードを深く被っているため、表情は見る事は出来ないが、少

年の口元には笑みが浮かんでいた。

一瞬、殺気が黒いフードを被った少年から感じた。周りを囲んだハンター達は、武器を一齐にその少年に向けて突き出した。

だが、その瞬間ハンターの体が、甲板にバラバラに崩れ落ちた。

甲板は真っ赤に染まり、黒フードの少年は顔に飛び散った赤い血を、右手の親指で拭った。

黒フードを被った少年の出したほんの少しの殺気に、船の中にいたハンター達は気付いて甲板に集まった。

もちろん、天地達もだった。

しかし、そこには、十人のハンターの無残に切り裂かれた肉片と、大量の真っ赤な血だけが残されていた。

「クツ！なんて事だ！」

いかにも、ハンターとしての経歴の長そうな、体格のいい40代位の男が、その肉片の前に跪いた。

彼の足には真っ赤な血がベツタリと付着した。

その後、ハンター達はその肉片を処理して、船の中へと集まっていた。

天地・魁人・由美・昴の四人は向い合わせの席に座って、小声で話をしていった。

「十人のハンターを一瞬で倒すなんて、普通じゃ考えられませんよ」

「そうね。魁人の言うとおりだわ」

通路側に座っている昴は、向かいの魁人の方を見ながら頷いていた。窓際に座っている天地は、窓の外を見ていた。

昨晚とは打って変わって、空はすっかり澄み渡り、海の蒼さが際立

っていた。

しかし、波は次第に高くなり、船は大きく揺れている。そんな天地の顔を由美は心配そうに見ていた。嫌な予感がしていた。

今回の戦いで天地と会えなくなる様な気がした。それが、気のせいである事を願っていた。

「ちょっと、二人とも聞いているの？」

睨みを利かせながら、少し怒りのこもった声で昴はそう言った。天地はすぐに昴の方を見た。

その瞬間、昴と目があった。

今にも殴りかかってきそうな目つきだ。

殴られるのが嫌だった天地は、一応作り笑いをしながら言った。

「き、聞いてるって……」

「本当に？」

昴の目つきが更に鋭くなる。疑っているのだ。

天地の背中からは冷や汗が流れ出ていた。

まるで、蛇に睨まれた蛙状態になっていた。

その間に入ったのが、神谷だった。

お決まりの黒いスーツ姿にタバコを銜えて、話に割り込んできた。だが、そのおかげで、天地は鉄拳を喰らわずに済みそうだ。

「最悪の事態だ」

最悪の事態。

天地達には、大体予想がついた。

そして、その予想は的中した。

「この船にハンターの姿に成りすましたオウガがいる」

そんな事が出来るオウガは、憎のオウガだけだ。

人の皮を被り、人間に成りすまし、他の人間を喰らう。

一番質の悪いオウガだ。

絶鬼の差し金だろう。

船の中は重い空気が流れていた。

皆が皆を疑っている。

天地達のすぐ横の席に、黒フードの少年が腰を下ろした。

今まで外に居たのか、フードが濡れている。

天地は何となくその少年が気になった。

「お前らも気をつけるよ。どいつがオウガか判らないからな」

そう言いながら神谷は口から煙を吐いていた。

暫く沈黙が続いた後に、由美がふと何かを思い出した。

「千春……。見かけないね……」

「そう言えば、そうだな」

天地は立ち上がると船の中を見回した。

だが、船の中に千春の姿は無かった。

船が大きく揺れるため、天地はバランスを崩し、窓に頭を打ち付けその場に蹲った。

「だい……じょうぶ？」

心配そうに由美が天地の方を見ていた。
顔を上げた天地は、由美に微笑んだ。

「だ……大丈夫」

そう言いながらも、天地の目は涙目になっていた。
頭を摩りながら、天地は席に座った。

その天地の横で魁人が笑っていた。

「な、何がおかしいんだよ」

「べ……別に……」

少々恥ずかしそうに、天地は魁人を睨んだが、魁人は笑いながらそう言った。

暫く和やかに話をしていた。

その時、隣の座席に座った黒フードを被った少年が動き出した。
ゆっくりと、席を立つと船の外に出て行った。

天地は何か胸騒ぎがした。

「ちよ、ちよっとトイレ行って来る」

そう言つて天地は五龍神を手にして立ち上がった。
それを見た昴が不思議そうに訊いた。

「ねえ、トイレに五龍神を持っていくの？」

「エッ」

一瞬、戸惑った。

確かにトイレに刀を持っていくなんて普通は、おかしいだろう。何とか、誤魔化そうと口を走らせた。

「いや、トイレで襲われるかも知れないし」

「私……一緒に行くのか？」

「いいよ。一人で行けるから……」

「遠慮……しないでいいよ」

微笑みながら由美は天地に視線を送った。
天地は由美の笑顔に弱かった。

「大丈夫！すぐ戻るから」

そう言い残し、すぐその場を走り出した。
そして、トイレに行くフリをして、裏から外に出た。
外は風が強く、天地は吹き飛ばされそうになった。

「のわっ」

バランスを崩し、フラフラとしながら甲板までやって来た。
船の先端には黒フードを被った少年が立っていた。
黒フードは風で激しく揺れていた。

そして、天地を待っていたと言わんばかりに、大声で言った。

「君は……。気付いているか？」

「？」

全く判らなかつた。

彼が何が言いたいのか全く。

天地はゆつくりと五龍神の柄を握った。

だが、天地はすぐに五龍神の柄から手を放した。

後ろから首筋に何か、鉄の様な物が向けられたからだ。

チラツとそれを見た。

それは、千春の雷犬神だつた。

それを、見た瞬間に色んな事が頭の中で繋がった。

「まさか！」

「その通り、今君が思ったとおりだよ」

黒フードの少年は微笑みながら、ゆつくりと歩み寄ってきた。

雷犬神は天地の首筋に触れた。

その瞬間に、血が滲み出てきた。

「君にはここで、死んでもらうつもりでしたが、邪魔が入ったよう
だ」

千春はジャンプすると、黒フードの少年の隣に移動した。

その二人の視線の先には、息を荒げながら疾風丸を構えた由美が
いた。

「ど……どつして……」

「そんな顔しないで……」

黒フードの隣で困った顔をしながら千春が言った。

由美の目には涙が溜まっていた。

船内は慌しくなっていた。

海の中から次々とオウガが船に乗り込んできていたのだ。

黒フードの少年は微笑みながら天地の顔を見ていた。

天地は五龍神を抜くと、黒フードの少年に斬りかかった。

五龍神を握る天地の手には、何の手ごたえも感じなかった。

黒いフードだけが二つに裂かれ、そこに少年の姿は無かった。

もちろん、千春の姿も無い。

黒いフードは、風で宙を舞って行った。

「くっ！」

悔しそうに天地は下唇を噛んだ。

船内は一瞬にして戦場とかし、船内はハンターとオウガの血で染まった。

天地と由美はショックで動けないで居た。

そんな二人に上空から黒いフードの少年の声が響いた。

「君達ハンターは、すでに僕の手の中に居る。

絶鬼様の軍師を務めるこの霧雨きりさめ 漸ぜんが」

蒼い空に浮いた少年はそう言って笑いながら消えていった。

その笑い声は天地と由美の耳にしつかりと残っていた。

第二十八章 生き残ったハンター

絶鬼のいる島に向う船は、海の上で停滞していた。風も激しく吹き、波も高くなっていた。

そのせいか、船は大きく揺れる。

船内にいたオウガを全て退治したが、その代償は大きかった。80名近く居たハンターの数は、10名にまで減っていた。

船長もオウガに殺され、船の舵をとれる者が居なかった。

そのため、船は停滞していたのだ。

船内のアチコチが血で真っ赤に染まっている。

その船の座席に座った神谷は険しい表情でタバコを吸っていた。テーブルを挟んで向かいに、天地が座っていた。

鞘に納まった五龍神が、テーブルに寝かされている。

そこには、天地と神谷の二人しか居なかった。

他のメンバーは外で後処理をしていた。

「そうか……。千春が……」

「はい……。俺が、あの時に気付いていればこんな事には……」

申し訳なさそうな顔で天地は俯いた。

だが、神谷は攻めなかった。

多分、神谷でもすぐには気付く事が出来なかったからだろう。

「お前のせいだけじゃないさ」

口からタバコの煙をゆっくりと吐きながら、神谷はサングラスをはずした。

サングラスを畳むとテーブルにゆっくり置いた。

「しかし……。相手にあれ程の軍師がいるとは……」

神谷はそうぼやきながら、タバコの煙を吐き出していた。

そんな中、船の先端の所で由美が泣いていた。

その脇で魁人と昴が由美を見守っていた。

船に当たった波が飛沫を上げていた。

飛沫が三人に降りかかってくる。

「ウツ……。ウウツ……」

「由美……」

「み……。皆……。無事に帰るって……」

泣き崩れる由美の足元には、黄色のお守りが落ちていた。

しかし、そのお守りは流れる血を吸って赤くなっている。

千春の分のお守り。

千春の手に渡る前に。

黄色のお守りは甲板を滑り、そのまま海に落ちた。

蒼く深い海のそこに沈んでいった。

空には雨雲が広がり始め、日の光りが遮られていった。

全ての後処理の終わった後、生き残ったハンターは食堂に集まっていた。

そこに、由美と昴の姿は無い。

由美は部屋で寝込み、昴は由美に付き添っている。

外ではいつの間にか雨が降り出し、波が更に高くなっていた。

天地は魁人の右隣の席に座り、その隣に神谷が座っていた。

他に五人のハンターが居た。

一人は40代位の体格のいい、ベテランのハンター。右脇には大きなハンマーが立てられていた。

その男の向かいには、金髪で長髪、耳には幾つものピアスがついている。

まだ10代位だろうが、結構落ち着いている。

武器らしき物は持っていなかった。

その男の横に漆黒の短髪の髪に、鋭い目つきの若い女性が座っていた。

腰には幾つものナイフをぶら下げていた。

天地の正面にはやる気の無さそうな男が座っていた。

髪はボサボサで、背中にライフルを担いでいた。

その横で本を読んでいる細身の男。

いかにも真面目そうで、腰にトンファーをぶら下げていた。

共通点はハンターと言うだけで、他に共通するところは無かった。

こんなんで絶鬼に勝てるのか、物凄く不安だった。

沈黙が続いていた。

何となく嫌なムードだったので、天地は小声で魁人に声を掛けた。

「なあ……。こんなんで、絶鬼に勝てるのか？」

「うっ……。僕も不安でしょうがないよ……」

その声が聞こえたのか、読書をしていた男が立ち上がった。

目は明らかに天地と魁人に向けられていた。

天地と魁人は目を合わせない様になっていた。

その後も沈黙が続いていた。

シャンデリアの光りが薄暗い部屋の中を照らしていた。

部屋の奥には豪華な椅子が置いてあった。
部屋の右側は大きく大きなバルコニーに繋がる窓があった。
そこに、白髪しろがみの細目で色白の絶鬼が立っていた。
外は雨が降っている為、当然絶鬼はびしょ濡れになっている。
絶鬼の視線の先には、広大な海に浮く一隻の船。
それを見ながら絶鬼は笑みを浮かべていた。

「ようやく、辿り着いたようだね」

と、そこに霧雨 漸と名乗った少年が千春と共に、絶鬼の背後に跪いた。

絶鬼は振り返らずに言った。

「なぜ、人間の皮を被っているんだい？」

骸鬼がいぎに黄麻おうま」

「絶鬼様。失礼ですが、今は霧雨 漸です。

そして、彼女は犬山 千春。これからは、そうおよびください」

「そう……。漸と千春か……。それで、何か用かい？」

漸は顔を上げて絶鬼の方を見た。

「もう、知っていると思います、ハンターどもがすぐ近くに……」

「そうだね。分かっているよ」

「ならば、次の手を打った方が得策かと……」

「そう……。なら、君に任せるよ」

そう言いながら絶鬼は微笑んでいた。

「それでは、次の策の準備を」

漸と千春はその場から消えた。

一瞬にして。

天地達は、一応自己紹介が終っていた。

40代のハンマーを持ったハンターの名は岩柳 剛毅

やはり、ハンター暦は一番長く、もう28年もハンターをやっている。

その向かいの金髪の長髪の男の名は国道 竜馬

変わった武器を所持しているらしいが、それは秘密らしい。

国道の横の漆黒で短髪の女性の名は神宮寺 冷夏

ハンターをやりながら、サーカス団のナイフ投げをしているらしい。

天地の正面に座っているやる気の無い男の名は三上 信也

自己紹介もやる気が無く、名前だけ言っすぐに寝たため詳しい事はわからない。

その横で読書をしていた男の名は黒川 淳

大学に通う真面目なハンターだ。

自己紹介の後、話はこれからどうするかという事になったが、話は全くまとまらず、そのまま一日が過ぎたのだった。

第二十九章 カウントダウン

翌朝。

天地はあまりの揺れの激しさに、目を覚ました。

気分が悪い。

船酔いだろう。

そんな体を無理やり起こし、食堂に向った。

暗い通路をフラフラの足取りで歩いていると、いきなりドアの扉が開き天地は顔を強打した。

「ウウツ……………」

顔を抑えながら天地はその場に蹲った。

部屋から出てきたのは、由美だった。

由美は蹲っている天地に気付き声を掛けた。

「何……………してるの？」

「何ってな……………」

声を震わせながら由美の顔を見上げてそう言った。

だが、由美が微笑みながらこつちを見ているので、天地の怒りは一気に引いた。

天地はすっと立ち上がった。

そして、鼻を真っ赤にしながら言った。

「あのな……………。いきなりドア開けたら危ないだろ……………」

「……………そうだね。今度から……………気をつける……………」

微笑みながら由美はそう言った。
昨日の事は吹っ切れたのだろう。
暫く沈黙が続いたが、由美のお腹が鳴った。
もちろん天地にも聞こえた。
由美は恥ずかしそうに呟いた。

「……………お腹……………空いた」

「そ…そうだな」

天地は由美に気を使いそう言った。
二人は食堂に向って通路を歩き出した。
食堂の前で魁人と昴に会った。

「おはよう。天地君、由美さん」

「どう？ゆっくり眠れた？」

魁人と昴が続けてそう言った。
それに対し、天地と由美が同時に言った。

「おはよう」「おはよう」

「何ハモってるのよ」

何か面白く無さそうな表情で、昴は二人を見ながらそう言った。

「別に、ハモってるつもりはな」

天地はそう言つて、由美の方に合意を求めようとした。だが、そんな天地に向つて由美は首を傾げながら聞いた。

「ハモっちゃ駄目……なの？」

「駄目ではないよ……な」

少し戸惑いながら天地は魁人の方を見た。魁人は昴の横で笑いながら言つた。

「別に悪くはないよ。ただ、昴が嫉妬してるだけ」

そう言つた時、昴の右拳が魁人のお腹に飛んだ。

ズツシリと手応えはあつたが、何か何時もとは違つた。

魁人は笑いながら答えた。

「僕がそう何度も同じ手を！？」

その時、左の膝がお腹に入った。

一瞬にして魁人の体が崩れ落ちる。

膝が決まつた瞬間、天地は顔を引きつらせた。

そんな天地の顔を見て由美が微笑みながら呟く。

「天地は……アレくらい……平気だよね」

「イヤ……。多分、俺もアレは……」

「……駄目？ ……やっぱり」

少し残念そうな顔をしながらそう言つた。

顔を引きつらせながら天地は笑っていた。
苦しそうにお腹を押さえながら、天地の肩を借りて魁人は立ち上がった。

由美と昴は先に食堂に入っていた。

天地と魁人はゆっくりとした足取りで食堂に入っていく。

二人は空いている席に座った。

と、言っても殆ど空席なのだが。

天地と魁人の正面には神谷と岩柳が座っていた。

いつもと変わらぬ様子で、神谷はタバコを口に銜えている。

食堂は静かで誰一人言葉を交わしていなかった。

そんな中、魁人が小声でぼやいた。

「痛いな……。本当にすぐ暴力ふるうんだから……」

お腹を押さえている魁人に天地が言う。

「お前、最近裕二に似てきたな」

「そう……かな？」

「そうだって……。昔は絶対にあんな事言わなかったのに……」

「うーん。考えてみれば、そうだね」

顎に右手を添えながら目を細くしてそう言った。

あの寮に来てから本当に魁人は変わった。

始めの頃は女性にあんな事を言わなかったのに。

裕二の影響を受け過ぎている。

そんな事を思いながらも、天地は反省した。

一応、自分のせいでもあるのだとわかっているからだ。

ため息を漏らした天地に神谷が声を掛けた。

「どうした？ 失恋か？」

「んなわけあるか」

即答だった。

まるで、何を言うか判っていたかの様だった。

つまらなそうな顔で、神谷は口から煙を吐いている。

とりあえず、朝食を済ませた天地達は、話し合いを始めた。
もちろんこれからの事だ。

「これからの事だが……」

そう言ったのは岩柳だった。

一応、一番ハンター暦が長いので、この場を任せているが……大丈夫なのだろうか？

まあ、そんな事を思っていたが声には出さないでいた。

そして、話し合いの結果、これから船に乗っている小型ボートで、島に移動する事になった。

天地達は早速準備に取り掛かっていた。

「なあ、あの人に全て任せてるけど大丈夫か？」

「さあ？ 僕に聞かれても……」

「だよな……」

ため息を漏らしながら二人は準備をしていた。

鞆に食料を詰め込み、傷薬なども詰め込んでいた。

準備が終った二人は小型ボートのある場所にやって来た。すでに他のハンターは小型ボートに乗っていた。

「遅いぞ」

「すみません。神谷さん」

魁人は丁寧に神谷に頭を下げていた。

その横で天地は欠伸をしていた。

その天地の右頬に昴の鉄拳が決まった。

頭の中で脳が激しく揺れる様な感じた。

足もよろめき、その場に座り込んでしまった。

昴は天地を見下して言った。

「遅れて来たんだから、ちゃんと謝りなさい！」

「す…すみませんでした……」

そう言っつて天地は倒れた。

「何も、そこまでしなくても……」

思わず魁人の口からはその言葉が出ていた。

天地が目を覚ましたときには、大分島に近づいていた。

天地のすぐ傍には由美が座っていた。

「ウウツ……」

まだ激しい頭痛がする。

日に日に昴の力が強くなってる気がする。

ボンヤリとしている天地の顔の前に、由美が顔を出した。鼻と鼻がぶつかりそうだった。驚いた天地は仰け反り距離をとった。

「な、何？」

「……大丈夫？」

少し間があつたが、由美は心配そうに天地を見つめていた。まだ天地の心臓はバクバク言っている。何とか気を静めようと深呼吸を何度か行った。そんな天地に向つて昴が言った。

「もうすぐ着くわよ。いつでも戦える状態にしなきゃね」

「……うん」

昴の方を向いて由美は頷いた。頭痛の残る天地は、フラフラながらも何とか立ち上がり、五龍神を手を取った。雨の降り頻る海の波は荒れていて、小型ボートが大きく揺れていた。いつ転覆してもおかしくない。だが、小型ボートは絶妙なバランスと取りながら、島へと着実に近づいていた。そして、天地達ハンターと絶鬼達オウガの激闘へのカウントダウンが始まっていた。

第三十章 成功率の低い策

天地達の乗った小型ボートはようやく岸へと辿り着いた。

ここまで、まだオウガに襲われていないのが、不思議なくらいだ。雨は激しさを増し、天地達はビシヨビシヨになっていた。

それにしても、不気味な島だ。

波の音と風でざわめく草木の音しか聞こえなかった。

オウガの気配が全くしなかった。

何か不思議な力でオウガの気配を感じなくさせているのだろう。

「不気味だね」

「そうだな……」

目の前に広がる森を見ながら天地は魁人にそう答えた。

森には一本の道筋がある。

だが、生い茂る木々で光りは遮られ、奥がどうなっているのか見えなかった。

「この暗い道を歩くわけ？」

神宮寺が不満そうな顔をする。

それに、やる気の無さそうな声で三上が呟いた。

「怖いなら残れば？」

「べ、別に怖くは無いわよ！」

横を通り過ぎた三上に、神宮寺は怒鳴った。

その様子を本を読みながら、チラチラ見ていた黒川が鼻で笑った。

「フツ。のんきな連中だ」

「おめえものんきに本読んでんじゃねえか」

「僕は本を読みながら、策を考えているんだ。」

君らの様にガムシヤラに戦って早死にしたいくないからね」

「そう言う奴程、戦いになると真っ先に逃げ出すんだ」

黒川を挑発するかの様に国道はそう言った。

だが、そんな挑発に黒川は乗らなかつた。

冷静に国道の方を見て逆に挑発した。

「フツ。君の方こそ、変わった武器を持っているとか言ってるが、実は戦うのがイヤで隠してるだけなんじゃないのか？」

「んだと！」

鋭い目つきで国道は黒川を睨み付けた。

今にも襲い掛かりそうな勢いだ。

だが、黒川は全く怯まず、そのまま読書続けた。

全くまとまりの無い奴ばかりだ。

こんな所をオウガに襲われたらどうなるか。

そんな不安を天地は抱いていた。

「……大丈夫かな？」

由美が不安そうな顔で天地の横に立っていた。

天地は笑う事しか出来なかつた。

「アハハ……。どうだろう……」

「大丈夫よ。一応、全員ハンターなんだし……」

「でも……」

昴の言葉を聞いた由美は不安そうに、国道・黒川・三上・神宮寺の四人の方に目をやった。

それを見た昴も何だか不安になった。

天地・魁人・由美・昴の四人は、ほぼ同時に深いため息をついた。その様子を後ろで一部始終見ていた神谷が、タバコの煙を吹かせながら言った。

「どうしたよ。ため息なんか八モらせて」

四人は振り返り口からタバコの煙を吐きながら笑っている神谷を見た。

のんきに笑っている神谷を見て、四人は更に深いため息を吐いた。

「オイオイ……。人の顔見てため息なんて吐くなよ」

そんな神谷を無視して、天地達四人は円になって話し合っていた。

「一番の不安要素が、一番身近に居るなんて……」

「私達……。本当に……。大丈夫かな？」

「師匠があんな風だと、何だか……。不安になるよ」

「私もそう思うわ……」

四人は口々に言葉を交わした。

そんな話を話していると、ため息が漏れた。とりあえず、これからの事を話し合った。

「これからの事だが……。何か意見のある者はいるか？」

太い声で岩柳がそう言って全員の顔を見る。

金髪で長髪の国道が、黒川を馬鹿にするかの様に言い放つ。

「おめえ、色々策を考えてるんだろ」

「ああ、策は考えてある。だが、成功する可能性はきわめて低い」

そんな事を言っただけ黙り込んだ。

それに対し、国道は笑いながら嫌味に言う。

「んな事言っただけ、実は策なんて無いんだろ」

「何だと！」

怒りをあらわに黒川は、国道の胸倉に掴みかかった。

その黒川の胸倉を国道は掴み叫んだ。

「やんのか！」

そんな二人の間に入ったのが、神宮寺だった。

胸倉をつかみ合う二人の手を払い、引き離すと聞いた。

「あんたら！ 何しに来たのさ！」

私達はオウガと戦いに来たのよ！ 少しは真面目に考えなさい」

二人は黙ってにらみ合っている。

ため息をこぼしながら神宮寺は腰を下ろした。

岩柳は黒川の方を見ると太い声で言った。

「お前の考えている策とは？」

「僕の考える策は、とても危険で成功確率も……」

「それでもいい。話せ」

「はい……。僕らを二つのグループに分けます。絶鬼を狙うグループと陽動するグループです」

説明する黒川に向って嫌味な口調で国道が言い放つ。

「陽動なんて本当に成功するのかよ」

「だから、成功確率は少ないって言ってるだろ！」

「国道、お前は黙っている。黒川続ける」

岩柳は国道を黙らせて黒川の策を聞くことに。

「陽動は成功するかわかりませんが、失敗したらそのまま城に乗り込んでもらいます。」

絶鬼を狙うグループは遠回りをして、城に侵入してもらいます。「城のどこに絶鬼がいるかわからないのに、どうするんですか？」

不思議そうな顔で魁人が質問した。

その魁人に一気に視線が集まった。

それが、怖くて魁人が一瞬怯んだ。

「確かに絶鬼の居る所はわからないが、それはその時に何とかしてもらうしか……」

「どちらにしても、あんまり期待できないな……」

眠そうにそう呟いた三上は欠伸をした。

確かに成功率はかなり低い。

そんなハンター達を1体のオウガが見ていた。天邪鬼だ。

城の屋根の上に座りボーガンに矢をセットしていた。

「生き残ったのは十人か。まあ、少し挨拶でもしておくか」

ボーガンをハンターの方に構えた。

標準は合っている。
ゆっくり引き金に指を掛けた。

「まずは、可愛い女の子から……」

引き金を引くと、五本の矢が昴に向って飛んでいく。

矢は空を切りながら、勢いを増している。

その時、三上の体がビクツと動き背中のライフルを構え叫んだ。

「伏せろ！」

その声に驚き皆は一瞬で武器を構えたが、間に合わない。

矢に標準を合わせ、三上は引き金を引いた。

銃声が六発聞こえた。

一発は矢を外れたが、他は全て矢に命中した。

外れた一発の弾は天邪鬼の左頬を掠めた。

「なかなかの腕前だ」

そう呟いて天邪鬼は、左頬から流れ出る血を拭って笑みを浮かべた。

ライフルの銃口からは白煙が出ていた。

天地達の間には暫く沈黙が続いていた。

三上はゆっくりとライフルをしまい、欠伸をしながら腰を下ろした。

周りのハンターは誰しもが驚きを隠せないで居た。

「おめえ、素早く動けるんじゃないか」

「……」

半笑いしながら、国道が三上に言ったが返事はなかった。
返事の変わりに寝息が聞こえた。
すでに眠りについていた。
本当にやる気が感じられない。
周りのハンターは、驚きから一気に呆れ顔になった。

その後の話し合いの結果、2グループに分けられた。
力が均等になる様と言う訳で、神谷（陽動）と岩柳（絶鬼を狙う）に分けられた。

神谷のグループは魁人・由美・国道・黒川の近距離タイプの武器を持つ者が集められた。

岩柳のグループは天地・昴・三上・神宮寺の天地と岩柳以外は遠距離タイプの武器の者が集められていた。

天地は不安だった。

力が均等にはなっただと思うが、明らかに接近戦になったら、不利になると言うのは分かる。

だが、そんな事は気にせず神谷と岩柳は分かれた。

神谷達が、森の中を突き進み。

岩柳達は荒れ狂う波の襲い掛かる岩場を慎重に進んでいく。

第三十一章 岩柳のグループと神谷のグループ

足場の悪い岩場を進む、岩柳のグループ。

ただでさえ足場が悪いのに、激しい波と降りしきる雨で更に足場は悪くなっていた。

「何で、私がこんなところを！」

一番後ろを歩く神宮寺が、そうぼやいた。

確かに一歩間違えば、波に飲み込まれてしまっただろう。

そんな事になれば、命を落としかねない。

神宮寺の前を歩いていたら三上が立ち止まり、眠そうに欠伸をしながら言った。

「怖いなら、引き返せば？」

「引き返すわけないでしょ！」

そう言って神宮寺はムスツとした表情で三上の横を追い抜いていた。

欠伸をして、三上は再び歩き出した。

天地は昴の手を取ってちゃんとリードしていた。

「気をつけるよ。お前が足滑らせたなら、俺まで巻き込まれるんだからな」

「何よ！ そう思うなら手放しなさいよ」

昴はそう言って手を振り払おうとしたが出来なかった。

天地がしっかり手を握っていたからだ。

「ちょっと！ 放しなさいって！」

立ち止まり天地は昴の方を向いた。

「これは、裕二との約束だ。お前に何かあったら、俺が裕二に何されるか……。だから……。その……。」

色々と考えたが、言葉が見つからなかった。

結局、出た言葉は、

「だーっ！ 面倒だ。とりあえず、手は放さないからな！」

そう言っただけで天地は昴の手を引いて、また歩き出した。

その後、昴は文句も言わず黙って天地についていった。

その頃、森の中を進む神谷のグループは 道に迷っていた。

「ちょっと！ 神谷さん、ここはさっきも通りましたよ！」

「そうだな……。」

「そうだなじゃないですよ！」

怒鳴る魁人の横で、タバコを口に銜えながら神谷は笑っていた。

森の中は複雑な構造で、神谷達は先程から同じ道を何度も行った
り来たりしていた。

「おめえ、やけに落ち着いてるけど、大丈夫なのか？」

「ソッ？ 焦っても仕方ないからな」

口から煙を吹かせながら、国道の方を見て笑っていた。

そんな神谷に、黒川が言い放つ。

「あなたは本当に戦う気があるのですか？」

「戦う気はあるが、こうなってはな……」

（誰のせいだよ）

誰もがそう思った。

暗い森の中で、神谷のタバコの火だけが真つ赤に燃えていた。静かに時だけが過ぎていく。

「……大丈夫かな？」

木の根の上に腰を据えた由美がボソツと言った。

木々のザワメキで聞き取り難かったが、近くに居た魁人だけははっきりと聞き取れた。

「天地君が心配？」

由美は魁人の方を見てゆっくり頷いた。

やはり、天地の事が心配なのだろう。

「やっぱり、天地君と同じグループがよかったんじゃない？」

魁人のその言葉に由美は首を横に振った。

それが、なぜか魁人にはわからなかった。

不思議そうな顔をしている魁人に、由美はゆっくりと言った。

「……天地、私が居ると……、かばうから……」。

それで、天地が傷つくの……いやだから……」

そう言つて由美は笑つて見せたが、その瞳は寂しげだった。魁人にも何となくその気持ちかわかる気がした。その時、暫く黙つていた神谷が立ち上がり言った。

「さて、そろそろ行くか」

「また、同じ所を回るのか？」

立ち上がった神谷に、冷やかな視線を送りながら国道はそう言つた。

暫く沈黙が辺りを包み込んだ。

「街道だっけ？」

「国道だ」

神谷の問いに国道が瞬時に答えた。

わざとらしく間違えるものだ。

そんな事を魁人は思っていた。

神谷は内ポケットからタバコを出すと口に銜えた。

「俺が考えも無しに同じ場所をうろつろすると思つるか？」

「さあな。俺はあんたと会つて、間もないからな。」

「んな事、知るわけ無いだろ」

「それもそうだ」

神谷はそう言つて大笑いした。

何となくムカついた、国道は神谷に掴みかかろうとしたが、一瞬にして捻じ伏せられた。

ぬかるむ地面に、国道は勢いよく倒れた。

泥で服がグチャグチャになっている。

「てめえ！」

体を起こして神谷を睨み付けた国道は、耳のピアスに手をかけた。その国道を見ながら、神谷はタバコに火を点けて言った。

「止めとけ、お前じゃ俺に勝てない」

「何だと！ やってみねえーとわからないだろ！」

「分かるさ。なんなら、試してみるか？」

そう言った神谷の頭上を国道が飛び越えた。

振り返ろうとした神谷の体に、何かが巻き動きを封じた。

細く糸状の物の様だが、とても頑丈だった。

その糸状の物は、神谷の体を締め付ける。

「これが、お前の武器か。珍しい武器だな」

「お前はもう逃げられないぜ」

不適に笑いながら国道は更に力を加える。

糸状の物は神谷の体に食い込んでいき、さらに体の自由を奪っていく。

しかし、神谷は顔色一つ変えず、タバコを口に銜えたまま煙を吐いていた。

「この程度で、俺に勝てるつもりなのか？」

神谷のこの言葉で、完全に国道はキレた。

「おめえ、自分の立場を分かってねえーみてえーだな」

怒りに顔を真っ赤にして、声を震わせながら国道はそう言った。

「ちよつと、神谷さん。何、挑発してるんですか。無駄な争いは止めましょうよ！」

二人を止めようと魁人はそう言ったが、すでに手遅れだった。完全に理性を失った国道に、この言葉は届いていなかった。

「細切れに成りやがれ！」

腕をクロスさせると、神谷を捕らえていた糸状の物が、神谷の体を一気に切り裂く。

黒い背広に細切れにされ、宙を舞う。

しかし、そこに血の跡も無ければ、神谷の姿も無かった。確かに手応えを感じた国道は、驚きを隠せないでいた。

「奴が……消えた!？」

「残念だったな。まだまだ、格が違うんだよ」

驚いている国道の背後から神谷の声がした。

四人はいつ背後に回ったのか、わからなかった。

大きな丸い岩の上に座り、タバコの煙を吹かしていた。

「勝負あったようだな」

「何!？」

黒川の言葉に、納得がいかないと叫ぶような顔で国道は叫んだ。だが誰が見ても、この勝負は神谷の勝ちだ。

岩の上から降りた神谷は、国道の横を普通に通り過ぎて、細切れにされた黒い背広を見て何やら落ち込んでいた。

何となく心配になった魁人は、一応声を掛ける事にした。

「大丈夫ですか？ 神谷さん」

「ああ……。それよりも、この背広……」

「大事なものなんですか？」

「ああ……」

（この背広、大事なものだったのに……）

落ち込む神谷の後ろ姿を見ながら、そう思った魁人は何とか励まそうとした。

その瞬間だった。

「ウウツ……。俺の財布が……」

「財布!？」

「ああ、三万も入ってたのに……」

悔しそうに拳を握り締める神谷に、魁人は呆れた。心配した自分が情けなく感じた。

ため息を漏らし、魁人は由美の横に腰を下ろした。

「……どうしたの？」

「いや……。たいした事じゃないから、気にしないで」

「……うん。気にしない……」

静かに由美はそう呟き遠くの方を見つめた。

と、言ってもどこまでも続く森は、光りが入らず真っ暗で遠くの方など見えてはいない。

落ち込んでいた神谷も、ようやく息を吹き返した所で、先に進む事になった。

また、道に迷うとも知らぬまま……。

第三十二章 風の刃と奇襲

神谷のグルーブが森の中で迷っている中、岩場を進む岩柳のグルーブは ようやく平地に辿り着いていた。

雨も小降りになっているため、木の陰で休む事にした。

「もう、岩場は無いでしょうね……」

「そうだな。岩場は無いと思うが」

疲れのせいか、少し掠れた声の神宮寺に対し、全く疲れを感じさせない岩柳の太い声が返ってくる。

そして、もう一人、疲れを感じさせない奴がいた。三上だ。

顔色一つ変えず、そのまま例の如く眠りについたのだ。

天地も昴も疲れて、話す気力すらなかった。

「どうした？ 元気ないぞ」

眠っていたかと思われていた三上が、急に言葉を発したので天地と昴は驚いた。

驚きのあまり、天地は背後に立っている木に頭部を激しくぶつけた。

そのまま頭を押さえて蹲る天地を見て昴は呆れた。

二人に聞こえてないと思った三上は、もう一度同じ言葉を発した。

「どうした？ 元気ないぞ」

「大丈夫？ 天地」

「ああ。大丈夫。少し驚いただけだから……」

心配そうにそう言った昴に、天地は笑いながらそう答えた。

二人にはもちろん、三上の声は聞こえていた。だが、タイミングが悪いと言うか、間が悪いと言うか……。そんな二人に、三上がまた同じ言葉を発しようとした。

「どうし……」

「き、聞こえてますよ！ 何度も言わなくても！」

「だったら、返事してくれよ……」

眠そうな声でそう言って、三上は欠伸をしている。

何だか調子が狂わされる。

天地は呆れて言葉を失った。

そんな天地の代わりに、昴が言った。

「寝てたと思ってたから、びっくりしたのよ」

「……」

「……？」

「クー……クー……」

静かに寝息をたてて三上は眠っていた。

そんな三上に、昴の怒りの鉄拳が何発もおみまいされた。

「わかった。これから、人の話の途中で寝ない事」

「は……はい……。わ……分かりました……」

見るからに痛々しい顔の三上は、そう言って頷いる。

流石の天地も、その痛々しい顔に引いた。

今までで一番酷いやられ方だ。

多分、次はもっと酷いやられ方になるだろう。

そう察知した天地はなるべく気をつけるようにした。

「そろそろ行くぞ」

立ち上がり、太い声で岩柳がそう叫んだ。

「エーッ。もう行くの？」

不満の声を上げたのは神宮寺だった。

そんな神宮寺に、昴に殴られた傷が残った顔で三上がボソツと言った。

「一人でここに残れば……」

「うるさいわね。あんたこそ、残れば？ その傷じゃあ足でまとい

よ」

「……」

三上は神宮寺の声など聞こえなかったかの様に、横を素通りしていった。

その後、会話は無く、天地達は黙々と先に進んでいた。

流石に平らな足場だけあって、非常にスムーズに進んでいるが、何か違和感があった。

誘い込まれていると、言う感じ。

だが、全く岩柳は気にしていない。

「なあ、怪しくないか？」

「何が？」

小声で言った天地に対し、昴は普通のボリュームで返事を返した。口の前で人差し指を立てて、シートとやっている天地。仕方なく、昴も小声で返答する事にした。

「何？ どういう事？」

「あの岩柳って人だよ」

「岩柳さんが？ どうしてまた？」

先頭を歩く岩柳の背中を見ながら、昴が首を傾げた。

「どこが、どう怪しいわけ？」

「どこがって……」

上手く説明出来ない。

それは、あくまで天地の直感がそう言っているからだ。

天地が悩んでいる時だった。

森の中から沢山のオウガが現われた。

完全なる不意打ちだった。

誰もが武器を構える事が出来ないなか、岩柳一人だけが武器を構えオウガと激突していた。

「お前ら、何をしている！ 早く戦わんか！」

四人はその声で武器を構えた。

体格のデカイ、怒のオウガが5体と、体格の小さい哀のオウガが10体いた。

大きなハンマーを振り回し、岩柳は前方の怒のオウガ3体と戦闘している。

天地は遠距離タイプの三人をカバーするかのようには戦っていた。そのせいもあって、天地の動きは少し鈍かった。

天地の目の前に立つ怒のオウガの右手の鋭い爪が、天地目掛けて振り下ろされる。

「グオオオオッ」

天地はその爪を右に飛んで回避した。

オウガの右手の爪は空振り、そのまま地面に突き刺さる。

その地面が碎けて、大小様々な大きさの石が飛び散り、天地に襲い掛かった。

天地の今の体勢では、その石を防ぐ事が出来そうに無かった。

「クツ！ やべえ」

左手で顔を庇う様にしていたが、三上の声が聞こえそれを止めた。

「石は僕が何とかするよ」

銃声と共に天地は、右手の動かせない真正面にいる怒のオウガに向かっていった。

飛んで来る大小様々な石は、弾ける音を立てながら木っ端微塵に吹き飛ばされる。

だが、すぐさまそのオウガの左手の鋭い爪が天地に振り下ろされた。

「グオオオツ」

「目覚めよ！ 火龍神！」

五龍神は一瞬にして、炎を纏った火龍神になった。

雨の雫が火龍神の刃に触れて蒸発し、火龍神から白い蒸気が上がっていた。

その火龍神でオウガの左手の爪を受け止めた。

しかし、オウガの左手は勢いよく、天地の目の前を通過して風を起こした。

オウガは何が起こったのか、わからない表情をしていたが、自分

の左手を見て驚いた。

左手には鋭い爪は無く、爪を焼け斬られた後しか残っていないかった。

「ガアアアアツ！」

「驚いたようだな」

天地は驚いているオウガの足元で、火龍神をしつかりと構えていた。

火龍神の刃に集まる炎が、火龍神の刃の色を真っ赤に染めた。

オウガは爪の無い左手を天地目掛けて勢いよく振り下ろすと、同時に天地の声が響いた。

「天まで昇れ！ 炎龍昇！」

火龍神を構えたまま、天地は地を蹴った。

その瞬間、火龍神は天地ごと炎に包み込んだ。

オウガの振り下ろした左手は、その炎とぶつかりあった。

だが、一瞬にして左腕は二つに裂かれ、炎は龍の如く天に舞い上がった。

そのオウガは気付いていなかった。

左腕だけでなく、自分の体までもを真っ二つにされている事を…

…。

気付いた時にはすでに体は消滅していた。

空中に浮いたままの天地に、地上から昴の声が聞こえた。

「天地！ あぶない！」

「あぶない？」

天地にその意味を理解する時間は無かった。

天地より更に上空から、5体の哀のオウガが勢いよく突っ込んできたのだ。

5体の哀のオウガに、天地が気付いた時には、両手両足と頭を掴まれ、勢いよく地上に落下していた。

このまま、地面に叩きつけられたら、天地は間違いなく死んでしまっただろう。

「どうしよう！ 天地が……」

「僕でも、あの速度で落ちてる物を狙うのは……」

「彼を信じるしかないわ。私達は目の前のオウガを倒すのが先決よ」「そんな……」

三人はなすすべなく、ただ見ていることしか出来ないでいた。

落下する天地の耳には、風の流れる音が聞こえていた。

そして、火龍神はいつの間にか五龍神に戻ってる。

だが、刃の龍の刻印の色は元の色ではなく、真っ白に輝いていた。その次の瞬間、天地は叫んだ。

「目覚めよ！ 風龍神！」

五龍神は、一瞬で風龍神になり、その刃の周りには風が取り巻いていた。

その瞬間に出た突風で、天地を押さえていた哀のオウガが吹き飛んでいった。

だが、落下する勢いは止まらず、凄まじい音と爆風を起こし地面に落ちた。

「天地！」

昂は風の矢を空中に飛んでいる哀のオウガに放ちながら叫んだ。

落ちた衝撃であがった土埃が邪魔で、天地の姿が見えなかった。

「まさか、死んじゃった？」

「三上！ 縁起の悪い事言っただけじゃないの」

「でも、あの速度で落下しちゃね」

空中を飛んでいた哀のオウガを、始末した三上と神宮寺は土埃の方を見ていた。

昴も土埃の方を見た。

その時、土埃が薄れていくのが分かった。

薄くなった土埃の中に、誰かが仁王立ちしているのが見えた。

「天地！？」

「あつ、生きてるっぽい」

「死んでほしかったわけ？」

「まさか……。でも、彼不死身だね」

天地の方に駆け寄る昴の後姿を見ながら、やる気の無さそうな声の三上と、その三上に呆れた様子の声の神宮寺が話をしていった。

駆け寄っていった昴の横から、怒のオウガの鋭い爪が飛んできた。

昴は当然、それに対応出来るはずがなかった。

その時、天地の声が響く。

「伏せろ、昴」

「エッ！？」

「大気を切り裂け！！！」

真空鎌鼬しんくつかまいたち！！！」

風龍神を横に振り抜いた瞬間、集まっていた風の渦が天地の周りの土埃を、裂きながら伏せている昴の上を通り過ぎた。

昴の上を通り過ぎる風は、凄まじい音を起している。

耳を塞いでいる昴だが、その音は体中に響き渡って、気を失いそうになっていた。

風は刃と化し、巨体の怒のオウガの体を裂いていった。

第三十二章 風の刃と奇襲（後書き）

えっ。今回総アクセス数が1000人を突破しました。

僕としては、初めて書いた連載小説がここまで来るなんて思っても見ませんでした。

愛読してくれてる皆さん、本当にありがとうございます。

そこで、今回、人気キャラ投票をしたいと思っておりますので、愛読してくれてる皆さんの好きなキャラクターをお聞かせください。

期間は来週の水曜日までにしたいと思います。

長々と済みませんが、皆様の協力をお待ちしています。

第三十三章 裏切りと怒り

風は治まり、風の刃に切り裂かれた怒のオウガは消え去り、その後ろに聳え立っていた森の木々が、無残に切り倒されていた。

風龍神から放たれた風の威力に、三上も神宮寺も驚きその場を動く事が出来ないうでいた。

もちろん、それを放った天地でさえ驚きを隠せないでいた。

「ハ…ハハハ…」

天地が笑っていると、伏せていた昴が目の前にいた。

先程の風で髪はボサボサになっていて、ぬかるんだ地面に伏せたせいで服が汚れていた。

嫌な予感がした。

背筋におぞましい殺気を感じ、天地は後退りした。

「て〜ん〜ち〜」

「エッ……。ちょ…ちよつと、待て……」

「問答無用」

「ギャー…」

天地の悲鳴と昴の鉄拳の鈍い音が辺りに響き渡った。

その悲鳴と音を聞きながら、三上と神宮寺は体を休めていた。

「彼にとっては、オウガより彼女の方がよっぽど鬼ね」

「そうみたいだね。あの鉄拳は、重くて体中に響くからね」

「ふ〜ん。あんたも気をつけないと、彼の様になるわよ」

微笑みながらそう言った神宮寺だったが、三上からの返事は無か

った。

不思議に思った神宮寺が、横に座っている三上を見た。静かに寝息をたてながら三上は眠りについていた。

「どこでも寝るな……こいつ」

そう呟いて神宮寺はため息を漏らした。

暫く続いていた昴の鈍い鉄拳の音がおさまり、手を二回叩いて神宮寺と三上の所に昴がやって来た。

その横にはボコボコの顔の天地がいた。

天地の顔は、昴に殴られすぎて誰なのかわからなかった。

「そ…そいつ、本当に天地かい？」

「ンツ？」

神宮寺は少し声を震わせながら、昴の横に立つ天地を指差していた。

不思議そうに首を傾げながら、天地の方を見て昴は笑いながら答えた。

「そうだけど、それがどうかしたの？」

「い…いや……。何でもないわ」

苦笑いしながらそう答えた神宮寺に、昴が訊いた。

「それより、岩柳さんは？」

「さあ？ 私に聞かないで」

「じゃあ、誰に聞けばいいの？」

「さあ？ 知らないわよ」

顔中腫れ上がった天地の視界は狭かったが、その狭い視界に背丈の高い男と黒いフードを被った少年が見えた。

男の横に巨大なハンマーがある事で、男が岩柳であると察知した天地は、二人に知らせようと言葉を発したが、全く言葉になっっていなかった。

「ばい！ がんでゆうがいたぞ」（おい！ 岩柳がいたぞ）

「うるさいわね。天地は黙ってなさいよ」

「でば！？」（でも！？）

全く天地の言葉は伝わらず、その代わりに天地の腹に昂の鉄拳が入った。

言葉を発することなく天地はその場に倒れこんだ。

「全く、こつちは話をしてるのに……」

「何か伝えようとしてたんじゃない？」

「それなら、ちゃんと喋りますよ」

（エー……ッ。ちゃんと喋れなくしたのは、あなたじゃないの〜）

啞然としながら視線を逸らした。

その瞬間、岩柳と少年が仁王立ちしてるのが見えた。

岩柳と少年が笑みを浮かべた。

それを、見た瞬間、背筋がゾツとして恐怖に震えた。

ゆっくりと岩柳は巨大なハンマーを持ち、殺気に満ちた目で二人を睨みつけていた。

「来るわよ！」

「来るって？ 誰が」

「いいから、武器を構えて！」

2本のナイフを手にとると、立ち上がり岩柳の方を睨んだ。
岩柳がハンマーを構えているのを見て、昴もようやく状況を理解した。

風鳥神を出し、風の矢を岩柳に向けた。

「何！？ 裏切り？」

「さあ？ どうかしら？」

「まずいよね」

「そうね。天地は戦闘不能だし（昴のせい）、三上は寝ちゃってるし……」

遠距離タイプの二人は岩柳と少年を睨んだまま動こうとしなかった。

黒フードを被った少年の方は余裕の笑みを浮かべている。

「岩柳。君の力をを見せてもらおうかな？」

「ああ、わかっているさ」

「それじゃあ。僕はここから見てるよ」

「参る！」

そう叫び、岩柳がハンマーを構えて昴と神宮寺に向かって突っ込んでくる。

左足をゆっくりと引き、風の矢を力一杯引く。

だが、矢を放つ事が出来ないでいた。

ハンマーを構えた岩柳は、勢いを緩めず迫ってくる。

「チッ」

昴の横で舌打ちが聞こえた。

その瞬間に、岩柳が動きを止めて後方に跳んだ。

足元には神宮寺が投げたナイフが突き刺さっていた。

「昴！ 迷ってる場合じゃないわよ！」

「でも、岩柳さんは人間で……」

「関係ない。人間でも、オウガに寝返ったなら……」

ナイフを取り出し、神宮寺は岩柳を睨む。

そんな神宮寺の横で、昴が叫んだ。

「岩柳さん！ なぜ、オウガに寝返ったんですか！」

それを、聞いた途端に岩柳が笑い出した。

「フハハハハッ！！ 悪いが寝返ったんじゃない。元々、オウガの

仲間だったのだよ」

「!?!」

驚きを隠せなかった。

船の上で仲間が殺され、悔しそうにしていたのは全部嘘だったのだ。

「それじゃあ、私達は、あなたにここに誘い込まれたと言う事ね」

「そう言う事だ！」

ハンマーを構え直し、岩柳は二人に向ってきた。

その瞬間、突風が吹き荒れた。

突風は昴を中心にして吹き荒れていた。

昴の横にいた神宮寺は、吹き飛ばされそうになっていた。

突風で体勢を崩した岩柳は動きを止めた。

「な…なんだ……」

突風に耐えながら岩柳がそう言った。

その声が聞こえたのか、黒フードの少年が答えた。

「どうやら、怒りに触れた様だね」

「怒りに？ 誰のだ？」

「誰のって、彼女自身と……。風鳥神のだよ」

黒フードの男はそう言って、面白い物が見れそうだと言つ目をしてる。

木の葉が突風の中を舞っている。

ゆっくりと昂が動き出した。

風鳥神に構えられた風の矢は、更に鋭く大きくなっていった。

「くっ！ 武器に意思などある筈が無い！！」

ハンマーを構え、突風に守られる昂に向かっていった。

「潰れる！」

そう叫んでハンマーを勢いよく振り下ろした。

ハンマーは昂の目の前で止まっている。

風に押し返されているのだ。

突風の流れを遮るハンマーには、凄まじい勢いの風を横から浴びていた。

ハンマーを持つ岩柳の手は、その風の勢いに耐え切れなくなり、ついにハンマーを手放した。

その瞬間、ハンマーは軽々と吹き飛ばされた。

そして、見えなくなった。

啞然とする岩柳の顔に向って、昴は風鳥神を構えた。

「あなたの負けです。早々に立ち去りなさい」

声は昴のだが、口調が昴っぽくなかった。

それを、離れて見ている黒フードの少年は感心していた。

（あれが、暴走という奴ですか……）。

しかし、おかしいですね。聞いた話ではもっと荒々しいと……）

その時、岩柳が大声で笑い出した。

その大きな笑い声で、天地は目を覚ました。

目を覚ました天地はまず、目の前の光景に驚いた。

何がどうやって、昴があんな風になっているのか。

驚きながら昴の様子を見ていた天地は、黒フードの少年の事を思い出した。

天地は五龍神を鞘から抜き、昴を囲む風の中に飛び込んだ。

風に流され、天地は勢いよく吹き飛ばされた。

「借りるぞ」

「エッ！？ て、天地！？」

「嘘！？」

神宮寺がそう言つて、昴は天地が吹き飛ばされた事に気付いた。完全に気を取られた。

その隙を岩柳が見逃すはずが無かった。

一瞬で風の矢を右手掴むと、そのまま昴を持ち上げて地面に叩き付けた。

地面は碎け円く陥没していた。

一方の天地は、鼻を取り囲む突風を利用して、一直線に黒フードに向っていた。

「ウオオオオオッ！！」

天地は叫びながら、黒フードに向かって五龍神を突き立てたまま突っ込んでいった。

だが、黒フードは勢いよく飛んで来る天地を、ヒラリと避ける。

「エッ！？」

その勢いは止まらず、そのまま目の前の大きな岩に激突した。爆音がし、岩は崩れ落ち、土煙が巻き起こった。

(結局何がしたかったの……)

岩にぶつかっている天地を見ながら、神宮寺は心の中で呟いた。だが、すぐに目の前の鼻と岩柳の方に目がいく。

巨大な風の矢は、まだ岩柳が掴んでいた。

風の影響か、ただでさえ軽い鼻の体は簡単に持ち上がり、何度も地面に叩きつけられていた。

その度に、地響きが起こり地面が砕けた。

何度も地面に叩き付けられた鼻の服はボロボロになり、アチコチから血が出ていた。

体中に痛みが走り、頭から出た血は額を通り、頬または臉の上を通り、口元を過ぎて顎から地面に雫となって落下する。

鼻を取り囲んでいた風は弱まり、今では何の役にも立っていない。

「ハハハハ。死ね！！死ねエ！！！」

笑いながらそう言っつて、昴を地面に叩き付けた瞬間だった。叩き付けた筈の昴の体は、すつと地面に着地したのだ。

そして、その瞬間に岩柳の右手が勢いよく胸に当たった。

何が起こったか、わからないまま、岩柳の体は後方に吹き飛んだ。昴が大きな風の矢を放ったのだった。

放った衝撃で昴も後方に吹き飛び、地面を転げながら倒れこんだ。岩柳の胸からは、血飛沫が舞い。

風の矢は勢いをそのままに、岩柳の胸を貫いていった。

後方に吹っ飛んでいる岩柳の体は、そのまま地面に落ち、2・3回バウンドし、地面を滑る様に引きずった。

地面には岩柳の真っ赤な血の跡が残っていた。

岩柳の体は丁度、黒フードの足元で動かなくなっていた。

第三十四章 黒フードとの戦い&森の中で……

足元に倒れる岩柳の死体を黒フードは見た。

そして、ゆっくり足を上げるとそのまま顔を踏みつけた。

岩柳の頭蓋骨の碎ける音が響き、それと同時にその顔からは真っ赤な血があふれ出てきた。

「ウウツ……」

その光景を目にした正気に戻った昴と神宮寺は、吐き気を覚えると同時に、奴に対する恐怖を覚えた。

体は硬直し、全く動かなかった。

そんな二人の方を見て、黒フードの少年は笑みを浮かべていた。

「岩柳と言う男……。全く役に立たない」

独り言の様にそう言いながら、ゆっくりと二人の方に歩み寄っていた。

武器を構えようとするが、全く体が言う事をきかない。

風で吹き飛んだ天地は、ようやく瓦礫から這い出た。

そして、五龍神を構えて、先程まで黒フードがいた所を見た。

すでにそこには、黒フードの姿は無い。

あるのは無残に顔を潰された岩柳の死体だけだ。

「あれ？ 奴…は？」

そう言ってその先に目をやると、黒フードの少年がいた。

しかも、昴が襲われそうになっていた。
天地はすぐに走り出した。

「先程の突風は見事でしたよ」

笑みを浮かべながら黒フードの少年はそう呟く。
黒フードの少年はゆっくりと、昴に向かって右腕を伸ばした。
その刹那、上空から何やら大きな物が、物凄い勢いで黒フードの少年の伸ばした右腕目掛けて落下してきた。

「！？」

「キヤッ!？」

それは、岩柳のハンマーだった。
ハンマーは黒フードの少年の右腕を引き千切り地面にめり込んだ。
血飛沫が上がり、苦痛に黒フードの少年が顔を歪めた。
左手で血を止めようとするが、血は止まらなかった。
昴はその黒フードの少年と、目が合った。
その目には憎しみ・悲しみ、そして、怒りが宿っていた。

「僕は、こんな所では死ねない……」

そう言った直後、天地の声が背後から迫ってきた。

「ダアアアアアッ!!」

「クッ！」

背後から振り下ろされた五龍神を避けて、天地を睨んだ。
ゆっくりと、天地は五龍神を構えなおす。

静かに風が二人の間を吹き抜ける。
その刹那、黒フードの少年は波の荒い海に飛び込んだ。

「!?!」

驚きながら天地は海を見た。

蒼い海は黒フードの血で少し赤くなっている所があった。

しかし、天地はわかっていて。

奴がこの程度で死ぬわけが無いと。

五龍神を鞘にしまい、昂に駆け寄った。

「大丈夫か？」

「……」

放心状態の昂は何の反応も示さなかった。

天地は昂の顔の前で軽く手を振ってみるが、やはり反応はない。

「おい。昂、しっかりしろー」

天地はそう言いながら昂の肩を揺すっていた。

昂はようやく気付いた。

「エッ!? な、何？」

「大丈夫か? アチコチ血だらけだが……」

「う、うん。服はボロボロになったけど、全然平気」

そう言って笑う昂の顔を見て、五龍神を鞘から抜いた。

驚き後ろに仰け反る昂に向かって、五龍神の刃先を向けた。

「動くなよ。昂……」

そう言っつて天地は心を静め力を五龍神に集中した。
五龍神の刃の龍の刻印が蒼く光りを放った。

「目覚めよ！ 水龍神」

五龍神は水龍神に変わった。刃が水の膜に覆われている。
更に天地は力を集中した。

「傷を癒せ。清水泡せいすいほう」

刃を包んだ水の膜は、緩やかな波を放ちながら、ゆっくりと刃から離れて行き、昴の体を包み込んだ。

「な…何？」

「俺が、修行中に覚えた回復術みたいなものかな？」

「へ…ッ……」

昴の体を包む水は、傷口に触れると気泡を出していた。
そして、十分くらいすると、昴を包んでいた水は弾け、傷は消えていた。

「すごい。全然痛くない」

「それは良かった。神宮寺さんは怪我してないですよね？」

微笑みながら木の傍に倒れている神宮寺に天地は言った。
不満そうな顔をしながら神宮寺は答えた。

「なんかさ、私と昴とで、扱いが変わりすぎじゃない？」
「そうかな？」

「絶対そうよ。何、二人とも付き合ってるわけ？」

疑いの目で天地と昴を見る神宮寺。

その言葉を聞いた瞬間、天地は腹を抱えて笑い出した。

何がおかしいのか、分からない神宮寺はキョトンとしていた。

もちろん、昴もキョトンとしていた。

そして、なぜか恥ずかしくなった。

「な、何がおかしいのよ」

「だってさ。俺が、こんな暴力女　！？」

その瞬間、鈍い音が響いた。

天地の視界は一瞬にして真っ暗になる。

瞼が閉じたのだろう。

地面に崩れ落ちた天地の体は暫くピクピクしていた。

目の前の光景に、ただただ呆れる神宮寺だった。

そんな中、森の中を彷徨う神谷達は　。

やはり、森の中を迷っていた。

「なあ、本当に道わかってんのか？」

「うん。おかしいな……」

タバコの煙を口から吐きながら神谷はそう呟いた。

その声が、聞こえたのか、魁人と由美は同時にため息を吐いた。

流石に皆歩き疲れて、言葉を失いつつあった。

かれこれ、2・3時間は歩き通している。

「神谷さん……。また、同じ所ですよ……」

「みたいだな」

「みたいだなじゃ無いですよ……。これで、ここ通るの10回目ですよ」

「みたいだな」

「わかっているんですか？ この森入ってまだ、オウガにすら会っていないんですよ」

「みたいだな」

「みたいだなって、ちょっと、聞いてるんですか？」

少し怒りのこもった魁人の言葉に、ゆっくりと足を止める神谷。それにつられて、魁人・由美・国道・黒川の順に足を止める。

暫し、沈黙が続く。

風が木々を揺らし、ざわめかす。

そんな中、口を開いたのは神谷だった。

「よし、今日はここで休もう」

「なっ!？」

のんきな口調でそう言った神谷に、流石に四人は驚いた。と、同時に深いため息を吐いた。

呆れて何も言えなかった。

黙々と野宿の準備をする神谷に対し、あんまり乗り気じゃない魁人・由美・国道・黒川の四人。

魁人と由美は何も言わずに、枯れ枝を集めていた。

暫くして、魁人は由美の方を見て声を掛けた。

「天地君達、大丈夫かな？」

「大丈夫……だと思っ……」

静かにそう言って由美はゆっくり立ち上がった。

魁人はその由美の後姿を見ていた。
暫くして、二人の所に神谷がやって来た。

「おう。二人でイチャついてるのか？」

タバコを銜えながら神谷が笑っている。

そんな神谷の口からタバコが落ちた。

火の粉がシャツに点いた。

「ウオツ！ ややや、やばい！！」

慌てながら神谷は服に点いた火の粉を払っている。

魁人と由美は変な物を見る目で神谷を見ていた。

そんな神谷の足元のタバコが目についた魁人は、神谷に聞こえる程度の声で言った。

「神谷さーん。タバコの吸殻はちゃんと拾ってくださいよ」

それに対し神谷は、慌てふためきながら返事を返した。

「お前、俺のシャツとここの自然どっちが大切なんだ」

「当然、ここの自然です」

魁人は当然の様に即答した。

「即答か！ お前、少しは俺の事も心配しろよ」

「何言ってるんですか。シャツは買えばいいですけど、自然は買えないんですよ」

「お前は、いつからそんなに冷たい人間になったんだ……」

泣き真似をしながら神谷はそう言ったが、魁人は完全にそれを無視して枯れ枝を拾い集めていた。

その光景を見ながら由美は小さな声で笑っている。

由美に笑われ神谷は、恥ずかしくなり顔を真っ赤に染めた。

「おい！ 魁人、何か突っ込みを入れたっていいだろ！」

「イヤですよ。そんな事したら、僕まで笑われちゃうじゃないですか」

「な、何だと！ 師匠は笑われてもいいって言うのか！」

「ええ。自業自得ですから」

冷静にそう言いながら魁人は神谷の方を見て微笑んだ。

深いため息を吐き、神谷は地面に落ちたタバコの吸殻を拾った。

そして、ポケットから新しいタバコを出して口に銜えた。

ライターでタバコに火を点ける神谷に、由美が言った。

「タバコ……体に悪い……です」

「んっ？」

ライターをしまい神谷は由美の方を見た。

由美は軽く微笑みながら言った。

「タバコは……体に悪いんです……」

「何だ。俺の事を心配してくれるのか。由美は、何て優しいんだ」

嬉しそうにそう叫びながら、神谷は由美に抱きつこうとした。

そんな神谷に気付いたのか、魁人は神谷に背を向けながら言った。

「神谷さん。そんな事したら、天地に報告しますよ」

「ウツ……。別に俺は何もしてないぞ」

「……？」

不思議そうに首を傾げる由美の前で、神谷がそう言って苦笑いを浮かべている。

魁人は伸びをすると、由美の方を見て言った。

「由美さん。気をつけた方がいいよ。神谷さん、何するかわからないから」

「 どういうこと？」

少し間があつて由美がそう言った。

神谷は焦りつつも笑いながら答えた。

「べべべ、別に何でもないんだよ。気にする事はない」

「？」

軽く首を傾げる由美。

神谷は早足で魁人の傍に移動する。

「魁人！ 変な事を言うもんじゃないぞ」

「 プツ、冗談ですよ。いつも神谷さんが言ってるじゃないですか」

笑いを噴出しながら魁人はそう言って神谷の顔を指差した。

啞然とした顔をしていた神谷だったが、徐々に顔が赤く染まり大声で怒鳴った。

「魁人！ 大人をからかうとは」

「エーッ！ ちょ、ちょっと、待って下さいよ！ 軽い冗談じゃないですか！」

「問答無用！ 天誅だ」

その声と同時に驚きの隠せない顔をしながら魁人は、走り出した。顔を鬼の様にしながら、神谷が魁人を追いかけていく。

由美はそれを見ながらクスクスと笑っていた。

結局、数分も経たない内に魁人は神谷に捕まり、頭を何度か小突かれた。

第三十五章 六鬼神 密迹 暗闇の中の戦い

天地が目を覚ました時、すでに辺りは闇に包まれていた。

空にはまだどす黒い雲が掛かっついていて、星を見る事は出来ない。

そんな闇の中、焚き火の明かりだけが四人の顔を照らしていた。

火の勢いは弱まりつつあったが、それでも四人の顔ははっきりと見る事が出来る。

すでに眠りに就いている昴と神宮寺。

起きてるのか、寝ているのか、わからない三上。

とりあえず、天地は焚き火に枯れ枝を入れて火の勢いを強くしていた。

その時、小さく三上が呟いた。

「やっと目が覚めたんだ」

その声に驚いた天地は少し後退りした。

ゆっくりと三上の方を見た天地は、三上と目があった。

笑みを浮かべながら三上は口を開いた。

「結構、派手にやられてたようだけど、大丈夫？」

「ええ……。もう随分痛みも取れましたし……」

「君は、傷の回復が早いね。僕なんて、まだ彼女に殴られた所が痛むよ」

昴の方を軽く指差しながら三上はそう言った。

確かに、普通の人なら大分時間がかかるが、天地には水龍神の力があるせいか、普通の人より傷の治りが早い。

枯れ枝の燃える音が静かに響き、優しく風が二人の間を吹き抜けていく。

絶鬼の島に乗り込んだとは思えない位、静かな時が過ぎていた。
そんな中、三上が口を開く。

「君は、この戦いが終わったら、どうするつもり？」

「僕は……」

すぐに言葉は見つからなかった。

色々悩んだが、結局答えは見つからなかった。

「この戦いが終わったら、どうするかなんて、考えてません」

「そっか」

ため息交じりにそう言った三上は、悲しげな瞳で焚き火の火を見て語った。

「僕さ、この戦い終わったら、ハンターを辞めるんだ」

「ハンターを辞めて、どうするんですか？」

「そうだな。どこか、静かな所で狩りをしながら暮すかな？」

「一人ですか？」

その天地の問いに、三上は言葉を詰まらせた。

まずい事を聞いてしまったと、思った天地は笑いながら話題を変えようとした。

だが、天地が言葉を発する前に、三上がゆっくりとした口調で話始めた。

「実は僕、婚約者が居ただけど、オウガに殺されちゃってさ。

しかも、僕は彼女がオウガに襲われてるのに、何も出来なくてさ……。

情けなかったよ。それから、僕はハンターになるために修行した

のは……。

始めの内は、色々辛かったけど、彼女を失った時に比べれば、全然たいした事なかった。

僕は、今まで一人前のハンターとして、やって来たつもりだけど……。

流石に疲れたよ。だから、この戦いを最後にハンターは辞めるんだ」

いつもやる気の無さそうな、三上がそんな真面目な話をすると、不思議な感じがする。

結局、その後何て声を掛けていいのか分からず、沈黙が続いた。静かに時ばかりが、過ぎて行き天地もいつの間にか眠りについていた。

一方、静かで真つ暗な森の中で、焚き火に照らされながら休む神谷達の姿があった。

木々の間から吹き抜ける風が、焚き火を揺らしている。

皆が寝静まっている中、由美ただ一人が揺れる焚き火を見つめていた。

暫くすると、神谷が目を覚ました。

「んっ……。由美、まだ起きてたのか？」

「うん……。眠れなくて……」

小声で由美はそう言ったが、静かなせいか神谷の耳にははっきり聞き取れた。

欠伸をして、少し笑みを浮かべながら神谷は言う。

「好きなのか？ 天地の事が」

「エッ!？」

顔を真っ赤にしながら俯く由美を見て、神谷は笑っていた。恥ずかしそうに由美は顔を上げて、神谷の方を見ると小さく呟いた。

「あの……天地には……」

「ああ、安心しろ。天地には言わないから」

タバコを口に銜えながら、神谷はそう言った。

ゆつくりとタバコに火をつけると、由美の方を見て煙を吐いた。暫しの沈黙が続く。

その時、近くの茂みで物音が聞こえた。

ゆつくりと疾風丸を握る由美。

神谷は口に銜えていたタバコを、焚き火の中にはくと火虎神を手を取った。

微かに聞こえる物音は、次第に近づいてきている。

由美と神谷は立ち上がり、物音のする方を睨んでいた。

その時だ。由美と神谷の背後から1体の巨大なオウガが飛び出してきた。

完全に二人は不意を突かれた。

「なッ!？」 「ッ!？」

巨大なオウガは、太く長い棍で由美と神谷を殴り飛ばした。

由美と神谷は、足を地に着けたまま後ろに吹き飛んだ。

その音で、魁人・国道・黒川の三人が目を覚ました。

「騒がしいですよ……」

「ゆつくり寝かせてくれよ……」

「全くです」

三人は眠そうに欠伸をして体を起こした。その瞬間にオウガの存在に気付いた。武器を構えようとしたが、オウガの棍が先に三人の体を殴り飛ばした。

「ぐっ！」

三人は体勢を整えてオウガを睨んだ。焚き火の明かりがオウガの体を照らしていた。オウガは棍を右手に持ち、地面に突き立てた。

「俺は、六鬼神が一人！ 密迹^{みつしゃく}。」

絶鬼様の命により、貴様らの命を貰い受けるぞ！！」

焚き火を棍で消し去った。

辺りは一瞬で真っ暗になった。

光りを失った五人には、密迹がどこに居るのかわからなかった。

「チツ！ 気配は感じねえーし、敵の姿は見えねえーし、最悪だぜ」
「無駄口を叩いてる場合じゃないだろ」

暗闇の中で国道と黒川の声が響いた。

確かに、気配は感じない。

この闇に目が慣れるまでは、時間がかかりそうだった。暫く沈黙が続いていた。

皆、辺りを警戒しているのだろう。

木々の間を吹き抜ける風の音が静かに響くと同時に、魁人の顔に向って巨大な棍が飛んできた。

避ける事が出来ず、その棍は魁人の顔面を捉えた。

「グツ!？」

魁人の体が地面を引きずる音が闇の中で響いた。

暗闇の中で、密迹の足音が響き渡る。

その足音は国道に近づいてくる。

身を構える国道の背後から、風を切る音が走る。

「な…に…!？」

鈍い音が闇の中に響き、国道が地面に倒れる音がした。

次第に目が慣れてきて、薄らと状況が見えてきた。

魁人はゆっくり立ち上がり、額を流れる血を拭った。

「グツ……。油断した」

「大丈夫か！ 魁人」

ようやく暗闇に目が慣れた神谷が魁人に駆け寄った。

周囲に密迹の姿が無い。

疾風丸を鞘から抜いき身構える由美と、トンファーを軽く構える

黒川。

そして、黒川の後ろの木の傍に倒れる国道。

よく目を凝らして見ても、どこにも密迹の姿は無い。

「消えましたね……」

「だが、油断はするなよ」

「そうですね……」

水鮫神をゆっくりと構えながら、魁人は辺りを見回した。

暫く沈黙が続き、静かに風が流れる。
そして、足音が近づく。

「来るぞ！」

神谷がそう叫ぶと魁人・由美・黒川の三人は武器を構えた。
密迹が由美の後ろの茂みから飛び出し、由美に向って長く太い棍
を勢いよく振った。

風を切る音で、それに気付き由美は疾風丸でそれを防ぐ。
と、同時に鈍い音が響き渡る。

「目が慣れてきたようだな」
「クツ……」

由美の疾風丸と密迹の棍が、交差したままガチガチとぶつかり合
っている。

だが、明らかに由美の方が力負けしている。
由美と睨みあう密迹の横から、トンファーが振り下ろされた。
それに気付いた密迹は由美を弾き飛ばして、その勢いで背後に跳
んだ。

トンファーは空を切った。

「外しましたか……」
「不意打ちか……。まあいい」

そう言いながら密迹は黒川を睨む。
魁人と神谷の二人は倒れている由美に駆け寄った。

「大丈夫？ 由美さん」
「……うん。大丈夫……」

「しかし、素早い奴だ」

そう呟きながら神谷は密迹の方を見る。
軽く棍を回しながら、密迹は黒川を睨む。

黒川も軽くトンファーを回転させながら密迹を睨む。

黒川の右足が勢いよく地を蹴った。

それと同時に密迹も地を蹴った。

右側からトンファーが、密迹に振り下ろされる。

それを、軽く棍で弾く密迹に向って、左側からも一つのトンファーが振り下ろされる。

だが、それも軽く棍で弾き返される。

黒川は何度もトンファーを振り下ろすが、全て弾き返されていた。

「クッ!!」

「どうした？ まだ、一発も当たってないぞ」

「くっそッ!!」

黒川が力んだのを察知した密迹は、振り下ろされたトンファーを
思いつきり弾く。

トンファーを思いつきり弾かれた黒川の体が仰け反り返る。

仰け反る黒川の腹に棍を突き立てた。

「ぐはっ……」

お腹を押さえながら、数歩後退りした黒川は地に膝をつき血を吐いた。

一撃だった。

たった一撃で、体のアチコチが痛み動く事が出来なかった。

密迹は口元に不気味な笑みを浮かべながら次の獲物を探していた。

第三十六章 風に舞う 由美

静かで暗い森で密迹と睨みあう神谷達。

国道は気絶したまま動かず、黒川は密迹の一撃を喰らい動けずにいる。

「さて、次はどいつが相手だ？ 何なら三人一緒に掛かって来てもいいぜ」

「なら、お言葉に甘えさせてもらおうか」

火虎神を構えるとゆっくりと魁人と由美を見た。

疾風丸を構える由美と、水鮫神を構える魁人。

三人がゆっくりと離れ密迹を囲む。

「行くぞ！ 魁人！ 由美！」

「はい！」

「……はい」

三人は同時に地を蹴り密迹に迫る。

密迹の右方向から由美の疾風丸が振り下ろされる。

「ハッ！」

「甘いぞ」

「！？」

疾風丸は空を切り由美は密迹に投げ飛ばされた。

由美を投げた密迹に魁人の水鮫神が左方向から襲い掛かる。

「てりゃーっ！」

「その程度か？」

棍で水蛟神を抑えて、密迹は右手で魁人に殴りかかった。その拳を魁人は紙一重で避けていた。

「くっ！」

「魁人、下がれ！」

その声を聞くと同時に、魁人は密迹の棍を弾いて後方に跳んだ。完全にバランスを崩した密迹の右方向から、神谷の火虎神が襲い掛かった。

神谷は火虎神で密迹の右足の脰うでを殴った。

右膝を地についた密迹の顔に向って、火虎神が飛んできた。

神谷の手にはズッシリと重みのある手応えがあつた。

だが、火虎神は密迹の右手で完全に受け止められていた。

「なっ!？」

「この程度で俺に手傷を負わせられると思ってるのか？」

「危ない神谷さん！」

「!？」

神谷の顔面目掛けて、密迹の棍が襲い掛かってきた。

火虎神を掴まれ、密迹の棍を防げない神谷の前に、魁人が現われ密迹の棍を水蛟神で防いだ。

凄まじい衝撃が魁人の両手を襲った。

「ぐっ……」

魁人は歯を食い縛りそれに耐えていたが、2撃目は防げないだろう。

密迹は笑みを浮かべると、火虎神ごと神谷を持ち上げた。

「!?」

「神谷さん!？」

そう叫んだ魁人に凄まじい衝撃が襲い掛かり、後方に吹き飛んだ。勢いよく吹き飛んだ魁人の体は木々を何本か貫いていく。激しい音を立てて木は倒れていった。そして、密迹は持ち上げた神谷を地面に叩き付けた。

「ウツ」

地面の碎ける音と共に、神谷の口から真っ赤な血が舞った。

地面は碎けて神谷の体がめり込んでいた。

掴んでいた火虎神を神谷の顔の横に突き刺した。

「期待外れだな……」

「ぐっ……。悪かったな……期待外れで……」

神谷は小声でそう言って火虎神を掴むと笑みを浮かべた。

密迹はゆっくりを長く太い棍を振り上げて、神谷の顔の上に落とそうとしたが、体が動かなかった。

「ぐっ! 体が……」

「やっと捕らえたぜ……」

フラフラながら立っている国道が密迹を見ていた。

細い糸状の物が密迹の体に巻き付き動きを封じていた。

ゆっくりと立ち上がった神谷に、国道が半笑いしながら言った。

「ざまねえな」

「一番先にやられたお前に言われたくないな」

火虎神を地面から抜きながらそう言って笑った。

体を封じる糸状の物を、引き千切ろうと力を入れると、逆に体にめり込んでいた。

「ググツ……………」

「止めとけ。もがけばもがく程、そいつは食い込んでいくぜ」

「俺を……………なめるな……………!!」

怒りのこもった声でそう言った密迹から、凄まじい殺気が放たれ辺りを包み込む。

嫌な予感がした神谷は大声で叫んだ。

「国道！ 今すぐこの糸を解け！」

「はあ？ あんた、何言ってるんだ？」

「いいから、早く!？」

「!？」

遅かった。

凄まじい力が国道の糸を引っ張り、逆に国道の体が細切れにされた。

辺りに肉片と血が飛び散り、赤く染まっていた。

先程とは全く違い、凄まじい気配が体にピンピンと感じていた。

「こ…これが……………本気だというのか……………」

「行くぞ！ 人間よ！」

風を切る音がすると同時に、凄まじい衝撃が神谷の体に襲い掛か

った。

何とか火虎神で密迹の棍を防いだ神谷だったが、体は軽々と吹き飛ばされた。

木々を何本か貫き勢いは止まったが、その直後木々が倒れていく。

「グッ……」

ゆっくり立ち上がった神谷の前に、密迹が一瞬で現われ神谷の体を棍で宙に投げ飛ばした。

軽々と宙に舞う神谷の上空に移動した密迹は、棍を思いつきり神谷のお腹に突き立てた。

そのまま、神谷の体は密迹の棍と共に落下していった。爆音と共に土埃が巻き起こった。

地面は砕けて、密迹の棍だけが地面から突き出ていた。地面に着地した密迹は棍を引き抜きゆっくりと言った。

「少々やり過ぎたか……」

辺りをゆっくり見回してため息をつく。

立ち去ろうとした密迹の前に現われたのは、疾風丸を持った由美だった。

風で瓦礫が崩れた。

立ちほだかる由美を見て、密迹は鼻で笑った。

「フッ。お前が俺に挑むと言うのか？」

「私は……負けない……」

「ならば、掛かって来るがいい！」

由美が素早い動きで、密迹に斬りかかるが、密迹は棍で疾風丸を受け流していく。

鈍い音だけが、辺りに響き渡る。
余裕の表情で疾風丸を弾き返す密迹。
密迹はまだ気付いていなかった。
疾風丸の刃に風が集まっているのに。

「お前達ハンターの力なぞ、そんな物か！」

「本気……出すから……」

由美は小さくそう呟いた。

その声は疾風丸と棍がぶつかる音で掻き消され、密迹の耳には届かなかった。

後方に跳んだ由美は、そのまま密迹と距離を取った。
距離を取った事など密迹は全く気にしていなかった。

「静かに流れる風よ……。私の体を、その清らかなる風で包み込み
……。」

素晴らしき舞を躍らせたまえ……。華風蓮舞かふうれんぶ」

疾風丸に向って小声でそう言うと、今まで疾風丸の刃を包んでいた風が、由美の体を包み込む。

その風は、昴の時と違い、静かで清らかな風だった。

静かな風で由美の髪が舞い上がり、ユラユラと揺れている。

密迹は由美が何をしているのか全く分からなかった。

ゆっくりと疾風丸を構え直す。

そして、ゆっくりとした口調で言った。

「……行きます」

「!?!」

離れていた場所に居た由美が一瞬にして、目の前に現われたので

密迹は反応する事が出来なかった。

すぐにその場を離れたが、いつの間にか右腕を斬られ、血が出ていた。

「な…何をした！」

「……………」

何も答えず由美はゆっくりと体を動かしていた。

その由美に向って、密迹は棍を振り抜いた。

だが、それを由美は舞を踊るかの様に、避けて疾風丸で棍を弾き飛ばした。

そして、一瞬にして密迹の死角に現われた。

「クッ！」

疾風丸が密迹の右足を斬りつける。

その瞬間に血が花びらの様に舞い散った。

苦痛に顔を顰めた密迹は、やはりすぐに由美から距離を取る。しかし、右足を斬り付けられて、動きが少し鈍くなっている。

「どういう事だ。先程とは動きが違い過ぎるぞ……………」

またも、由美は何も言わなかった。

何が起きているのか、わからない密迹は次第にイライラを募らせていた。

どんなに距離をとっても、由美は死角に現われ密迹を斬りつける。その度に血が花びらの様に散っていくのだ。

「グッ……………。俺を、なめるな」

「終幕です」

密迹が突っ込んでくると同時に由美はそう呟き疾風丸をかざした。風を切る音と共に、由美に向って密迹の棍が飛んで来る。

だが、棍は空を切りそこに由美の姿は無かった。

辺りを見回すが、やはり由美の姿は見当たらなかった。

その時、上空から由美の声が響き渡った。

「舞い散れ！！ 疾風乱舞！！！」

疾風丸の刃の周りには竜巻が出来、由美が疾風丸を振り下ろすと一瞬にして風の刃と化し密迹の体を斬りつけていく。

密迹の体を無数の風の刃が襲い、その度に血飛沫が舞い上がった。だが、その攻撃を密迹は耐え凌いだ。

「フ…フハハハハッ。耐え凌いだぞ。お前の最後の攻撃を……」

密迹の足元は自分の血で真っ赤に染まっていた。

地面に着地した由美は、足が纏れて倒れた。

ゆっくりと、由美に近づこうとする密迹の背後で一人の男の音が響いた。

それは、神谷の声だった。

「どこに行くつもりだ？」

「お前は!？」

驚きを隠せないと言う表情で振り返り神谷を見た。

確かに神谷は地面に叩き付けたはずだ。

あの高さから地面に叩きつけられて、生きていられる人間がいるのか？

そう言う疑問を持ちながら神谷をマジマジと見ていた。
ゆっくり、タバコを銜えると、火虎神から火を出して、タバコに
火を点けた。

「仲間を傷つけた罪は重いぞ」

神谷はそう言って密迹を睨み付けた。

第三十七章 意気投合 そして、次なる敵

静かな森の中で睨み合う神谷と密迹。

タバコの煙をゆつくりと口から吐きながら、神谷は歩き出した。いたる所から血が出ている密迹はフラフラながらも棍を構えた。

緩やかな風が二人の間を吹き抜ける。神谷の前髪とシャツが風で揺れている。

苦しそくに顔を顰めながらも、密迹は神谷に向って棍を振り回して突っ込んでいく。

「俺は人間には負けん！」

気迫のこもった声でそう叫び、密迹の棍が神谷の右脇腹に向って飛ぶ。風を切る音と共に棍は空を切り、風を巻き起こし、土や落ち葉を舞い上がらせる。

空を舞う神谷が、密迹の頭目掛けて火虎神を振り下ろす。密迹の左の拳が振り下ろされた火虎神に突き出された。神谷の火虎神と密迹の左の拳がぶつかり合う。

その衝撃で神谷の体は後方に吹き飛び、一方の密迹の左腕からは血が噴出した。

「グッ……」

神谷の体は木の上に落ちた。木の葉がクッションとなり、ダメージは軽減されたが、口に銜えていたタバコは、いつの間にかどこかに飛んでいってしまった。

木の上から飛び降りた神谷は、軽く右肩を回しながら首の骨を鳴らしていた。

「いや〜。びつくりした。まさかパンチで弾き返されるとは」

軽く笑いながら神谷は火虎神を構えた。

すると、火虎神の両端が真つ赤な炎に包まれた。暗い森の中を、その炎が照らした。先程までいた森の中とは、思えない程風景が変わっていた。地面はいたる所が砕けて陥没していて、木々は無残にへし折られている。

密迹の左腕は力が入らず、動かなくなっていた。

「お…お前、何をした……」

「何をしたって、言われてもな」

左手で頭を掻きながら笑っている神谷に、密迹は怒りの声を上げた。

「ふざけるな！ 人間如きが!!」

「その人間如きに、お前は敗れるんだ」

「ふざけ ！？」

叫ぼうとした密迹の左腕が、ボコボコつとコブの様に膨れ上がった。何が起こっているかわからないが、激しい痛みと燃え盛る様に腕が熱かった。

「グオオオツ」

左腕を押さえ唸り声を上げながら苦しむ密迹。

それを見ながら、神谷はゆっくりとポケットからタバコを取り出して、口に銜えると火虎神で火を点けた。タバコから白煙がユラユラと空にあがる。

左手でタバコを持つと、ゆっくり口から煙を吐き、タバコを地面

に捨てて足で踏み、火を消してゆっくりと呟いた。

「爆虎」

それと同時に密迹の腫れていた左腕が、更に腫れ上がり一瞬にして爆発して肉片が飛び散った。左肩からは大量の血がポトポトと地面に滴れ落ちる。密迹の足元は自分の血で真っ赤に染まり滑りやすくなっていた。

「ウウツ……。これが、人間の力だというのか……」

「さて、お前も疲れたろ。そろそろ安らかに眠ってくれ」

「黙れ！！俺は……」

強気に叫ぶ密迹だが、血の流し過ぎて足がもつれて、大きな音を立てて地面に倒れこむだが、その顔は神谷の方を向いたまま、鋭い眼光で睨みつけている。

ゆっくりとした足取りで神谷は密迹の方に歩み寄ってくる。近づく神谷に密迹は叫んだ。

「グッ！ どうした。さっさと止めを刺せ！」

「ちょっと、気が変わってな」

「き、気が変わっただと！ ふざけるな！！」

「まあ、そう言うな」

笑いながらそう言った神谷は密迹の顔の前に腰を下ろした。体の自由の利かない密迹は神谷を前にして何も出来ないでいた。体を動かそうともがく密迹に神谷が笑いながら言う。

「オイオイ。動いたらその分、血が流れるぞ」

「黙れ！ 人間に心配される覚えは無い」

「まあまあ。お前達オウガだって、元は人間から生まれた者じゃないか」

「俺達は生まれたくて生まれた訳じゃない」

密迹はそう言っつて神谷を睨む。

確かにオウガは生まれたくてこの世に生まれてくる訳じゃない。人の心の闇が溜まりに溜まって、初めてオウガは生まれる。そして生まれてきたオウガは、血を求め肉を求め人々を襲う。これが、闇から生まれたオウガの性なのだ。

もちろんそれを神谷は知っていた。だからこそ、密迹と話したいと思っただけだ。

「そうカツカするなよ。俺は、お前と話したいだけだ」

「話ただけだと!？」

「ああ。お前は他のオウガとは違って、自分の力を試す為にハンターと戦ってるって感じがすんだよな」

「人間のお前に何が分かる」

「人間とかオウガとか、関係ないさ」

ポケットからタバコを出すと口に銜えた。そして、火虎神で火を点けて煙を吹かしていた。

そんな神谷を見ると、不思議と笑いが込上げてきた。

「ふ…ふはははは…」

急に笑い出した密迹に神谷も続けて笑い出した。二人の笑いが森中に響いた。

その様子を木にもたれながら見ていた由美は小さく呟いた。

「怪我…大丈夫?」

「あれ、気付いてたの？」

魁人の声が木の上から聞こえたかと思うと、由美の横に降りてきた。着ていた着衣はボロボロに裂けて、体中傷だらけだった。それは、由美も一緒に、裂けた着衣の隙間から下着が見え隠れしていた。そのせいか、魁人は由美の方を見ない様になっていた。

「どうか……したの？」

「い……いや……。どうかしたのじゃなくてさ……」

恥ずかしそうにしている魁人の視線で、由美もようやく気付き、裂け目を押さえながら顔を真っ赤にしていた。魁人は背を向けて叫んだ。

「み、見てないよ。全然いてないから！！」

激しく両腕を上下に振りながら、見てないと否定する魁人だが、確実に見えていただろう。

「魁人の……エッチ……」

由美は小さく呟いた。その言葉は魁人の心に深く突き刺さった。落ち込み木にもたれこんだまま、魁人は動かなくなった。

二人がそんな事をしている中、神谷と密迹は意気投合していた。笑いながら話していた神谷と密迹が急に静かになった。

「なあ、お前は何で絶鬼の配下についたんだ？」

「何でって……」

「何か理由があるんじゃないのか？」

「そうだな。元々、俺達は封印されてたのを、絶鬼が解いたって感じだな」

「ふん」

頷きながら神谷は新しいタバコを口に銜えた。これで、何本目のタバコになるだろうか。一体、どこにそんなにタバコが入っているのかが不思議なくらいだ。

神谷はタバコに火を点けてゆっくりと煙を吐く。白煙は風に吹かれて流されていく。

「それで、絶鬼は何を考えてるんだ？」

「さあな。だが、一つ言える事がある」

「何だ？」

「あいつはオウガじゃねえ」

密迹がそう言うが、神谷にはさっぱり分からない。絶鬼がオウガじゃないなら、なぜオウガの指揮をとるのか。それを、訊こうとした時だ。

「あぶねえ！！」

密迹の声が響くと同時に右手に持っていた棍が飛ぶ。棍が割れる音が響いた後、木っ端微塵になった棍の破片が神谷の頭に降り注いだ。その音の方を魁人と由美は見る。

二人の視線の先は真っ暗で何も見えない。だが、確かにその先に誰かがいるのが分かった。暗闇の中で枝の折れる音がした。何者かが落ちていた枝を踏んだのだろうか。

暗い森の中に微風が吹き、木々の葉を揺らしざわめかせる。

神谷の横で倒れていた密迹がゆっくりと立ち上がった。その瞬間

に、左肩から血が垂れる。

そして、苦しそうな声で言った。

「奴が……来た様だ……」

「奴？」

ゆっくりと首を縦に振る密迹。

鎖を振り回す音が響く。風が巻き起こり、木々が更にざわめく。落ち葉が舞いあがり神谷・魁人・由美の髪を揺らす。

鎖の伸びる音がすると共に、暗闇の中から巨大な鉄球が物凄いスピードで飛んできた。鉄球は神谷の顔の横を通り過ぎた。その瞬間に突風が吹き神谷の体がよろめいた。

何かの潰れる音が神谷の背後から聞こえると、同時に真っ赤な血が飛び散った。生暖かな風と共に鉄球が神谷の横を通り戻っていく。鉄球が神谷の横を通り過ぎる時、風と一緒に血の匂いが漂った。まさかと思い、神谷が振り返るとそこには顔の潰れた密迹が力なく立ち尽くしていた。

「密迹!?!」

ゆっくりと両膝が地面に落ち、そのまま上半身が前に倒れこんだ。地面に広がった赤い血が、密迹が倒れると同時に飛沫を上げる。石化する密迹の体。地面に広がっていた密迹の血は、微粒子となり風に舞っていった。

第三十八章 六鬼神 那羅延 1対1の戦い

密迹の体は完全に石化して、微風によって崩れていく。神谷はまだ、密迹に訊きたい事はあった。

『絶鬼がオウガじゃないとはどういう事なのか』
『奴は何をしようとしているのか』

色々な事が頭をよぎり、いつの間にか神谷は石化した密迹の体の横に座り込んでいた。石化した密迹の体に触れると、簡単に崩れ落ちていく。折角、話の分かりそうなオウガにあったというのに……。神谷のもとに魁人と由美が駆け寄ってきた。

「神谷さん……」
「……大丈夫？」
「俺は平気だ……」

微かに声が震えている。神谷の背中しか見えていないが、その背中中は泣いている様だった。声を掛けようとしたが、言葉が何も見つからなかった。由美も魁人も黙って神谷の後ろ姿を見ている。

その時、暗闇の中から鎖を回す音が響き渡った。重い足音が徐々に近づいてくる。

武器を構えようとする魁人と由美の二人を、制止させた神谷はゆっくり立ち上がった。暗闇から低く野太い声が聞こえてきた。

「六鬼神ともあろう者が、絶鬼様を裏切ろうとは……」

暗闇の中から姿を現したのは、体中傷だらけのオウガだった。右手に持った鎖を頭上で回して、その鎖の先には巨大な鉄球がつ

いていた。鋭い目つきで三人を見ながら口元に笑みを浮かべる。

その時、横から黒川が威勢のいい雄叫びを上げながら、トンファ
ーでオウガに殴り掛かって行く。

「ウオオオオツ」

「止め……」

それを、止め様と叫ぼうとする三人だったが、すでに遅かった。

上空を回っていた鉄球が回転しながら黒川に飛んでいく。両方のト
ンファーでそれを受け止めようとしたが、その勢いは凄まじく、ト
ンファーが折れる音か、はたまた黒川の腕の骨が碎ける音か、分か
らないが物が碎ける音が響いた。二発目で、黒川の頭は無残に潰さ
れ頭蓋骨は碎け散った。

神谷・魁人・由美の三人は何も言えなかった。ただ、怒りだけが
湧き上がってきていた。

鉄球に付いた黒川の血がアチコチに飛び散っていた。血の匂いが
いたる所からして、とても臭かったが、この匂いがオウガにはたま
らない様だ。

「この血腥さ（ちなまぐささ）が俺の力を増幅させる。さあ、次は
誰が顔を潰されたい」

低く野太い声が森の中に響く。ゆっくりと一歩前に出た神谷は、
タバコを口に銜えてオウガの方を睨み付ける。そして、魁人と由美
にだけ聞こえる声で言う。

「こいつは、俺一人でやる。お前たちは手を出すな」

「でも……」

何か言いたげな魁人の肩を由美が掴んだ。魁人が由美の方を見る

と、由美が首を横に振りながら小さな声で言った。

「ここは……神谷に……任そう」

「でも……」

「大丈夫……。私達は……見守ろう」

そう言って由美は魁人の目を見る。その由美の目は、何かを訴えかけていた。魁人はその目に負け、ため息を吐きながら言った。

「わかった。見守ろう」

「魁人。俺に何かあったら由美を連れて天地達と合流しろ」

「何言ってるんですか。その時は、僕が奴を」

「まあ、そうはならないと思うがな」

笑いながら神谷はそう言ったが、目が笑っていなかった。火虎神の両端の虎の彫刻に真っ赤な炎が集まった。そして、その炎でタバコに火を点けた神谷は大声で言い放つ。

「このタバコを吸い終わる前に、お前は地面に倒れる」

「そのタバコが吸い終わる前に俺を倒せると言うのか？ 面白い」

「その前に、聞きたい事がある。お前も六鬼神なのか？」

「ああ、俺は六鬼神の一人那羅延ならいえん」

そう名乗ると同時に鉄球が飛ぶ。魁人と由美に離れる様に言うと、飛んで来る鉄球に向って火龍神を突き出す。回転する鉄球に当たる、火虎神の虎の彫刻が嫌な音をたてながら火花を散らしている。鉄球の回転が弱まったのに気付いた那羅延は、鎖を引き鉄球を手元に戻した。

戻ってきた鉄球を左手で受け止めた那羅延は、鉄球のあまりの熱さに思わず鉄球を地面に落としてしまった。

「ウツ!？」

鉄球は地面に落ちると、凄まじい地響きを起こし、地面にめり込む。地面にめり込んだ鉄球からは白い煙があがっていた。

左手首を右手でしっかり掴み、顔を歪めている那羅延の真正面から、火虎神を回転させながら、突っ込んでくる神谷の姿が見えた。左手の痛みを堪えながら、神谷に向かって右の拳を振り下ろした。振り下ろされた拳に向かって、神谷は火虎神を振る。風を切る音から遅れて、しなつた火虎神が那羅延の右の拳に直撃する。重みのある感触が手に伝わる。

その瞬間に、那羅延の体が後方に勢いよく吹き飛び地面に倒れた。

「ゲツ……」

ゆっくり体を起こす那羅延に向かって、口に銜えていたタバコを飛ばし、白煙を口から吐きながら神谷は言い放った。

「ちゃんとタバコを吸い終わる前に倒したぞ」

「ふざけるな。俺はまだ死んでいない」

「言つたろ? タバコを吸い終わるまでに、お前は地面に倒れるつて。誰も、お前を殺すなつて言つてないし、俺も疲れたし休みたいからな。後は……。魁人! 由美! 任せるぞ」

那羅延に背を向けて笑いながら、魁人と由美に手を振っていた。そんな神谷に向かって魁人の檄が飛ぶ。

「ちよ! ちよつと! 何考えてるんですか! さっきの言葉は何だつたんですか!」

「はあ? さっきの言葉? 俺、何か言つたか?」

首を傾げながら考え込む神谷。

そんな神谷に向って背後から、那羅延の右の拳が飛んできた。その拳を後ろ向きそのまま、避けた神谷は火虎神で素早く那羅延の顎を打ち上げた。那羅延の体は後方に浮き上がり地面に倒れた。

「ウウツ……」

軽く首を振りながら、視点を合わせる那羅延から離れていく神谷。鎖を引つ張る音が微かに聞こえた。と、同時に那羅延が叫んだ。

「俺を甘く見たな！ 死ぬ」

巨大鉄球が神谷の背中に向って飛んできた。鎖の伸びる音が続き、鉄球が神谷に迫ってくる。だが、神谷は最小限の動きでそれを右に避けた。

鉄球は神谷の左横を通過していき、そのまま何本かの木をへし折った。木が倒れた衝撃で風が起き、神谷の髪がなびいた。

鎖が引つ張られ、鉄球が那羅延の所に戻っていく。轟々しい程の音をたてながら、鉄球の付いた鎖を自分の頭上で回す那羅延。すでに、神谷の挑発によって我を忘れてしまっている。

「ん〜っ。魁人。お前一人で十分か？」

神谷は伸びをしながら、木の根の上に腰を据えて魁人にそう言った。それに対し、自信の無さそうな魁人の声が返ってくる。

「十分なわけ無いでしょ！ 神谷さんが挑発するから……」

「何、大丈夫だ。心配するな」

「ちよつと！ 人事だと思つて！」

笑いながらポケットからタバコを出し、口に銜えた神谷はやはり火虎神で火を点けて、白煙を口から吹く。白煙は風に乗り空に舞うのんびりとしている神谷に、戦う気が無いのが分かった魁人は、渋々那羅延の相手をする事にした。

しかし、那羅延の鋭い眼光は神谷に向いたままだ。ため息交じりの声で魁人は那羅延に叫ぶ。

「ここからは、僕が相手をします……」

「ふざけるな！ 俺の相手は奴だ！」

那羅延はそう言って、鉄球を神谷に向かって投げた。こうなる事は、大体分かっていた魁人は、腰を低くして水蛟神を引いた。水蛟神の周りに水が集まり渦巻き始める。

一方、鉄球は回転速度を増しながら、物凄いスピードで神谷に向うが、神谷は顔色一つ変えずタバコを吸っている。

「噛み砕け！ 水牙蛟！」

引いていた水蛟神を一気に突き出した瞬間、水が弾ける音と共に水蛟神の周りに渦巻いていた水が蛟の形になり、物凄い勢いで鉄球に喰らい付いた。その威力は凄まじく、硬い巨大鉄球など一瞬で噛み砕かれていた。修行前とは威力もスピードも桁違いだった。噛み砕かれた鉄球は、無残に地面に破片だけを残していた。

「あの鉄球を……」

「間に合った……」

息をゆっくり吐きながら、魁人は額から流れる血を拭った。まだ、密迹のダメージが残っているのだ。

やはり、天地の様に簡単に痛みが引く訳が無かった。

「うっ。こっちだって、辛いのに……」

ブツブツと愚痴をこぼしながらも、しっかりと那羅延に向っていき、魁人だった。

第三十九章 水龍神の化身

静かな森の中、魁人と那羅延が対峙していた。

風で落ち葉が舞い、木々がざわめいている。那羅延の持つ鎖が地面に引きずられて、ジャラジャラと音をならしている。ジリジリと右回りに動きながら、相手の出方を伺っていた。水蛟神を握る魁人の手は汗で湿っていた。自分の心臓の音がなぜか大きく聞こえ、他の音が小さく聞こえた。

その時、風を切る音がすると同時に、那羅延の持っていた鎖が魁人の右腕に巻きついた。全く気付かなかった。完全に魁人は那羅延のペースに飲まれていた。

「捕まえたぞ」

「グッ！」

鎖を解こうとする魁人だが、その瞬間に体が前方に思いつきり引っ張られた。その勢いを殺さず、那羅延の蹴りが魁人の体を捕らえる。蹴りをくらい吹き飛ばす魁人の体を、また引っ張るとまた蹴りを浴びせた。

体勢を整える事が出来ず、魁人は何度も引っ張られ、蹴り飛ばされていった。

「どうした！ さっき鉄球を砕いた様に俺を砕いてみる！」

不気味に笑いながら引っ張られた魁人の顔面に膝蹴りを見舞った。

「グハッ……」

口から血を吐きながら、魁人は吹き飛び地面に倒れた。蹴りを何

度もくらい、もう体が動かなかった。

疾風丸を抜こうとした由美に神谷がそつと言う。

「まだだ。由美」

「でも……」

「大丈夫だ。魁人を信じろ」

「……うん。分かった」

疾風丸の柄から、ゆっくり手を放し魁人を見守る事にした。

ゆっくりと立ち上がった魁人は唾を地面に吐いた。口の中が切れて、血が出ているのだろう。唾は真っ赤に染まっていた。

体が……足が……全身が重い。そんな事を思いながらも魁人は水蛟神をゆっくり構える。だが、那羅延がそう簡単に、水牙蛟を撃たせてくれる訳が無かった。

鎖を上にとくと、魁人の体が軽々と宙に浮いた。空中で身動きの取れない魁人を、振り回して地面に叩き付けた。地面が割れて魁人の体が瓦礫に埋もれた。

「フツ……。何て歯ごたえの無い」

「油断してると、喰われちまうぞ」

神谷は余裕をかましている那羅延に、そう言って笑みを浮かべていた。

「何を、言っている。奴は瓦礫の下で……!!?」

そこまで言っつて、ようやく気付いた様だったが、すでに遅かった。鎖を引っ張ったが、その先に魁人の姿はなく、鎖を噛み砕いた後があった。

魁人を見失った事で、初めて自分が不利だと那羅延は悟った。

地面はいたる所が割れていて足場が悪く動き難く、夜中で視野が狭くなるため魁人を探せずにいた。

一方の魁人はまだ瓦礫の中に埋もれていた。先程地面に叩き付けられた際、右足を負傷して動く事が出来なideいたのだ。

「痛ッ……………」

激痛に表情を顰めるが、歯を食い縛りその痛みを我慢していた。ジリジリと那羅延の足がすれる音がはっきりと聞こえていた。そのお陰で、どこに那羅延がいるのかはつきりと分かっていた。

「全部、神谷さんのせいだ……………。あの人が挑発しなければ、こんな風にはならなかったのに……………」

小声でぼやきながら魁人は神谷への怒りを募らせた。魁人が神谷への怒りを募らせていると、急に外が騒がしくなった。魁人が見つからない事で那羅延が暴れだしているのだろう。

魁人の予測通り、那羅延は鎖で魁人の埋まっている瓦礫の山を殴っていた。瓦礫が崩れ更に魁人の体にのしかかってきた。流石に限界だった魁人は、痛い右足をかばいながら、瓦礫から這い出てきた。

「はあ…はあ…」

「見つけたぞ」

目が霞み体に力が入らなかった。那羅延が3体に見えた。実際、1体なのだろうが、ダメージの受けすぎで視点もあってなかった。残り体力からすると、水牙鯨を撃てるのは精々3回が限界だろう。

「そろそろ、危ないかな」

「どっつ……………するの？」

「うん。どうするか？」

「私……行くね……」

小さく呟いた由美が一步踏み出そうとした時、神谷が魁人に向けて大きな声で叫んだ。

「魁人！ あの封印は解禁だ！ 思う存分使っていいぞ！」

「今更ですか……。それに、思う存分って……。今の僕の体じゃあ、一発が限界だよ」

小さい声でそう言った魁人の声は、もちろん神谷には聞こえていなかった。アッって何って目で由美が神谷を見ていた。神谷は

「見てれば分かるさ」

と、言っただけの様にタバコを口に銜え、白煙を撒き散らしていた。

魁人は水蛟神の刃の鮫の刻印に向って小さな声で唱える。

「清く穏やかな水は、全てを潤し癒しをあたえ、時に激しく全てを飲み込む。」

この槍に封じられし悪しき鮫。目覚め我の刃やいばと化せ！」

凄まじい程の蒼い光りが水蛟神の刃から放たれ、那羅延は右腕で目を覆った。神谷はサングラスを掛けて光りを遮り、由美は完全に目をとじていた。その光りの中で魁人の声が響き渡った。

「出ですよ！ 水龍神の化身・水蛟！」

大地に向って水蛟神の刃を突き刺す。蒼い光りはおさまり、代わ

りに地響きが起っていた。何が起るか全く予測が付かなかった。

「な…何が起っている!？」

那羅延は激しく揺れる地面に手をつけて、体勢を立て直そうとしていた。魁人の足元からゆっくりと、蒼き鋭い眼光の水の鯨が出てきた。その歯は鋭く尖り、何でも噛み砕きそうだった。

「アレは……」

「アレは、水鯨だ。あの槍に封印されていたのを一時的に開放したんだ」

「そんな事……出来るの？」

「ああ。かなり体力は消耗するが、出来るには出来る。だが、奴を使うか、奴に使われるかは、持ち主の力で決まるんだがな」

「それじゃあ……」

「まあ、魁人は大丈夫。多分」

「多分って……」

いい加減な神谷に由美が、ついに冷たい視線を送った。由美の冷たい視線は、他の人にやられるよりも冷たく、体中が凍え本気で落ち込む。

そんな時、澄み渡る低音の音が響いた。それが、水鯨の声だとすぐに分かった。

「俺の封印を解くとは、何の用だ」

「一暴れしてもらおうよ……」

「そのボロボロの体で、俺を扱っ事が出来るのか？」

「いや。今回は、君に全てを任す……。倒す敵は……」

ゆっくりと那羅延に指差す。水鯨は鋭い眼光で那羅延を見る。そ

の瞬間、那羅延が一步後退りすると、動きを止めた。澄み渡る低音の音が、少し笑いを含みながら言う。

「奴一人か……。だが、俺に任せていいのか？」

「ああ、大丈夫だ。僕の体力も限界だから、早めに終わらせてくれ」「良かるう」

水鮫の尾が激しくうねり、一瞬で那羅延の体にぶつかった。その肌に触れた瞬間に、那羅延の体からは真っ赤な、血飛沫が上がる。水鮫は素早い動きで、那羅延の体に何度も体当たりをして、血飛沫を上げさせた。

「ウア……グツ……」

口から血を吐きながら、フラフラとしている那羅延。辺りには那羅延の血が飛び散っていた。

圧倒的な力を見せる水鮫に、由美と神谷はただただ感心するしかなかった。その時、か細い掠れた声で魁人が言った。

「も……もう……もたな……いぞ……」

「分かっている。これで、終わりだ」

水鮫はそう言うと、大きな口を開き那羅延を噛み砕いた。水鮫の透通る蒼い水の体が、真っ赤に染まった。と、同時に水鮫は弾け那羅延と一緒に消滅した。

力を使い果たした魁人は地面にゆっくりと腰を下ろした。大量の汗で体中びしょ濡れだ。

由美は破けた衣服をいつの間にか着替えて、魁人に駆け寄った。

「大丈夫？」

「う…うん。一応ね……」
「ギリギリじゃねえか」

笑いながらそう言う神谷に、魁人は薄らと殺意を覚えた。誰のせいで、こんな事になったと思っっているのだ。そんな事を思ったが、それを叫ぶ力は残ってなく、激しい睡魔に襲われた。魁人はそのまま眠りについてしまった。

「寝ちゃった……」

「しかし、こんな場所じゃ寝れないよな」

「……そうですね」

二人はそう言って辺りを見回した。大量の木々が無造作に倒れ、地面は割れ、血腥かった。

とりあえず、国道と黒川の墓を簡単に作ってから、その場を移動する事にした。

すでに、朝日が顔をだし空は明るくなり始めていた。

第四十章 合流

結局、一睡もしないまま由美は神谷と森の中を歩いていった。

腰ほどの高さまで伸びた草の中を、足元に注意しながら二人は進んでいる。魁人は神谷の背中に、担がれ寝息をたてている。

緩やかな風が二人の進む草の上を撫でる様に吹き抜ける。草の匂いの先に海の匂いがした。その事で、進む先には海がある事が分かった。この島に上陸した岸に出るのか、はたまた、違う場所に出るのか全く分からないが、薄暗い森の中から出られたらな、それではよかった。

前進するにつれ、波の音も聞こえてきて、風に乗って潮の香りが漂ってきた。

茂みから聞こえる足音で、天地は目を覚ました。焚き火は消えて、灰と炭だけが残っている。昨夜までは黒雲がかかっていた空も、澄み渡り輝いていた。草を踏む足音は次第に近付いて来る。

鞘に入れたままの五龍神で、昴・神宮寺・三上を突付き起こした。昴はまだ眠そうな虚ろな目をしているが、一方の神宮寺は伸びをして首の骨をポキポキ鳴らしている。三上の方は　まだ、起きていない。

茂みが揺れて足音が早足になる。その音で、昴と神宮寺は立ち上がり武器を構える。

「な…何？」

「さあ？」

「さあ…」

「俺もさつき起きてな」

寝癖でボサボサの頭をしている天地をみて、昴は納得した。

天地達三人は、海に背を向けてしつかりと茂みを見る。道幅が狭いため、いきなり飛び出してきたら対応が出来ないだろう。

その時、茂みガサガサと揺れて、由美が飛び出してきた。

「天地！」

「エッ！？ 由美」

驚きの声を上げた天地は五龍神の柄を握る手を緩めた。茂みから飛び出した由美は、天地に抱きついた。あまりの事に、驚いた天地は後ろに仰け反る。その瞬間、ある事に気付いた。

それは、自分のすぐ後ろが海だと言う事に。気付いたのが遅かった。

天地はバランスを崩し、抱きついてきた由美と一緒に海に、落ちそうになるが、とっさに由美を突き飛ばした。

「クッ！」

「キャッ」

由美が地面に倒れると、昴と神宮寺が駆け寄り、天地の方を見て叫んだが、そこには天地の姿はなく、波の音と水飛沫だけが上がっていた。

「あっ！？」

二人もようやく事態が飲み込めて、海を見た。荒い波に飲み込まれながらも、天地は必死に海面に顔を出している。

「だいじょーぶ？」

「ウッ…、プハッ…」

「返事が無いわね」

昴はそう言っつて神宮寺と顔を見合わせて笑っている。激しい波で、声を出す事の出来ない天地は手を振って、二人に助けを求める。

「あつ、手を振ってる」

「何、楽しんでるのかしら？」

「私達も振り返しましょう」

「そうね」

そう言っつて昴と神宮寺は、天地に手を振り返す。確実に、天地を見て楽しんでいる。もちろん、助けを求めている事は知っているのだ。由美は何も言わないで、波と葛藤する天地を見て笑っていた。

そこに、ようやく魁人を負ぶつた神谷が茂みから出てきた。昴と神宮寺は神谷の方を見る。いたる所に草の葉が付いていた。

「はあ……はあ……」

「どうしたの？ 息荒げちゃって」

「あつ？ いや、お前らの声があったから、走ったのはいいが、この草で足元が見えなくて転んでな……」

「それで……」

ゆっくりと神谷の足元から頭の先までを神宮寺は見る。

そして、神谷の背中の上で寝る魁人に気付いた昴が何か冷たい視線を神谷に送る。ズキズキと刺さる昴の視線を気にせず、笑いながら神谷は魁人をおろした。冷たい視線を送る昴の肩を由美が二度叩いて言っつ。

「あの……天地が……」

「ちよっと待ってて」

「でも……」

小さな声でそう言って由美は海を見る。そこに、天地の姿は無く、白い波が蒼い海に線を描いていた。いたって冷静な由美は、もう一度昴の肩を二度叩く。

「何？ 由美」

振り向いた昴に由美は海を指差して小さく言った。

「天地が……」

最後の方は波の音で聞き取れなかったが、海を見ただけで状況はわかった。昴の甲高い悲鳴の様な声が辺りに響き渡る。

「キヤーーツ！ てててて、天地が！！」

「ンツ？ そう言えば、天地の姿が見えないな」

「アーツ！ そうだ、天地は海に！？」

昴の悲鳴で天地のいない事に気付いた神谷は、辺りを見回して天地の姿を探している。その横で、神宮寺が大声で叫んだ。その叫び声で、眠っていた魁人が目を覚まし、自分の目の前にいる昴と神宮寺の姿に驚き声を上げた。

「な、何で昴と神宮寺さんが！？」

「おっ、目を覚ましたか」

何食わぬ顔で笑いながら神谷は魁人の顔を見ていた。その神谷に掴みかかり、魁人は小さく低い声で問う。

「どついつ事ですか？ 神谷さん」

「ど、どついつ事って……？」

「どついつ、ここにいますか？」

「いや、俺等三人じゃあ、不安だろ？ だから、天地達と合流したんだが、天地の姿は見えないな」

話題を変えようとする神谷に、魁人が更なる尋問をする。

「それじゃあ、最初から、天地君達の場所を知ってたんですね」

「いや、それはだな……」

口ごもる神谷を、睨みつける魁人。そんな二人の耳に飛び込む昴の悲鳴。

「キヤーツ！」

視線が一瞬にして昴の方に向く。緑色の海藻が張り付いた腕が、昴の足に伸びていた。神谷と魁人が同時に立ち上がり、武器を構えるが、まだ傷が完全に癒えていない魁人は、目の前が眩み地に膝をついた。

その瞬間に海の中から水飛沫を上げながら、緑の海藻で顔を隠した奴が出てきた。それを見た瞬間に昴の叫び声と鉄拳が飛んだ。

「キヤーーーーーツ」

鋭い鉄拳は鈍い音を響かせ、その度に昴とは違う悲鳴が聞こえた。

「ギヤーーーーーツ」

何度か、止めに入ろうとした由美だったが、なかなか切り出せず、

ただただオドオドするしか出来ないでいた。オドオドする由美の姿を見て、魁人は昴がサンドバッグにしているのが、天地じゃないかと気がつき、昴を止めたが、海藻の下の天地の顔は、ボコボコになっていて誰なのかわからない顔になっていた。

「どう言つつもりだ……」

水龍神で傷を癒している天地は、ムスツとした顔で昴を睨んでいた。ようやく、天地の顔の傷も引き原形が見えてきた。ここまで、回復するのに3〜4時間程度の時間を費やしていた。

そんな天地の顔を見ながら昴は、笑って話を逸らそうとしていた。

「由美。知ってたなら、天地だって教えてくれてもよかったのに」

「教えたよ……」

「え〜ッ！ 嘘よ」

「本当」

「いつ？」

「天地が……岸に辿り着いたって、波の音で……聞こえなかった？」

そう言って首を傾げる由美。ため息を吐き呆れ返る昴に、天地の鋭い言葉が突き刺さる。

「ちゃんと確かめろ！ 五龍神だって持ってたろ！」

「そんなの知る訳無いじゃない！ 大体、殴られる前に海藻取るとか、声を出すとか出来なかったわけ！」

「叫ぶ前に、お前が悲鳴あげて殴りかかってきたんだろ！」

大声でもめている二人を見ながら、神宮寺は呆れていた。絶鬼との決戦が近いというのに緊張感を全く感じさせない。天地達を、見ると神宮寺は不思議と緊張が和らいでいた。

自分の傷を癒し終えた天地は、次に魁人の傷を癒していた。

「それにしても、酷いやられ様だな」

「そうかな？」

「そうだって……」

昴にボコボコにされていた天地の顔を見た後のせいか、自分の傷はさほど大した事のない傷の様に思えた。

木の陰で寝ている三上を見た魁人は口を開いた。

「三上さんは、まだ寝てるんだね」

「ああ、三上さん。ずっと見張りしてたみたいだからな」

「へっ」

意外そうな顔で魁人は三上を見ていた。確かに、いつも寝ている三上が、夜中見張りをしているなんて想像もつかなかった。

この日は、結局一度もオウガには会わなかった。それが、逆に不思議だった。

まるで、天地達が体調を万全にするのを待っているかの様だった。

第四十一章 不安な心

結局、一日を費やし傷を癒した一行は、まだ絶鬼の居る城に辿り着けずにいた。朝から海を辿りながら歩いているが、城はまだ見えてこない。

潮の香りが風に乗って、岸を歩く天地達の横を吹き抜けていく。先頭を歩く神谷は相変わらずタバコの煙を吹かしていた。そのタバコの煙はあるオウガの目印となっていた。そのオウガは例の如く、城の屋根の上からその煙を発見し、生き残ったハンターの数を数えていた。

「1…、2…、3……。7人か。ここに来て3人消えたか」

そう呟きボーガンに矢をセットする。カチツと音がして、矢がセツトされた。

ボーガンの先を天地達の方に向けると、引き金は引かない。暫くボーガンを構えたまま動かないが、急にボーガンを水平に構えると、引き金を引いた。

その瞬間、風を切る音と共に矢が放たれ、空を飛ぶ鳥の首に見事に命中した。鳥の首からは血が吹き出て、力なく地上へと落ちていった。その鳥が、タバコを吸う神谷の目の前を通過して地面に落ちた。衝撃で、鳥の頭が潰れ血が辺りに飛び散る。

顔色一つ変えず、神谷はその鳥の前にしゃがみこんだ。

「何か……落ちてきた……」

「ここは、色んな物が落ちて来るな」

由美の言葉に天地は空を見ながら言った。不思議そうな顔をして魁人が、天地の方を見ていた。何か言いたそうな表情だ。

それに、気付いた由美が魁人に訊く。

「どうかした？ ……言いたい事は……言った方がいい」
「いや。大した事じゃないから……」

苦笑いしながら魁人は軽く手を振る。それをみて、由美は首を傾げた。

暫くしゃがみこんで動かない神谷に、始めに声を掛けたのは昴だった。

「神谷さん。一体何が落ちてきたんですか？」

「ンツ？ 鳥の死骸だよ」

タバコを口に銜えたまま笑みを浮かべながら、顔の潰れた鳥の両羽を両手で広げながら昴の方に見せた。その瞬間、昴の悲鳴と共に神谷の左頬に、昴の鋭い蹴りが炸裂した。

「キヤーーツ！」

空気を切る音の後、すぐに鈍い音が響く。その蹴りの勢いで、神谷の持っていた鳥の死骸と、口に銜えていたタバコが海に飛んでいった。それを、見ていた天地・魁人・由美・神宮寺の四人は、呆れため息がこぼれた。右手で頭を抱えながら魁人が首を振り呟いた。

「僕の尊敬する、師匠があんな人だなんて……」
「人選を間違っただな」

頷きながら天地は魁人の肩を軽く叩いた。魁人の口からため息が漏れる。

「はっつ。この先、大丈夫かな？」
「……大丈夫……多分」

由美が魁人を励まそうとそう呟いたが、全然励ましにならなかった。余計に肩を落とす魁人に、三上が眠そつな声で言う。

「きつと……皆の緊張を……解そうとしてるんだよ」

「そうですね？」

「そうじゃないなら、人選ミスだね」

そう言っつて欠伸をしながら、三上は魁人の横を過ぎていった。最後の一言が余計だった。

あそこは「そうだよ」と言っつて欲しかった。魁人は肩を落としたまま、ため息ばかりをついていた。

「やばい……。かなり、落ち込んでる」

「そうだね」

落ち込む魁人の少し後ろで、しゃがみこんで話をする天地と由美。何度か魁人を見るが、相当凹んでる事はすぐに分かる。

「私の……せい？」

悲しげな瞳で、そう呟く由美に、押し殺した声で天地は呟く。

「いや。悪いのは……」

天地はゆっくりと神谷の方を睨む。由美は天地の視線をゆっくりと追う。神谷は、まだ昂に鉄拳と蹴りをお見舞いされていた。

それを見ると、なぜか天地と由美まで落ち込んだ。

「私達……。人選……。ミスした？」

「そうだな……。あいつについて行ったのが全ての間違いだ……」

二人の口から同時にため息が毀れた。

相変わらず、静かな部屋。

シャンデリアが窓から差し込む陽の光りで、きらめきを放っている。

殺風景で何も無いこの部屋には、赤絨毯あかじゅうたんがドアから奥の階段まで続いていた。大きく開いた窓からは潮の香りと波の音が聞こえてくる。階段の上には大きな椅子があり、それに白髪の細目で細身の死に装束の絶鬼が座っていた。

その時、部屋のドアが軋む音をたてながら開く。部屋に黒フードを被った、少年が入ってくる。左腕は無く包帯が巻かれている。

ゆっくりと赤絨毯の上を静かに進む。階段の前で黒フードは足を止めて、椅子に座る絶鬼を見る。

「お呼びでしょうか？」

小さく低い声が、何も無い広い部屋に響く。ゆっくり笑みを浮かべている絶鬼だが、その口調には怒りがこもっていた。

「うん。呼んだよ。なぜか、分かるよね？」

「さあ？ どうしてお呼びに？」

そう言って黒フードの少年は首を傾げる。そんな黒フードの少年に向って、絶鬼がゆっくりとした口調で言う。

「骸鬼…いや……。今は漸だったね。君を軍師として認めてはいるけど……。勝手な行動は止めたまえ。僕としては、君を失いたくはないからね」

「はい。以後気をつけます」

笑みを浮べる絶鬼に軽く頭を下げる漸。

漸は頭を上げると、ゆっくり口を開いた。

「それでは、絶鬼様に報告をしたいと思います」

「報告？」

「はい」

小さくそう呟くが絶鬼は表情を崩さず笑みを浮べている。

「実は、昨晚。密迹と那羅延が森に侵入したハンターと戦闘になり、命を落としました」

「そっか。密迹と那羅延が……」

「六鬼神が二人もやられた以上、全面的に奴らを」

「いや。まだ、時間はある。ゆっくり楽しもうよ」

絶鬼はそう言って微笑む。

「そうですか……」

静かにそう言って、漸は絶鬼に背を向けてドアに向かって歩き出した。その顔には怒りが表れていた。

部屋を出た漸の前に、千春の姿があった。

「どうでした？」

千春はゆつくりとそう訊く。それに対し、怒りのこもった声で漸が返答する。

「話にならん」

「そうですか」

「まあ、奴の命も後わずか、それまで楽しませてやる」

そう言つて漸は高笑いしていた。その笑い声は太い壁に遮られ絶鬼には聞こえなかった。

結局、天地達は昴に殴られ、気を失つた神谷が目覚めるのを待っていて、先に進むことは出来なかった。神谷が目覚めた時には、すでに蒼い空がオレンジ色に変わっていた。

陽も沈み暗くなった岸に焼き火の光りだけが輝いていた。今日は、雲も無く澄み渡る空にきらびやかに星が散っている。一番光りを放ち薄らと地上を照らすのは、満月だった。

「今日は、満月か……」

夜空に浮かぶ満月を見ながら天地が呟く。その横で魁人が欠伸をししながら、水鮫神の手入れをしていた。

潮風が焼き火を揺らす。静かに焼き火の音だけが響く。

昴は神谷を殴り疲れて眠りに就き、三上もいつもの如く眠りに就いている。神宮寺は自分のナイフの刃を、しっかりと手入れしていた。神谷はタバコを銜えながら、痛む体を休めていた。由美は焼き火を見ながら黙り込んでいた。

誰一人として、言葉を発しない。やはり、不安なのだろう。

その後も、言葉は交わさず、皆は眠りに就いたのだった。

第四十二章 見えてきた城

清々しい程澄み渡った蒼い空。波の音と風でザワメク草木の音が、静かに交じり合う。ハンター7人の足音がバラバラに地を踏み鳴らす。

先頭を歩く足音が止まると、他の足音もそれにつられて止まる。白煙を口から吐きながら、低い声が響いた。

「よつやく、見えてきたぞ」

神谷の声で、誰もが息を呑んだ。

7人の視線の先には、森から少し飛び出た城の赤いレンガの屋根が見える。あそこに絶鬼が居ると思うと、自然と体に力が入った。

「いよいよか……」

緊張しているのか、声が少し震える天地。震える天地の声に気付いた神谷は笑いながら言う。

「何だ？ 緊張してるのか？ 絶鬼に会う前から緊張してどうするんだ」

「神谷さんは、緊張感が無すぎですよ」

笑う神谷に魁人が鋭く言う。そんな魁人の言葉にもめげず、神谷は笑いを続ける。呆れる昴と神宮寺がため息を漏らす。その二人の背後で三上の声が響く。

「ため息なんて吐いちゃって、どうした？」

「いや……。何でも無いです……」

眠そうな三上の声を聞くと、何か疲れを感じる。だから、昴はそう答えてからため息をもう一度吐いた。由美は黙ってその様子を見ていた。

暫く、神谷の笑い声が響いていたが、ようやくその声もおさまった。

「城までもうすぐだけど、絶鬼の手下はどれくらい居るのかな？」

不安そうな声で昴はそう言って神谷の顔を見る。相変わらずタバコを口に銜えている神谷は、静かに鼻から煙を出す。何も答ええない神谷の代わりに魁人が答えた。

「僕らは、天地君達と合流する前に、六鬼神の二体と戦った」

「六鬼神？ 何だよそれ？」

「他のオウガよりも……強力な力を持った……オウガ」

天地が怪訝そうな顔で魁人の方を見ると、由美が天地の質問に答えた。それを聞いた神宮寺が、更に疑問を口にした。

「それで、六鬼神とは決着をつけたの？」

「ええ、何とか襲ってきた二体とは決着をつけました」

「と、言う事は後4体。それに、軍師の漸と千春が加わり6体。絶鬼を合わせて7体か」

顎に右手を添えながら天地はそう言った。神谷はタバコを右手に持つと、口を大きく開き白煙をドーナツ状にして飛ばした。非常にのんびりとしている。

そんな神谷を無視して、天地達は話を進める。

「まあ、向こうの主力も7体か」

「戦力的に見て、こっちが圧倒的に不利だけどね」

昴がそう言って天地の方を見てため息を吐く。確かに、戦力的にこっちが不利だった。その理由は昴・神宮寺・三上の三人にあった。三人とも遠距離タイプで、接近戦には対応できないからだ。そんな事など、重々承知していた。

「そうなんだよ。圧倒的に不利なんだよな」

「なんか、私達が悪いって目してるわね」

神宮寺が天地の視線に気付き、不満そうな声を上げる。その神宮寺に眠そうな、三上の声突き刺さる。

「うん。君が悪い」

「なっ！ あんたも、遠距離戦専用じゃない！」

「僕のは近距離でも発砲出来るから」

「わ、私だって、近距離戦は出来るわよ！」

二人の視線が同時に昴の方に向く。戸惑いながら昴は二人の顔を交互に見る。

「エッ、なっ、何！？ もしかして、私が悪いって言いたいんですか？」

驚きの声を上げる昴に対し、二人の視線が冷たく突き刺さる。そして、神宮寺が声を上げた。

「だって、弓って、引くのには時間掛かるじゃない」

「それだったら、三上さんのライフルだって同じです」

「エーッ。僕のライフルは時間掛からないよ」

やる気の無さそうな三上の声が響く。天地・魁人・由美の三人は、呆れて言葉も出なかった。その後も、昴・三上・神宮寺の三人は色々ともめていた。その三人を止めたのは神谷の一言だった。

「さて、そんなに元気があるなら、とつとと城に乗り込むか」

口からタバコを吐いて、それを踏み潰し、ゆっくり立ち上がり手を二回叩く。全員の視線が神谷の方に向いていた。ニコヤカに微笑みながら、神谷は全員の顔を順番に見ていく。

「んっ？ どうした？ 出発するぞ」

「エッ、はい」

そう返事をした天地が立ち上がると、他の皆も立ち上がった。少し戸惑いながらも、歩き出した神谷の後に続いて歩きだした。

暫し、沈黙が続く海の方から吹く潮風が、木々の葉を揺らしざわめかす。蒼い海に白い波が一筋の線を描く。やはり、7人の足並みはバラバラだった。城に近づくにつれて、誰も言葉を交わさなくなっていた。

第四十三章 聳え立つ門の先に

天地達は、ついに絶鬼の居る城の前に辿り着いた。

城の前には大きな門がそびえたち、行く手を遮っている。門の前には、森が広がり細い道筋が一本延びていた。

本当に静かだ。まるで、誰もいないかの様な静けさだ。この城に絶鬼がいるとは思えなかった。

「ここに、絶鬼が居るの？」

「ああ、そのはずだが？」

「何だか、静か過ぎない？」

不安そうな声で昴がそう言うが、神谷は気にするなと言わんばかりに笑い出した。それが逆に昴を更に不安にさせた。

門を見上げる天地は、横に居る魁人に声を掛けた。

「この門、俺達開けられるかな？」

「さあ？ 見た目からすると、結構重そうだよな」

「どうするつもりだ？」

「さあ？」

門を見上げながら話す、二人の後ろで由美が静かに目を閉じていた。不思議そうな顔をしながら、神宮寺が近付いてきて声を掛けた。

「ねえ、何してるの？」

「……」

暫く待つが、返事は無い。寝ていると思い、立ち去ろうとした時、由美の声が聞こえた。それで、神宮寺は足を止めて振り返った。

「……風を集めてる」

「風を？ どうして？」

「お城の中だと……風が集め難いから……」

「へっつ。色々考えてるのね」

「……うん」

ゆっくり首を縦に振って、また目を閉じた。確かに、疾風丸の刃の周りには風が吹き荒れていた。

皆は自分の気持ちを整理していた。

そして、ようやく門を開けることにした。

「神谷さん。どうします？」

「よし、昂。お前の鉄拳で砕くんだ」

魁人の言葉に、軽いノリで神谷はそう言って昂をみた。びっくりした様子の昂は、両腕を激しく上下させながら言う。

「む、無理ですよ！ 私は、か弱い乙女なんですよ」

その言葉に一瞬にして、皆が疑いの目を向ける。そして、誰もが口にしなかった事を、三上が口走った。

「か弱い乙女が、男を殴るかな？」

皆の視線が、一斉に門の前に居る三上に向く。何食わぬ顔で欠伸をしている三上に、風を切る音と共に鋭い鉄拳が飛んだ。三上はその拳を右に避けた。その瞬間、三上の後ろに聳え立つ門に、昂の鋭い鉄拳が打ち込まれる。鈍い音が響き渡り、その瞬間に門に亀裂が走る。

そして、昴の悲鳴がこだました。

「イッターーイ」

右の拳を真つ赤にしている昴を尻目に、他のメンバーは亀裂の走る門を見ていた。先に口を開いたのは神谷だった。

「うーん。やっぱり、無理か……」

「普通に考えたら、無理ですよ。人の拳でこんな大きな門を砕くなんて」

「そつだな」

そんな会話をする神谷と魁人に、門の前で右手を押えて蹲る昴が怒りのこもった声で言う。

「何なら、神谷さんと魁人の骨を砕きましょうか……」

「えっ、いや……。スマンスマン。冗談だよ。なあ」

「そつだよ。冗談だよ」

「おい。天地、昴の傷を癒してくれ」

一瞬、昴の目に殺意を感じた神谷と魁人は、焦りながらそう言っ
て苦笑いを浮べていた。背中には冷や汗を掻いていた。オウガより
も、昴の方が怖いと、この時悟った。

天地は水龍神で昴の右手を癒している。

門の前に立ち尽くす他のメンバーは、ゆっくりと門に出来た亀裂
を目で追っていった。強い衝撃さえ与えれば、門は砕けそうだが、
誰がその衝撃を与えるかにあった。三上のライフルと神宮寺のナイ
フでは、威力が足りないだろうから、それをやる人物は自ずと絞ら
れていった。

それは、火虎神を持つ神谷か、水鮫神を持つ魁人の二人だった。

由美は風を集めたばかりで、今放てばどうなるか分からないし、昂は治療中、天地は昂を治療しているからだ。向い合う神谷と魁人。いつに無く真剣な顔つきの神谷は、ゆっくりと息を吐きながら大声で叫ぶ。

「最初はグー！」

「ジャンケン！」

「ポン！」

二人の声が重なりあいながら、同時に手をだす。その一瞬で勝負は決まった。

愕然とする魁人の前で、神谷は両手を天に突き出し喜んでいる。何て、大人げない人なのだろう。と、周りの皆がそう思っていた。ため息を吐きながら魁人は、門の前に立った。

「勝負は勝負でしたから……」

「よし、任せるぞ！」

「はいはい……」

魁人は神谷にそう言い返して、腰を低く落とす。そして、ゆっくりと水鮫神を引き、力を集中させる。誰もが息を呑み、魁人の方を見ている。水鮫神の周りに集まる水が渦巻いてる。そして、ゆっくり息を吐きながら魁人は叫んだ。

「噛み砕け！ 水牙鮫！」

水鮫神を一気に突き出す。

門に刃先が触れると同時に、水鮫神の周りに集まっていた水は、鮫の形になりて一瞬にして亀裂の走る門にぶつかる。ぶつかると同じ時に、門と水の鮫が砕け散る。水飛沫が門の外側に居る天地達の方

に飛び散り、砕け散る門の破片が門の内側へと砕けて落下する。門の破片は轟々しい音をたてながら、地面に突き刺さる。その度に、土埃が立ち込めた。

「ゴホッ、ゴホッ」

土煙の中で魁人が咳き込んでいるのがわかった。飛び散った水飛沫で、天地達はびしょ濡れになっていた。

「魁人……。いくら何でも、やり過ぎだろ？」

「ゴホッ、そんなゴホッ……。事、言われても……」

咳き込みながら魁人は、そう言って神谷の方を見る。びしょ濡れになっている神谷は、手で隠していたタバコを出し、口に銜えて火を点けた。

「全く。もう少しで、タバコが全部駄目になる所だったぞ」

「神谷さん。気になってたんですけど、タバコ何本持つてるんですか？」

「細かい事は気にするな。さあ、行くぞ！」

「エッ、ちよっと!」

神谷は魁人の質問を無視して、門の中へと入っていく。それに続いて他のメンバーも、門の中に入っていく。

天地は魁人の横で立ち止まり声を掛けた。

「俺も、不思議に思ってたんだが、気にしても始まらないぞ」

「そ…そうだね」

天地は魁人の肩を叩きながら頷き、一緒に門の中へ入っていった。

門の中には、庭園が広がっていた。噴水があつたり、花壇があつたりと、不思議な感じだった。白煉瓦で出来た道が、真つ直ぐ城に伸びていた。オウガの姿など、全く無かった。とても静かで、噴水の音だけが綺麗に聞こえていた。

「どうなってるの?」

「とても……静か……」

「もしかして、畏とかじゃないわよね?」

女性陣が次々と言葉を発する。

穏やかな風が城壁を越えて、静かに天地達の間を吹きぬける。一応、周りを警戒しながら、天地達はゆっくりと白煉瓦の道を歩いていく。7人の足音がバラバラに庭園に響き渡る。誰も言葉を交わさずとしない。それだけ、神経を集中させているのだろう。暫く足音が鳴り響いていたが、それが止まった。天地達は城の入り口に辿り着いたのだ。

中で待ち伏せしているかもしれないが、恐る恐る神谷が扉を開いた。扉は軋みながら、ゆっくりと開いた。その瞬間、中からかび臭い匂いが漂ってきた。案の定、城の中はいたる所にカビが生えていた。城に入ると、すぐ目の前に幅の広い階段が真つ直ぐ伸びていた。そして、その階段の上には2体のオウガが立っている。三日月形の剣を両手に持ったオウガと、ボーガンと斧を持ったオウガ。2体は階段の下にいる天地達を見下している。

第四十四章 それぞれの戦い

階段の上に居る2体のオウガを見上げる天地達に向って、ボーガンと斧を持ったオウガが口を開く。

「俺は六鬼神の天邪鬼」

天邪鬼が名を名乗ると、その横の三日月形の剣を持ったオウガもゆっくりと口を開いた。

「俺は、六鬼神。悪鬼」

「ここから先に進みたければ、俺達を倒して進むことだ」

ボーガンにゆっくり矢をセツトする。それを見て、天地達も武器を構える。両者、睨みあったまま相手の出方を見ていた。最初に動いたのは天邪鬼だった。階段を飛び降りながら、天邪鬼はボーガンから矢を何発も放つ。天地達はそれを避けるためにバラけた。

天地と由美は右に、神谷と魁人が左に、昴と神宮寺は後方に、三上は前方にバラけていた。その真ん中には天邪鬼が着地し、目の前にいる昴と神宮寺に襲い掛かる。

「俺を楽しませてくれよ！」

「昴！ 離れて！」

ボーガンを斧に持ち替え、勢いよく振り下ろす。素早く腰からナイフを取り出した、神宮寺はそれを受け止める。澄み渡る様な音色が響く。その後、ガチガチと鉄と鉄の擦れる音が響いた。

歯を食い縛りながら、右手で持ったナイフで神宮寺は斧を受け止めていた。神宮寺の細い腕が小刻みに震える。

「グッ……」

「いつまで、もつかな？」

そう呟いた天邪鬼に対し、口元に笑みを浮べた神宮寺は斧を押える力を緩めて、後方に跳ぶとその場で伏せた。急に力を緩められた天邪鬼は、前方に倒れそうになる。今まで、神宮寺が居て気付かなかったが、天邪鬼の目の前には巨大な風の矢を構える昴の姿があった。

「射抜け！ 大燕！」

巨大な風の矢を放つ。巨大な風の矢は、回転しながら一直線に天邪鬼の頭に飛んでいく。凄まじいスピードで飛ぶ巨大な風の矢を、天邪鬼は体を右に逸らしてかわした。そして、天邪鬼の真後ろにした、三上に向かっていった。

巨大な風の矢に気付いていない様子の三上に、天地が叫んだ。

「三上さん！ 後ろ！」

「ンッ？」

三上は後ろを見ないで、ライフルを肩に乗せたまま引き金を引いた。銃声と共に、巨大な風の矢が弾け、微風が三上の傍を吹きぬけた。三上のライフルから放たれた弾丸は、見事に天邪鬼の左肩に直撃していた。

「グッ！」

天邪鬼の体が床に倒れた。左肩からは血が流れ出ている。ゆっくりと、三上の方を睨み付けて、怒りで震える声で言う。

「よくも……」

三上に向かっていこうとする天邪鬼の背中に、鋭い風の矢が突き刺さる。天邪鬼が背後を見ると、風鳥神を構えた昴と、ナイフを持った神宮寺が立っていた。

「あなたの相手は私達でしょ？」

神宮寺が微笑みながらそう言う。天邪鬼の怒りが頂点に達し、斧で二人に襲い掛かる。だが、澄み渡る音色が何度も響いていた。

その頃、悪鬼と睨み合う天地・魁人・神谷・由美・三上の5人。悪鬼は三日月形の剣を構えたまま、5人を見下したまま動かないで居る。悪鬼は5人を見ながら口を開いた。

「俺に、切り刻まれたいの、どいつだ？」

「俺が……」

「しょうがない。僕が相手をするよ」

天地の声を遮って、三上が眠そうにそう言って銃口を悪鬼の方に向ける。何か言いたげな天地に向って、三上が眠そうに言った。

「君は、絶鬼と戦わなきゃいけない。だから、ここは僕が相手をするよ」

「でも」

「大丈夫。近距離戦はやりなれてるから」

微笑む三上が、悪鬼に向かって引き金を引く。悪鬼は宙を舞い弾丸

をかわす。その瞬間、三上が叫んだ。

「今の内に先に進んで」

「わかりました。ここは任せます」

天地と由美が先に階段を上がり、その後には魁人と神谷が続いた。悪鬼は床に着地して、三上の方を見た。

「お前が一人で戦うのか？」

「そうだね」

やる気の無さそうな声で、そう言いながら三上は欠伸をしていた。その三上に三日月形の剣が襲い掛かって来る。だが、三日月形の剣は空を切り、悪鬼は体勢を崩す。その瞬間、三上が悪鬼に銃口を向けて引き金を引く。銃声と共に弾丸が銃口から飛び出す。だが、その弾丸を悪鬼は三日月形の剣で弾く。

「あまいな……」

「君もね……」

悪鬼の弾いた弾丸は壁に当たり、跳ね返り悪鬼の右脛に突き刺さる。血飛沫が舞い悪鬼は膝をついた。

「グッ……。これを、狙っていたと言うのか……」

「本気で行かなきゃ殺されそうだからね」

「そうか。なら、俺も本気を出そう」

そう言うと、悪鬼の目の色が変わった。そして、一瞬にして三上に斬りかかってきた。

三上はその刃を紙一重でかわしていった。

静かで長い廊下に響く4人の足音。どこに絶鬼が居るか分からないが、とりあえず真っ直ぐ走っていた。

「おい！ どこに絶鬼が居るのかわかるのか！」

「知らないけど、多分一番奥の部屋だよ！」

「多分てな！」

呆れながら神谷は天地の後ろ姿を見ていた。暫く歩いていると、大きな扉の前に辿り着いた。多分、ここに絶鬼が居る気がした。

「ここが、一番奥の部屋か」

「そうみたい……」

「だが、本当にここに絶鬼が？」

神谷はそう言って首を傾げるが、天地は何も言わずに扉の取っ手を握る。

「エーッ！」

「おい！ 天地！」

驚きながら魁人と神谷はそう言ったが、扉は軋みながら開いていく。その奥には、赤絨毯が一直線に伸びている。そして、その先には椅子に座った白装束の絶鬼が居た。白髪が風で揺れて、細目はこちらを見ていた。

「……絶鬼」

「久しぶりですね」

楽しそうに微笑みながら絶鬼がそう言う。やはり、天地が来るのを待っていたのだろう。ゆっくり、立ち上がる絶鬼の傍に、阿修羅と夜叉が現われた。そこに、漸と千春の姿は無かった。神谷がタバコを口に銜えながら言い放った。

「えらく余裕みたいだな」

「ええ、そうですね。僕らは、君達に負ける気がしませんから」

「その強気が命取りととならなきゃいいがな」

「そうですね。それじゃあ、力の差を見せ付けましょうか？」

絶鬼が笑みを浮べたまま、阿修羅と夜叉に合図を送る。阿修羅と夜叉が同時に突っ込んで来る。阿修羅の槍は、神谷の火虎神で受け止められた。一方、夜叉の刀は魁人の水鮫神に止められた。その瞬間に辺りに鉄のぶつかりあう音が響く。

「天地！ お前と由美は絶鬼と戦って来い」

「わかった。後は任せる」

「天地君も由美さんも気をつけて」

「……うん」

天地と由美は、魁人と神谷の間を抜けて絶鬼の方に向かっていった。槍を押さえる火虎神を凄まじい力で弾き返す。弾かれた神谷のお腹に向って、阿修羅の槍が鋭く突き出される。その槍の刃を火虎神で、床に叩き落す。槍は凄まじい音をたてながら床を砕き、破片を飛び散らせる。神谷は距離をとってタバコの煙を鼻からゆっくり吐く。

「怖いね。闘志剥き出しだね」

「貴様、俺を馬鹿にしてるのか？」

「別に、馬鹿にはしていないさ」

そう言いながら神谷は笑みを浮べる。完全に阿修羅を馬鹿にしている。

一方、魁人と夜叉は武器を交えたまま睨みあっていた。だが、流石にらちがあかないと思っただけで、魁人と夜叉は、同時に後方に下がった。夜叉の刀が不気味に輝きを放っている。

「拙者は、お主では無く、天地殿と戦いたかったのだが」

「そう。でも、天地君には戦うべき相手が居るからね」

「では、お主が拙者を楽しませてくれるのか？」

「さあ？ それは、わからないな」

「そうか。ならば、行くぞ」

間合いを縮めると、不気味な輝きを放つ刀が振り下ろされた。それを、魁人は水鮫神の刃で受け止めた。刃と刃のぶつかる音が響き、火花が散った。何度も、刃と刃のぶつかる音を響かせながら、互角の戦いを繰り広げていた。

第四十五章 悪鬼との死闘

城の入り口で悪鬼と戦う三上は、防戦一方だった。交互に鋭く振り下ろされる三日月形の剣が、三上の服を掠めていく。

「どうした？ 攻撃をしないのか？」

「そうだね……。こつも、攻撃をされちゃねえ」

やる気の無さそうな声で三上はそう言う。三日月形の剣は、何度も風を切る音を鳴らす。逃げ回る三上は、徐々に追い込まれていく。流石に室内だと、逃げ場が限られていた。

ライフルに入っている弾丸は残り3発。どう考えても3発では、悪鬼は仕留められないだろう。だが、三上は焦りを見せなかった。

後方に下がりがながら、銃口を真下に向けて引き金を引く。銃声が鳴り響き、床に跳ね返り、三日月形の剣を振るう右腕に突き刺さった。その瞬間に、真っ赤な血が飛び散り一瞬動きが止まる。だが、左手に持った三日月形の剣が振り下ろされる。それを、かわした三上は左肩に向って、銃口を向けて引き金を引く。銃声が鳴り響き、弾丸が左肩を貫き真っ赤な血を飛び散らす。

「グッ……」

痛みに顔を歪めながら三上と距離をとる。近くに居ると、弾丸の勢いが強いのに気付いたのだ。悪鬼が後ろに下がったのを確認すると、三上はライフルに素早く弾丸を詰めた。

「ウウッ……。凄い命中率だな。今の所、全部命中しているぞ」
「へっッ。そうなんだ」

やる気の無い声でそう答える三上に悪鬼が言い放った。

「だが、もう俺にお前の放つ弾丸は当たらん」

「それじゃあ、試そうか？」

「やってみるがいい」

そう言われ、弾丸を詰めたばかりのライフルの銃口を、悪鬼に向けて引き金を引く。銃声と共に弾丸が2発放たれた。だが、それは、三日月形の剣に弾かれ、澄んだ音色を奏で部屋の中を跳ね返る。そして、そのまま悪鬼に襲い掛かるが、それも悪鬼は難なく三日月形の剣で弾く。また、澄んだ音色が響き弾丸が勢いを無くして床に落ちる。

「あらつ。本当にもう当たらないの？」

「そうだ。お前の攻撃はもう通じない」

「あらら。厳しいかな？」

「ああ。お前が俺を倒すのは不可能に近い」

そう言いながら悪鬼は剣を振り回している。剣を振り回すと、風を切る音が聞こえてきた。少し焦ったような顔を見せた三上だったが、すぐに欠伸をしてやる気の無い顔にかわった。

「この状況になっても、そんな顔をするか」

「そんな顔って、失礼な。僕は生まれつきこんな顔なんだ」

「フツ。そうか。変わった顔だな」

「よく言われるよ」

「なら、その顔は焦っていると見ていいのか？」

「さあ？ そうとも限らないんじゃない？」

そう言って眠そうな顔で微笑む。その笑みが何を意味するか全く

分からなかった。かび臭い匂いが漂っているが、三上は一切顔色を変えない。ポーカーフェイスというのか、ただ単に鈍いだけなのか、全く性格が見えてこない。そんな三上が、悪鬼には恐ろしく覺えた。

「どうしたの？ 攻撃してこないけど？」

「フツ……お前の動きを観察してるだけだ」

「僕、動いてないけど？」

「黙れ。お前はどうかやって俺を倒すか考えるんだな」

「わかった。そうする」

三上はそう言って銃口を床に向けたまま引き金を引いた。銃声が響き渡り、3発の弾丸が飛びかう。そして、バラバラに悪鬼に襲い掛かるが、澄んだ音色を響かせながら、弾き返される。回転する三日月形の剣が、更に回転を速める。風を切る音も鋭くなっていく。

「うーん。やっぱり無理っぽいな」

「諦める。俺に、お前の弾丸は届かない」

「僕も、疲れるのは嫌だし、早めに終わらせるつもりだったんだけど」

「それは、残念だったな。相手が悪かったな」

そう言いながら悪鬼は、徐々に間合いを詰めてくる。回転する三日月形の剣が起こす風が、三上の前髪を舞い上がらせる。刃先が三上の服を更に裂く。後方に下がる三上だが、すでに壁際まで追い詰められていた。

「アラツ……。もう、壁際だ」

「もう逃げ場は無いな」

「そうだね。まずいね」

「そんなのんきな事を言っていると、俺の剣が体を切り刻むぞ」

三上は顔色一つ変えず、ニコニコしていた。何を考えているのか、本当に分からない。切り裂くのに少し躊躇している悪鬼に、三上は銃口を向けた。

「躊躇してると、命を落とすよ」

「クッ！」

銃声と同時に血飛沫が舞った。しかし、それは悪鬼の血では無く、三上の血だった。悪鬼の右手に持った三日月形の剣が、三上の左脇腹に深く切り込む。

「ぐふっ」

三上の口から血が噴き出る。その血は悪鬼の顔に飛び散っていた。そんな中でも、三上は顔色を変えず、微笑んでいる。深く切り込まれた三日月形の剣は抜けなくなっていた。三上の血が床に広がり、床を真っ赤に染める。

「どうして、この状況で笑える」

「う…生まれ……つき……こんな……顔なんだ」

「そうか。ならば、そのまま楽にしてやるう」

悪鬼はそう言って、もう一本の三日月形の剣で右腹部を突き刺した。血が勢いよく噴き出て、更に悪鬼の体を赤く染める。三日月形の剣は三上の体を突き抜けて壁に突き刺さっていた。徐々に体に感覚が無くなっていくのが分かった。血を流し過ぎた。

視界も薄らとして来た。やっと、ゆっくりと眠る事が出来る。朦朧とする意識の中で、そんな事を考えていた三上だが、遣り残した事がまだある。それは、目の前にいる悪鬼を倒す事だ。霞む視界の

中で、三上のライフルを持った腕がゆっくりと動く。

「ぼ……く……は、まだ……」

「いい加減に死ね！」

左手に持った三日月形の剣を更に置くまで突き刺す。だが、体から出る血の勢いは弱弱い。すでに、大量の血を流し過ぎたのだろう。

苦しい。早く眠りに就きたい。でも、やる事が……。

そんな他の奴にやらせればいい。他の奴？他の奴って誰？ここは任せろって言って、他の奴に任せるのか？

でも、僕は全力を尽くした。もう体は動かない。本当に、全力を出したのか？ 本当にもう体は動かないのか？

三上の頭の中で色々な言葉が飛び交った。

そんな中、笑い声が響く。悪鬼の笑い声だ。

「フハハハッ。さあ、どこから喰ってやろうか」

悪鬼はそう言って、三上の体に向けて牙を向けようとしていた。だが、その悪鬼の口の中に三上のライフルの銃口が入る。

「ムッ！ お、お前！」

「こ……これで……終わ……りだ……」

弱弱しい声でそう言った三上は、口元に笑みを浮かべゆっくりと引き金を引いた。銃声が鳴り響くと同時に、悪鬼の頭が破裂し肉片と、真っ赤な血が辺りに飛び散る。ゆっくりと悪鬼の体が後ろに倒れる。飛び散った悪鬼の血は、細かい微粒子となり消え去った。床

に倒れる悪鬼の体は、石化して消滅していった。

それと、同時に三上の瞼がゆっくりと閉じた。その右手に持ったライフルが、ゆっくりと血の広がる床に落ちる。体はうな垂れ、動かなくなった。

第四十六章 昴と神宮寺の戦い方

城の庭園で天邪鬼と戦う、昴と神宮寺は悪戦苦闘していた。

振り下ろされる斧を防ぐ神宮寺の細い腕は、痺れて感覚が無くなりつつあった。昴も天邪鬼の放つ矢を、打ち落とすために、かなりの体力を消耗していた。

天邪鬼から距離をとって、睨みあっている。その時、何度か城の中から、銃声が響いていた。

「三上が残ったみたいね」

「そうですね。でも、三上さんだけで、大丈夫ですかね？」

「さあ？ あいつの心配するより、自分の心配しなきゃね」

「そうですね……」

昴はゆっくりと、そう言って風の矢を構える。笑みを浮かべながら、天邪鬼はゆっくりと矢を、ボーガンにセットしていく。狙いをつけた獲物を、徐々に追い込んでいく様にこの戦いを楽しんでいる様に見える。

昴と神宮寺に向って、矢を放つと数本の矢が、昴と神宮寺に襲い掛かる。昴と神宮寺は向って来る矢を、かわしながら花壇の後ろに隠れた。

「あいつに弱点なんてあるのかしら？」

「どうなんでしょうか？」

「大体、近距離も遠距離も出来るなんてずるいわよ」

「まあ、そうですね……」

二人が話しをしていると、天邪鬼の声が近付いてきた。

「いつまで、隠れているつもりだ？ それとも、怖くて出てこれないのか？」

その声が無性に腹の立つ声だった。二人は怒りを堪えながら、話し合った。

「いつまでも、こうしててもしょうがないわ」

「でも、どうするんですか？」

「とりあえず、私が近距離戦に持ち込むから、あなたは援護して」「危険ですよ」

「大丈夫よ。あなたを信じてるわ」

そう言うと神宮寺は微笑みかけてから、天邪鬼に突っ込んでいく。天邪鬼は、突っ込んでくる神宮寺に気付き斧を取り出す。

「死ね！」

天邪鬼が鋭く斧を振り下ろす。神宮寺がナイフで受け止める。澄み渡る音色が響き、火花が散った。風が二人の間を静かに吹き抜ける。と、同時に昴の声が響く。

「神宮寺さん！ どいてください！」

神宮寺は力一杯、天邪鬼の体を突き飛ばし、左に跳ぶ。花壇の後ろで大きな風の矢を構える昴が、天邪鬼の視界に入った。

「射抜け！ 大燕！」

「その手は俺には通じない」

そう叫んで体を後ろに逸らして、大きな風の矢をかわす。その時、

蒼い空に白い小さな点が、幾つも見えた。それが、何かこの時の天邪鬼は分からなかった。

体をゆっくり起こした天邪鬼に向って、昴が笑みを浮かべながら言い放った。

「降り注げ！ 降下・大燕！」

その言葉と共に天邪鬼の体に、大きな風の矢が何本も降り注いだ。凄まじい爆音を、たてて土埃を撒き散らした。地面には穴が開いていた。恐ろしいほどの威力だ。そして、土埃が静まったその場所に、天邪鬼の姿は無かった。

「やったの？」

「さあ？ でも、あれで生きていられるかしら？」

「どうでしょう？」

「そういえば、三上は無事かしら」

ゆっくりと城の入り口に視線を送る。入り口には大量の血が流れていて、悪鬼の笑い声だけが響いていた。二人の脳裏には最悪のイメージが膨らんだ。だが、その時一発の銃声が鳴り響き、肉片が城の中に飛び散った。

その後、悪鬼の体がゆっくりと倒れた。石化する悪鬼の体を、庭園から見ていた昴と神宮寺の背後で不気味な声が響く。

「戦いの最中に、余所見をしていいのか？」

「！？」

振り返った二人の前には、血だらけの天邪鬼が立っていた。あれだけの矢を受けて、まだ生きていると言うのが、信じられなかった。後退りする昴と神宮寺に、ゆっくりと不気味な笑みを向ける。

「残念だが、俺はあの程度では死なん……」

「こいつ。不死身？」

「ああ……俺は……不死身だ」

そう言つと、持っていたボーガンの引き金を引き、数本の矢を飛ばす。至近距離で放たれた矢に反応できず、2人の体に矢が突き刺さると、血飛沫が舞い上がる。

昴と神宮寺はすぐに身を隠したが、矢は深く体に刺さっていた。

「うっ……。油断したわね」

「イツ……。全くです。でも、あれをくらって立ってるなんて……」

「本当。最悪ね」

「全くです。それで、これからどうします？」

「同じ手は、通じない様だし、困ったわね」

静かにそう言つて二人は落ち込む。天邪鬼の足音が近付いてくる。

「いつまでも、隠れられると思うなよ」

天邪鬼の声が響く。そして、ボーガンに矢をセットする音が聞こえる。息を呑む2人の耳に、矢を放つ音が聞こえた。だが、矢はいっところに飛んでこない。まさかと思い、昴が上空を見ると、無数の矢が2人に向つて降り注ぐ。2人は同時に別々の方向に跳んで、降り注ぐ矢をかわした。

「フハハハッ！ 死ね！」

「！？」

降り注ぐ矢をかわした昴の前に、斧を振りかぶった天邪鬼の姿が

あった。かわしきれない。瞼を堅く閉じ死を覚悟した昴だが、痛みは感じない。恐る恐る目を開くと、そこには斧を振りかぶったまま、動かない天邪鬼の姿があった。

「うつ……。貴様……」

天邪鬼の背後には神宮寺の姿があった。天邪鬼の背中にナイフを突き刺して、その返り血で真っ赤に染まっていた。斧が天邪鬼の手からゆっくりと落ちる。斧は鈍い音をたてて地面に突き刺さった。神宮寺が更に力を込めると、天邪鬼の体から更に血が噴き出る。

「まだ、死なないの……」

「人間如きが……」

天邪鬼の手がゆっくりと、ナイフを突き刺す神宮寺の手に伸びる。ナイフを握る神宮寺の手を、凄まじい力で天邪鬼は掴む。

「クツ……。まだ、こんな力が……」

「この……。程度で……。死なぬ」

「神宮寺さん！」

昴が叫んだ。その瞬間、神宮寺は天邪鬼の手を振り解き、その場を離れる。天邪鬼の手は、背中に刺さるナイフの柄を握り、力一杯ナイフを抜こうとする。その時、目の前で昴の声が響く。

「射抜け！ 大燕！」

風鳥神から大きな風の矢が、天邪鬼の胸に向って放たれる。矢は鋭い音をたてながら、天邪鬼の胸に突き刺さる。回転する風の矢が、血飛沫をあげながら天邪鬼の体を貫いた。天邪鬼の体がゆっくり地

そう言って神宮寺の臉がゆっくりと閉じた。そして、一度と目を
覚ます事はなかった。

第四十七章 3つの戦い

激しく火花を散らせる魁人の水鮫神と夜叉の刀。その二つがぶつかり合う音は、妙な感じで、心に響き渡る感じがする。

その二人の隣では、阿修羅の鋭い突きを最小限の動きでかわす、神谷の姿があった。

その二つの戦いが行われている中で、天地と由美は絶鬼の前で足を止めていた。

余裕なのか、顔色一つ変えず笑みを浮かべている。五龍神の柄をゆっくりと握った天地は、絶鬼を見ながら口を開いた。

「えらく余裕だが、俺達をなめてるのか？」

「いいえ。僕は、君と戦えるのが嬉しいんですよ」

「そうか。それじゃあ、真剣勝負と行こうか」

「そうですね」

絶鬼がそう言って手を掲げると、一本の刀が手の平に現れた。その刀は鞘に納まっているが、禍々しい程の殺気を漂わせている。まるで、その刀が絶鬼を作り出している様に思えた。

「それじゃあ、1対1と行きましようか？」

「いいだろう」

「天地……」

「由美は、離れている」

心配そうな表情をしている由美に、天地はそう言って五龍神を抜いた。心配だったが、由美は天地から離れた。絶鬼が自分のやりあえる相手じゃないと悟ったからだ。

五龍神をゆっくり構える天地に、絶鬼は刀を抜いて言い放った。

「僕と君の戦いで、全てが決まる。僕が負ければ世界は救われ、君が負ければ世界は滅ぶ」

「そうか。責任重大だな」

「そう言う事になるかな？ まあ、そんな事気にせず、全力で戦えばいいだけの話だけどね」

絶鬼はそう言って微笑み、ゆっくりと天地に刀の刃先を向ける。

睨み合い沈黙が二人の間に生まれる。大きく開いた窓から、穏やかな風が吹く。その瞬間、睨み合う二人が同時に床を蹴る。踏み込んだ瞬間に、床が砕けて破片が宙を舞う。刃と刃のぶつかり合う澄み渡る音が、部屋の中に響き、火花が散る。

「ゲツ」

「フフツ」

一瞬で二人は距離をとり、睨み合う。天地の右頬には薄らと一筋の線が現われ、そこから真っ赤な血がゆっくりと溢れ出てきた。

絶鬼の刀が掠ったのだろうか。しかし、確かに天地は刀を五龍神で防いだはずだった。

「フフフツ。驚いたみたいだね」

「無駄口は叩くなよ。目覚めよ！ 火龍神」

五龍神の刃の刻印が真っ赤に染まり、燃え盛る炎が刃を覆った。火龍神と化した五龍神は、更に炎の勢いを強めていった。それを見て、嬉しそうに微笑む絶鬼が呟いた。

「それを見るのは、これで三度目かな？ 君も懲りないね。僕としては、他の龍を見たいんだけど？」

「随分、余裕だな。火龍神じゃ役不足か！」

そう言っつて、天地は勢いよく火龍神を振り上げた。その瞬間、火柱が床を走り絶鬼に襲い掛かる。だが、その火柱は絶鬼の刀に切り裂かれ、火の粉を舞い散らせながら火柱は消滅した。

「その程度？」

首を傾げながら、絶鬼はそう呟いた。天地は振り上げた火龍神を、ゆっくりと構えなおして、真っ直ぐ絶鬼を睨む。刀を構えず、振り下ろしたままの絶鬼は、欠伸をしながら言った。

「まだ、早かったかな？ 君と戦うのは」

「どういう事だ」

「その程度の力じゃ、僕を満足させられないって事かな？」

「ふざけるな！」

絶鬼の言葉に天地は一気に走り出した。歯を食い縛り、勢いよく右上から火龍神を振り下ろした。だが、絶鬼は火龍神を刀で、簡単に受け止めると、そのまま右に払って逆に天地の体を切りつけた。

右肩から左脇腹までを切りつけられ、服が裂け血が勢いよく噴き出した。体を斬り付けられ天地は、距離をとってゆっくりと右膝を床についた。血が床に滴れている。

「うっ……」

「これが、力の差ですかね？」

「本気を出してないのに、そんな事がわかるのか？」

「本気を出さなくても、これだけの力の差があると言ってるんですよ」

微笑みながら絶鬼は、そう言つて天地を見る。白装束は天地の血で、所々が赤く染まつていた。

ゆっくり息を吐きながら、天地は火龍神を目の前に構える。火龍神は五龍神に戻り、その刃の刻印は蒼く染まつた。水の膜が刃を包み、水龍神と化す五龍神。

「傷を癒せ！ 水清泡」

天地の体を水の膜が包み込み、体についた切り傷から泡が立ち、塞がっていく。それを見て、少し驚きの表情を絶鬼は見せた。

「それが、癒しの力を持つ水龍神の力ですか」

「癒しか……。その優しい水龍神も、時として怒りの刃を向ける！」

「！？」

いつの間にか、絶鬼の体を水の膜が覆っていた。それは、絶鬼の体の自由を奪っている。そんな状況でも、絶鬼は微笑んでいた。水龍神の刃を床に向けたまま振り上げた。

「突き刺され！ 水氷柱」

勢いよく水龍神を床に突き刺すと、絶鬼を包む水の膜が鋭い氷柱の様になり、絶鬼の体に襲い掛かった。絶鬼の体からは血が噴き出て、血飛沫が舞う。だが、さほど痛みを感じていないようだった。

「水龍神の力は、この程度か……」

天地には、絶鬼が五龍神に封じられる力が、どの程度か測っているように思えた。それだけ、絶鬼には余裕があると言う事なのだろう。

激しく火花を散らしている魁人と夜叉。水鮫神と刀が幾度と無くぶつかり合う。両者共に額からは、汗が流れていた。

「お主は天地殿とは違う力を感じる」

「だから、何だっって言っんだ」

鋭く水鮫神を突き出す。夜叉は刀で右に弾く。澄み渡る音が響き、火花が散る。水鮫神を弾いた刀は、鋭く魁人の体に斬りかかる。だが、魁人も刀の側面を水鮫神の柄で、右に払った。

魁人と夜叉は距離をとって、睨み合った。どんなに、水鮫神を突き出しても、夜叉に届かず、体力だけが失われていった。

「ハア…ハア……」

息を荒げる魁人の姿を見て、夜叉が刀を下ろして息をゆっくりと吐く。魁人にはなぜ夜叉が刀を下げたのか、全く分からなかった。隙を見せる夜叉だが、魁人にはどうしても攻撃する事が出来なかった。そのまま、魁人と夜叉は静かに向い合っていた。

鋭く振り抜く阿修羅の槍が、激しい風を巻き上げながら、空を切る音が微かに聞こえる。軽快な身のこなしで、神谷は阿修羅の槍をかわしていた。

「どうした？ そんな大振りだと、俺には傷はつけられないぞ」

「クッ、焼き尽くせ！」

「！？」

阿修羅の槍が、神谷の足元の床を砕く。その瞬間に、禍々しい炎が神谷の体に襲い掛かった。瞬時にそれに気付いた神谷は、身を翻してその場を離れた。

距離をとった神谷のズボンの裾が、阿修羅の炎で少し燃えていた。

「危ないな……」

「フツ、次はお前の体が丸焦げになる」

「丸焦げは……。嫌だな」

「それなら、本気を出すんだな」

「そうだな。さっさと終らせるか」

軽く火虎神を振り回しながら笑みを浮かべている。それに対し、阿修羅は右手に持った槍を、引いてゆつくりを腰を低く構えた。殺気を漂わせる阿修羅は、凄まじい勢いで床を蹴った。その勢いで、床が砕けて破片が飛び散った。

激しい爆発音の後に、部屋の扉の横の壁が崩れた。先程まで神谷の立っていた場所には、阿修羅が槍を振り抜いたままの姿で、動きを止めていた。土埃をたてながら、崩れ落ちる壁の瓦礫には神谷が倒れていた。

「どうした？　あまりに速過ぎて、反応できなかったのか？」

瓦礫の上に倒れる神谷に、阿修羅はそう言って笑っていた。立ち上がった神谷の額から、ゆつくりと血が流れる。

「折角の顔が台無しじゃないか……」

ボソツと神谷はそう言って、タバコをポケットから出した。どこと無くまだ、余裕があるような雰囲気だ。それが、阿修羅の逆鱗に触れた。神谷はそんなつもりは無いのだろうが、確実に阿修羅は怒

りを募らせていた。

第四十八章 裏切り

三つの戦いが行われる室内では、重苦しい空気が漂い、由美はそこに居るだけで、体中から汗が流れ出ていた。それだけ、重圧が掛かっているのだらう。気を抜けば、一瞬にして倒れてしまいそうだった。

水龍神を構えたまま、天地は絶鬼を睨みつけていた。白装束は裂けて、真っ赤な血で赤く染まっている。だが、絶鬼の表情は変わらず、ただ薄気味悪く微笑んでいるだけだった。

「さあ、次は何を見せてくれるのかな？」

ゆっくりと天地に歩み寄る絶鬼の体から、血が垂れて床の所々に血痕が残っていた。天地の傷は完全に塞がり、水龍神は五龍神に戻っていた。

「フフフツ。次の龍を見せて貰いましょうか」

素早く刀を振る。天地は五龍神で、刀を受け止めるが、頬に薄らと血が滲む。やはり、完全に受け止めても、波動で体を斬り付けられる。絶鬼の刀から漂う殺気が、天地の体を切り裂いているのだらう。だが、それが分かったとしても、天地には防ぐすべがなかった。天地は素早く絶鬼の刀を弾き、距離をとった。

「見たいなら、見せてやる」

「そうですか。それは、楽しみです」

絶鬼は微笑みながら、刀を下ろして天地を見ている。天地が力を集中すると、五龍神の刃の龍の刻印が、金色に光り始めた。そして、

刃の周りに静電気が起り、バチバチと音を鳴らしている。

「目覚めよ！ 雷龍神！」

雷龍神の刃の周りを稲妻が走り、床や壁のアチコチが砕けた。天地の髪もその静電気で、逆立っていた。その稲妻を目の当たりにして、絶鬼は嬉しそうに笑みを浮べる。まだ、余裕なのだろう。

「それが、金色の龍……。雷龍神」

「五龍神に封印される五龍の中で、最も扱い難く強暴な龍だ……。これが、切り札だ」

「最も扱い難く強暴か……。楽しみだよ」
「行くぞ」

不適に笑う絶鬼に向って、天地は鋭く雷龍神を振った。それを、絶鬼は軽々と刀で受け止める。澄み渡る音が聞こえ、激しく刃がぶつかりあう。その瞬間、雷龍神の刃の周りに集まった稲妻が、弾けて天地と絶鬼の体を襲った。

稲妻が絶鬼の胸を直撃し、絶鬼の体が宙に舞った。天地も稲妻を右肩に受けて、吹き飛ばされた。激しい爆音と共に、天地は背中から壁に激突した。壁は崩れて外の風景が見えていた。絶鬼は、床に落ちて動かなくなった。稲妻が効いたのだろうか。

瓦礫に埋もれていた天地は、ゆっくりと立ち上がり絶鬼の方を見た。稲妻を受けた右肩は、ズキズキと痛みあまり動かしたく無かった。

「グツ……。やっぱり、こいつは使いこなせないな……」

天地がそう呟いた時、倒れていた絶鬼の体がゆっくりと起き上がった。白装束の胸の部分が、稲妻を受けて黒くこげていた。だが、

その顔には笑みが浮かんだままだった。

「今のは、驚きましたよ。しかし、自分がダメージを受けてしまっ
ては、何の意味も無いですよ」

「言つたる。俺もこいつは扱いきれない」

「そう言つてましたね」

意味ありげにそう言つて、絶鬼は微笑む。そして、ため息を吐き
ながら、ゆっくりと口を開いた。

「君が、まだ五龍神を使いこなせていないのは、残念ですが……。
もう終わりにしましょうか」

不気味なオーラを纏う刀を、ゆっくりと構えると、天地を睨み付
けた。天地もすぐに、雷龍神を構えたが、遅かった。鋭い刃が天地
の体を、斬りつけた。体からは血飛沫が勢いよく舞い、体中に激し
い痛みを感じる。体は吹き飛び床に倒れ、床を真っ赤に染める。

反応できなかつた。これが、絶鬼の本気なのだろうか。だが、絶
鬼はまだ力を温存しているように思えた。

床に倒れた天地の体は、重たく立ち上がる事が出来ない。

「どうです？　これが、僕と君との力の差です」

「ち……力の……差だと……」

「そうですよ。今の君は、本気を出していない僕にすら、勝つ事が
出来ないと言つ事です」

「クッ……」

体を起こそうとするが、どうしても動かなかつた。傷口からはド
クドクと、真っ赤な血が勢いよく流れ出ていた。右手に持った雷龍
神は、五龍神に戻っている。

由美はそんな天地を、見ているのが辛かった。だが、体が動かなかった。絶鬼の恐怖が体を、硬直させているのだろう。

「……天地」

由美はそう呟き、天地の方を見つめていた。

苦しそうに顔を顰める天地に、絶鬼がゆっくりと歩み寄り、刀の刃先を天地の顔に向けた。

「残念ですが、もう終わりにしましょうか」

「ウツ……」

天地は死を覚悟した。その瞬間に、あの時の光景が蘇った。雨の降るあの日、右腕を負傷したまま阿修羅と戦い、死を覚悟した時の事を。あの時、死を覚悟して目を閉じた、そのせいで由美は……。そう思ったが、体に力が入らなかった。

「それでは、オヤスミなさい」

「寝るのは、お前だ」

「！？」

鈍い音が辺りに響き、生暖かな真っ赤な血が、天地に降り注いだ。絶鬼の胸には、鋭い爪が突き出していた。天地には何が起ったのかわからなかった。ただ、目の前の絶鬼の白装束が、真っ赤に染まっていくのだけわかった。

「……ぐふっ」

絶鬼の口から、血が吹き出て床が真っ赤に染まる。辺りが一瞬にして、静まり返る。戦いを続けていた神谷と阿修羅も、絶鬼の方を

見ていた。もちろん、魁人と夜叉も……。

絶鬼の胸から突き出た爪が、引き抜かれると体がゆっくりと倒れた。そして、その後ろに立つ黒フードの少年、漸と千春が立っているのが見えた。

苦しそうな絶鬼の声が、天地の耳に届いた。

「やっぱり……。裏切った……様……だ……ね……」

「フフフツ。いつまでも、人間の貴様に従っていると思ったか？」

「どういう事だ……」

漸を見ながら天地はそう言った。不適に笑いながら、漸は天地の質問に答えた。

「こいつは、オウガじゃない。ただの人間だ。まあ、人間離れた能力を持っているようだがな」

「それでも、こいつは……」

「まさか、こいつを僕等がボスと認めていたと思うのか？」

漸のこの言葉に、魁人の近くに居た夜叉が怒りの声を上げた。

「お主！ 主君を手にかけるとは、どういっつもりだ！」

「主君か……。そう思っているのは、君だけだよ。六鬼神の内、4人は絶鬼に不満を持っていたよ」

「どういっつもりだ！」

そう叫んだ夜叉に向って、不適に笑いながら漸は阿修羅の方を見た。阿修羅も、不適に笑みを浮べるとゆっくりと口を開いた。

「ようやく、俺も自由の身か……。これで、好きなだけ肉が喰える」
「まさか、お主！」

「驚いているようだな、夜叉」

この時、夜叉は悟った。阿修羅と漸は最初から、絶鬼を裏切るつもりだったのだと。だから、阿修羅は本気を出していなかったかったと。

その瞬間、夜叉は阿修羅に向って刀を振り下ろしていた。だが、刀は澄み渡る音を響かせながら、阿修羅の槍で受け止められていた。

「オイオイ。お前の相手は、俺じゃないだろ？」

夜叉に向って不適に笑いながら、阿修羅はそう言った。怒りで刀を持つ夜叉の手は震えていた。刃と刃がガチガチと音を鳴らす。

「どうやら、状況が変わってきたな」

神谷がタバコを口に銜えながら、魁人の方へ近付いてきた。相変わらずの神谷に向って、魁人が呆れながら言葉を発した。

「神谷さん……。真面目にやりましょうよ……」

「俺は、いたって真面目さ」

「そうだ！ 天地君を！」

天地の事を思い出し、魁人は腰を低くして水鮫神を引いて、漸の方を睨み付けた。水鮫神の刃の周りを水の渦が取り囲んだ。

「噛み砕け！ 水牙鮫！」

鋭く槍を突き出すと、水鮫神の刃の周りを取り囲んだ、水の渦が鮫の形になり漸に向って放たれた。水鮫神は、一直線に漸の方に向

つていくが、その漸の前に千春が立ちはだかった。その右手には雷
犬神が、構えられていた。

「轟け！ 雷鳴」

勢いよく振り下ろされた、雷犬神から蒼い稲妻が放たれ、一瞬に
して水の鮫を玉砕した。

第四十九章 華風蓮舞

部屋中に飛び散る水飛沫が、床にビチャビチャ音をたてながら、真つ赤な血を洗い流す。振り下ろされた雷犬神の刃は、まだ稻妻を纏っていた。その雷犬神をゆっくり、振り上げた千春の後ろで、漸が天地の体を踏みつけた。

絶鬼に斬られた傷口を、思いつきり踏まれ、体に激痛が走った。

「!?」

声にならない位の激痛で、天地は苦しむ事しか出来なかった。傷口からは、更に血が溢れ床をまた赤く染めた。

魁人は漸に向って行こうとしたが、それを神谷が止めた。

「神谷さん、どうして止めるんですか」

「落ち着け。まずは、状況を見極めるんだ」

「天地君は、どうなつてもいいって言ってますか？」

「天地を助きたい気持ちは分かるが、相手が隙を見せないとそれも出来ないんだぞ」

「でも！」

魁人と神谷が言い争っている間も、天地の傷口からは血が溢れ出ていた。苦しむ天地を見ているのが、由美には耐えられなかった。ゆっくりと、鞘から疾風丸を抜く。刃が薄らと輝きを帯びて、その周りを静かに風が流れる。

疾風丸を抜いた由美に気付いた、魁人は何か嫌な予感がした。

「神谷さん。由美さんが……」

「んっ!? あいつ！」

「止めましょう!」
「ああ」

止めようとした二人だが、すでに遅かった。静かに由美の唇が動き、疾風丸の刃の周りを取り巻く風が、徐々に勢いをます。その風は、由美の体を取り巻き始め、髪が舞い上がり服が激しく揺れる。その風に漸と千春が気付いき、様子を伺っていた。

「……………。華風蓮舞」

穏やかな風が部屋の中に流れるが、どこと無く怒りを漂わせている。そして、次の瞬間、由美の姿が漸と千春の背後に現れ、疾風丸を鋭く振り抜いた。だが、疾風丸の刃は二人に届かず、雷犬神によって受け止められた。刃と刃がぶつかり合う音が響き、火花が散った。

「その程度では、漸様を傷つける事は出来ません」
「……………邪魔」

そう呟いた由美は、雷犬神を右に弾き千春の体勢を崩した。そして、隙の出来た左脇腹に蹴りを入れた。鈍い音が響き、千春の体が床に倒れこんだ。

「うっ」

床に倒れる千春を見ながら、由美が振り抜いた疾風丸を土蛇神で受け止めた。鋭い爪の先が不気味に光り、由美の頬に触れる。

「格段に速くたったようだが、僕を傷つける事は出来ないよ」
「……………その足……………邪魔」

その瞬間、漸の体が床に崩れた。天地を踏みつけていた足を、由美が払ったのだ。床に崩れ落ちる漸のお腹を、蹴り飛ばし天地の前にかがみ込んだ。

「……大丈夫？」

「ウツ……。悪いな……」

「移動……するよ」

天地の体をゆっくりと持ち上げる。由美のか細い腕で、天地を持ち上げる事が出来るのは、体を纏う風のおかげだろう。天地は小さな声で、由美に何か呟いたが、魁人と神谷には聞こえなかった。

「何、話してるんでしょうか？」

「さあ？ でも、由美ってあんなに強かったのか？」

「知りませんよ。修行から帰ってきてすぐ、ここに来たじゃないですか」

「そうだったな」

ゆっくりタバコの煙を吐きながら、神谷は笑っていた。魁人は呆れながら、苦笑いを浮べた。暫くして、由美が天地と絶鬼をつれて神谷と魁人の方にやって来た。なぜ、絶鬼を連れて来たの二人にはわからなかった。

「何で、絶鬼が一緒なんだ？」

「俺が……頼んだ」

「頼んだって、なぜだ？」

神谷が珍しく、不思議そうな顔をした。とりあえず、天地と絶鬼を床に寝かせると、由美は疾風丸を構えた。

漸が薄気味悪く笑みを浮かべながら、こっちを見ていたからだ。

「いやいや。油断しましたよ」

「全くですね」

漸と千春は、軽く服についた埃を払っている。そして、天地は漸の姿を見て、ある事に気がついた。それは、奴の右腕があると言う事だった。確か、あの時に腕は千切れたはずだった。

「お前……。その右腕は……」

「右腕？」

苦しそうにそう訊いた天地に、軽く首を傾げながら漸はそう呟く。そして、思い出したように言い放った。

「そうだったね。確か、僕の右腕はあの時に千切れたんだね」

ゆっくりとした口調でそう言って、黒フードから右腕を出した。その腕は継接ぎだらけで、不気味な腕だった。そして、その腕が誰の腕か知るのには、意外と早かった。

「その腕は！」

「まあ、貴様らの思う通りだ。これは、この島に乗り込んだ貴様らの仲間の腕だよ。結構、使いやすくてね」

「ふざけるな！」

珍しく魁人が怒りをあらわにしていた。そんな魁人に、神谷がそつと何かを呟いた。何を呟いたかは、分からないが魁人はゆっくり頷き、水蛟神を構えた。

「天地君。僕は君が回復するまでの、時間稼ぎしか出来ないけど。必ず君が回復するまで、持ち堪えて見せるよ」

そう言っつて、魁人が笑みを見せたが、すぐに表情が変わった。覚悟を決めた、そんな顔付きだった。その事に天地はもちろん、気付いていた。魁人がそんなに持ち堪えられない事も。

「頼むぞ……。結構時間が掛かるからな」

天地はそう言っつて、五龍神に力を集めて水龍神に変化させ、自分の体と絶鬼の体の傷を癒し始めた。絶鬼の傷を癒すのには、理由があった。それに、絶鬼は漸に利用されていただけなんじゃないかと思えてきたからだ。

傷を癒す二人を、タバコを吸いながら神谷は見ていた。

「でも、絶鬼の傷を癒してどうするんだ？」

「訊きたい事が、あるんで……」

「絶鬼にか？」

「エエ……」

傷を癒す天地は、ゆっくりとそう言っつて横たわる絶鬼を見た。胸を貫かれ絶鬼を、回復できるかは、わからなかったが何とか助けたと思った。

漸と千春は魁人と由美を見て、不適に笑っていた。まるで、お前等じゃあ、役不足だと言っつている様だった。ゆっくり間合いを見極めながら、向かい合っている。

魁人は腰を落とすと、ゆっくりと水鮫神を引いた。水鮫神の刃の周りには、霧状の水滴が集まり始めた。しかし、漸は余裕の笑みを

崩さなかった。

「喰らい付け！ 霧鮫連牙！」
むこうれんが

水鮫神を突き出すと、霧状の水滴はいくつかにまとまり、そのまま鮫の形になって漸に向かっていく。無数に飛び交う水の鮫が、一気に漸に向かっていった。

「漸様！」

漸の方に行こうとした千春の前に、一瞬で由美が現われた。

「私が……あなたの相手……」

「私の邪魔をすると、痛い目を見るわよ」

鋭く睨み付ける千春の目を、由美はジッと見ていた。

一方、漸は不適に笑みを浮かべながら、向って来る水の鮫をかわしていた。どこから襲い掛かっても、全てをかわしていく。

「まさか、こんな小さな鮫で、僕を喰らうというのかい？」

そう言って、魁人の居た場所を見た。しかし、そこに魁人の姿は無かった。

「あいつ……」

飛び交う鮫をかわしながら、魁人を探していると、シャンデリアの上から魁人の声が響いた。

「噛み砕け！ 水牙鮫！」

シャンデリアから襲い掛かる水の鮫は、かわす事が出来そうになかった。だが、漸は焦らず両手にはめた土蛇神を、突き刺すと叫んだ。

「我を守れ！ 土壁陣」
どへきじん

その瞬間、床が盛り上がり、漸の体を完全に覆った。水の鮫は、土の壁にぶつかり消滅した。

第五十章 封印から解かれた 水鮫 vs 土蛇

凄まじい爆音が部屋の中に響き、土埃が漸の姿を隠している。

シャンデリアから飛び降りた魁人は、水鮫神を構えたまま土埃の奥を睨んでいた。すると、土埃の中から、拍手が聞こえた。

「びっくりしましたよ。まさか、あんな所から攻撃してくるなんて、思っても見ませんでしたよ」

土埃の中から、無傷の漸がゆつくりと出てきた。あの土の壁で、全ての攻撃を防ぎきったのだろう。あれで、少しでもダメージを与えたかったが、まさか全て防がれるなんて、そう思うと体が重くなつた。水鮫神がいつもより重く感じ、もう水鮫神を振り回す力も残っていない。

「ハア…ハア……」

「息が荒いね。もしかして、もう疲れちゃったかな？」

「クツ……。こうなったら、一か八かだ……」

魁人はそう呟き、ゆつくり瞼を閉じた。そして、水鮫神に全ての力を注ぎながら、刃の鮫の刻印に向って小さな声で、言葉を唱える。

「清く穏やかな水は、全てを潤し癒しを与え、時に激しく全てを飲み込む。」

この槍に封じられし悪しき鮫、目覚め我の刃と化せ」

言葉を唱え終わると、眩い程の蒼い光りが辺りを照らした。周りの誰もが、その光りに目を奪われた。そんな中、神谷だけはサンングラスをかけて、平然と立ち尽くしていた。光りが納まると、魁人が

ゆっくりと目を開いた。

流石の漸も、その眩い光りで目が眩んでいた。

「目晦ましか……」

「ただの目晦ましじゃないぜ」

「何!？」

タバコを吸いながら、ゆっくりと神谷はそう言った。目を擦りながら、漸は魁人の位置を確認するが、薄らとしか見えなかった。

「出ですよ！ 水龍神の化身・水鮫！」

轟々しい音が響き、床が激しく揺れた。天地は何が起ころうとしたのか、わからなかった。

「神谷さん。魁人は何を？」

「んっ？ あいつは、水鮫を呼んだんだな」

神谷がそう言った瞬間、床から透通る様な蒼い鮫が姿を現し、鋭い眼光で漸を睨みつけている。そして、疲れの見える魁人に、ゆっくりと言葉を發した。

「また、俺を呼んだか」

「悪いね……。今回は結構やばくて……」

「そうか。まあ、俺には関係ない話だ」

「今回も、全て君に任せるけど、あんまり長くは持たないよ」

「わかっている。お前の姿を見ればな」

そう言って、尾で激しく床を叩いた。その瞬間、床は崩れて下の階が見えた。水鮫は勢いよく、漸に体当たりした。軽々と吹き飛ん

だ漸の体は、壁を突き破り外に落ちた。

「外に逃げられたか」

「お前が、飛ばしたんだろ」

「あれくらい、耐え切れるだろ」

「無理だよ……」

魁人が水鮫にそう言った時だった。崩れた壁から、ゆっくりと漸が這い上がってきた。服は裂けて、体には切傷が出来て、多少血が出ていたが、あんまり気にはしていないようだった。

「水鮫の封印を解くとは、驚きだね。それなら、僕も封印を解かしてもらおうよ」

そう言って、漸は瞼を閉じる。土蛇神の甲の蛇の刻印に向って、漸はゆっくりと口を開いた。

「広大な大地は、全ての生命を支え、大いなる力を与えん。

この鉤爪に封じられし邪悪な蛇。今、目覚め我の前に立ちほだかる敵を喰らえ」

そう言い終えると、土蛇神の蛇の刻印から、緑の眩い光りが辺りを照らした。皆は目を伏せたが、サングラスを掛けた神谷だけは、漸の方を見ていた。緑の光りの中で、漸の声が響いた。

「姿を現せ！ 土龍神の化身・土蛇！」

光りは納まり、大地が揺れた。激しい揺れで、魁人の体は床に倒れた。もう、体力も限界だろう。そんな魁人の前に、床を破り巨大な土色の蛇が現われた。水鮫よりも更に鋭い目付きで、魁人の事を

見下している。そして、漸の方を見てガラガラの声でゆっくりと言
う。

「私の封印を解いたのは貴様か」

「その通りだ。お前の敵は奴等だ」

「敵だと？」

土蛇はゆっくりと漸の指差した所を見た。そこに居る、水鮫に気
付くとゆっくりと言った。

「貴様は、水鮫か……。久し振りだな」

「そうだな。最後に会ったのは、1000年前だったか」

「まさか、貴様が私の敵か」

「そう言う事らしいな」

「そうか……。ならば、容赦はせぬ」

「お前に、容赦される覚えはねえな」

水鮫はそう言うと、勢いよく尾で床を叩き土蛇に、襲い掛かった。
一方の土蛇は、体をくねらせながら、襲い来る水鮫を避けていた。

「1000年の間に、鈍った様だの。水鮫よ」

「鈍っただと？ それは、お前の方じゃないのか？」

そう言って、水鮫は大きく口を開いた。その口の中に水が球体な
り、集まり始めた。

「碎ける！ 激流水波」

大きく開かれた口から、放たれた球体の水は、轟く音を辺りに響
かせながら、土蛇の体を貫いた。土蛇の土の体が、崩れ落ち床には

無残に、泥だけが残された。だが、漸は表情を変えずに、水鮫と魁人を見ていた。

床に膝をついたまま、魁人は立ち上がる事が出来なかった。水鮫はゆっくりと魁人の横に來ると、静かに口を開いた。

「大丈夫か？」

「君が、人の心配をするなんて……。どういふ風の吹き回し……」

「フツ……。別に心配をしている訳じゃない。お前が力尽きれば、俺も消えてしまふからな」

弱々しい魁人の声に、水鮫はそう答えたその瞬間だった、床を突き破り太く長い土蛇の体が、水鮫の横に居る魁人に巻き付いた。そして、ガラガラの土蛇の声が響いた。

「忘れたのか？ 我の体は脱皮する事で更に、堅くなることを」

「グアアアアツ」

土蛇の体が魁人を締め付け、魁人の叫び声だけが響いた。水鮫の体は徐々に薄くなつていき、魁人の力が弱まりつつあるのを感じ取った。

その時、神谷がゆっくりとタバコを床に落とした。そして、火虎神で鋭く土蛇の体をついた。爆音と共に、土蛇の体が砕け、そこから魁人を助け出した。

「うつつ……」

「よくやった、後は俺が時間を稼ぐから、ゆっくり休め」

神谷はそう言って、魁人を床に寝かせた。水鮫は神谷を見て、ゆっくりと口を開いたが、水鮫の体は消滅し、言葉は届かなかった。だが、水鮫が何を言いたかったのか、神谷には分かっていた。

「さて、俺の弟子を散々いたぶってくれたみたいで」

「何を言ってるんだ？ やられている彼を、あんたは見ていただけだったじゃないか」

「それじゃあ。まずは、その巨大な蛇を退治しようかな？」

「あなたも、封印を解くのかな？」

「それも、いい考えだな」

神谷はそう言って、火虎神を構えて力を集中した。だが、漸が簡単に封印を解かず訳が無かった。土蛇に目で合図を送ると、土蛇が神谷の体に巻き付いた。

「土蛇！ 思いっきり奴を潰せ」

「言われずとも、そうするさ」

握りつぶそうと、力を入れた土蛇の体に激痛が走る。そして、ゆつくりと神谷の声が聞こえてきた。

「激しく燃え盛る炎は、全ての物を焼き尽くすまで燃え上がる。

この棍に封じられし勇敢な虎。永き眠りから覚め、向かい来る者を焼き払え」

この言葉が終ると、神谷の体に巻き付いた土蛇の体の隙間から、真っ赤な光りがもれてきた。そして、もう一度神谷の声が響き渡る。

「出て来い！ 火龍神の化身・火虎！」

その瞬間、土蛇の体が弾けとんで部屋中に土が飛び散っていた。そして、土蛇が居た場所には、真っ赤に燃え盛る虎と神谷の姿があった。タバコを取り出した神谷は、燃え盛る火虎の体で火を点けて

口に銜えた。

「久々に封印を解いたが、動けるか？」

「ああ……。それより、俺の体で火を点けるな」

「そう言っな。減るもんじゃないし」

「緊張感の無い奴だ」

「よく言われるよ」

神谷はそう言って笑った。そんな神谷に呆れつつも、火虎の視線がゆっくりと漸に向いた。

「火虎、言っておくが、俺達は時間稼ぎだ。奴は俺達の力で奴は倒せんからな」

「分かっている。俺は土蛇や水鮫と違うんでな」

そう言って火虎は、床を蹴った。鋭い火虎の爪の跡が床に残り、勢いよく漸に向って行った。

第五十一章 風と雷

燃え盛る火虎が漸と格闘している最中、風を纏った由美と雷犬神を持った千春が激しくぶつかり合っていた。

勢いよく振り下ろされる雷犬神を、疾風丸で受け止めると千春のお腹に蹴りを入れる。流石に、風を纏った由美の動きに、千春は追いつく事が出来ないでいる。だが、その副作用がジワジワと由美の体に襲い掛かっていた。

「ハア…ハア……」

由美は息が荒く、大量の汗が額から流れ出ていた。華風蓮舞を発動してから、かれこれ20分近く経つ。疾風丸の柄を握る手には、もう感覚が無くなって来ていた。体中、傷だらけなのに、全く痛みを感じなかった。

「ハア…ハア……」

「随分、疲れてるわね」

「ハア…ハア……」

「もう、話す元気も無いの？」

「ハア…ハア……無駄な……ハア…ハア……話は……ハア……したくない……」

「そう。でも、あなたの周りの風は、随分弱まっている」

千春はそう言って息遣いの荒い由美に、雷犬神を向けてニコニコと微笑んでいる。確かに、由美の体を取り巻く風の勢いは、始めに比べてかなり弱まっていた。この風が消えた時、由美は千春にやられると、確信していた。

「あなたの命ももうすぐ消えるわ！」

「ハア…ハア……」

「轟け！ 雷鳴！」

雷犬神を勢いよく振り下ろすと、刃先から蒼い稲妻が走った。床を激しい音をたてながら、由美に向って一直線に向かって行く。その場で立ち尽くしたまま、由美は動かなかった。

そして、体を包んでいた風が消えていた。これで、自分の命が尽きたと由美は思った。だが、蒼い稲妻は由美の目の前で、鋭い何かとぶつかり消滅した。

「誰!？」

千春はそう言っ、部屋の入り口の方を見た。そこには、風鳥神を構えた昴の姿があった。

「吹き荒れる風は、静かに時を流れ、時に暴風と化して全てを壊す。この弓に封じられし清らかな鳥よ。その翼を今一度羽ばたかせ」

辺りが真っ白な光りに包まれた。そして、物凄い風が部屋の中に吹き荒れた。由美は目を閉じ、その風を肌を感じながら、ゆっくりと疾風丸に風を蓄えている。光りの中で昴の声がこだまする。

「飛びたて！ 風龍神の化身・風鳥！」

光りが納まり、部屋の中に吹き荒れていた風が、昴の横に集まり始めた。

漸と戦う火虎の体の火が、その風で更に勢いを増していた。神谷は口元に笑みを浮かべ、ゆっくりと漸を見た。そして、持っていた火虎神を構えると、床を蹴り漸に向かっていった。

「行くぞ！ 火虎！」

「俺は、さつきから戦っている」

「細かい事を気にするな」

「お前は、大雑把過ぎるぞ」

火虎はそう言って、鋭い爪を漸に振り下ろす。漸はそれを右手の土蛇神で受け止める。その右脇腹に神谷が、火虎神を振り抜いた。鈍い音が響き、神谷の手にもズツシリ重い手心えを感じた。だが、火虎神は漸の左手の土蛇神に止められていた。

「甘いね。この程度なら、簡単に!?!」

激しい痛みが左腕に走った。先程、確かに受け止めたはずの火虎神が、いつの間にか左腕を捕らえていた。その痛みで、力が緩み右手で防いでいた火虎の鋭い爪が、漸を切り裂いた。

昴の横に集まった風は、美しい鳥になっていた。綺麗な翼が煌き、美しい目が全てを見透かしている様だった。そして、透通る様な美しい声が静かに響く。

「私の封印を解いたのは、あなたですね。私の力は微弱ですが、あなた方の助けになりましたよ」

「それじゃあ……。あなたの風の力を、彼女に……」

由美を指差して、昴はそう言った。すると、風鳥はゆつくりと頷き翼を羽ばたかせた。強風が部屋の中に吹き荒れ、壁には亀裂が走った。重たい腕をゆつくりと振り上げると、疾風丸の刃の周りに風が取り巻き始めた。そして、その風は由美の体も取り巻いていく。

ゆつくりと風鳥の体が、浮き上がり部屋の中を華麗に舞う。

「あなたに、私の力を授けます」

「……ありがとう」

透通る美しい声が、由美の耳に届き風鳥が、由美の体を取り巻く風と一体となった。風は更に勢いを増し、重かった体が軽くなった気がした。それも、体を取り巻く風のおかげなのだろう。

「風が戻ったようね。でも、あなたの体はもうボロボロよ」

「……それでも……私は戦う」

鋭く千春を睨むと、床を蹴った。風が吹き抜ける音が、千春の耳に聞こえたかと思うと、背後に由美が現れた。気付いた時には、右肩から血が噴き出ていた。

よるめき、床に膝をつくと、その首元に風を纏った疾風丸が、そつと触れた。

「あなたの……負け……」

「フツ……。私にとっての負けは、死んだ時だけ……」

雷犬神を左手に持ち替えると、素早く反転し背後に居る由美に斬りかかる。だが、その刃は由美の纏う風によつて、弾き返された。弾かれた雷犬神は、千春の手から離れ、床を滑る様に飛んで行った。由美は何も言わずに、疾風丸の刃先を床に倒れる千春に向けた。悔しそうに下唇を噛み、千春はゆつくり口を開いた。

「どつやら、ここまでのようね。さあ、殺しなさい」

「……」

千春の言葉に、由美は何も言わずに疾風丸を鞘に収め、千春に背を向けた。由美を取り囲む風は、疾風丸と共に鞘に納まったかの様に静まり返った。どうして由美が止めを刺さないのか、昴にはわからなかった。

「由美！ どうして、止めを刺さないの！ 姿は千春でも、中は才ウガなのよ！」

「……ごめん」

由美は小さくそう言った。その声は、入り口に居る昴に微かに聞こえた。その瞬間、千春の口元に笑みが浮かんだ。

そして、走り出し床に転がる雷犬神を拾い上げ目を閉じて言う。

「轟き響く金色の雷、全てを破壊し、全てを奪う。」

この大剣に封じられし忠実なる犬。轟く雷と共に今蘇れ！」

眩い金色の光りが雷犬神から発せられる。背を向けている由美には、その光りは別に大した事は無いが、天地や昴にとってはとても眩かった。

「来い！ 雷龍神の化身・雷犬！」

凄まじい爆音と共に、稲妻の体の犬が現われた。周りの壁を破壊するように、稲妻が飛び交う。シャンデリアは稲妻を直撃し、勢いよく床に落下した。幸い、その下には誰も居なく、怪我をする者は居なかった。

「我が主の為に、忠実に命を受けよう」

「なら、あの女を喰らうのよ」

雷犬神を由美に向けて、千春はそう言う。雷犬は由美の方を見て、ゆっくりと口を開いた。

「あの者から、何の力も感じない。我が手を下さずとも」

「いいの。力の差を見せ付けるのよ」

「承知いたします。ならば、参る！」

雷犬は勢いよく床を蹴り、大口を開けながら由美を喰らおうとした。その瞬間、由美が小さな声で言った。

「…………ごめん。…………千春」

その声は小さく、その声は誰にも届かなかった。雷犬は由美に向けて牙を向けた。だが、由美は素早く体を反転させると、腰を落とし右膝を床につき、素早く疾風丸を抜きながら叫んだ。

「裂け！ 波動一閃！」

疾風丸を鞘から抜くと、今までおさまっていた風が、一瞬にして吹き出した。それは、巨大な刃と化し、眼の前の敵、すなわち雷犬を切り裂いた。稲妻は弾け、壁を貫いた。

「そんな馬鹿な！」

そう叫んだ千春の体に、凄まじい風が襲いかかった。それが、風の刃だと気付いた時には、体が消滅していた。風の刃が消えた後、部屋にはその跡がしっかりと残っていた。床と天井は二つに裂け、壁は崩れ落ちていた。もちろん、雷犬神も砕け散っていた。

そして、疾風丸を抜いた由美の体も、ゆっくりと床に崩れ落ちた。

「由美！」

部屋の入り口から、足元に気をつけながら昴が駆け寄った。倒れる由美の体を起こした。体中傷だらけで、戦いの激しさがそれを見ただけで伝わってきた。体も冷たく、血が通っていないかの様だった。

第五十二章 絶鬼の過去

由美の放った風の刃で、壁や天井、床、いたる所が崩れている。天地の傷は大分癒えてきているが、絶鬼の傷の方は未だに癒せずにいる。

「昂！ 由美と魁人をつれて来い」

「でも、それじゃあ、あんたの体力が」

「俺は平気だ！ それよりも、由美と魁人の方が重傷だ！」

天地にそう言われ、昂はゆっくりと由美の足を引きずりながら、天地の元に運んだ。その後、すぐに魁人も運んできた。

天地の額からは汗が流れ、頬を伝い顎から床に零れ落ちた。相当疲れが見えている。それもその筈だ、五龍神を変化させるだけでも結構な体力を使うのに、長時間も水龍神を使い傷を癒せば、疲れも溜まるはずだった。

「ハア… ハア… グツ…」

「大丈夫なの？」

「心配するな……。この位……」

目を閉じながら、水龍神に力を集めた。弱々しく蒼く輝き、薄らと水の膜が水龍神を包んだ。

「傷を癒せ！ 清水泡！」

水龍神を包んでいた水の膜が、魁人と由美の体を包んだ。だが、その水の膜は明らかに今までのよりも薄く、すぐに弾けてしまいうだった。多分、天地の体力が限界に達しているせいだろう。

それでも、水の膜は魁人と由美と絶鬼の傷口を、癒していた。その時、絶鬼が薄らと目を開き、ゆっくりと口を開いた。

「なぜ……、僕を助ける……」

「目が覚めたのか……」

目を覚ました絶鬼に天地は弱々しい声で言った。絶鬼にも、天地が限界だと言う事は、はっきりと分かっていた。

「僕は……、君等の敵だ……。助けてもらおう義理は無い……」

「お前に、その気が無くても……、俺はお前に聞きたい事があるからな……」

「僕が、オウガと一緒に居る理由か？」

「そうだ……」

天地はそう言って頷いた。何も言わずに、絶鬼はゆっくりと目を閉じて、呼吸を整えていた。そして、間を開けてからゆっくりと言った。

「僕がオウガと一緒に居るのは、人間の悪しき所ばかりを見たからかな……。まあ、君には分からないだろね」

絶鬼はそう言って薄らと笑みを浮べた。人間の悪しき所なんて、天地にはよく分らなかった。そんな天地に、絶鬼は自分の過去の話をし始めた。

〈絶鬼の過去〉

僕は、生まれてすぐに親に捨てられ、孤児院で育った。

生まれ付き、白髪で細目で色白だった僕は、よくいじめられて、友達なんて一人も出来なかった。唯一の友達は、孤児院で飼ってい

た子犬だった。その子犬は、薄汚くて滅多に人も寄り付かず、僕にとってその子犬と居る時間だけ心が和んだ。

ある日、僕が子犬に会いに行くと、小屋の前からその子犬は消えていた。確か、鎖で繋がれていたため、自分で逃げ出すと言う事は無いだろう。

そう思い孤児院内を探していると、二人組みの少年たちの声が聞こえた。

「あいつ、今頃あの汚い犬を探してるぜ」

「まあ、あんな奴と犬が居なくなっちゃっても、この孤児院じゃあ、気にする奴なんかいないぜ」

「そうだな。それに、あの白髪は不気味だって」

「あいつ、絶対化け物だぜ」

その後も、色々と何かを話していた。だが、僕は最後まで訊かずに、すぐに孤児院を出た。そして、町中を駆け回り、暗くなるまで子犬を探した。

街灯が暗い歩道を、薄らと照らしている。僕は半ば諦め気味で、孤児院に足を運んでいると、犬の鳴き声が聞こえた。その鳴き声は、弱々しいがあの子犬のものだ、そう気付き僕は走った。裏道を抜けると、大きな広場に出た。土管が数本横たわり、木が数本だけたっている広場。

ただその広場には、巨大な生物が居た。暗くてよく見えないが、その手には血だらけの子犬が、足を掴まれ逆さ釣りにされていた。僕はその巨大な生物に叫んだ。

「その犬を放せ！」

「ガアアアッ」

唸り声の様な声を発し、その生物が僕の方を見た。恐ろしい目付

きで、口からは牙が剥き出しになっていて、その先からドロドロの液体が垂れた。頭には角らしき物が生えている。この時、僕は初めてオウガを目にした。始めは恐怖で動けなかった。だが、そのオウガが子犬を口に入れた瞬間、僕の中で何かが弾けた。

そして、気がついた時には全身が血だらけで、腕には動かなくなった子犬を抱えていた。オウガの血はすぐに微粒子となり、風で吹き飛んでいったが、その子犬の血だけはしっかりと服や顔についていた。

僕は泣きながら、孤児院に帰宅した。すると、孤児院を管理する男が血だらけの犬と僕を見て、いきなり怒鳴りだした。

「この化け物め！ ついに家の犬にまで、手を出したか！」

「ぼ……僕……」

涙を堪えながら、状況を説明しようとしたが、そんな事聞かずに男は僕を殴り飛ばした。その後も、何度も男は僕を殴った。

「うっっ……」

僕は暗く狭い物置に、入れられていた。血まみれの姿で、血まみれの犬を抱いていた。狭い物置は、その血の匂いだけが漂っていた。薄らと光りの入る隙間から、小さく声が聞こえた。

「あの犬死んじまったみたいだな」

「ああ、そうみたいだな」

それは、あの犬の話をして一人の声だった。そこで、僕は真実を知った。

「でも、ビビッだよな。あんな化け物が空き地に居るんだからよ」
「まあ、死んじまったのは、あの汚い犬だけでよかったぜ」
「いっその事、あいつも死んでくれれば良かったのに」

その言葉を聞いた瞬間に、心の奥に眠っていた物が、目を覚ました感じがした。悲しみと怒り、そして、憎しみが僕の心で混ざり合い、今までにないほどの殺意を覚えた。

自分が何をしたかは覚えていないが、気がついた時には物置の扉を破壊し、右手には物置に置いてあった刀を持っていた。その刀は禍々しい殺気を帯びていて、自分の心の闇を全て引き出してくれているようだった。

二人は僕を見ると、怯えた目をしながら腰を抜かしていた。

「や……、止める！」

「うわあああっ！」

僕は無意識にその二人を、刀で切りつけていた。血飛沫が道幅の狭い廊下に飛び散った。その血は、もちろん僕の顔にも飛び散っていた。悲鳴を聞いて、何人もの人がやってきたが、次々と刀で切り裂いていった。

結局、孤児院に居た人間を全て切り裂き、僕は孤児院を後にした。そして、出会ったオウガが今、漸と名乗っているオウガだった。

過去を話し終えた絶鬼は、ゆっくりと天地の方に顔を向けた。天地は何も言わなかった。そんな天地に、絶鬼がゆっくりと口を開いた。

「どうして、何も言わない……」

「なら……、お前は……何て言って欲しい……」

表情を変えず、絶鬼にそう言った。天地にも絶鬼の気持ち、何となく分かっていた。一人ぼっちの寂しさを、天地自身が知っていたからだ。

「俺も……、よくいじめられて、友達がいなかったから……」

「君が、いじめられていた？」

「ああ……、ここに居るメンバーで知っている奴は、多分神谷位だと思うが……、俺は生まれ付き瞳の色が真っ赤で……。今はカラーコンタクトで、分からないけど……。あの頃はコンタクト、してなかったから鬼の子って言われて……。ついでに、俺の通ってた学校って、ハンター育成学校でさ」

そう言っつて、天地は苦しそうに笑う。それを見て絶鬼も薄らと笑みを浮べた。

「鬼の子か……。そうまで言われて、よくハンターになったね」

「俺はあいつに会ったから、ハンターになるまで頑張れた」

「あいつ？」

不思議そうな顔で絶鬼は、天地の顔を見た。天地はゆっくりと頷きながら、口を開いた。

「ああ……。俺は裕二と出会い、ハンターになろうと決意した……。あいつは、俺にこう言った『例え人と違ってても、それは、自分だけが持つ特別な物。だから、誰に何を言われても気にするな。人と違うと言つ事は、それだけ違う運命を歩む事の出来る、特別な存在なんだから』」

まあ、今思えばちょっとクサイ言葉だけど……。その時の俺には、

とつてもいい言葉だった」

昔を思い返ししながら、天地はゆっくりと笑みを浮べた。その顔を見て、絶鬼がゆっくりと笑い出した。絶鬼に笑われて、何だか少し恥ずかしくなった天地は、言葉を続けた。

「それで、俺が言いたかったのは……。俺とお前は似た様な育ちだったが、出会った相手が悪かったって事かな」

「面白い話をするね。僕は悲しみと怒りと憎しみに、取り付かれたオウガにも人間にもなれなかった、ただの化け物だよ……」

悲しい瞳でヒビの入った天井を、見つめていた。その絶鬼の体からは、もう殺気を感じなかった。多分、水龍神の力で絶鬼の心の闇を浄化したのだろう。

第五十二章 絶鬼の過去（後書き）

この度、総アクセス数が2000人を突破しました。
愛読してくださる皆さん、ありがとうございます。

この物語も、あと何章かで最終章となります。
ぜひ、最終章まで愛読宜しく願います。

評価・感想など、お待ちしておりますので、お聞かせくださると嬉しいです。

第五十三章 吸収

絶鬼と話をしている間も、休まず傷の治療をしていた、天地は疲れで目眩を起こした。すでに、汗は流れなくなっていた。全身に感覚がなく、体が軽くなった様な錯覚を覚えていた。

そんな中、神谷と火虎は漸をドンドン追い込んでいった。床には血が飛び散っているが、それが誰の血なのかは、わからなかった。火虎の力は、まだ衰えず全身の炎も、十分燃え盛っている。

「流石に2対1では、こちらが不利ですね」

「まだ、余裕みたいだな」

漸に向ってタバコを銜えたまま、神谷が言った。どちらかと言えば、神谷の方が余裕のあるように見えた。

そんな神谷に向って、漸が不適に笑みを浮かべながらゆっくりと言った。

「悲しみ、怒り、憎しみ。どれも、弱い人間の心にある感情だ」

「それが、どうした？」

「その小さな悲しみ、怒り、憎しみが、一つになったらどうなると思う」

「そりゃ、凶悪なオウガが……！？ まさか」

驚いた表情で神谷は、漸を見ていた。驚いた拍子に、銜えていたタバコは、ゆっくりと床に落ちた。漸が何を考えているのか、神谷にはわかったが時はすでに遅かった。

漸の体からおぞましい程の殺気が、溢れて出して崩れた壁から凄まじい風が入ってきていた。風が部屋に入ってくると、ひび割れた壁がミシミシと軋む音を、辺りに響かせていつ崩れてもおかしくな

かった。

「グツ……」

その突風で舞い上がる、砂埃や細かい岩が、目の前にいる神谷に襲い掛かる。その神谷を庇う様に、火虎が前に立ちはだかった。火虎の体の炎は、風で更に勢いを増している。

「あの者の体に邪悪な力が集まっているぞ」

「そうだな……」

どす黒い球体の塊が、無数風に乗って崩れた壁から入ってきて、部屋の中を渦巻いていた。その球体の塊は、風に乗りながら漸の体に吸収されていった。

その時、阿修羅の怒鳴り声が部屋中に響いた。

「どつという事だ！」

その声のする方に、全員の視線が向いた。すると、対峙している阿修羅と夜叉の体が、徐々に石化していくのが分かった。

苦しそうな顔で阿修羅は、漸を鋭く睨み付けた。漸は薄らと笑みを浮かべると、ゆっくりとした口調で言った。

「君は、実に使える駒でした……が、もう用済みだね。僕の力の一部になってもらおうかな」

「なっ！」

その言葉に驚きを隠せない阿修羅は、一步後ろに後退りした。その瞬間、右手に持っていた槍が床に落ち、澄み渡る音が響き渡った。阿修羅の腕は砂の様に、床に零れ落ちる。ゆっくりとだが、確実

に阿修羅の体は石化していた。夜叉も体が石化し、すでに床に横たわっていた。

「グツ……。お主も……利用されただけのようだな……」

夜叉はそう言うと、完全に石化され風に吹き飛ばされていった。その夜叉を見て阿修羅も、自分の最後を悟った。そして、ゆっくりと仰向けに倒れた。

阿修羅の体は床に倒れる前に完全に石化し、床に倒れると同時に石化された阿修羅の体は砕け散った。

「どうなってるんだ……。絶鬼」

「阿修羅と夜叉の事か？」

吹き荒れる風に耐えながら、天地は絶鬼を見た。今まで笑みを浮べていた、絶鬼が急に真剣な顔をしている。その絶鬼の表情を見ただけで、天地は漸が恐ろしい事をしようとしているのだと、分かった。

その頃、各地に広がるオウガ達の体も、石化し崩れ落ち粒子と化して消えていった。

オウガに気付かれない様に、全ての明かりを消した管理人室の隅に、裕二と歩美の姿があった。微かに感じていたオウガの気配が、次々と消えていくのに裕二は嫌な予感がしていた。

「どうなってる……」

不安そうな裕二の声に、怯えた様子の震えた声で歩美が訊いた。

「ど、どうしたの？ な、何かあった？」

「いや……。外で微かに感じていたオウガの気配が、次々と消えて言ってるんだ……」

「それじゃあ……。魁人達が？」

期待に満ちた様な表情で歩美はそう言ったが、その表情は暗いため裕二には見えていない。

そんな裕二は、その期待を裏切る様に言葉を続けた。

「多分……。まだ、決着はついていない。と、言うか、これから、最終決戦になると思う」

「それじゃあ、何でオウガが？」

「それは、分からないけど……。多分、最終決戦に向けてオウガの力を集めてるんじゃないかな？」

「そんな……」

不安そうな顔で肩を落とす歩美を、励まそうと裕二は口を開いた。

「大丈夫だ。あいつは……。いや。あいつ等は、負けない。きっと、全員生きてこの寮に戻ってくる」

歩美の肩を叩き、微笑みかけるが、部屋が暗いせいで歩美から、裕二の顔は確認できなかつた。でも、裕二の言葉を聞いて、歩美もゆっくりと微笑みかけた。

そして、天地達の無事を祈っていた。

幾つもの黒い球体の塊が、世界中各地から絶鬼の城に集まっていた。そして、砕けた壁からその黒い球体の塊は部屋に入り、漸の体に取り込まれていく。漸の体から出る気配は、黒い球体の塊を吸収

するにつれて、強くなっていった。

「力が……力が溢れる！」

そう言いながら、漸は両腕を広げて大声で笑っていた。体のそこから溢れる力に、酔いしれているのだろう。その笑い声は部屋中に響き渡っていた。

「あやつのが、更に強くなっていくが、どうするつもりだ？」

「さあな。俺達はただの時間稼ぎ……。最後は五龍神に選ばれた、天地の仕事だ」

「無責任な奴だ」

「俺はあくまで脇役だ。主役にはなれないタイプなんだよ」

新しくポケットからタバコを取り出し、口に銜えるとゆっくりと火虎神で火をつけて、笑みを浮かべながら火虎神を構えた。自分のすべき事を、神谷はしようとしているのだ。そして、神谷が何をすることもりなのか、火虎には分かっていた。

「俺はお前に最後までついて行くぞ」

「当たり前だ。俺とこの火虎神は、死ぬ時までずっと一緒さ」

火虎はそう言ってゆっくりと、漸の方を見て体の炎を更に燃え上がらせた。銜えていたタバコを左手で掴むと、床に落とした。

そして、火虎神を構えると、勢いよく床を蹴った。火虎も神谷に続き床を蹴り、漸に向かっていった。

神谷は右方向から鋭く火虎神を振り抜いた。火虎神が風を切る音に少し遅れて、火虎神が鋭く漸に襲い掛かった。火虎神を握る神谷の手に、ズッシリと重い感触があった。だが、火虎神は漸の人差し指一本に、止められている。

そして、左方向から振り下ろされた火虎の爪を、漸は軽々と右手でその爪を受け止めた。

「グッ！」

「ちょっと、気が早いですよ。僕の体はまだ完全体じゃないんですよ」

そう言いながら、人差し指で火虎神をゆっくりと押し返した。その力に、神谷はなすすべなく、後退した。

火虎もすぐに距離を取り、漸を睨み付けた。

「やばいぞ！ これ以上は俺達では」

「それでも、やるんだ」

神谷は火虎神を構えなおし、漸の方を睨み付けた。だが、漸はそんな神谷と火虎の事など、全く気にせずに、集まる邪気を体中に取り込み不気味に笑っている。

邪気を取り込み、強まる漸の力に流石の神谷も恐怖を感じていた。

「行くぞ！ 火虎！」

「この命に代えても奴の吸収を、止めて見せよう」

神谷と火虎は同時に床を蹴った。炎を纏った火虎神を、勢いよく振り抜きながら神谷は叫ぶ。

「焼付け！ 爆炎一閃」

火虎神を取り巻く炎は、更に勢いよく燃え上がり漸に襲い掛かる。だが、火虎神は漸に軽々と受け止められた。そして、神谷の体は勢いよく吹き飛ばされ、床に激しく体を打ちつけた。

火虎の鋭い爪が漸に勢いよく振り下ろされるが、その鋭い爪も、軽々と受け止められ、漸がゆっくりとした口調で言った。

「お前と遊ぶのも飽きた。これで、終わりにしよう」

「ふざける　！？」

火虎がそう言いかけた時、漸の土蛇神が鋭く空を切り裂いた。その瞬間に、火虎の体が切り裂かれ、床に崩れ落ちた。

第五十四章 失われた力

床に崩れ落ちた火虎の頭を、ゆっくりと振り上げた右足で踏み潰した。漸の右足が火虎を潰したせいで、紅い炎を纏っていた。

「フハハハッ！ 火虎、水鮫、風鳥、雷犬、土蛇。五大獣は消えた。残るは五龍神に封印される五龍だけだ」

確かに、火虎が消滅したと同時に、神谷の持つ火虎神は力を失い、鮮やかな赤色だった棍の色も、色褪せて石化していた。

魁人の水鮫神も、刃は輝きを失い、先の方から石化して行く。風鳥神も弦が切れ、石化が進んでいた。

もちろん、漸の手にはめられている土蛇神も、石化してきている。

「どうなっている……」

石化する火虎神を見ながら、神谷はそう言った。もちろん、天地や昴にも何が起こっているのかわからなかった。

ただ、自分たちが絶体絶命の窮地に、立たされていると言っ事だけ分かっていた。

「もうすぐ……。もうすぐ完全体に！」

漸はそう言いながら、両手を広げて笑い始めた。増幅する漸の力の前に、武器を失った神谷は何も出来ないでいた。

流石の神谷も、悔しそうにしているかと思っていたが、神谷は表情を変えず、タバコを口に銜えてゆっくりと立ち上がった。

「火虎神も失っちゃったか……。だが、時間は稼げた。後は天地に

任せる」

神谷はそう言って天地の方を見た。だが、天地は床に倒れて息を荒げていた。それを見て、神谷は天地に駆け寄り、襟を掴み大声で怒鳴った。

「何寝てるんだ！ 折角、時間を稼いだのに！」

「な……、何……言ってる……。俺は……お前に……時間を稼げ何て……言っていない……」

「何言ってるんだ！ お前が俺達の最後の希望なんだぞ！」

神谷はそう言って、天地の体を激しく揺すった。頭が激しく揺れて、気持ちが悪くなってきた。

「ウツ……。止めろ……」

神谷が手を離すと、天地の体は床に倒れた。力なく床に倒れた天地に、神谷はため息を吐きながら言った。

「希望の光が、こつも弱々しいと闇に飲み込まれた気分になる……」

「実際、もう闇に飲み込まれている」

神谷に向って、絶鬼がゆっくりとそう言った。胸の傷は完全に塞がっては居ないが、絶鬼は刀を右手に持ちたっていた。

床に倒れている天地に向って、絶鬼がゆっくりと言葉を発した。

「僕は闇で、君は光。光の君には、護るべきものがあるんだから……」

「死ぬなよ……」

絶鬼が言い終わる前に、天地が言った。少しかすれた声だが、絶鬼にははつきりと聞こえた。絶鬼はゆっくりと笑みを浮かべながら、言葉を続けた。

「元々、君達は僕を倒すために……」

「お前の心の闇は消えた。それに、闇が無いと、光は輝かない」

そう言って天地はゆっくりと、微笑んだ。それに対し、絶鬼も微笑み返してからゆっくりと言った。

「そうだね」

「ああ」

天地がそう言うと、絶鬼はゆっくりと一步前に出た。その絶鬼に向って、漸がゆっくりと口を開いた。

「死に底無いか……。貴様が僕に勝てると思っているのかな？」

「そうだね。今の僕では、君に勝てるわけが無いね」

「それでも、僕に立ち向かうのか？」

漸はそう言って、絶鬼を見た。黒い球体の塊を全て吸収し、部屋に吹き荒れていた風はおさまっていた。

体の底から溢れる力に、漸は自然と笑みがこぼれた。負ける気がしないと、言う感じで笑みを浮かべている。

「嬉しそうだね」

「ああ……。嬉しいさ。この湧き上がる力が」

「君の話はつまらないし、さっさと始めようか」

「面白い事を言うな」

不適に笑みを浮べる漸に、絶鬼も笑みを浮べていた。二人は対峙したまま、動きを止めていた。漸の体から発する殺気が、体にピリピリと伝わる。

微かに恐怖で体が震える絶鬼に、漸がゆっくりと口を開いた。

「体が、震えている様だが、怖いか？」

「そうだね。こう言うのを怖いって言うんだろうね」

そう言っつて絶鬼が微笑むと、漸がそれを鼻で笑ってゆっくりと右手を絶鬼に向けた。その瞬間、絶鬼の体を何か見えない力で、吹き飛ばした。床を転がり、絶鬼は動かなくなった。

暫くして、ゆっくりと立ち上がると、漸の方を見て呟いた。

「びっくりした……」

その声は、小さくて漸には聞こえなかった。ゆっくりと息を吐きながら、絶鬼は漸を睨み付けた。その絶鬼の体に、見えない力が襲い掛かってきた。何度も何度も、絶鬼の体を吹き飛ばし、刀を構える事すらさせて貰えなかった。

「ウツ……」

「どうした？　それが、全てを破壊する鬼の力なのか？」

絶鬼を馬鹿にする様に、そう言っつて笑っている。その顔がムカつき、一発殴りたいと思っつていたが、体は動かず胸の傷口から血が出てきていた。

そんな絶鬼の前に進んだ漸は、白髪を掴みあげてゆっくりと言っつた。

「お前、この白髪を嫌っつていたな。なら、今度はその髪を真っ赤に

染めてやるっ」

そう言って、絶鬼の持つ刀を奪った。鋭い不気味に輝く刀を、ゆっくりと振り上げた。

「さよなら、全てを破壊する鬼、絶鬼よ」

鋭く刀を振り下ろそうとした漸の背後で、天地の音が響いた。

「お前の相手は……俺だ」

絶鬼の体を床に投げ捨てると、ゆっくりと振り返った。そこには、フラフラの天地が立っていた。

すでに、体力は無く、立っているのがやっとだと言うのは、本人も周りのメンバーもわかっていた。

だが、天地に頼るしか無かった。五龍神に選ばれた、天地に頼るしか……。

「そんな状態で僕に勝てるのか？」

「勝てるのか？ 違う……。勝たなきゃいけないんだ」

天地はそう言って、五龍神の柄をしっかりと握り締めた。だが、天地の目には漸がブレて見えていた。

視点が定まらず、何度も首を横に振っていた。

「さて、貴様の持つ五龍もこの世から消し去ってやるっ」

「やれるものなら、やってみろ……」

強がるが、まともに漸と戦えるなんて、思ってたなかった。五龍神をゆっくりと構え、視点の定まらない目で、漸を睨みつけている。

不適に微笑みながら、ゆつくりと絶鬼から奪った刀を構えた。不気味に輝くその刀の刃に、漸の体を取り巻く殺気が集まっていた。

「君は、僕に一撃も与える事も無く、死を迎える」

「それは、予告か？ それとも、ただの挑発か？」

「どちらでも無いね。これは、予言。君の未来さ」

その言葉と同時に、漸は刀を振り上げて、一気に振り下ろした。殺気を纏った刀からは、鋭い邪気を纏った風の刃が、天地の体に襲い掛かった。

五龍神でその風の刃を受け止めるが、その威力に吹き飛ばされた天地の体は、無数に斬り付けられ、血が飛び散った。

床に倒れた天地の体から、血が流れ出て床を赤く染めた。

「グッ……」

歯を食い縛り、ゆつくりと立ち上がる天地に、もう一度風の刃が襲い掛かった。天地はその刃を防ぐ事が出来ず、体を深く斬りつけられた。大量の血が宙を舞い、床にボタボタと降り注いだ。

床に倒れる天地は、すでに意識を失っていた。呼吸は弱々しく、今にも息絶えそうな状態だった。

「やはり、完全体の僕には、五龍神も歯が立たない様ですね」

弱々しい呼吸の天地に、漸は歩み寄った。体から大量の血が流れる天地を、見下して五龍神に目をやった。五龍神の柄は、天地の右手で確りと握られていた。

「こんな状態でも、五龍神は放しませんか。まあ、あなたを殺してから、五龍神には消滅してもらいますか」

刀を振り上げた漸は、不適に笑い天地の胸に向って、刀を振り下ろそうとした瞬間、五龍神から真っ赤な光が溢れた。そして、漸の体に凄まじい衝撃が走り、体は吹き飛んだ。だが、漸は普通に床に着地すると、ゆっくりと顔を上げた。

目の前には、紅い燃える様に熱い龍の姿があった。鋭い爪を床に突き立てて、その鋭い眼差しで漸を睨みつけている。

第五十五章 五体の龍

五龍神から現われた紅き龍は、鋭い眼差しで漸を睨み付ける。その紅き龍を見て、漸は不適に笑みを浮べる。

その笑みが何を意味しているのか、分からないが不気味だった。

「フフフツ。紅き龍か……」

「我等の主人は、我等が護る」

「今の僕に、君等の力は通じないよ」

刀を構えて紅き龍を見る。対峙する漸と紅き龍の間には、沈黙が続いている。緊迫した空気に、神谷と昴と絶鬼は息を呑んだ。

始めに動いたのは、漸だった。殺気を纏った鋭い刀を、勢いよく振り下ろした。鋭い風の刃が、紅き龍に迫っていく。その時、五龍神が再び輝いた。次は、緑の光を放っている。

風の刃は、何か堅いものに当たり消滅した。

漸の目の前には、紅き龍の他に、碧の龍がいた。

「その程度の力では、我は倒せん」

碧の龍は轟々しい声でそう言って、漸の方を見た。

その龍を見て、更に漸は不気味に笑みを浮べる。そして、ゆっくりと呟いた。

「二匹目か」

その声は、紅き龍にも碧の龍にも聞こえていなかった。そんな中、五龍神がまた、輝いた。蒼く輝き、美しい蒼き龍が姿を現した。美しい蒼き龍は、透通る様な清らかな声で言った。

「私は、彼の傷の手当てを」

その蒼き龍を見て、漸は更に不気味に微笑む。その様子に、気付いた紅き龍がゆっくりと、口を開いた。

「何が可笑しい？」

「いえ……。可笑しいのではありませんよ。嬉しいんですよ」

漸はそう言っただけでゆっくりと、刀を捨てた。そして、笑い声を上げた。不気味で背筋の凍る様な、笑い声を……。

そんな中、五龍神が輝いた。白い光と金色の光を放ちながら、2体の龍が現われた。1体は、白く美しい鱗を輝かせた白銀の龍。もう1体は、金色に輝く鱗が稲光する金色の龍。

2体は漸の背後に現れ、結果漸は龍に囲まれる形になっていた。

「全ての龍が揃った今、貴様は我等の主人に指一本触れる事は出来ぬ」

紅き龍はそう言って、白銀の龍を見た。白銀の龍はゆっくりと、体を動かし勢いよく天井に息を吹きかけた。

その瞬間、城の天井は吹き飛び、真つ青な空が広がった。吹き飛んだ城の屋根は、空で砕けて森の中へと落ちていった。

「な……何て力……」

「これが、五龍の力だというのか……」

驚きの声を上げた昴に、少し感心した様に神谷が続いた。流石に五龍の力に驚きを隠せない様だが、漸は全く驚いていなかった。むしろ、嬉しそうだった。

「さあ、次はあなたが吹き飛ぶ番です」

「僕が？ 吹き飛ぶ？ 面白いじゃないですか。やってみてください」

馬鹿にした様な口調で、漸はそう言うが白銀の龍は至って冷静だった。ゆっくりと紅き龍を見て、ゆっくりと空に舞った。それに続くように、紅き龍が空に舞い、金色の龍も空に舞い上がった。

「空を飛んで、どうするつもりですか？」

「さあな。貴様には関係の無い事だ」

冷たい視線で、空から漸を見下して、金色の龍はそう言った。その後、紅き龍の音が響いた。

「土龍神！ 他の者たちを頼むぞ」

「わかっておる」

碧の龍がそう言うと、神谷・魁人・由美・昴・絶鬼の周りに頑丈な、土の壁が現われ視界を遮った。完全に土の壁に覆われ、外の様子が見えないで居た。

「なんだ！ この壁！」

「神谷さん、どうなってるんですか？」

そんな二人の耳に、碧の龍の声が聞こえた。

「この壁は、お主達を護るための鉄壁の壁じゃ。そう不安がる事はない」

「だが！」

「安心せい。天地とやらは、かならず水龍神が傷を癒す。それまでの辛抱じゃ。それに、今お主達を失う訳にはいかんのじゃ。分かってくれ」

その声を最後に、碧の龍の声は消えた。神谷は仕方なく、座り込みタバコを銜えた。そして、火をつけようとした瞬間に、昴にタバコを奪われた。

「おい。何をする」

「神谷さん。こんな状態でタバコ吸ったら、煙が充満しちゃいます。それに、何でそんなに落ち着いていられるんですか！」

「そうだな……。歳のせいじゃないか？」

昴は呆れて何もいえなかった。だが、神谷はそんな昴の不安を、この言葉で吹き飛ばしたのだった。

その頃、外では空を飛んでいる3体の龍と漸が睨み合いを続けていた。

「空を飛んでいるだけでは、何の意味もありませんよ」

漸はそう言つて、首を傾げて息をゆっくり吐いた。だが、3体の龍は上空をクルクルと、円を描くように飛んでいるだけで、何をしようとしているのか、全く分からなかった。

流石の漸も、時間が経つにつれてイライラを募らせていた。そして、それがついに爆発した。

「どづいつつもりだ！ 戦う気はないのか！」

「今だ」

漸には聞こえないくらいの声で紅き龍が、そう言つと3体は急に

動きを止めた。そして、その口元には、力が集まり始めた。

紅き龍の口には真つ赤に燃える炎が集まり、白銀の龍の口には荒れ狂う風が集まり、金色の龍の口にはほとばしる稲妻が集まっている。

そして、勢いよく集まった物を、同時に漸に向けて放ちながら叫んだ。

『火・風・雷。三大龍神・秘儀 かえんらいげきふうしや 火炎雷撃風車』

白銀の龍の放った風が竜巻となり、紅き龍の放った炎を飲み込み炎の竜巻となると、その周りを金色の龍の放った稲妻が走った。

その竜巻は、真下に居る漸に直撃した。竜巻は瓦礫を吸い寄せ、稲妻はその瓦礫を砕き、炎はその砕かれた瓦礫を消滅させた。

床に散らばっていた瓦礫は、綺麗に消滅し残ったのは碧の龍の作った、頑丈な土の壁と漸の姿だけだった。

体に稲妻が走っている漸は、ゆっくりと空を見上げて言い放った。

「今のは、効いた。だが、僕はその程度じゃ倒せない」

「我等もお前を倒す気はない。完全に封印の解けていない状態で、お前を倒せるとも思っていない」

「そうか。なら、君等と遊ぶ理由はないな」

ゆっくりと手の平を上空を飛ぶ、紅き龍と白銀の龍に向けた。そして、何かが漸の手の平から、発せられた。

紅き龍はそれを軽くかわすと、口から火の玉を吐いた。白銀の龍はゆっくりと息を吐き、それを簡単に掻き消した。

飛んで来る火の玉を、漸は右手で受け止めた。火の玉は威力を弱め、消滅した。漸の手の平は、その火の玉で少し焦げているが、さほどダメージは受けてはいないようだった。

「やれやれ、僕は疲れるのは嫌なんですよね」
「我等も、疲れるのはちよつとな」

紅き龍は漸にそう言って口から何発も、火の玉を放った。その火の玉に白銀の龍が息を吹きかけ、その火の勢いを強くする。

その火の玉を漸は手の平から出した見えない力で、掻き消していた。爆発音が辺りに響き、風が吹き荒れていた。

蒼き龍はそんな戦いを見ながらも、天地の傷を癒していた。蒼く透通る水が、天地の体を包み込み、その水が傷口を塞いでいる。

弱々しかった呼吸も、大分安定しているが、まだ傷を完全に癒すには時間がかかりそうだった。

「間に合うでしょうか？」

「何を弱気な事を言っておるのじゃ。間に合わせるのじゃ」

「ですが、もう時間が……」

「いざとなれば、あの者達の力を借りるまでじゃ」

蒼き龍の清らかな声と、碧の龍の多少衰えた様な声が交互に聞こえている。その声は、神谷と昴の居る所まで、聞こえていた。

そして、碧の龍の言った、あの者達が自分たちをさしている事を、神谷は悟ったが、時間が何なのかは、分からなかった。

「どついつ事でしょうか？」

「さあ？ 俺に聞くなよ」

壁に凭れながら、神谷はそう言ってゆっくり息を吐いた。その時、大きな物音が壁の向こう側から聞こえた。それが、何の音なのか神谷達には、分からなかった。

第五十六章 蘇りし力

辺りに大きな物音が、響き渡り地面が揺れた。床には真つ白な鱗の龍が横たわっていた。今まで吹き荒れていた風は止み、辺りは静まり返っている。

少し離れた場所で、横たわっている白銀の龍を見ながら、漸は薄気味悪く笑っている。白銀の龍はゆっくりと、小さな声で言った。

「時間が来たようです。私は先に戻ります。ですが、その前に風鳥の復活を」

透けていく白銀の龍の声は、土に覆われた神谷と昴にも聞こえた。昴は手に持った弦が切れ、色あせた弓 風鳥神を見つめていた。

「私の鱗から生まれし、清らかなる鳥よ。今一度、風を取り戻し空高く羽ばたけ」

白銀の龍はそう言うと、光となり五龍神へと吸い込まれていった。一方、昴の手に持っている弦の切れた弓は、光輝き色あせていた色が、綺麗に染まり弦も元に戻っていた。だが、風鳥神の形が変化していき、前回よりも少し大きくなり持ちやすくなっていた。

その頃、漸と睨みあう紅き龍と金色の龍は、少しずつ体が透け始めていた。

「もう、時間が無い様だ」

「力を使い過ぎたか」

空を飛ぶ紅き龍と金色の龍はそう呟きながら、漸の事を見下していた。漸はゆっくりと紅き龍と金色の龍に向って、両手をかざした。

すると、両手に漆黒の玉が現われた。

「そろそろ、終わりしよう。僕も食事をとりたいからね」

「我等も、もう時間が無い。この攻撃が最後だ」

紅き龍はそう言つと口を開き炎を集めた。金色の龍も口を開き稲妻を集めた。紅き龍と金色の龍を見て、漸は不適な笑みを浮かべ両手に集まった、漆黒の玉をぶつけ合わせてから、二体に向つて放つた。

それを見て、紅き龍と金色の龍は、同時に集めたものを放ち叫んだ。

「放電炎流星」
ほうでんえんりゅうせい

炎の玉は稲妻を纏、物凄いスピードで漆黒の玉にぶつかつていった。

爆音と共に煙がたち登り、爆風でその煙が広がつていった。その時、金色の龍がゆっくりと落下していった。

そして、その後続くように紅き龍の体がゆっくりと落下していった。

大きな音が辺りに響き、床が崩れ落ち土埃が舞い上がった。横たわり完全に二体の体は、透けて光となろうとしていた。

「我等も時間が来たか」

「消える前に、奴等の復活を」

紅き龍に向つて、金色の龍はそう言った。その2体を見ながら漸はゆっくりと口を開いた。

「残念だけど、雷犬神と土蛇神は完全に消滅した。もう、復元は無

理だよ」

そう言った漸の背後から、碧の龍の落ち着いた口調の声が聞こえてきた。

「復元じゃと？ わし等のするのは、復元じゃのうて、新たな命を与え復活させるんじゃ。武器が消滅しようとして、関係なく蘇るのじゃ」
「そう言う事だ。残念だったな」

金色の龍はそう言って軽く笑みを浮べた。そして、紅き龍と同時に口を開いた。

「私の鱗から生まれし、怒れる忠実なる犬よ。今一度、大気を揺るがし地を駆ける」

「私の鱗から生まれし、燃え上がる勇敢な虎よ。今一度、燃え盛り全てを焼き尽くせ」

紅き龍と金色の龍はそう言い終わると、光となり五龍神へと吸い込まれていった。

一方、神谷の横に転がっている色あせた火虎神は、紅く輝き色が元に戻っている。だが、両端に付いた虎の彫物の口が、大きく開き鋭い牙をむき出しにしている。

「火虎神が、変わったな……」

「私の風鳥神も、少し大きくなりましたよ。威力が上がったんでしようか？」

「さあ？ それは俺にもわからん」

首を横に振りながら、神谷はゆっくりと息を吐いた。あまりに呆気ない神谷に、昴は少し呆れた。

暫し、沈黙が続いていたが、壁に何かの刺さる音が響き、壁に凭れている神谷の顔の横から、光を放つ鋭い大剣の刃先が現われた。突然現われた、大剣の刃に昴はびっくりして言葉も出なかった。だが、神谷はさほど驚いていなく、その刃を火虎神で軽く叩いていた。

「これは、雷犬神か。確か、由美に砕かれたが、ここまで完璧に修復されるなんてな。それに、更に刃が大きくなった気がするな」

「か、神谷さん……。驚かないんですか？」
「驚く？ 何で？」

その言葉を聞いて、昴は深いため息を吐いた。あと少しずれてたら、串刺しにされてたかも知れないのに、なぜあんな風に落ち着いていられるのか、不思議だった。

そんな中、碧の龍の音が響いた。

「もう時間じゃ」

「時間って、どういう事だ」

今まで雷犬神を火虎神で、叩きながら笑っていた神谷はそう言って、真剣な顔付きになった。暫し間が空いたが、神谷の質問に碧の龍の返事が返ってきた。

「わし等は、無理やりあの刀の封印から出たのじゃ。じゃから、ここに居られる時間は限られてくるのじゃ」

「それで、俺達に何をしろと？」

「天地の傷も癒えた。後は目を覚ますだけなのじゃが……」
「時間が掛かると？」

碧の龍の声言い終わる前に、神谷がそう言って火虎神を握り締

めた。昴も風鳥神を握り締め、神谷の顔をジッと見ていた。

静かに沈黙の時間が過ぎていくが、ゆっくりと碧の龍の音が聞こえてきた。

「わし等が消えた後の事は、任せるぞ。他の仲間も、皆傷は癒えておる。力をあわせるのじゃ」

「わかった」

静かに神谷がそう言うと、二人を覆っていた土の壁が崩れていった。そして、土の壁が崩れると、外の様子がわかった。

消えかけの碧の龍と蒼き龍。離れた場所に立ち不適な笑みを浮かべる漸。

そして、他の土の壁から出てくる魁人・由美・絶鬼。まだ、少し頭が朦朧とする魁人と由美だが、やる事は碧の龍から聞いて分かっていた。

魁人の右手に握られた水蛟神は、色あせ刃も崩れている。土の壁から姿を現した者達を、見渡して漸は鼻で笑った。

「フツ。死に底ないが、今更何の用かな？」

俯き小刻みに肩を震わせながら、漸は静かに言った。その体からは殺気が、あふれ出している。目の前に幾度となく立ちはだかる者に、苛立ちを覚えているのだろう。

そんな中、碧の龍の轟々しい声と、蒼き龍の清らかな声が同時に響いた。

「わしの鱗から生まれし、地を這う蛇よ。今一度、大地を揺るがし全てを喰らえ」

「私の鱗から生まれし、荒れ狂う蛟よ。今一度、荒波を越え鋭き牙で噛み砕け」

碧の龍と蒼き龍はそう言い終わると、五龍神に吸い込まれていった。

魁人の持つ水蛟神は、蒼い光に包まれた。色あせていた水龍神は、元の色に戻り、崩れた刃は大きくなり、刃先は三つに分かれ鋭く光っている。

一方、砂の粉と化した土蛇神は、絶鬼の足元で一つに集まり元の鉤爪に戻る。鉤爪は鋭く長くなっていた。

「おい、絶鬼。土蛇神はお前が使え」

「土蛇神を……僕が？」

いきなりの神谷の言葉に、絶鬼は戸惑っていた。すでに、神谷・魁人・由美・昴の四人は、絶鬼は自分たちの仲間だと、認識していた。

絶鬼は嬉しかった。自分を仲間だと思ってくれる者達が、居ると言う事が嬉しくて仕方なかった。涙を堪え、絶鬼は足元の土蛇神を手を取った。

「……それじゃあ、これは……」

小さな由美の声が、神谷のすぐ隣で聞こえた。その左手には、刃の大きくなった雷犬神の柄を握っていた。軽々と雷犬神を持ち上げた由美に、少し驚き神谷はゆっくりと口を開いた。

「お、お前……。重く無いのか？」

「……全然」

少し間が空いてから、由美はそう言った。鋭く光る疾風丸と雷犬神を、ゆっくりと構えて息を吐いた。あんなに大きな雷犬神を、体

格も小さく細身の由美が片手で持っている、言う事がとても不思議だったが、よく考えたら雷犬神は最も軽量化を重視武器だと気がついた。

「まあ、雷犬神は由美に任せる」

その言葉に由美は、ゆっくり頷いた。

武器を構えた5人は、目の前にいる漸を睨みつける。空にはいつしか、不気味な雨雲が広がっていた。

第五十七章 本当の姿

暗雲立ち込める空。静かに吹き抜ける風。辺りは夜になったかの様に、暗くなっていた。

冷たい床に横たわる天地は、右手に五龍神を握ったまま、まだ眠りから覚めていなかった。

昴から取り返したタバコを、口に銜えて火虎神で火をつけると、ゆっくりと息を吸い込んだ。

「さて、そろそろおっぱじめるか」

「僕は雑魚どもの相手をしてる程、暇じゃないんだよ」

漸はそう言つて、顔を上げると神谷を睨み付けた。怒りに満ちたその目は、血走っている。神谷・魁人・由美・昴・絶鬼の5人は、ゆっくりと武器を構え漸の攻撃に備えている。

漸に向つて昴は風の矢を向けている。

それを見て、漸はゆっくりと口を開く。

「さつきも言つたが、僕は君等の相手をしてる程、暇じゃない」

「そんなの僕等には関係ない」

「一斉攻撃だ！」

神谷の言葉と同時に、昴以外の4人は床を蹴った。

そして、火虎神が漸の右足に向つて鋭く振り抜かれ、背後からは水蛟神が鋭く突き出された。

鋭く振り抜かれた火虎神は、しなり風を切りながら漸の右足に飛んだが、それを踏みつけると軽々と、宙に舞いそれと同時に突き出された水蛟神を、かわして二人から距離をとった。

「甘いですよ」

「クツ!」 「甘いのは、お前の方だ」

「!?!」

床に着地した漸に、鋭く振り抜かれた雷犬神が襲い掛かってきた。素早く体を後ろに逸らし、雷犬神をかわしたが、完全に体勢は崩れていった。

その漸に、雷犬神を振り抜いた由美が、疾風丸を振りかざしている姿が見えた。疾風丸の刃の周りには、風が取り巻いている事から、そらが振り下ろされるとわかった。

「僕に、それは効かない!」

右手を由美に向けて、そう叫んだ。右手には一瞬で漆黒の玉が現われた。だが、由美はいつこうに疾風丸を振り下ろさなかった。

その由美に向かって、漸は漆黒の玉を放とうとした、その瞬間だった。右腕に鋭く尖った風の矢が突き刺さり、その威力で狙いがズレて、放った漆黒の玉は、由美の顔の横を過ぎていった。

右腕には穴が開き、そこから大量の血が飛び散り、床を真っ赤に染める。床に崩れていく漸に向かって、絶鬼が鋭く右腕を振り抜いた。右手に着けた土蛇神が、漸の体を引き裂き更に血を辺りに飛び散らせた。宙に浮き上がった漸を、ゆっくりと見上げた由美は小さな声で言った。

「舞い散れ! 疾風乱舞!」

素早く振り下ろした疾風丸からは、鋭い風の刃が幾つも飛び出し、宙を舞う漸の体を斬りつけていった。辺りに血飛沫が舞い、漸の体が力なく床に落ちた。

急に静かになった。漸が動かなくなっただからだろうか。だが、漸

があの程度で死ぬとは、誰一人思ってたなかった。現に、漸の体は石化していないのだから。

「これで、大分ダメージを与えたと思います」

「そうだといいな」

タバコを口に銜えたまま、魁人の言葉に神谷はすぐに返答した。その神谷の言葉に、昴が歩み寄りながら言った。

「神谷さんにしては、自信の無い声ですね」

「ンツ。ちよつとな……」

「あれだけくれば、結構弱ってますよ」

少し嬉しそうに昴は微笑んだ。だが、その笑顔もすぐに消えた。

薄気味の悪い漸の笑い声が辺りに響き渡ったからだ。すぐに武器を構えて、床に倒れる漸に体を向けた。

だが、漸の体は動かずまるで、抜け殻の様だった。その瞬間、絶鬼はある事を思い出した。漸が人間の皮を被っていた事を。その事を伝えようとしたが、一瞬体に衝撃が走り目の前が真っ暗になった。そして、気がついた時は宙を舞っていた。

「絶鬼！」

魁人がそう叫んだ。その視界に、巨体の生物の姿が見えた。大きさは3m位だろう。腕や足が異様に長く、肩は鋭く突起していた。鋭く長い爪と牙が不気味に輝き、その体からは凄まじい殺気が漂っていた。

絶鬼の体が床に落ちる音と同時に、その巨体の生物が走り出した。そして、抜き去り際に由美に向って、鋭い爪を素早く振り抜いた。

一瞬だが、その爪が見えた由美は素早く疾風丸と雷犬神で、それ

を防いだが完全に防ぐ事は出来ず、多少血飛沫を上げながら吹き飛んだ。

「ウツ！」

「由美さん！」

そう叫んだ魁人に、神谷が叫んだ。

「気を逸らすな！ 来るぞ！」

「は、はい！」

由美の方を気にしながら、魁人は水蛟神を構えた。そんな魁人に向って、鋭く突起した巨体の生物の右肩が、襲い掛かってきた。素早い身のこなしで、それを左に避けた魁人に、鋭く右肘が飛んだ。反応する事が出来ず、魁人は肘打ちを直撃した。

「グツ」

その場に崩れ落ちる魁人。

そして、巨体な生物の鋭い爪が、神谷と昂に同時に襲い掛かる。何とか反応した神谷はそれを、火虎神で受け止めた。

「お前は……」

神谷がそう言い掛けた時、ゆっくりと巨体な生物が口を開いた。

「これが、僕の本当の姿さ」

「やっぱり、漸か！」

そう叫んだ神谷の右肩に、漸の鋭い牙が襲い掛かった。鋭い牙は

神谷の右肩に、食い込んでいき真つ赤な血で赤く染まる。激痛が神谷の全身に伝わった。

「グアアアッ！」

神谷の叫び声だけが辺りに響き渡った。神谷の右肩に噛み付く漸の顔に、昴が風の矢を向けていた。

「神谷さんから、離れなさい！」

そう言つて、昴は風の矢を放った。だが、漸は風の矢が当る前に、神谷を突き飛ばし昴に襲い掛かった。

反応できるわけが無かった。風の矢を放った直後で、全く体勢が整つていなかったからだ。鋭い漸の爪は、昴の体を引き裂いた。昴の体からは血が噴き出て空を舞った。

5人は力の差を感じた。今まで戦っていた漸とは、比べ物にならないほどの力だ。スピードも、パワーも何十倍にも上がり、全く歯が立ちそうもなかった。

「思い知れ！ 人間ども！」

漸は大声で笑いながら、床に倒れる5人を見ていた。その笑い声が5人の傷口に響き、ズキズキと痛んでいる。

「天地……」

小さな声で由美は天地の事を呼んだ。もちろん、意識の無い天地にその声は届くはずは無かった。それでも、天地の事を呼び続けた。他の4人も同じだった。

もう、天地に頼るしかなかった。五龍神に選ばれし、ただ一人の

人物の天地に頼るしか……。

第五十八章 闇の中の光

暗い闇の中を天地は彷徨っていた。光も何も無いどこまでも続く闇の中に……。

『俺は……どうなった？』

『確か、漸と戦って……、戦ってどうなった？』

『俺は死んでしまったのか？』

闇の中で自問を続ける。だが、答えは返って来ない。それでもなお、自問を続ける。

『皆は無事か？』

『世界はどうなった？』

『この後、どうなる？』

自問を繰り返すが、いつこうに返って来ない答えに、少し不安になる。そして、光を求め闇の中を歩き出した。どこに行けば、いいのか分からずただ一直線に歩いた。

その時、背後から名前を呼ばれた。

「……天地」

微かに聞こえる小さな声。そして、その声の主が由美である事もわかった。

天地が振り返ると、闇の中で小さく輝く光が見えた。そこから、名前を呼ぶ声がしていた。

「……天地君」

『これは、魁人の声……。しかし、どうして君付けするかな？』

「……天地」

『これは、昴の声……。結局、裕二の事どう思ってるんだろっ？』

「早く目を覚ませ……天地」

『これは、神谷さんか……。あれ？ 何でさん付けしてるんだ？
年上だからか？』

「天地……」

『この声は、絶鬼か……。そう言えば、あいつの本当の名前なんだ
ろっ？』

声を聞いただけで、様々な問いが頭の中を過った。別に今考える
事じゃないけど、なぜが浮かんでしまった。ゆっくりと光に向って
歩く天地に、もう一度由美の声が聞こえた。

「……天地。早く……目を覚まして……」

『由美の声か……。声が小さいし、変な間を開けるから、すぐ分か
るな……』

光から聞こえる由美の声に、天地は早足になった。色々と過る疑
問は全てなぎ払い、ただ光に向って走り出していた。

漸の笑い声が辺りに響き渡る。その笑い声は、とても不気味で背
筋がゾツとする。暫く笑い続けていた漸は、急に笑うのをやめてゆ
っくりと床に倒れる5人を見渡した。

その時、痛む体を堪えながら、絶鬼が立ち上がり漸を睨みつけて
いる。

「何だ？ お前が先に喰われたいのか？」
「喰われるのは、君の方だ！」

鋭く光る土蛇神に力を集めた。そして、床に土蛇神を突き刺して叫んだ。

「飲み込め！ 土牙蛇口」
どがじゃこ

床に蛇が大地を這うかの様な亀裂が入っていく。そして、その亀裂は漸の足元に来ると、蛇が口を開いたかの様に、大きく裂け鋭い牙を突き立て、漸の体を噛み砕こうとした。

だが、漸は両手でその壁を押えると、不適に笑みを浮べて言った。

「この程度じゃ、僕は喰えない」
「グッ！」

更に力を加える絶鬼だが、漸はそんなもの諸共せず壁をぶち壊した。

そして、一瞬で絶鬼の前に現われ、一撃で絶鬼を弾き飛ばした。絶鬼は激しく吹き飛び、床を転がった。床に倒れる絶鬼の方に、歩み寄った漸はゆっくり頭を踏みつけた。

「このまま、頭を潰すのもいいが、やっぱりジワジワいたぶるのもいいかな」

「噛み砕け！ 水牙鮫！」

絶鬼の頭に足を置いている漸に向って、魁人が水鮫神を突き出した。水鮫神に集まった水が、鮫の形になり漸に襲い掛かった。

だが、その水の鮫は漸の鋭い爪に引き裂かれ消滅した。弾け飛ん

だ水は、床に広がった。

「新しくなった水蛟神も、この程度の力ですか？ 残念ですよ」
「これなら、どうだ！」

腰を落とし水蛟神を引いた瞬間に、体に衝撃が走った。軽々と吹き飛んだ魁人の体は、崩れた壁を擦り抜けて下に落ちていった。

「魁人！」

神谷はそう叫んだ。返事はなかった。俯きながら、神谷は立ち上がった。火虎神を軽く回しながら、ゆっくりと息を吐いた。

その様子に気付いた漸は、神谷を見て笑みを浮べる。

「まだ、やるの？ 正直、もう飽きました」

「それが、どうした？」

「やるんですか？ あの力の差を目の当たりにして？」

「行くぞ！」

回していた火虎神をしっかりと握り、右肩の痛みに耐えながら漸に向かっていった。火虎神を素早く突き出すが、漸はそれを右腕だけで受け流していく。

火虎神を突き出す度に、右肩からは血が流れ出てくる。徐々に右手の握力がなくなるのを、体で感じている。

動きの鈍くなった神谷の右肩に、漸は鋭い爪を突き立てた。

「ゲアアアアツ！」

神谷の叫び声が響き渡った。苦しむ神谷をなぎ払い、漸は足元の絶鬼の体を蹴り飛ばした。

弱りきつた絶鬼の体は、床を転がりうつ伏せに倒れた。

絶鬼の血と神谷の血が、床で混ざり合っている。その血の中に両足をいれ、漸は静かに息を吐いた。辺り一体が静まり返り、風でざわめく木々の音が静かに耳に届いた。

「そろそろ、五龍神を破壊するか」

「そんな事……させない……」

そう言つて、ゆつくりと由美は立ち上がった。右手に持った疾風丸は風を纏い、左手に持った雷犬神が稲妻を纏っていた。

床に横たわる昴は、風鳥神を漸に向けて風を集めた。風の矢が集まる風を取り巻き、鋭く大きくなっていく。

その昴に漸が気付かない訳がなかった。だが、あえて気付かないふりをしていた。

対峙する由美と漸の間に流れる風は冷たく、地球の最後を告げているかのようだった。

「まだ、僕の邪魔をするか？ 大人しくしていれば、見逃してましたよ」

「あなたに……見逃される位なら……死を選ぶ」

「なら、死んでください」

「死ぬのは、あんただよ！」

漸がそう言つたのと、昴の声が重なった。いかにも今、初めて昴の事に気付いたかのように、漸は昴の方を見た。だが、昴の構える風の矢の大きさは、予想外の大きさだった。

「突き抜ける！ 烈風大鷲！」

そう言つて矢を放った昴の腕に、凄まじい衝撃が走った。後ろに

吹き飛び、昴は転げた。

一方、風の矢は大気を突き抜けるように、鋭い音を立てながら漸に向って行く。だが、その矢は漸の10cm前を通り過ぎていった。その瞬間に、風が大気を揺るがし、漸の体はよろけてしまった。

「ウグツ……」

風の矢で一瞬視界を遮られ、由美の姿を見失った。視界を遮る風が通り過ぎた時、目の前に由美の姿はなかった。

辺りを少し見回している漸に、どこからともなく由美の声が響いた。どこに居るのか分からないが、声だけがこだましている。

「吹き荒れ大地を駆ける！
青雷せいらい一閃」

バチバチと、稲妻の走る音が風に乗って聞こえた。だが、どこからその音が聞こえたかわからなかったが、すぐに漸に向って青光りする風の刃が飛んできた。一瞬の事で、漸はかわす事が出来なかった。

体に稲妻が走り、風の刃が体を斬りつけた。血がポトポトと床に落ちた。

「グウツ……。女だからと、甘く見ていたが……」

そう呟いた漸は、風の刃が飛んできた方に走り出した。そこに、由美がいると言う事を分かっていたからだ。まるでダメージを受けてないかの様に、漸は由美の目の前に移動した。右腕を振りかぶり、勢いよく振り下ろした。

だが、その振り下ろした腕に、何の手応えもなくただ空を斬った様な感覚だった。爪には血もついておらず、何が起こったのか分からない。

静かに風が吹き、暗雲立ち込める空から、薄らと光がカーテンの様に差し込んでいた。その光が一人の男の姿を照らした。男は由美を抱きかかえて、その腰には鞘に納まった五龍神を持っていた。

由美は薄らと目に涙を浮かべながら、ゆっくりと口を開いた。

「天地……」

「……ごめん。遅くなった。あとの事は、俺に任せろ」

天地はそう言って、由美を下ろすと軽く微笑んだ。微笑む天地の右肩を、由美は軽くグーで殴った。

「イテツ。お前、助けてやったのに、何すんだ！」

いきなりの事で、戸惑った天地はとっさにそう言ってしまった。別に怒鳴るつもりじゃなかった。そんな天地に、俯きながら由美は静かに言った。

「遅いよ……。怖かった……」

体を震わせ頬を涙を流す由美。怖いなんて由美が言うとは思っても見なかった。それだけ、漸の強さに恐怖を覚えたのだろう。そんな由美の肩にゆっくりと手を置き、天地は耳元で小さな声で何かを呟いた。何を呟いたか分からないが、その言葉に由美はゆっくりと頷いた。

第五十九章 最終決戦の終幕

静かに五龍神が鞘から抜かれ、刃が擦れて音をたてる。

由美は天地から離れて、睨み合う二人を見ていた。風が吹き、床に広がる血の匂いが舞い上がる。

漸に五龍神の刃先を向けて、ゆっくりと口を開いた。

「さあ、始めるか。これが、最後の戦いだ」

「いいだろう。これで、僕が勝てばもう誰にも邪魔させない」

「勝てばな」

天地は五龍神の刃に触れると、ゆっくりと龍の刻印を指でなぞった。五龍神は一瞬で火龍神に変わっていた。

炎を纏った火龍神は、刃を真つ赤に輝かせている。

「火龍神か。絶鬼にも歯が立たなかった火龍神が、俺に通じるのか？」

「それは、自分の体に聞いてみな！」

漸に向って天地は走り出した。迫ってくる天地に長い腕を振り抜く。鋭い爪が天地に襲い掛かるが、それを火龍神で防いで漸の足元までやってきた。

燃え盛る炎が火龍神の刃を真つ赤に染めた。

「天まで昇れ！ 炎龍昇！」

床を蹴ると火龍神を覆う炎は、天地の体を覆いそのまま空に舞った。漸の体はいつの間にか下から上に切り付けられ、血飛沫が勢いよく飛び散った。

フラフラと後退した漸は、宙に舞う天地に向って鋭い爪を振り下ろす。火龍神は一瞬で土龍神に変化し、天地は力を集めて叫んだ。

「我が身を護れ！ 土壁護陣」
どへきしじま

天地を土の壁が包み込み、振り下ろされた漸の爪は土の壁に突き刺さった。土の壁は崩れていき、なかから風龍神を構えた天地の姿があった。

刃の周りに風が集まっている。

「大気を切り裂け！ 真空鎌鼬！」

鋭く風龍神を振り抜いた。風龍神に集まっていた風は、崩れる土の壁を木っ端微塵に、切り裂いてそのまま漸の体を切り裂いた。

「グオオオツ！」

鋭い風の刃を胸に受け、漸は呻き声をあげた。胸を横一線に切り付けられ、体には十字に切れ目が入っている。血がドクドクと流れ出て、辺りを血の海のように染めていく。

倒れそうになる漸だが、すぐに踏み止まりゆっくりと床に着地した天地を見下す。

「グオオオオ……。この程度……。ぐふっ」

漸の口から大量の血が吐き出された。降り掛かる血の雨を、天地は後ろに飛んでかわすと、ゆっくりと風龍神を雷龍神へと変化させた。

青光りする稲妻が雷龍神の刃の周りを弾け回る。その天地に向けて、漸が右足を振り上げた。その大きな足で天地を踏み潰そうとした。

ているのだろう。

「くたばれ！」

「死ぬのは、俺じゃない！ お前だ！」

腰を落とし雷龍神を下段構えすると、振り下ろされる漸の右足を見上げた。雷龍神に集まる稲妻は更に威力を増し、バチバチと大きな音をたてる。

「大気を揺るがせ！ 青龍雷撃斬！」

勢いよく雷龍神を振り上げると、稲妻は一瞬で龍と化し振り下ろされた漸の右足に直撃した。

「グウウウッ！」

右足に凄まじい稲妻が走るが、漸は歯を食い縛りそれを堪えて足を振り下ろした。勢いよく天地を踏みつけた漸の右足が、ゆっくりと二つに裂け崩れ落ちた。その崩れ落ちる足の裏には、土の壁があり零れ落ちる血を防いでいる。

「ば……、馬鹿な……」

左足一本で後退する漸だが、巧くバランスをとる事が出来ずにいた。床一面に広がる漸の血は、徐々に微粒子と化していく。漸の死が近付いている事が、よく分かった。

「終わりだな……」

「まだだ！ まだ……」

「往生際の悪い奴だ」

天地はそう言って五龍神を構えた。鋭い五龍神の刃が、薄らと光り輝いた。五龍神を構えた天地に向って、漸は鋭い爪を振り抜いた。先程より、威力の落ちた漸の攻撃を、五龍神で軽々と防いだ天地は、そのまま漸の腕を切り裂いた。

切り落とされた腕は、床に転がり石化して消滅した。もう漸の体から血は出ない。出るのは真つ赤な砂の様な粉だけだった。

「グオオオツ！ 僕はまだ！」

「これで最後だ！」

「黙れ！」

「天高く昇れ！」

天地はそう言って五龍神に力を集めた。赤・青・緑・白・金の5色の光が、代わる代わるに放たれる。

「天龍昇！」

床に五龍神を勢いよくさした。すると、大地は揺れ、風が吹き荒れ、海は波を荒げ、城の周りはどこからとも無く炎が燃え上がり、暗雲の中では稲光と雷鳴が轟く。

「な……何が……」

「五龍が天に昇り、地に帰る」

天地はそう言って、五龍神を床から抜いた。その瞬間、漸の真下の床に5つの光の円が出来た。そして、その光の円をぶち破り5体の龍が、そのまま漸の体を貫き天に昇った。

漸の魂を喰らい、天に昇った5体の龍は、暗雲の中に消えていった。

魂を喰われ完全に石化した漸を見て、天地はゆっくりと床に腰を下ろした。

「ダッツ……。しんど……」

そう呟いて、天地は空を見上げた。まだ、暗雲が立ち込めているせいで、光は差し込まず暗かった。ブーツとしている天地に、傷だらけの仲間が駆け寄った。

「終わったようだね……」

「おう、絶鬼。随分、派手にやられたみたいだな」

天地は笑いながら絶鬼にそう言った。絶鬼もそれに笑い返した。笑っている二人に、弱々しい神谷の声が聞こえた。

「ウオ~~~~イ……。俺を病院に……」

肩からは大量の血が流れ、今にも死にそうな顔をしている。流石に血を流し過ぎたのだろう。

「早くしてくれ……」

「いや〜っ。残念ながら、ここに病院は無いな」

「な……何……」

「まあ、もうすぐ雨が降る。癒しの雨が……」

落ち着いた様子で天地はゆっくりとそう言った。そして、暗雲立ち込める空を見上げた。それにつられて、他のメンバーも空を見上げる。すると、暗雲の中で何かが弾けた。

暗雲は一気は吹き飛び、蒼い空がパツと広がった。空からはキラキラ光る粉が、雪の様にフワフワと地上に降り注いだ。

「……何？」

小さな声でそう言った由美は、右手を差し出した。その右手にゆつくりと光る粉が落ちた。

赤い光は怒りを静め、青い光は優しく傷を癒す。
碧の光は大地を潤し、白い光は植物を蘇らせる。
そして、金色の光は破壊された建物を復元する。

「うっつ。駄目だ。死ぬ」

「あーっ、うるさい！」

天地は神谷に怒鳴った。神谷が何度も「死ぬ」だの「もう駄目だ」だの言うので、天地もそろそろ本気でうるさいと思っていた。多分、周りに居る誰もがそう思っているだろう。

その時、魁人が階段をあがってやってきた。そして、天地の顔を見て叫んだ。

「天地君！」

「おっ、魁人。どこ行ってたんだ？」

「ちよつと1階に……。じゃなくて、漸は？」

少し間が空き、一斉に笑いが起きた。真剣な顔をしていた魁人も、流石にそれには間の抜けた表情になった。

「えっ、ちよつと、何？」

戸惑いを隠せない魁人を無視して、皆は笑い続けた。

最終章 全てが終わり、時は流れた

あの島での戦いが終わり、数ヶ月が経った。

あの戦いでオウガは激減したが、それと同時にハンターも激減していた。そのため、神谷は島から戻るなり、オウガを倒す旅に出た。行った。

神谷が旅に出て数日後、魁人と昴も旅に出て行った。元々、神谷と旅をしていた2人は、素早く身支度を済まし、すぐに寮を出て行ってしまった。裕二も歩美も2人を止める事はしなかった。多分、ハンターの仕事を理解したからだろう。

絶鬼は色々と考えた末、生きてオウガに襲われる人々を助ける旅に出る事にした。自分が犯した罪を背負いながら、絶鬼は旅に出た。もちろん、目立つ白髪は真っ黒に染め、名前も元の名前に戻した。

「何か、急に静かになっちまったな」

学校の屋上で寝そべりながら、裕二はそう言った。空は青く白い雲が緩やかに流されていく。その裕二の隣には、天地が座っている。その脇には五龍神が鞘に入り、寝かされている。

「ふあ〜っ。眠い……」

天地は欠伸をしながら、目を擦る。横になっていた裕二は起き上がり、不満そうな声で天地に言った。

「お前さ。何とも思わないのか？」

「何が？」

「何がじゃないだろ……。あいつ等いなくなって、何とも思わない

のか？」

天地は首を傾げて、「うん」と唸り声を上げる。暫く天地の唸り声だけが響き渡る。その時、天地の携帯音が響き渡った。携帯をポケットから取り出した天地は、携帯の画面を見た。

「ちょっと、待ってる」

天地はそう言って少し離れた場所で電話に出た。

「どうした？」

『学校の方に……逃げた……』

小さな由美の声が電話の向こう側から聞こえた。そして、更に言葉が続けた。

『弱いオウガだけど……一人で大丈夫？』

『大丈夫だ。一瞬で片付ける』

『そう……。気をつけてね……』

『ああ。それじゃあ、またな』

天地はそう言って電話を切った。振り返った天地に、裕二がムスツとした顔で睨んでいた。

一歩後退り天地は、顔を引きつらせた。

「な、何だよ」

「いいよな。いつでも会えるって」

天地に向って嫌味な声でそう言った。妙に迫力のある裕二に、天地は少し圧倒されていた。

その天地達の方に、1体のオウガが空を飛んで来るのが見えた。すぐに床に寝ている五龍神を拾い上げた。

「悪いが話は後だ」

「わかった。それじゃあ、俺は隠れるよ」

裕二はそう言って屋上から出て行った。天地は五龍神を鞘から抜き、ゆっくりと構えるとゆっくりと言った。

「今日も頼むぜ。五龍神」

そう言うと、五龍神の刃に刻まれた龍の刻印が、その声にこたえるかの様に輝いた。

最終章 全てが終わり、時は流れた（後書き）

この物語はこれでおしまいです。

最後までご愛読してくださった皆さん、ありがとうございました。長々と読み難い小説でしたが、最後まで読んでくれた皆さんにはとても感謝しております。

連載が終わってしまうのは、何だか寂しい感じがしますが、これからも頑張つて小説を書くので応援宜しくお願いします。

本当に最後まで読んでくださり、ありがとうございました。また、僕の小説を読んでいただけると、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3086a/>

激闘戦鬼

2011年9月18日23時03分発行